

僕と天狗の取材録

彩風 鶴

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

僕の名前はさや、漢字で書くと刀を入れる鞘とかく

僕は今、新聞記者であり烏天狗の射命丸文さんの弟子(?)

として過ごしています

これはそんな僕の奮闘記です。そして僕は今日も文さんに振り回されていく・・・

目次

プロローグ	1	ですか？	53
紅魔館の取材		おまけ編 2話〜サバゲー……で	
1章 1話〜紅魔館の取材交渉		すね。	65
8		白玉楼の取材	
1章 2話〜取材の始まり(?)		2章 1話〜今度は白玉楼……ですか	
20		?	80
1章 3話〜メイドはつらい……です		2章 2話〜妖夢さんも大変だった	
5		2章 3話〜人里の妖怪事情	92
1章 4話〜取材終了	45	104	
おまけ編 1	34	2章 4話〜またまた、ですか……	
おまけ編 1話〜サバゲー……		5	
		2章 5話〜取材終了	130
		117	

おまけ編 2

おまけ編 1話く弾幕：…つてなんで

すか？く 142

おまけ編 2話く勝てるわけがな

い…にげるんだあく

156

博霊神社の取材

3章 1話く早起きは三文…

のとく？く 165

3章 2話くお金は命より重いく

176

3章 3話く喧嘩するほど仲がいいく

190

3章 4話く初めて(じゃない)のおつ

かいく 203

3章 5話く記憶という記録く

215

おまけ編 3

おまけ編 1話くボーイツシュって良

いですよねく 231

おまけ編 2話くボーイツシュつ

て…(大事なことなのでryく

244

宴会の取材

4章 1話く何事も準備からく

257

4章 2話く空中散歩も楽しやないく

271

4章 3話く賑やかな宴会く

284

4章 4話く下戸や未成年はジユ

《自主規制》く

297

4章 5話くお酒は二十歳になつてか

309

おまけ編 4

おまけ編 1話く魔法使いVS人く

322

おまけ編 2話く魔法使いVS人(?)

335

異変の取材

5章 1話く新たな出会いく

350

5章 2話く同類く

362

5章 3話く状況整理は手短にく

373

5章 4話く取り調べの時間く

386

5章 5話く進展く

397

おまけ編 5

おまけ編 1話く百合の花つてきれい

ですよねく

409

おまけ編 2話くこのく木何の木?く

421

永遠亭の取材

	6章	1話	バカはなんとやら	435
	6章	2話	迷える子兔	447
	6章	3話	迷子は迷子センターまで	459
	6章	4話	寂しいと死んじゃう	472
	6章	5話	クスリはリスク	484
	おまけ編	6		
	おまけ編	1話	暇な時間ほど辛い時	499
	間はない			
	おまけ編	2話	暇な時間ほど幸せな	595
	時間もない			
	異変の取材	2		
	7章	1話	挑戦は大事	528
	7章	2話	無事帰還いたしました	542
	7章	3話	情報交換はお早めに	555
	7章	4話	かんどーの再会	569
	7章	5話	灯台下暗し	581
	おまけ編	7		
	おまけ編	1話	アポ無しは良くない	595

おまけ編 2話く契約事項の確認をく

610

人里の取材

8章 1話く幻想郷では常識に囚われ

てはいけないく 627

8章 2話く一期一会く 640

8章 3話く現実なんてそんなものく 652

652

8章 4話く変身なんて序の口く

664

8章 5話く理由なんてさほど重要で

はないく 676

おまけ編 8

おまけ編 1話く信じていれば来てく

れますく 688

おまけ編 2話くあけおめ・そしてこ

とよろく 700

異変の取材 3

9章 1話く(笑)く 713

9章 2話く話し合いは念入りにく

724

9章 3話く雨に降らればく 735

9章 4話く迷子の迷子のく 747

9章 5話く患部で止まってすぐ溶け

るく 759

おまけ編 9

おまけ編 1話く用法・用量をお守り

下さいく 771

おまけ編 2話くメタ発言はお控えく

下さいく 783

魔法の森の取材

10章 1話くなりすましにご注意を

く 795

10章 2話くキノコの胞子く

808

10章 3話く優雅なお茶会く

820

10章 4話く植物は偉大く 831

10章 5話く最後まで手を抜かない

でく 842

おまけ編 10

おまけ編 1話く恋患いく 852

おまけ編 2話く恋患い ぱあとつう 864

く 864

プロローグ

僕の名前さや・・・漢字で書くと刀を入れる〈鞘〉とかく

僕は今紅魔館と呼ばれるお城で困り顔の吸血鬼さんと殺気にあふれた目をしたメ
イドさん・・・

そして僕の師匠(?)である天狗であり新聞記者をしている射命丸文さんにはこや
かな顔で

交渉を続けている。。

誰か・・・・・・助けて・・・下さい・・・

~~~~~30分前~~~~~

僕は湖畔にある赤くて大きくて綺麗なお城の前でつぶやいた。

「……が・・・紅魔館……綺麗なだけどちよつと不気味・・・かな・・・?」

僕は文さんに頼まれて紅魔館というお城に取材交渉に来ています。

で、肝心の文さんは氷の妖精の証言だとかでネタ集めにいつちやいました。

「と……とにかく屋敷に入らないと……ととっ!」

そのとき、僕の視線の先には緑色のチャイナ服に〈龍〉と書かれた帽子をかぶった赤髪のの女の人がたっていた。

「す、すすすいません!!ぼくはあ、あの……その……怪しいものとかではなく、その、なんかあのぶ、ぶ文々。新聞の……その……えつと……スタ……ツフ……?でして、そのいきなり押しかけてきて失礼なのは承知なの……です……が……?」

あれ……?もしかして寝てる……のか……な?僕は慎重に近づいて帽子を取って見た……。

あ………これ完全に寝ちやつてる………。

そ……つとぼくは門をくぐり抜けた。

僕は紅魔館の門を軽くノックする。

「あのーだけかいませんか?」

到底聞こえることはないような弱々しい声で言ったのだが……、  
答えるようなタイミングで「はい？」と綺麗な声が返ってきた。

それと共にお城のドアが開いてメイド服を着た、まさに〈瀟洒〉といった感じの女性  
が顔を出し……、

「どちらさまでしようか？」

と、尋ねる。

僕はしどろもどろになりながら

「えっと…… そのぼぼ僕はぶ、文々。新聞のものでして…… あの…… 取材交渉  
に……。」

「文々。？…… あああの天狗の…… それで取材交渉って？」

「え!? そのあ…… えっとす、すいません僕も急に文さんに言われたもので…… あまり詳  
しいことは……。」

「…… まあとにかく客室にお通しするわ。さ、入って」

明らかに怪しかったと思うが…… 優しい人で良かった……。

とは言っても、さすがに警戒されてるだろうし…… できるだけ失礼のないようにしな  
いと……。

そして僕は客室とは思えないほど大きな部屋に通された……。

「さて、で……あなたは何をしに来たの？」

「えつとですね……あの……文さんにへ紅魔館の取材をするから取材OKか聞いてきて」と頼まれて……それで文さんに色々訊こうとしたのですが……。」

「あの天狗のことだしネタ探しに行つてくるとでも言い残してどこかに行つちやつたんでしょ？」

「はい」

と僕は苦笑いしたが、メイドさんはスルーして

「そういうえば名前書いてなかったわね」

と言った。

「あ、ごめんなさい僕は心音さや、漢字で書くと刀を入れる〈鞘〉と書きます」

「鞘……ね、分かったわ、私は十六夜咲夜。この紅魔館でメイド長をしているわ、よろしく……とにかくあの天狗が来ないことにはしょうがないようね……待ってて、今お茶を持ってくるわ」

「あ、お、お構いなく」

ああ……行つてしまった。はあ……ちゃんとしやべれていただろうか？まあそれにしても……。

「綺麗な人だったなあ……」

「咲夜さんですか？」

「はい！なんかこう……女性の女性の女性ってゆうか、しかもメイドさんってところがま  
t……………」

あれ僕いま誰としやべって……？

「妖精の情報といえど侮ってはだめですねえ、なかなかおもしろいネタがはい」

「あああああ文さん!? えっ！ちよつと！いつからそこに？」

「自己紹介に入ったあたりから」

「えっ……えっ……？ なな、何でいるって言うてくれないんですか！」

「いやいや……なかなかおもしろかったものですから……」

そういうと文さんは、おもむろにカメラを取り出して僕の目の前に突きだした。

そこには咲夜さんと手を前に突き出して……焦るといふよりはパニックになっていた。と  
いったほうがいいようなそんな様子僕が写っていた。

「けっけっけ消してくっくっださいい!!」

僕は必死で交渉するが文さんにはっこりと笑って……

「5万円になります」

「そんなせつしようなあああ!!」

そんな会話をしているとドアが開き、

「ずいぶん騒がしいわね……」

と、おしやれなティーカップののったお盆を持った咲夜さんが入ってきて……  
そして絶句する

「あ、お邪魔してます」

「……………玄関の鍵は閉めたはずなんだけど……………」

「ああ、その窓があいていたので……」

「……………」

「あ、文さんそれはさすがに……」

咲夜さんは諦めたような顔をして……

「まあいいわ……それよりお嬢様が広間に通すように……」

ああ咲夜さん怒ってる……完全に怒ってる

「ありがとうございます……」

ああ文さん頼みますからもうちよつと咲夜さんの逆鱗に触れないように……………

ああ、これは苦勞しそうな予感が……………

続く……。

## 紅魔館の取材

### 1章 1話〈紅魔館の取材交渉〉

ふう……これは……まずいと……思う

右には満面の笑みの文さん 左には喋ってくれなくなった咲夜さん

どうしよう……そもそも今僕はどこに向かっているんだ……？

それにお嬢様って……？ああもうわかんないことが多すぎる……そして考  
えるのをやめた……

そして僕はとても大きな部屋に通され……その部屋の奥に一人の女の子が小さな体  
とは不釣り合いな大きなすに座っていた……そこから何んだかカリスマ性  
のようなものにじみ出ている……ような気がした

僕は文さんにきく

「あの方がえつと……〈お嬢様〉なんですか？」

「ええ、そうでs」

文さんが言い終わる前に咲夜さんが早口で答える



「そうあのとてつもなくかわいいカリスマが溢れているお方があなたの言っているお嬢様……つまりこの紅魔館の主であり由緒ある誇り高き吸血鬼のレミリア・スカーレット様よ」

「……えっ? いきなり水を得た魚のようにしゃべり出す咲夜さんの豹変ぶりにも驚いたが僕はそれよりもさっきの咲夜さんの言葉が引っかけた」

「きゅ、吸血鬼!」

「えっちよ、え!? きゅ、きゅきゅくうけつきい!」

「口を半開きにして驚く僕に咲夜さんが」

「鞄、落ちていて、とりあえず素数でも数えなさい」

「えつと……1、3、5、⑨……じゃなくてきゅつきゅきゅ吸血鬼ってどういうことですか!」

「叫ぶ僕をよそに咲夜さんが文さんに言う……」

「あなたねえ……いくらなんでもここまで知識のない子を取材交渉によこすつて……せめてある程度紅魔館について教えてからにしなさいよ」

「あいにくにも忙しかったものでして」

「えっ? いやいやいやえっ吸血鬼あの子が? 嘘でしょ? いやよく見たらなんか羽」

とかついでるけど………

「鞘、あなた烏天狗をみても驚かないのに吸血鬼をみると驚くのね………」

「いやだって吸血鬼っていったら……えええつと血を吸うんですよねそそうだじゅじゅ十字架あと杭とにんにくと日光と………」

「だめだ、この子はやくなんとかしないと………」

「咲夜さんがものすごく乾いた目で僕を見ている。そして僕に聞こえないように文さんにささやく」

「この子幻想郷入りしてどれだけなの？ずいぶんと日が浅いんじゃない………」

「ええとですねえおそらく昨日になります」

「昨日!?ああ通りで………でも紅魔館までどうやってたどり着いたのよ?」

「ああそれはですね………」

「文さんが何か言おうとしたときにあの女の子が上品でよく通る声でいった

「いつまで私抜きで話をする気かしら?」

「咲夜さんが焦りながら

「もっ申し訳ございませんお嬢様!」

「まあいいわ、とにかく立ち話もなんだしそのいすに掛けなさい……咲夜は私の分の紅茶を………」

咲夜さんが血相を変えて

「はっはい！ただいま」

と、慌ただしく部屋を後にした……

えつと、ちよつと待て、あの子は吸血鬼でお城の主で……つてことはここは吸血鬼のお城で今からそのお城に取材しようとしているんだよね……

……殺されるかもしれない！……

血相を変える僕をよそに文さんは平然と「失礼します」といすに座っている……僕は必死に

「ああああ文さんつつつしし死んじやう殺されるるるににに逃げましようっ！」

と訴えるが吸血鬼はもう僕らの向かいの席に座っている……

(もうだめだこれは……死んだな……) 僕が顔面蒼白で突つ立っていると吸血鬼がゆっくりと口を開いた

「咲夜からきいたわ〈鞆〉だったかしら？天狗の助手をしているとか」

「えっ!?!ふあつふあい！」

もう何が何だかわからないうえ、いきなり話しかけられたので変な声を出してしまつた。そして文さんはさも当然のように吸血鬼と喋っている……

「助手というとかわいそうですし一応名目上は弟子と言うことで」

「そう。それから鞆、」

またまた話しかけられて体が強張る

「吸血鬼に変な先入観を持つてるみたいだけどあなたが思っているほど吸血鬼って言うのは恐ろしいものじゃないわよ」

「っ!?!はっはい」

そのこえは妙に安心できて僕の中の恐怖が不思議と和らいでいった………。何だろう?この感覚前にもどこかで……まあ考えても仕方がないと思い、僕は落ち着いて深呼吸をし、素数を数えた上でいすに腰をかけた。

「それで取材交渉の件だけど………」

「はい」

文さんがにこやかにこたえる。

「断らせてもらおうわ」

吸血k……えつと……レミアさんの取材拒否に対して文さんは表情一つ変えずに

「なぜでしょう?」

と問う……。咲夜さんが紅茶を持ってきてレミリアさんの前に置いた。レミリアさんはそれを一口飲んだ後

「理由は一つではないけれどもあなたの言う取材というのはずいぶんと時間をとるものなんじゃないかしら？」

「そうですね。今回は〈紅魔館の住人の一日！〉というのを考えていまして単純に一日かかると思います」

「そう。そうだとしても……やはりうなずけないわね……こちらとしてもメイドたちやパチエのそしてもちろん私のプライベートってことがある訳よね？。そう簡単に〈どうぞ〉という訳にはいかないのよ」

そして文さんが言う

「プライベートというのは……たとえば咲夜さんのPADについてとかですか？」

そして次の瞬間僕は奇妙な体験をした。文さんが喋り終わった瞬間咲夜さんが見えないような速さで位置を若干移動したかと思うと文さんの周りには無数のナイフが刺さったような傷が見えた……何をいつてるか分からないと思うんですが僕もなにかおこったか分かりません……。レミリアさんが「咲夜……」と困り顔で呟くと咲夜さんは「……………申し訳ありません……」と答えた。ただ咲夜さんの周りから殺気のようなものが見えたので僕は目を合わせないようにした……

周りの刺し傷は気にもとめずに文さんはレミリアさんに交渉を続けている……誰か……助けて……下さい……

「とにかく……取材は断らせてもらおうわ」

そういうとレミリアさんは咲夜さんに僕たちを玄関まで送るように命じた……

そして僕は相変わらず殺気をまとった咲夜さんと残念そうな文さんにはさまれて玄関にむかった……

その途中咲夜さんに尋ねられた

「鞘、あなた昨日にこの幻想郷に来たらしいけど、どういうことなの？」

僕は返答にしばし困った後

「えっと……僕は昨日、文さんの仕事場の近くで倒れていたそうなんです。そこを文さんに助けてもらって……ですがその前の記憶がなくなっていて……文字などは読めるし基本的な知識は残っているのですが……」

「記憶喪失……ってこと？」

「はい、そうです。といってもそんなに重要視していませんよ。文さんは良い人だし、弟子として働かせてもらっているのです、今の生活で十分満足です。」

と僕は本心を口にする。咲夜さんはにっこりと笑って

「そう。(ずいぶんとアバウトなのね……今の生活って半日しかたつてないんじゃない?」

といったそして続けて

「そういえばあなたどうやって紅魔館にやってきたの? 昨日の今日で紅魔館までの道を覚えた訳じゃないでしょ?」

「ああ……おぼえたんですよ」

と僕は答える。咲夜さんはとくに驚いた様子もなく

「どういふこと?」

と僕に尋ねた。

「えつとですな僕は昨日文さんに助けられて、その後いろいろお話した後、幻想郷についてしりたくて、文さんの仕事場の文献をある程度読ませていただいたんですけど。その文献の内容をほとんど覚えてるんですよ……昔のことは忘れちゃったっていうのに」

文さんにきいたら幻想郷ではこんなことはあまり珍しくないっていつていたしぼくが笑うと咲夜さんも「ふふつ」と上品に笑った。でも何か考えている様子だった。

そして僕らは広いお城の玄関についた。そして咲夜さんが文さんに忠告するように

言い放つ

「今後今回のようなことがあるとこちらとしても大迷惑なの、行動は慎んで下さい」

僕は咲夜さんの気迫に驚いたが文さんはケロッツとして咲夜さんに静かに言った

「あのー取材の件・・・やはり難しいんでしょうか？」

そして咲夜さんは

「それはお嬢様がお決めになることです。私には判断しかねます。」

とわざとらしい事務的な口調で答えた。すると文さんは胸ポケットから一枚の写真を取り出して咲夜さんに差し出した

「レミリアさん一人ならともかくお二人で写っている写真ともなかなか貴重なのでは？」

「・・・お嬢様と交渉してきます・・・」

と咲夜さんは何かに縛られたような義務的な口調で答えた・・・  
僕は今日〈取引〉・・・いや〈賄賂〉というものをこの目で見届けました。

しばらくすると咲夜さんが戻ってきて「お嬢様にとりあってどうにかお許しを得たわ。さあ例の物を・・・早く！」と文さんに催促をして〈例の物〉を手に入れると満足そうな顔でポケットに入れ、しばらくするとハツとして僕に言った



「そうだ、鞆、お嬢様が来てほしいって言ってたわよ。いま連れて行くからついてきて」  
「……え!？」

僕は突然の呼び出しに驚き

「……?」

文さんは不思議そうな顔をしている。

そして僕は再びレミリアさんのいる部屋に訪れた。

「ああ鞆、いきなりごめんさい、咲夜からきいたと思うんだけど今回の件、承諾するこ  
とにしたのだけれども、あなたにだけ取材を抜けてほしいの……」

「え……?」

僕と文さんがそろえて声を出した。

「それというのも今回の件について咲夜と話した後一応メイドたちやほかの住人にもき  
いたのだけど……やはり長時間殿方と過ごすというのはみんな抵抗があるみたいで  
(えっ?)僕は予想だにできなかった単語に驚く

「だから……天狗、何がおかしいのかしら?」

文さんが笑いながら僕に言う

「鞆、あなた言っでなかつたんですか?」

レミリアさんと咲夜さんがきいてくる

「どういふこと？」

僕は引つ込み気味にこう答えた

「あのう分かっていいると思つていたんですが……僕……女ですよ……」

「えっ？」

長い長い沈黙の後レミリアさんと咲夜さんの気の抜けた声が紅魔館に響いた……

続く……

小さなおまけ　　～咲夜さん視点のワンシーン～

いかに私といえどさすがにあの写眞はずるいと思う。ええあの写眞はずるい……そう、そうよ、あの写眞が悪い……

ということでお嬢様になんとか取材を承諾してもらわないと……そして私はお嬢様の前に移動して呟いた

「お嬢様……取材の件なのですが……承諾されてはいかがでしょう」

「?、どういうこと?」

「天狗の新聞とはいえど紅魔館にとって良いことをかかせれば私たちにとってマイナスなこととはございません。この機会にぜひ取材をさせてはいかがでしょうか?」

「っ! まずい... 勢いのままに喋ってしまった言葉として成り立っていただろうか...」

「とにかくメイドたちやパチエにもきいてきてもらえる?」

「かしこまりました」

よし、どうにか承諾にこぎ着けそうだ...

そして私はおそらく満面の笑みでメイドたちを集め始めた...

# 1章 2話～取材の始まり(?)～

さて、……ついに紅魔館への取材が始まるわけなんだけど……  
まさか……男の子と勘違いされてるなんて……そりゃあ僕は一人称が〈僕〉だけ  
ど

あれ? あるいはば何で僕は自分のことを僕って呼んでるんだらう?

それに文さんは何で僕が女って分かってたんだらう? ……あるいは文さん眠って  
いる間に僕の服を着替えさせてくれたんだっ  
け……  
そのときか……

「どうかしました……?」

と僕は文さんにきかれて、

「えっ?! あついや何でも……ないです!」

と答えた。……

「顔が赤いですけど……? 緊張してるんですか? まあ初の取材ですからしょうが  
ないですね」

「!？」

そっか、今から取材なんだ・・・

あの後（前話参考）僕は取材立ち会いの許可をもらい、次の日の・・・つまり今日の早朝から取材を始める、ということになった。そして今僕は紅魔館までの道の湖畔を歩いてます。文さんは飛んだ方が速いんだろうけど危ないからと僕と一緒に歩いて向かって来ています。

・・・危ないって・・・何があるんだ？

まあとにかく僕と文さんは紅魔館にたどり着いた。

寝てる・・・そういえば昨日もこの人寝てたよなあ・・・大丈夫なんだろうか・・・僕は目の前で寝息を立てながら幸せそうな顔で熟睡している赤髪の女の人を前にして思った

そんな僕の心中を察したのか文さんが

「この人は一応紅魔館の門番の紅美鈴さんです。まあだいたいこんな感じで職務放棄してますけど」

と解説してくれた。・・・門番・・・

？

・・・それは・・・やっぱり大丈夫なのだろうか？・・・

そして僕は大きな紅魔館のドアを叩いた

「あの、文文。新聞ですけど・・・」

すると「待つてたわ」と咲夜さんがすぐにドアを開いてくれた。

「お嬢様がお待ちよ、お通しするから入って・・・」

「あつありがとうございます」

と僕は咲夜さんに一言言つてまた大きなお城に足を踏み入れた。

「ようこそ紅魔館へ・・・」

レミリアさんが僕等に言つた

「今日はよろしくお願ひしますね。まあ取材と言つてもお二方はいつもどおりにしていただければこちらで勝手に取材させていただくので」

「ええまあそのつもりよ・・・くれぐれもメイドたちの邪魔はしないように・・・それじゃ、言いたかつたのはこれだけよ・・・あとはそちらの好きにしていいわ」

「はい、ありがとうございます」

と文さんがお礼を言うのとレミリアさんと咲夜さんは部屋を後にした。

レミリアさんたちが出て行くと文さんが僕にこう言った

「あ、鞆……取材は私が行うので鞆はとりあえず紅魔館の中を見学でもしといて下さい」  
えっ?……

「ええええええええ!!ちよつちよつと、それじゃあ僕が来た意味がないじゃないですか  
!」

「まあまあ、私といっても何もできないと思いますけど」

まあ………。そうかもしれないけど……。

「そっそれにしたって……」

「まあ見学するのも大事ですし何かおもしろそうなことがあったらメモするなり私をよぶなりして下さい」

「……分かりました……」

ということでは僕は紅魔館の見学をすることになりました……(不本意)

「見学と言つても……」

僕は辺りを見回して

「こんな広い館じゃ迷うのが落ちだろうなあ……」

とため息をつく。ふう、とにかくそこら辺を歩いてみるか……迷わない程度に……

そして僕は紅魔館を歩き始めた。

しばらくするとこれまた大きな扉があった

「取材に来てるんだから・・・あけても・・・いい・・・よね・・・?」

と自分に言い聞かせて僕はその扉を開いた

そこにはとてつもなく広い空間に隅々まで本棚に本が積み重ねられていた・・・

「すごい」

思わず口にする

「そう?」

と横から声をかけられて心臓が飛び出る

「うわあああああごごごごごめんなさい」

「・・・なんで謝るのよ・・・?」

「えええつとあなたは・・・?」

「パチュリー・・・パチュリーノーレッジ・・・魔女よ」

「まっま魔女ですか!?!」

ダメだ吸血鬼がいるんだからちよつとやそつとでは驚かないつもりだったのに・・・驚いてしまった



とにかく・・・ええと1、3、5、⑨

「あなた、天狗の助手でしょ？」

「えっあつはい！文さんの・・・助手の鞆です、えと・・・漢字だと刀を入れる鞆と書きます」

「レミイからきいたわ」

レミイ？レミリアさんのことだろうか？

そうこうしていると向こうから難しそうな本を抱えた女の子が駆けてきた

「パチュリー様・・・この魔導書なんですけど・・・その子は・・・？あああ天狗の助手の確か・・・鞆でしたっけ」

どうやら僕のこととはみんな知っているようだ・・・そしてやっぱり僕は助手なんだろうなあ

「はい・・・あの・・・あなたは・・・？」

「あつすいません私はですね、この紅魔館の大図書館の司書を務める小悪魔です」

今度は小悪魔・・・もうさすがに驚かない・・・

「小悪魔さんよろしくお願ひします」

「ええこちらこそ」

魔女や小悪魔といつても二人とも普通の人みたいだし大丈夫だよな？

と考えるとパチュリーさんと小悪魔さんはどこかに行ってしまった。ふうどうしよう

そして僕は大図書館を後にしてまたふらふらと歩き始めた。

ふらふらと紅魔館を歩いて数時間すると後ろからいきなり話しかけられた

「鞄?」

「ひゃいつ!」

驚きすぎて変な声が出してしまった・・・

「ななななんだ文さんですか・・・おおおどろかさないてくださいいよお・・・」

文さんが笑いをこらえながら言う

「いやいや変な声を上げるうえに涙目になってくれるのでおもしろくて」

「そんなあ」

僕は力なく嘆く。そして文さんにきいた

「それで何のようですか?何かお手伝いすることが?」

少し手伝えることを期待したのだが文さんの答えは

「ああ、ちよつと違うんですが・・・とにかく紅魔館の外に出るのでついてきて下さい」

「はあ・・・」

そして僕は言われるまま文さんについていった・・・

紅魔館から外に出ると広い庭がある。そこを抜けて熟睡している門番さんを通り過ぎて長い橋を渡った向こうの広い場所に出た。

僕は文さんにきく

「これは・・・どういう・・・？」

すると文さんが僕に言った

「あのですね鞘、あなたはこの世界に来てどれぐらいたちますか」

「今日で三日目です」

「そう！まだ日が浅いわけですよね？そしてここ、幻想郷はなかなか危険な世界です・・・自分の身を守る程度の戦闘能力は必要なですよ」

「はあ・・・」

「というところで少し訓練をすることにしました」

「えっ？」

そういうと文さんは僕の後ろを指さした

そこには一人の男の人がたっていて僕と同じように戸惑っている様子だった。

「どっだ？ハハハ」

男の人が言う。どうやら彼も状況を理解していないらしい……僕は文さんにきく

「どつどういうことですか!?! っていうかこの方は誰ですか!?!」

「うくん……まあ少し鞆の戦闘訓練につきあっていたただく方ですよ」

男の人は

「えっ文……? ってことは幻相郷なのか?」

と呟いている。

するとどこからともなく黒いパーカーを着た人が出てきてその男の人を引っ張っていった……

~~~~~説明タイム~~~~~

鶴 「こんにちは彩風鶴と申します。まあこの作品の作者です(笑)」

鶴 「ええと今回同じくハーメルンで小説の執筆をしている〈reira〉さんよりコラポのお誘いをいただきreiraさんの作品の一つへどこか可笑しい幻想郷より〈時夜〉君をこちらの世界に連れてこさせていただきました!(本当にありがとうございませう)」

時夜 「状況がよく分からないんだが……」

鶴「……ようはコラボなんでまあ適当にやって下さい！ってことです」

時夜（アバウトだな……）

鶴「まあ一回だけ鞘と……あの女の子と手合わせしてやって下さい。それでは！」

時夜「えっ？あいつ女だったの？」

~~~~~

僕は文さんにきく

「戦闘訓練って……どっとうしろって言うんですか？」

文さんは軽い口調で

「ええとですねここに二つのペイントボールがあります。ある程度の衝撃を与えれば破れるのでこれをお二人の額に固定して相手のペイントボールを壊しあってももらいます」

という

「そんな……僕戦闘なんてできないですよ……」

「まあものは試しです！とにかくあの方と一度お手合わせしてみして下さい」

「ふええ……」

男の人は複雑な顔で

「まあ……よろしく（なんかよく分からないけど要はこいつと戦って勝てばいいんだよ

な・・・?)」

といつている・・・

そして僕とその男の人は額にペイントボールをつけて向かい合った・・・

・・・あれ・・・?僕らって取材に来たんじゃ・・・?

ふう・・・今、時夜さん(ペイントボールやらつけるときに自己紹介を済ませた)と向き合っている訳なんだけど・・・どうしろって言うんだ・・・僕はまあもしかしたら記憶のあつたときはそこそこ戦えたのかもしれない・・・その証拠に腰には使い古したような短剣があつた・・・でもその短剣は柄と鞘の部分が固定されていてとても戦闘向きとは思えないし・・・

そうこう考えていると時夜さんが動いた(時夜君には文が木刀を貸しました)僕は短剣を構えようとしてあることに気づく・・・あれ?足がうごかな・・・自分の足を見るとそこは凍っていた・・・僕は何が起こつたか分からなかったがとにかく短剣でじぶんの額を守つた。短剣の鞘と木刀がぶつかつてゴンツ!と低い音が響く・・・僕は必死に木刀を振り払おうとして力を入れて

「うりゃっ!」

つと横に短剣を振つた・・・短剣の先には木刀はなく短剣は空を掻いて「ぶおお

ん」と轟音を鳴らして勢い余って僕の体は横に倒れた．．．思いもしなかったことが起こったため僕は「うわっ」と声を漏らし．．．そして．．．僕の記憶はそこから途絶えた．．．

気がつくまで僕の視界に写ったのは赤い液体と心配そうにこちらを見る時夜さんと写真撮っている文さんだった

「．．．．．これはどういう．．．．．？」

僕が口にするの時夜さんは一瞬こちらを向いたのだが答えに困る感じで文さんの方に助けを求めるように顔を向けた

文さんはいつもと変わらない感じの口調で

「ええとですね。時夜さんとの訓練中に鞘、あなた気絶してしまっただですよ．．．」

「気絶．．．？」

「ええ、コロッと。それでまあ訓練は時夜さんの勝利ってことで」

「はっはあ．．．．．」

曖昧な答えで納得は行かないのだがとにかく時夜さんには迷惑をかけてしまったらしい僕は時夜さんに謝罪をした

すると文さんが楽しそうに言った

「そろそろ紅魔館に戻りましょう、さあ鞘行きますよ」

「えっ?あの・・・時夜さんは・・・」

「ああ、さっきの黒い人が元の場所につれていってくれますよ」

元の場所・・・?なんだか分からないけどまあ考えてもしようがないか・・・  
そして僕は紅魔館に戻ってきた。

続く・・・

小さなおまけ　　くくく時夜君視点の訓練くくく

ふうなんだかよく分からないがとにかくあの子と戦えばいいってことだろ・・・?

でもなああんまり強そうに見えないけど俺もそんなに腕に自信がある訳じゃ・・・

とにかく(四季を操る程度の能力)で足下を凍らせるか・・・

・・・よし・・・あとはまあ額のあれを壊せば・・・

そして木刀を降り下げる。多少手加減をしたが短剣で防がれてしまった

はねのけられそうだったので木刀を引くとその子はかけ声とともに横に向かって思



いつきり短剣を振った

出た音が明らかに短剣から出る音じゃないような音が出たが気のせい……  
ろう

そしてその子は横にのめって倒れたが、倒れる瞬間に妙なものを見た……

その子が今までのゆるい表情からは想像できないような険しい表情で「チツ」とこちらをにらんだように見えた……気のせい……か……？

しかし倒れたかと思うと気絶していたようだった

その子の氷を溶かし、額のペイントボールを割った

俺は……何をしてるんだ……？

# 1章 3話～メイドはつらい・・・です～

さて・・・なんだかよく分からない戦闘訓練を終えて僕は今、文さんと紅魔館に戻ってきたところなんだけど・・・そこで僕は見た・・・門番さんが起きてるところを・・・

「あ、ずっと寝てる訳じゃないんですね」

門番さんは門の端で仁王立ちをしていた。ぼくは門番さんに挨拶しようと思いついて門番さんに近づく

「あくまあ四六時中寝てるわけじゃないでしょうけど・・・これは・・・」

文さんが若干にやつきながらこつちを見ているのがものすごく気になるけど、まあとにかく挨拶をしておこう

「あの、こんにちは・・・僕、文文。新聞の射命丸文さんの助手をさせろ・・・」

そこで門番さんの右足が信じられない速度で僕の顔めがけて飛んできた

「うおわっ!?!」



「えっあそこからここまで一瞬で移動したんですか!？」

「まあ・・・そういうことです」

・・・ここでは・・・幻想郷では僕の常識は全く通用しないようです・・・

僕はまた紅魔館をふらふらし始めた・・・

ふう、どうしようかなあ・・・見学ついても時々メイドさんたちとあつて自己紹介される程度だし・・・

そういえば自分に対しての疑問がいつぱいあるんだよなあ・・・ちよつとそれについて考えてみようかなあ・・・

・・・まず僕は何でここに来たんだろう・・・まあこれは記憶がないからどうしようもないんだけど・・・文さんに助けてもらったときは何を持ってたんだっけ・・・ええと鞘と柄が固定された短剣と・・・あとは・・・服と・・・簡単な鞆だったっけな？

どういふことなんだろう・・・？ううん手がかりが少なすぎるなあ・・・  
・・・後は・・・あつそうだ能力についてだ・・・ここ幻想郷の人たちは何か能力を持っているんだよな・・・

文さんは風を操る・・・だったっけ、僕は・・・何なんだろう・・・ああ!!あの本の内容を覚えてるのがそれか!!あれっ?でも確か・・・えつと一度見たものを忘れ

ない・・・求聞持の能力を持つてる人がいたような・・・あれっ、だれだったっけ？あれ？なんで覚えてないんだ？あれ覚えてるはずじゃ。そういえば幻想郷の地図もうつすらとしか思い出せない!?え!?何で?・・・ああ・・・これには能力じゃないのか・・・じゃあもしかして僕は前まで記憶力がものすごく良かったのかな?うーんやつぱわかんないや・・・

じゃあ最後の疑問・・・さっきの戦闘訓練の時・・・気絶しちゃったのもそうだけどなんかあり得ない速度で短剣を振れたような・・・あのときの轟音がまだ耳に残ってるし・・・あとさつき門番さん・・・えっと・・・美鈴さん・・・だっけ・・・?に蹴られそうになったとき体が勝手に動いたような・・・いや・・・人間ホントに危険を感じたらそんなもんなのかもしれないけど・・・なんか・・・どっちかっというとなかに動かされたようなそんな感じだったんだなあ・・・あああわかんないいい!

もう考えてもしようがないな・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・  
 そして僕は考えることを放棄した・・・・・・・・あれ?デジャヴ・・・・?

そんな風になっていると咲夜さんが前から歩いてきた、

「あ、咲夜さん」

僕が話しかけると咲夜さんが表情一つ変えずに

「取材、させてもらえなかったんだって？」

ときいてきた。うう・・・いきなり痛いところをつかれる

「はは、僕じゃ文さんの邪魔になつてしまうでしょうし・・・」

と無理に笑つて答える

「そう、」

「ところで咲夜さんは何をしているんですか？」

「少し休憩をいただいたのよ・・・それで鞆、唐突なんだけどメイドの体験してみる気はない？」

.....えつ?.....

ええええええ!!えつちよっ!、ええええ、くあせ d r f t g y ふじこーt!?

めめめいど?なんで僕が?ええ!!

ダメだ落ち着け深呼吸深呼吸.....あとええと1、⑨、1⑨、4⑨

「だっだいじょうぶ?鞆?.....鞆?」

名前を呼ばれて我に返る.....素数数える場合じゃねえ!

「(ゴ) (ゴ) (ゴ) めんなさい!!ええええつとそつそれでメツメツメイドさんつてどど、どうい  
うことですか?」

何で僕はこんなに焦ってるんだ冷静になれ、冷静になれ

「ええと、いや、文から鞆が暇そうだったらメイドの手伝いでもさせてあげてっついていわれて……」

文さんその気遣いはとってもありがたいです……ありがたいんですが僕としては文さんの手伝いをしたいんですっ！

そしてなぜか僕は咲夜さんにつれられてメイドの控え室に連れてこられました。

メイド服……着てみたくないことはないんだけど……僕、女の子っぽい服似合わないだろうし……

そんな僕の頭の中の混乱を差し置いて咲夜さんは僕の服のサイズを測り、一着のメイド服をもつてきてくれた。

実際に見てみると想像していたフリフリのついたそれとは違い、動きやすさを重視した感じのシンプルなものだった。

まあさつきまであつたメイドさんたちもこのメイド服だったし考えてみれば当たり前なのだけれど……それに実用性を考えればそりやそうか……

そんなことを考えながら僕はメイド服に着替えた。

……これは……似合ってるんだろうか、それにスカートってこんな

にスースーするものなの？

なんか歩きにくい・・・かも・・・

そんな僕を咲夜さんはじいつと見ていた。

ああやっぱり似合わないんだろうなあここまでしてもらっていて咲夜さんには悪いけど・・・着替えさせてもら・・・

「かわいい・・・」

えっ？

えええ!?

僕は咲夜さんの口から出た一言に驚く・・・かわいい・・・？何を見てそういったんだ？僕・・・じゃないよね？

「鞘、あなたすごく似合ってるじゃない、ほら、見てみなさいよ」

そういつて咲夜さんは僕を大きな鏡の前に押した。そして僕は鏡に映った僕をみて目を丸くする。

「これ、が・・・僕・・・？」

そこには服を変えて髪を結んだだけなのにまるで別人のような自分がたっていた。

「うわあああすごい・・・」



鏡に手をつけて自分の姿をまじまじと眺める。ふと、そういえば自分の容姿なんてほとんど見てなかったなあと思った

そして僕は恐らく生まれて初めてメイドさんになりました!!といつても仕事は運搬などだけだったけど・・・

ちなみに途中で文さんにあつたとき

「おお・・・！なかなか似合ってますねえ・・・いつそのこといつもその服でいたらどうですか？」

と文さんが冗談か本気か分からないような口調で言うので

「ははは・・・それじゃ僕の身が持たないですよ・・・」  
と断った。

その後数分間視線みたいなものを感じただけど・・・気のせい・・・だよ・・・ね・・・？

そして外がもう暗くなってきた頃に僕はメイド服を着替えて咲夜さんにお礼を言つたあと、部屋を後にしようとして咲夜さんに呼び止められた・・・

「鞘、今メイドたちの入浴時間なんだけど・・・あなたも入ったら？」

・・・ええ!?ええ!?

「いいいやいや、いいですよ?!そんな迷惑でしょうし・・・」

僕は必死に遠慮する

「いいのよ、それに汗かいてべたべたじゃない」

確かに・・・汗でべたべたで気持ち悪い・・・いや・・・それでも・・・

ん・・・お言葉に甘えよう・・・か・・・。

・・・お言葉に甘えよう・・・か・・・。

そして咲夜さんにつれられて僕は大きな浴場にたどり着いた

紅魔館の中はほとんど見てしまったつもりだったんだけど・・・この浴場には

気づかなかったなあ

そして僕は大きすぎる浴場に足を踏み入れた・・・

僕は体を洗って大きな湯船につかると一日の疲れをはき出すような大きな息を吐い

た

そういうえば今日はホントに疲れたなあ・・・こんなじゃダメなのかなあ・・・

それに少し頭がくらくらする・・・

それでもこのお風呂があればそんな疲れも吹っ飛ぶ・・・なんてことはなく・・・

僕を見たメイドさんたちが一瞬驚いたようにこつちを見て、戸惑ったような表情をした後、納得したように通り過ぎる………なんてことが何回もあった

なんだか申し訳ないような………なんだか………変な感覚に襲われる………もう一度疲れをはき出すように「はあ」と溜息をつく

「たいへんですねえ」

よこから声をかけられて、答える

「いえ、まあ………しやうがないですy………」

んっ!?!………僕はバツと横を向く

「隣、お邪魔してまゝす」

「あああやさん!?! なななん………何でいるんですか!?!」

僕は驚いて大声を出す………数人のメイドさんがこつちを向いた………

「咲夜さんから入浴の許可をいただいたので」

「は………はあ………」

そして僕はお風呂で完全にのぼせきり、ゆでだこになった………

続く………



## 1章 4話〈取材終了〉

はあ……僕は大きく溜息をついてお風呂からでた。

のぼせててクラクラするし、その上、周りの目がなんとというか……興味深々と  
言った感じの目なんだけど……ちよつと怖い……

「黙ってればただの女の子なんですけどねえ」

文さんに話しかけられ僕は

「そんな……！僕なんて全然可愛くないですし……それに……」  
と全力で謙遜……というか否定をする。

「まあ女の子であることはみんな分かったでしょう」  
ヘラつとそういうことを言わないでくださいいいい！

僕は服を着て紅魔館の大きなお風呂を後にした……そういえば咲夜さんはいつ入ってるんだろう……さつき文さんがお風呂場に張り込むとか言ってたなあ……それと関係あるのかなあ……つていうか紅魔館の住人の一日つて特集を組むんじゃないか……大丈夫なのかな……？

．．．それにしても．．．．．なんか体が．．．熱いというか．．．．．のぼせたせい．．．か．．．．．ふう．．．．．とりあえずどこか休めそうなところは．．．．．  
そして僕は紅魔館の中をふらつき始めた．．．．．

僕は今度こそ．．．．．本当に．．．．．門番さんが起きているところに行くわした。僕は紅魔館の入ってすぐのロビーに来たのだがそこには小さな女の子が．．．．．レミリアさん．．．．．かな．．．．．と遊ぶというか．．．．．闘うというか．．．．．をしている門番さん．．．．．紅美鈴さんがいた。  
「妹様、そうです！そこであいての脇腹があくので右足で．．．．．」

美鈴さんの声が静かな部屋に響くそして空気を裂く「シュツ」つという音が参加する  
「こっか？」

「その調子ですー！」

僕はいろいろと混乱していた．．．．．まずあの子は誰．．．．．  
？レミリアさん．．．．．みたいだけ髪の毛の色が違うしそれに羽になんだか宝石みたいなものがついてる．．．．．あと門番さんなのに門にいらなくてもいいんだろうか．．．．．  
いや寝てるんじゃない、いてもいなくても同じかもしれないけど．．．．．  
頭の中でいろいろと考えていると美鈴さんがこちらに気づいてやってくる

「ああ！あなたは……天狗の新聞記者さんの……ええと」

「じよつ助手の鞆といいますが、ほっ紅、美鈴さんですよね……？よつよろしくお願います」

「やっぱり……僕は人見知りなんだろうなあ、そして……助手……だろう……なあ……」

「よろしくお願いますね」

美鈴さんにはこやかにこたえてくれた。

そして僕は気になっていた疑問を口にする

「あつあのお……その女の子は……レミアさん……ではないですよ……」

美鈴さんは少し驚いたような顔をした後、後ろの女の子と顔を合わせて笑った……

「はははっ！違いますよこの方はお嬢様の妹様の……」

そこまでいったところで女の子が前に出てきてスカートの袖を持ちながら言った

「フランドール・スカーレットよ」

その仕草はレミアさんに似て上品で、声もレミアさんと似ていたけどフランドールさんは……どこか幼い感じの雰囲気だった。

「よつよろしくお願いますっ！」

僕は頭を下げた。そしてもう一つききたかったことを口にする

「あの、さつきは何をしていたんですか？」

そういうと美鈴さんが

「ああ、ええとですね．．．今は妹様から私に、武術を教えてほしいと頼まれました．．．それで私がご教授をさせていただいていました」

武術．．．．．なんとなく苦手な響きで普段では絶対にかかわらないと思うが．．．  
昼間の文さんの言葉が頭をよぎる．．．．．「ここ幻想郷はなかなか危険な世界です．．．．．だから自分の身を守る程度の戦闘能力は必要というわけですよ．．．．．僕は美鈴さんに言った

「あの、僕も一緒に．．．いい．．．ですか．．．．．？」

紅魔館のロビーに「シユパツ」つという音が響いた．．．．．といつても当然僕が拳を突き出して出た音じゃない、もちろん美鈴さんの拳から出た音だ

そして僕はといえば「スツ」．．．全く音なんて鳴らない．．．．．つていうかなるのが普通なの．．．．．か．．．．．？

「もつとしつかり腰を入れて！」

美鈴さんに言われもう一度拳を突き出すが変わった様子はない．．．．．



美鈴さんがこちらにやってきて言う

「鞘さんの場合はたぶん基礎的な体力や力の面が足りていないんだと思います……。普段から体を動かすように意識するようにしてみてください！きつと良くなると思います」

「はい……」

やっぱり僕の運動能力は並以下なのかな……ちなみにフランドールさんは飽きたみたいでどこかに行ってしまった……

「それでも基礎的なことの飲み込みはとても早いですよ！素質あつたりするんじゃないんですか？」

美鈴さんに言われ、お世辞だと分かっているも素直に「ありがとうございます」と返した。

すると……ロビーの入り口から文さんが来て

「鞘、ここにいたんですか、何してたんです？」

そうきかれ、横にいる美鈴さんを指して

「ええと、美鈴さんから武術の……」

そこまで言うとう突然美鈴さんが何かを察知したようにロビーからすごい速さで出て行った……

そして、それとほぼ同時に咲夜さんが現れ、僕たちにこう聞いた  
「いま美鈴がいなかった？」

僕がさつきまでいましたよ、と答えようとすると、それより先に

「美鈴さんですか？ さあ．．．？ 見ていませんですけど．．．」

と文さんが答えた。すると咲夜さんは

「そう」

と一言だけ言つて戻つていった。僕は文さんにきく

「美鈴さんは咲夜さんから逃げてたんですか？」

文さんは曖昧な表情で

「ん．．．．．まあそんな感じですよ。」

と答えた．．．．．それにしても．．．．．美鈴さんには咲夜さんを察知するセ  
ンサーでもついているんだろうか．．．．．？

「そういうえば文さんさつき僕を探してた感じでしたけどなにかあったんですか？」

僕は文さんにそう訊ねた

「ああええとですね取材が終わったのでもう帰ろうかと思ひまして探してたんですよ」

「あ、終わったんですか．．．どうでしたか？」

僕が訊くと文さんは微妙な表情で

「んん〜まあぼちぼちといった感じでしたね……………」

「……………?そうですか……………」

そして文さんは思い出したようにこう言う

「あ、そうですね!忘れてました!今から紅魔館の方々に挨拶をしようかと……………」  
……………それは忘れちゃだめですよ!

「今回はありがとうございます」

文さんは満面の笑みで、集まった咲夜さん、レミリアさん、その他メイドさんたちにお礼を言った

「あ、ああありがとうございますっ!」

そして、ぎこちない僕の声が続く

「いいのよ、記事楽しみにしてるわ」

レミリアさんが言う

「期待しててください」

と文さんが答えた。そして最後にもう一度文さんが

「それでは今後も文文。新聞を(ご)最真に」

と、そういつて僕らは紅魔館を後にした。

僕らが紅魔館を出て行った後、咲夜さんはパチユリーさんと話していた

「パチユリー様にかお分かりになりましたでしょうか」

「・・・・・・・・・・まあ・・・・・まだなんともいえないわねそれにまだ完全にあの子のことを把握しているわけじゃない」

「・・・・・・・・・・そうですよね・・・・・・・・・・」

咲夜さんは小さく溜息をついた

そしてパチユリーさんは椅子に腰掛けて本を開いたその脳内を一つの考えがよぎ

る・・・・・・・・・・

(まさかそんなこと・・・・・・・・・・まさかね・・・・・・・・・・)

パチユリーさんは持っている本に目を移した

続く・・・・・・・・・・

## おまけ編 1

## おまけ編 1話くサバゲー．．．．．ですか？く

僕は今、偽物の．．．．．おもちゃのアサルトライフルをもつて大きな岩を背にして息を殺している。

横には同じく銃（偽）を持った男の一人．．．．．

．．．．．  
どうしてこうなった．．．．．

「サバイバルゲーム．．．．．ですか．．．．．？」

紅魔館から帰ってきて一日空けた朝に文さんの口から出た言葉を僕は繰り返す。

僕は文さんの仕事場で寝泊まりさせていただけることになった、まあそのかわりに仕事の手伝いをするわけだから住み込みのバイトみたいなもの．．．かな．．．？

「そう！サバイバルゲーム！まあサバゲーという方がいいんですかね？」

「？．．．．．無人島にでも行くんですか？」

「あれ？鞘知らないんですか？外にいたときとかに．．．．．」

「ん、外・・・・・・・・・・？ってどういうことですか？」

「えっああ・・・・・・・・おぼえてなかったんでしたっけ・・・・・・・・ええとですね・・・・・・・・」

く少女説明中く

「はあ・・・・・・・・つまり僕はもともと〈外〉にいた外来人・・・で、おそらく幻想入りしたときに記憶も消えてしまったと・・・・・・・・」

「はい。（それにしても変な点もあるけど・・・・・・・・）」

僕は・・・・・・・・幻想郷に生まれたわけではなかったのか・・・・・・・・なんだかよく分からないがちよつとがっかりした。

「それで・・・・・・・・鯖ゲー・・・・・・・・って・・・・・・・・なんなんですか？」

「サバイバルゲーム・・・・・・・・略してサバゲーです！」

「はあ・・・・・・・・」

僕が気の抜けた返事を返す

「ええとですねえ少し気になる外来本・・・・・・・・ええと、外の世界から来た本のことです・・・・・・・・まあその外来本を手に入れたのですが・・・・・・・・」

そういうと文さんは後ろに回していた手を「バツ」と前につきだして僕の目の前に一冊の本の表紙があらわれた

「ええと・・・・・・・・〈サバゲー初心者から上級者への近道〉・・・・・・・・」

「ここで取り上げているサバゲー……というものがなかなかおもしろいのですよ!……  
ということとで外の世界の遊戯という風にして文文。新聞で取り上げたいので、実際に  
やってみようかな……と」

「やる、つて……僕が、ですか?」

文さんが笑顔で頷く。

まあ……取材の手伝いになるのなら、そう思った僕は文さんに

「で、サバイバルゲームつて……結局何をするんですか?」

「ん〜まあ簡単に言えばおもちゃの銃の撃ち合いです」

「……え?」

ええええ? 銃の撃ち合いつて、えつ、だってそれ、死んじゃうんじや……

「ああああやさん?! 銃の撃ち合いつて、それ死んじやいますよね!」

「……ですからオモチャの銃の撃ち合いです!」

「え? ……おもちゃ?」

文さんの口からでた〈銃〉という言葉には似合わない台詞に驚く

「そうです、おもちゃの銃です」

「え? つてことは撃たれても?」「死にません」

「痛くも?」「ありません」

「死に?」「ませんっ!」

しばらくこんなやりとりが続いた後やっと僕が理解し、

「はあ、外ではそんなことが流行ってるんですね・・・・・・・・」

と呟く。文さんは

「まあ銃というものが実際にどのようなものなのかよく知らないんですがね」

といっている。

大丈夫なんだろうか・・・・・・・・・・・・・・・・? ..?

「それでサバゲーって・・・・・・・・具体的になんですか?」

「ええと本によりますと・・・・・・・・エアソフトガン・・・・・・・・まあおもちゃの銃  
ですね。その銃を使って撃ち合いをします。ええと基本的に玉は当たったら自己申告、  
また2チームに分かれて行うそうです。チーム全員が〈死亡〉したら負けとなります。」

「場所は?」

「まあ適当に決めればいいでしょう」

アバウトだなあ・・・・・・・・

「それじゃあ人や道具はどうするんですか?」

「それについては心配はいりませんよ」



文さんはたのしそうにそういうと僕の後ろを指した。

そこには……女の人が1人……あと、ええと男の人が4人いた。……  
 なんだらうこのデジャヴは……

~~~~~説明タイム~~~~~

さて、どうも彩風です！今回ええと僕と天狗の物語に僕の友達のオリキャラ（つうか友達を若干キャラ変えたもの）3人とリア友……ハーメルン作家の雨宮さんの〈東方紅葉伝〉より雨宮紅葉くんを引きずってきたんですが……ええと簡単にみんなの説明を……

・オリキャラ3人と自分

・まるさん 男

中3で超がつくほどのメカニック、基本冷静な人、めがね

・くまんさん 男

高1で超がつくほどのロリコン、基本優しい性格のイケメン……でもロリコ

ン

・なるなる 男

中2で彩風鶴と名乗っている、天ば 以上w

・ かいりさん 女

中2で唯一の女子、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の天才・・・・・・・・でも腹黒、とにかく腹黒ぱつと見めつちやいいひと、でも腹ぐる・・・・・・・・

・ 東方紅葉伝より

・ 雨宮紅葉 男

銃器、兵器を創造する程度の能力を持つ。それ以外はまだ謎が多い

~~~~~

「・・・・・・・・・・・・・・・・文さん・・・・・・・・この方たちは・・・・・・・・?」

「ああ・・・・・・・・ええとですね、外来人と言えば外来人ですし違うと言えば違いますね・・・・・・・・」

「答えになってないですっ!」

それでもあつち側にいる5人・・・・・・・・いや1人をのぞいて4人は状況を理解している様子だった。

か「あれ、なるさんなんでいんの?」

な「いや、人数足んなかったし・・・・・・・・」

か「いや作者がいるとかおかしいっしょ」

な「そうかな?」

ま「そうだろ」

く「・・・・・・・・・・ははは・・・・・・・・・・」

か「まあとりあえずなんか打開策考えろ！」

そういうと女の人は細い足で癖つ毛の男の人・・・・・・・・・・を蹴り飛ばした・・・・・・・・・・  
蹴り飛ばした!?!

そう、言葉のままに（蹴り飛ばした）

ま「うわっ・・・・・・・・・・いったそう・・・・・・・・・・」

か「大丈夫だつてw」

女の人が上品に笑う・・・・・・・・・・ものすごく怖いんだけど・・・・・・・・・・

そして何か戸惑ってる男の人が周りを見回す。

「えっ、いやちよつと、こ（こ）ど（こ）？」

そして見たことあるパーカーをかぶった人が・・・・・・・・・・つとかたぶんさつき女  
の人に蹴り飛ばされた人が戸惑っている男の人を連れて行った・・・・・・・・・・

くく彩風が説明中くく

しばらくするとさつききの男の人が微妙な表情で戻ってきた。まだ納得がいていな  
い様子だ・・・・・・・・・・

そして僕たちはお互いに自己紹介をした。

しばらくすると文さんが「いいですかー？」と声を上げた

「はい、では今から皆さんにサバゲーを行ってもらいますーええと・・・とりあえず保護めがねは今ここにあるので着用して下さい」

そういうと文さんが白い透明なゴーグルのようなものを配った、みんながそれをつけると文さんが説明を再開した

「さて、エリアなんですけど・・・特に取り決めません、迷子にならない程度にお願いします。妖怪とかの心配はこちらでどうにかするので大丈夫です。そして・・・肝心の武器なのですが・・・」

文さんはチラッと雨宮さんの方をみると小さく頷いた。

雨宮さんは溜息をつき、「ほっ」と小さくかけ声を言うと雨宮さんの前には様々な銃が転がっていた。

僕は呟く

「これが武器、兵器を想像する程度の能力・・・」

「んっ、好きなの選べばいいよ」

そういうと雨宮さんは自分の手に大きな銃一つと腰にピストルを出現させた。

僕はたくさんある銃を前にして

「うわぁ・・・まるで本物みたいだなぁ・・・」

とつぶやく

「なんだ？これ？」

急に横から話しかけられ僕は

「ああ……ええとエアソフトガンっていつておもちゃの銃……」  
ん？

僕は横に振り向く、そこには大きな帽子をかぶった金髪の女の人が座って、銃を触っていた

「ん？どうすんだこれ？」

「うわああああ、すすすいませんすいません」

「うわっ！びつくりしたくいきなり大声出すんじゃないぜ」

「え？いやっそつその……あなたは……」

「ん？私か？私は霧雨魔理沙だ、よろしく」

「え？ああはい……よろしく……です」

え？どういうこと？さつきまでいなかっただよね？この人、ええ!?どういうことだ？

ああ分かんない……

僕が考えていると魔理沙さんは文さんに尋ねる

「おーい天狗！これなんなんだ？っていうかなにしてんだ？」

すると文さんの代わりにかいりさんが魔理沙さんに言う

「ええとですねいま外の世界の遊びの(サバゲー)と言うものをやろうとしているんですが、これはその時にもちいる・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・なんでかいりさんは普通に魔理沙さんと喋っているんだろうか・・・・・・・・・・？

「へえ外の世界ではこんなのをやっているんだな」

そう言うのと魔理沙さんは転がっているピストルを一つ手に取るとおもむろに岩目掛けて引き金を引いた、「パンツ」と小さな音がしてピストルからBB弾というものが発射される。魔理沙さんは楽しそうに

「へえ、こりや面白そうだな天狗、私も混ぜてくれよ！」

と文さんに言った。文さんは

「まあ人数も足りなかったしちしようどいいでしょう」

そういうと文さんは僕の方にやってきて

「さあ、まだ決めていないのは鞆だけですよ」

「え？」

辺りを見回すと、皆自分の手にそれぞれ銃を抱えていた。ちやつかり魔理沙さんも中くらいの銃を一つとピストルを一つ、

はっ早く決めないと！そう思い僕は銃に目を移した、そして何となく気に入ったものを選ぶ。

そして適当なものを二つ手に取った、すると文さんが本を片手に銃について教えてくれた。

「ええとつ、その大きな方がSIG SG550 まあアサルトライフルですね命中精度も高く、使いこなせば下手なスナイパーとなら遠距離で戦えます。そしてそつちがコルトパイソン．．．まあ回転式拳銃ですね、リロードの方法は分かりますか？」

「はい、さつきかいりさんにききました」

「よしっ！それではチーム分けです！チームはこちらで分けさせてもらいました！」

僕は一気に文さんに注目する、

「ええと、まずAチームは．．．雨宮さん、かいりさん、魔理沙さん、です。で、Bチームが鞘、まるさん、くまんさんで、お願いします。」

僕らはチームになったもの同士で顔を見合わせる、そして集まって簡単に作戦を考えた。

．．．．．そして．．．．．

「それでは二分後、スタートの合図に、雨宮さんに創造してもらった閃光弾を投げるの

で、それとともに開始して下さい・・・・・・・・・・では、開散！」  
文さんが言い終わると僕は一斉に二方向に散った・・・・・・・・・・

続く……。



## おまけ編 2話くサバゲー……………です。ね。く

【まるview】

ええと……………彩風から「小説に出てくれ」といわれて、幻想入りしたものの……………サバゲーとは……………せめて教えてほしかった……………。

んで、俺は今スナイパーライフルのスコープをのぞいている。

さつき立てた作戦……………っていえるほどたいそうなもんでもないが、まあ話し合いによると、鞘とくまんさんは前線につっこんでいって、俺が援護するって形になった。まあそううまくいくとは思えないけど……………。

俺はスコープをのぞいて鞘とくまんさんの場所を確認する。そして周りを見回す、すると魔理沙がほうきにまたがって空を飛んでいた

「この距離なら……………狙えるか……………?」

そうつぶやいて標準をあわす。

すると予想外な事に、魔理沙がこちらに気付いたらしく猛スピードでこちらにつっこんできた

(ヤバッ)慌てて一発撃つと、不思議なことに「フツ」と魔理沙がスコープから消えて後

ろで声がした

「いくぜっ!! マスタースパークっつとと。こっちじゃなかったな」

「んなっ!」

驚きつつ振り返り、魔理沙が撃つたと同時に体を横に転がしてなんとか難をしのいだ。

そのまま走り、すぐその岩に身を隠す。

後ろから魔理沙のサブマシンガン、トプソンM1928A1の「スパパパ」という連射音が聞こえてくる。

(クツソ、サブマシンガン相手にパイソン一丁じゃ流石にきついかな………PSG

―1は置いて来ちゃったし………)

と思考を巡らしていると、不意に音がぴたりとやんだ。

「んっ何だ? 弾切れか?」

そういうと魔理沙はトプソンを「ポイツ」と道端に投げ捨てた。

(捨てんなよっ!)

そう叫びたかったがこちらにとってはこれ以上ないくらい好都合。これで手持ちはハンドガン同士で互角になった。

その上、俺は魔理沙のデザートイーグルに入っている弾の数を知っている、たしか3

0発、それを打ち終えた瞬間に突っ込めばいい、

そして俺は岩陰からでて、魔理沙と対峙した。のもつかの間、間髪入れずに魔理沙が撃ってきた。

それでも距離はあるためハンドガンならねらいも安定せず、当たる心配はなさそう  
だ。

(突っ込んでこられたらどうしようかと思つてたが、良かった)

そして魔理沙が27発目を撃ち、そろそろ……と身構えた瞬間、……  
頭部に何かをつけられる、振り向こうとすると澄んだ声で

「動くな〈フリーズ〉」

と言われ、動きを止める、構えていたパイソンが蹴られて道端に飛ばされた。「クスク  
ス」と笑う声が聞こえる……声の主はかいりさんだった……

「ふふっ、まるさんOUT〜」

年末の某番組のように楽しそうにそういうと俺はかいりさんに〈殺された〉

「ちよつと、かいりさんいつからそこいたの？」

俺がかいりさんにきくと、かいりさんはにっこりと笑つて自分の口元に人差し指をつ  
け

「まるさん、〈死人〉はね……喋らないんだよ？」

といった、ものすごくイラツときたのだが、こればかりは仕方ない、と俺は黙った俺がスタート地点まで戻ろうとするとかいりさんが置きっぱなしになっているPSG―1をみて

「あつ、PSG―1! やった♪」

とうれしそうに言う、すかさず俺が

「いや、それルール違反じゃ……」

最後まで言う前にかいりさんがまた人差し指を口元につけて

「まるさん、〈死人〉はね、しゃべらん」

分かった分かった、仕方なく俺はその場を後にした、魔理沙が察したのか「大変だなあ」と声かけてくれたが、あんまり慰められたかんじはしなかった……

はあまさか一番最初に〈死ぬ〉とは……

後の二人は大丈夫だろうか……いや、でも紅葉相手に近距離武器の二人じゃ

さすがにきついだろうな……

なんてつたつて紅葉の武器は……

【鞆view】

ふう……ひとまず僕は岩陰に腰を下ろした。ここで待ち伏せしていればいずれ誰かくるだろう……

そう考えながら僕とくまんさんは少しだけ待った、するとまるさんが狙撃するといっていた所からエアガンの音が聞こえてきて、行くかどうか、くまんさんに尋ねると「大丈夫だと思うよ……まるさん運動できるし……」（鞘ちゃんと一緒にいれる方がいいしね♪）」

とにこやかに答えてくれた、

そして岩陰から顔を出していたくまんさんが、急に顔を引つ込めた。

僕が声に出さずに表情で（どうしたんですか？）と伝えると、ジェスチャーで（前方、敵！）と返ってきた。

その返答に僕は体を強張らせる……そして銃を構えた、

すると、くまんさんが手で（待ってて）という風にウインクしながら僕に伝えると、岩陰から飛び出していった、

（えっ？）

僕は驚いて動けなかったが、岩陰から出て行つたくまんさんがおもむろに銃を構える……がすぐに血相を変えたかと思うと、僕のいる岩陰に飛び込んできた。

さらに僕は意味が分からなかったのだが、そっちの疑問はすぐに解けた、









腰からハンドガンを取りだしこちらに向けて撃つ、

「ひゃっ！」

僕は後ろに尻餅をつく、気付かれた以上ほとんど僕に勝ち目はない。

どうする………？

僕は数秒考えて、そして僕はなかばヤケになって突撃していくことに決めた………。

そして………。

皆さんは………ゾーンという言葉を知っていますか？

ゾーン、主にスポーツ選手などが体験することがある〈究極の集中状態〉を指します。このゾーンに入ると周りのものがすべてゆっくりに見えると言います。そして………僕は今、………それに近いものを体験しました。

正確にはへすべてが止まってゝ見えた。そして、自分の意志に関係なく、〈勝手に体が動いた〉、

詳しく言うと、あのととき僕は突つ込んでいこうと覚悟を決めて岩陰から出て、紅葉さんに突撃していった、が、紅葉さんは微動だにしていなかった、普通の人ならこの状況

には恐怖すら感じるだろう、でも僕はもつと驚くべき事を体験した。

一瞬、……そう、一瞬で紅葉さんの後ろに回って……  
銃を紅葉さんの後頭部に押し付けた。

そして間髪入れずに撃った。「パンッ」という音が響き……  
僕の記憶はまた、……そこでとぎれた……

僕はサバイバルゲームのスタート地点、まあ要するに文さんの仕事場の前で目を覚ました、みんなが……、正確には紅葉さん以外の方達が心配そうな顔で僕の顔をのぞき込んでいた……

「うわっ!」

目を覚ますとともにそう叫んだ僕を見て皆が安心したように、笑った

「良かった……無事意識が戻ったようで」

文さんに言われて僕は溜息をつきながら言った。

「また……気絶しちゃってたんですか……?」

僕の問いに対して文さんは無言でうなづく、

「あれ?紅葉さんは?……というかサバイバルゲームは?」

それに対して文さんは

「紅葉さんは先ほど元のせか……ええとまあいるべき場所に戻りました。そしてサバイバルゲームは……残念ながら、2―0で鞆のチームの負けでした。」

それをきいて僕はとつさにくまんさんとまるさんの方に向き

「ごっごめんささいっ！僕の力不足で……」

といったが、くまんさんは笑顔で

「なに言ってるの！鞆ちゃんは紅葉君を倒したわけだから、一番活躍してたよ！むしろ僕らが力不足だったよ」

といってくれた。

え？……倒した？……僕が……紅葉さんを？……

すると僕の脳裏にうつすらとあのときの情景が浮かんできた……

そして僕はあのことをみんなに伝えようと口を開きかけた……が、説明しようにも、どうすればいいか分からない。

そして僕は開きかけた口を閉じた。

夜……、かいりさんたちが帰って行って僕は文さんの仕事場で雑用をこなして一日

を終えた。

丑三つ時……射命丸文はふと目を覚まして横に寝ているはずの助手……心音鞆がないことに気づき辺りを見回したがだれかがいる様子はない、文は体を起こして仕事場を出た。……するとそこには

ただ空を見つめる鞆がいた。文は鞆に話しかける。

「鞆、どうかしたんですか？」

文の問いに対し、鞆は視線を一切変えずに、心此処にあらざといった感じで答えた。

「あ、いえ……」

、そしてふたたび鞆は言葉の口にしながら振り向いた

「月が……綺麗だな……」

(まだもう少し……)へこころねさやへは口の中で静かに呟いた。

続く……

小さなおまけ……紅葉君の視点……

はあ……なんだかよくわかんないまま始まつちまつたんだが……

というか……自分で思ったものがそのまま創れるんだな……まさかエアガンのミニミを創れるとは……うれしい誤算だ……

っていうか……前に一人……ええと、くまん、だったっけな……あいつ隠れてるつもりか？ おもいつきし顔みえてんだが……

とにかくさつさとあいつを（殺す）か……

すると、くまんはいきなり俺の正面に立ちはだかった、

「ミニミ相手に正面からとは……いい度胸してんな」

感心半分呆れ半分に俺は呟くとミニミを撃ち出す、するとくまんはすぐさま岩陰に飛び込んだ……まあ妥当な判断だろう……

俺はなおも威嚇し続けた、するとまだ懲りないのか、くまんが飛び出してきて草むらに逃げ込む、

（無駄だったのに……）

俺はその草むらに銃口を向けようとした、が横から弾が飛んでくる。

「んなっ!？」

ついそう叫んで撃たれた方向を見る、しかしどこから撃たれているのかは分からなかった、仕方なく俺はミニミを止めて耳を澄ました、しかし音は聞こえないのに、また弾が飛んできた、どうにかして音を消しているのだろう。でもへ飛んできた方向が分か

ればいい。俺は弾が飛んできた方向に視線を移す。

いた、岩の横から少し顔をのぞかせている……。あれは。鞆……。だつたな……。俺はニヤツと笑つて岩の方向にグロックの弾を放つ、そして小さな叫び声を上げて鞆が岩に隠れる。

……。そして、その瞬間俺はへしんだ、そう、その瞬間に俺の後頭部には弾が当たつていた。

振り返るとそこには鞆が倒れていた、何が何だか分からなかったが俺がへ殺された。という事実だけはしっかりとしていた。そう、へ鞆にへ殺されたのである。

おれは「HIT……」と静かに右手を挙げると、そのままその場を後にした。

もういつちよ小さなおまけくくまんさんのおまけくく

ええと、何が起こつたんだ？

鞆ちゃんがいきなり紅葉君の後ろに来たと思つたら、すぐ倒れちゃうし、紅葉君はどっか行つちゃうし……。とにかく鞆ちゃんが大丈夫か確認しないと、もう思い鞆ちゃんに駆け寄る、

「大丈夫？」

そう聞いたが返事ではなく代わりに

「んんっ・・・・・・・・・・・・・・・・！」

というような痛みに耐えるような声が出た。

・・・・・・・・・・・・・・・・めっちゃかわいいんだがつつつつつつつ!!!!!!

てかこれあれじゃね？人工呼吸おkじゃね？いやまあ鞘ちやんがいきなり倒れたか

ら驚いてっつてことで、・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

いける・・・・・・・・・・だいいちこれしようs・・・・・・・・

そこまで考えたところで後頭部に衝撃を感じる、

「っつて!？」

後ろを振り向くとかいりさんが笑顔で

「何しようとしてんの〜〜〜？ロリコンン？」

と聞いてきた、即座に

「何でもありません！」

と返す、そしてかいりさんはエアガンではなく手を銃の形にして鞘ちやんに向け、

「BANG」

とだけ言った。





「ああ、ええと白玉楼という場所なのですが……分かります？」  
文さんに尋ねられてぼくは

「あ、分かります！ちようど今読んでた記事に書いてありました。」

といいながら手元の〈文々。新聞〉を開く、そこには

『未開の桜の木の下に謎の花びら！』（公式ファンブック、東方文楳帖より）

という見出しがあった、

そこには冥界の白玉楼にすむ西行寺幽々子の仕業か？との文面があり笑顔のおっとりした感じの女の人の写真が添えてあった。

「ここに取材に行くんですか？」

僕がそう聞くと、文さんが答える

「はい、あの、前に紅魔館の住人の1日、という取材をしていたじゃないですか？」

僕は頷く

「あの記事がなかなか好評だったようで、今度は白玉楼に行こうかと……」

「なるほど……分かりました！、で、いつ行くんですか？」

「今からです」

……

え？……

しばしの沈黙の後、僕がもう一度言葉を口にする

「ええと・・・・・・・・・・、今、なんて・・・・・・・・・・?」

「いや、だから今からです」

またしばし沈黙が入り、僕が言葉を発する

「ええええええ!!今からってそんな、え?・・・・・・・・・・第一、何の連絡もなしにいきなりって言うのは失礼じゃ・・・・・・・・・・?」

「紅魔館の時はいきなり鞆を向かわせましたけど・・・・・・・・・・?」

「・・・・・・・・・・まあ・・・・・・・・・・確かに・・・・・・・・・・それでもですね?やっぱりいきなり行くのはまずいんじゃない・・・・・・・・・・」

「大丈夫です、だいたいいつも文文。新聞は神出鬼没ですし」  
「使い方・・・・・・・・・・間違ってますか?」

さてさて・・・・・・・・・・それで僕は白玉楼を目指すことになったんですが・・・・・・・・・・

いま、不良の(?)女の子が僕たちに向かって宣戦布告しています・・・・・・・・・・

「やい!天狗!そして、その・・・・・・・・・・?だれだおまえ・・・・・・・・・・?まあいい!あたいと勝負しろっ!」

「チツチルノちゃんっ!・・・・・・・・・・やめた方がいいよ」

「大丈夫だよ大ちゃんっ！あたいはさいきよーだもんっ。さあかかってこい！」  
僕は文さんに聞く……

「え？あの……文さん、これは……」

「ああ相手にしなくて大丈夫ですよ、ただの妖精です」

ただの妖精、、つて妖精がもうへただ〜じゃないんじや……

僕は口には出さず思ったが、文さんが「勝負しろっ！」と叫ぶ妖精さんを無視してスタスタと歩いていくので僕は

「ごめんね、文さん今忙しいみたいだから……」

と妖精さんに言うと、妖精さんは文さんに向けていた視線を僕に向けて

「じゃあもうおまえでいいから勝負しろ！」

僕の体が固まる。

「え？……あの……ええと？」

僕は文さんの方を見る。

文さんが小さく溜息をすると、僕らの方へ歩いてきて、僕の手を取った……そして……

次の瞬間僕は……浮いていた……いや、正確に言うと文さんにおんぶされた状態で浮いていた。下を見ると、さっきの妖精さんたちが周りをきよろきよると見渡

しながら

「やいつ!天狗!どこに行つた?隠れてないで出てこい!」

僕が文さんに尋ねる。

「ええと、・・・・・・・・・・どうするんですか?」

文さんが表情一つ変えずに

「このままおいていけばいいでしょう・・・・・・・・関わつていても仕方ありませんし・・・・・・・・白玉楼まで歩いたらかなりかかるので・・・・・・・・」

「え?いや、あの・・・・・・・・おぶつていたら疲れませんか?」

「え?・・・・・・・・はははっ!大丈夫ですよそれくらい、舐めないで下さい!」

「はあ・・・・・・・・じゃあ・・・・・・・・お、お願いします・・・・・・・・」

そして僕たちは白玉楼に向かって飛んでいった

はあ・・・・・・・・47・・・・3段・・・・・・・・目え・・・・・・・・はあ。はあ・・・・・・・・

僕は石造りの階段に倒れる

「はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・あ、あ・・・・・・・・文さん・・・・・・・・もう・・・・・・・・

ケホツケホツ・・・・・・・・限界・・・・・・・・です・・・・・・・・」

「階段、まだまだ続きますよ・・・・・・・・?」

「あの……さつきみたいなのに……文さんに……おぶってもらって……飛んで……いけない？……んでしようか……」

「あああ、ええと……その……あれです……そう！」

文さんは何か思いついたように言う

「えと、此処冥界では妖怪の力というのは弱まってしまふんです、だから自分一人飛ぶのだけでも疲れてしまうのです……(大嘘)」

僕は納得し

「はあ……なるほど……そんな理由が……そうとは知らず、ごめんなさい」

そういうと文さんに

「はいはい、そんなことより、休んでたらいつまでたつてもつきませんよ！」

そういわれ僕は重たい足をまた動かし始めた。

文さんがにやついていたのはきつと気のせいだろう

意識が朦朧としていて、視界が揺れてきた頃……ついに僕は……白玉楼を目にした……そこには紅魔館とは対照的に古くからある日本家屋の大きなお屋敷が建っていた……。

「や、やっと・・・・・・・・ひい、ひい・・・・・・・・つ、つきました・・・・・・・・ね。・・・・・・・・  
はああああ」

そして、僕の視界は揺れて揺れて、そのまま真っ白になった。

僕は目を覚ますと、目の前には銀髪の僕と同じぐらいの背の女の子がタオルを洗つて、絞つているところだった

「え?・・・・・・・・あ、あの・・・・・・・・」

僕が朦朧とする頭で必死に絞り出した言葉にその女の子は

「あー、気がつきましたか・・・・・・・・良かつた、」

と、笑顔で答えてくれた。

「えと、その・・・・・・・・これは・・・・・・・・?」

僕が尋ねると

「あなた、階段を上ったところで気絶したらしいんですよ。それで幽々子様から介抱してあげるように命じられて今に至るわけです」

だそうだ・・・・・・・・倒れた・・・・・・・・また気絶し

て、文さんや他の人にも迷惑をかけてしまった・・・・・・・・

「はあああ」

大きな溜息をつく僕に、女の人是不思議そうに首を傾げた。

そして僕は白玉楼の大広間に案内された。ちなみに僕を介抱してくれた女の子の名前は妖夢さん、というのだそうだ。

さて、その大広間にはひとりの、ピンク色の髪が目立つ女の人が座ってせんべいを片手にお茶を飲んでいた。

そう、そこまでなら僕も当然驚くことはなかった………。その女の人……幽々子さんの周りを飛び回る青白い何かをみるまでは……

「ひゃっ!? ひ、ひ……人魂、」

僕は妖夢さんの後ろに隠れる。すると幽々子さんがこちらを向いて

「あら、起きたのね〜」

と笑いながら軽い声で僕に話しかけた。僕が幽々子さんの周りの人魂を指さして、

「ひ、ひ、ひ、人、人魂が!」

と言うと、またまた軽く

「あら、妖夢の人魂には驚かないのね〜」

その一言に僕の体が固まった

ゆっくり妖夢さんをみると、困った表情でこちらをみていた

そして、僕は妖夢さんの周りを飛び回る白い大きな人魂をみて、また気を失いそうになる、が、ぎりぎりのところで何とか持ちこたえて、そして

「ひゃああごっつごっ、ごめんなさいいい・・・」

必死に何かに謝った

妖夢さんが困ったようにこちらをみて幽々子さんはきよとんとしている。

・・・すると後ろでふと「カシヤツ」と音がした。

振り返るとそこにはクスクスと笑う文さんがいた、

「鞘は驚くことと驚かないものの差があり過ぎじゃないですか?」

そういうと文さん撮った写真を確認した。

「え・・・?だって、ひ、人魂が・・・」

僕が涙目でそういうと

「この世界には天狗もいますよ?」

「そ、それは・・・」

僕は口ごもる

「吸血鬼も、悪魔も、魔女も・・・あと妖精もいますよ?」

「・・・」

やっぱり僕はいままでの常識をきれいさっぱり捨てきれないといけないようで



す・・・・・・・・・・

僕は呼吸を整えて、素数を数えて立ち上がった。

そしてふと思つた疑問を口にする。

「そういえば文さんは今までどこにいたんですか？さつきまでいなかつたみたいですけど？」

文さんは目を若干そらすようにして

「ああ、ええと、鞆のことを西行寺さんに頼んだ後、ちよつと野暮用がありましたね・・・・・・・・それより！鞆は大丈夫なんですか？」

そう言われ、僕は

「あ、大丈夫です、妖夢さんのおかげですっかり元気です」

「そうですか、それはよかったです。」

文さんはそういつて笑うと、視線を幽々子さんに移した。

「ところで、西行寺さん？」

いきなり名前を呼ばれてか幽々子さんは煎餅を加えたまま

「ふあゝ？」

と返事をした。

すると文さんはド直球に

「今日から明日までなんですが取材してもよろしいですか?」  
と尋ねる。

いくら何でもその頼み方はまずいんじゃないか……  
そう思つて心配そうにみていると幽々子さんの答えは

「いいふあよ、ふえつに」

予想外にもYESだった。

え?、と思いつきに妖夢さんをみたが特に不満はなさそうな様子だった。  
取材交渉というのはこうもあっさりしているものなんだろうか。

そして僕は二度目の取材を体験することになった。

続く

本当に小さいオマケく氷の妖精く

くつそおく……いくらあたいが最強だからって逃げるとは卑怯なやつら  
め……

今度会つたらぎつたぎたにしてやる。

「大ちゃん!いこう!」

「あ、待って、チルノちゃんっ」

妖精たちは今日も平和です。

## 2章 2話～妖夢さんも大変だった～

さて、なんだかよく分からないまま白玉楼の取材が始まった訳なんだけど……  
なんとさえいえばいいのかわからない、なんだか想像してたへ取材とは違った……って感  
じだ。

想像してたのはもつとなんか……話を聞きながら、ええと……  
なんか、もつと、突き詰める感じの……そんな感じのものだった、

が、実際は文さんは幽々子さんの横で座ってるし、僕は文さんに

「鞆は妖夢さんについて行って下さい、分かったことやおもしろいことは細かくメモを  
取るように！」

といわれて妖夢さんについて行って行くけど、何というか……妖夢さんはずつ  
と料理や掃除など、家事をしていたから特にメモすることもなかった……  
(こんなので記事になるのかなあ)

と心配しながら、なおも妖夢さんの後について行っていると、ずつと縁側に座ってい  
た幽々子さんが

「妖夢……」

と妖夢さんと呼んだ、妖夢さんが慌てて

「はい！なんですか？」

ときくと幽々子さんが

「お茶菓子なくなっちゃった……」

と、そばにある木のお盆を見る……妖夢さんが

「あ、はい！今、持ってきてます」

そういつて急ぎ足に台所へ向かった、そして僕はそれを追う。

そして、台所について妖夢さんが戸棚を開いた。

「………」

「無い………ですね………」

そこには目当てのものはなく、僕がそういうと、妖夢さんは困った顔で

「ど、どうしよう………」

と呟いた、

「と、とにかく、幽々子様には謝ってこないと。」

そういうと、縁側に向かって走っていった。

「す、すみません、幽々子様……」

妖夢さんが幽々子さんに謝ると、幽々子さんが静かに目を閉じて、言う

「じゃあ、今、食べられない？」

その幽々子さんの表情は赤ちゃんが甘えるようで、妖夢さんは何も言えなかったようだった。

そして幽々子さんが言った

「買ってきてくれない？」

その幽々子さんの言葉に妖夢さんはしどろもどろになりながら

「いや、……でもあのお菓子は人里でしか手に入らなくて……今からい

くのは……」

というが、幽々子さんが涙目攻撃をしかける。そして甘えとも脅しともとれる

「ダメ？」

の一言で妖夢さんは溜息をつきながら

「分かりました、買ってきます……」

といった。

(妖夢さんも大変なんだなあ)

と考えていると、あることに気づく

僕が妖夢さんの取材をするってことは、すなわち妖夢さんについて行かないやいけないってことで……ってことはあの階段をもう一度上らなきゃいけないって……?

僕は静かに文さんを見る、文さんは笑顔で

「鞘、行つてらっしゃい」

と言った。僕は……死ぬかもしれない……

「妖夢さんは腰に剣をさしてますけど……その……お強いんですか？」

僕の前でスタスタと階段を下りていく妖夢さんは振り返らず、

「いや、私はまだまだ未熟ですよ……」

という

「そうなんですか……? そうですね……幽々子さんの使用人として働いているんですよね?」

そうきくと妖夢さんは若干不満を含んだ声でこういった

「いえ、私は白玉楼の住み込みの庭師ですよ? まあ一応は幽々子様の剣術指南役ではありますけど……」







「(ぎゅ)っ(ぎゅ)っ(ぎゅ)っめんなさい!」

そういつて僕は妖夢さんに支えられた状態を直した

そして文さんを見る

「ど、どどどうして、いつも普通に出てきてくれないんですかあ!」

涙目の僕の写真を取りながら文さんは一言

「おもしろいからです☆」

「そんなあああ」

僕の無念の叫び声が響く。

ふう・・・・・・・・・・・・・・・・

僕は落ち着こうと深呼吸をして、そして文さんをみる。

「そ、それで着替えをしていくってどう言うことですか?」

「え? いやまあ、その格好では人里では目立つでしょうし、目立たないような服装に、と・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いや、その・・・服はどうするんですか?」

「大丈夫です。白玉楼から借りてきました!」

そう言うときさつきからずつと黙って僕らのやりとりをみていた妖夢さんが「え?」と

小さくいつて文さんをみる

「それがコレです」

テレビショッピングのように文さんが言うのと後ろに回していた手を前に出した  
そこに持っていたのは……

「……………文さん？これは……………」

……………そこに持っていたのは

「なんで……………ゴスロリなんですかつ!？」

ゴスロリだった。

「ゴスロリ……………?って言うんですか?あいにく白玉楼にはコレしかなかったも  
ので」

と、真顔で言った。

「え、え?えと……………その人里の人たちは皆さんこんなのを着ているんですか?」

「はい」

と、これまた真顔の文さん、これは……………着た方がいいのだろうか……………

しばらく悩んだ結果、妖夢さんはどうなのか?という疑問が生じないでもなかったけ  
ど、周りが見んな着ているなら……………としようがなく着ることに決めた

「分かりました……………」

そう口から絞り出すと文さんから

「どうぞぞ」

と、満面の笑みでゴスロリを手渡された、

はあ．．．．．

僕は心の中で大きな溜息をついてから

「それじゃ．．．．．着替えてきます．．．．．」

と近くの森に入った。

その僕を見る妖夢さんの目からは、戸惑いと、疑問と、哀れみと、不気味がる様子が見てとれた

「き、きき．．．．．き。着替えて．．．．．来ま、きま、した．．．．．」

僕は違和感と恥ずかしさをスカートと握ることどころか隠し、．．．．．  
まあ、実際には隠せていなかったわけだけど．．．．．妖夢さんと文さんのところ  
に出てきた

「うん、予想通り、ばっちり似合っていますよ」

文さんが満足げにそう言い、妖夢さんに

「妖夢さんも似合ってると思いますよね？」

と急に振った。

急に振られた妖夢さんは「えっ!？」

と小さく漏らして

「えと、似合ってるんじゃない……ですかね? (いや、まあ似合ってはいるんだけど、男の子が着てる、って考えると何ともいえないものが……)」  
と、無難な答えを選んだようだった。

「あ、あつあ、……ありがとう……ご、ごさいま、す……」

顔を真っ赤にしてうつむきがちの僕をへ乱写したあと、文さんは

あまりにすんなりと、息をするように

なんの問題もないように、

「まっ、ゴスロリでいくと目立つでしょうし着替えていった方がいいですよ」

と口にした

「はっ」

僕の気の抜けた声が響いた

少し地味な着物を着た僕が頬をふくらませながら階段を下りていく、

その後ろを文さん、妖夢さん続く……

文さんが笑いながら言う

「鞆・・・・・・・・悪かったですから・・・・・・・・クスクス・・・・・・・・機嫌直して下さいよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕が無言と涙目で答える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・まあ気をつけて帰ってきて下さいね」

文さんがそういうと僕は

「えっ？ついてきてくれないんですか？」

とついつい話しかけてしまった

「まあ、幽々子さんの取材もありますしね」

そう言うところりと後ろを向いて

「妖夢さんもついてますし、大丈夫でしょう・・・・・・・・・・・・・・・・きつと」

と付け足した。

僕は少し不安だったのだがそれを隠すように

「分かりました・・・・・・・・・・それでは」

と答えた。

そして文さんは文字通りあつという間に行ってしまった。

続く……。

## 2章 3話～人里の妖怪事情～

僕達は人里についた。

「ここが、・・・・・・・・人里・・・・・・・・ですか？」

僕がせわしなく首を動かしながら妖夢さんに聞くと

「はい、そうです」

と返ってきた。

そこに広がる光景はまさに昭和・・・・・・・・・・くらい？の村、という感じのものだった。

寺子屋や貸本屋などお店も様々なものだった

「へえ・・・・・・・・・・すげいなあ・・・・・・・・・・」

僕は完全に未知の世界だと思っていた幻想郷に少しだけでも見覚えがある部分があつて安心していた。

すると妖夢さんが

「とにかく早くお茶菓子だけ買って帰りましょう」

と、そういつて人の多い道をタタタツと駆けていき、



僕はそれを追うようにして

「ま、まま……まっつてくださーい！」

駆けていった。

「はい、これ……いつものお茶菓子の詰め合わせ……それと、お煎餅も、おまけで入れておいたわ」

老舗の雰囲気を漂わせるお菓子屋さんのおばさんが妖夢さんに袋を手渡す。

「いつもありがとうございます」

そう妖夢さんが笑顔で言うと

「いえいえ、こちらこそどうも……妖夢ちゃんいつもいっぱい買っていてくれるし家としては大助かりだよ。」

そんな、どこにでもありそうな会話が突然途切れ、おばさんが僕の方をみて

「ん？」

と短くこぼした、そして今度は僕と妖夢さんを交互にみてから

「んん？」

とまたまたこぼした。

そしていたずらっ子のようにニヤアと笑うと心底楽しそうに

「あれあれ?・・・妖夢ちゃんも隅に置けないわねえく・・・いつの間に〈彼氏〉  
なんてつくつてたの?・・・このこのつ」

そう言うのと妖夢さんを肘で突つついた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

しばらくの間

そして・・・・・・・・僕と妖夢さんがほぼ同時に

「え?」

と、気の抜けた声を発した。

「ちつちち、違いますよ!?!なに言ってるんです!?!」

顔を真っ赤にして抗議する妖夢さんに対し僕は

「え、いや、え?そのお・・・・・・・・ええと・・・・・・・・」

言いたかったことをいえず、そのまま俯いた

なおもおばさんは笑い続け

「いいのいいの、おばさんそういうのには首突つ込まないから!」

と笑って答えている。

気のせいだろうか・・・・・・・・現在進行形で突つ込んでないか?

妖夢さんは抗議を続けたがその努力は報われず、おばさんはカツカツと、笑いながら店の奥へ入っていった。

「あの……すいません、なんか迷惑かけちゃったみたいで」

僕が謝ると、妖夢さんが少し、ほんの少しだけ頬を膨らませながら

「……別にいいですよ、こちらこそすいません、」

と早口に答えた。

僕が身につけている着物は一応は女性用のもののだが、子供用、ということもあつてか、確かに男の子が着ても違和感のないものだった

(妖夢さん怒っちゃったかなあ?)

そう考えながら歩いていると、角を曲がったところで、「ドカツ」という音とともに僕と、ぶつかった誰かが同時にしりもちをついた。

「ひやつ!?!(つづ)つづ、(づ)めんなさい!」

僕がとつさに謝ると

「いったあ、つたく、何なのよ?」

ぶつかった相手、巫女服を着た黒髪の女性が頭をさすりながらつぶやいた

「あ、あ……あの……怪我とかは無い……ですか?」

「え？、ああ大丈夫よ、これくらい……これから気をつけなさい」

そういうと、その女性は立ち上がりたち去ろうとしたが、……

それを妖夢さんが呼び止める

「霊夢さんじゃないですか、どうしたんです？」

その声に霊夢さん、と呼ばれたその人は振り向いた。

「あら、妖夢じゃない……」

そしてさっきのおばさんと同じように僕と妖夢さんを交互にみて、しばらく考えた後、仏頂面で妖夢さんに告げた

「え？なに？妖夢、デート？」

いともたやすく（意識していないだろうが）地雷を踏んだ霊夢さんに妖夢さんは、にっこりと笑いながら

「違いますよ？なんなんですか？もうさつきから……切り捨てますよ？」

……訂正しよう。にっこりと笑いながら……しかし目は全く笑わずに、それどころか殺意すら感じさせる雰囲気で妖夢さんは言った

その雰囲気を感じ取ったのか霊夢さんはそれ以上追求することはなかった。

「で、霊夢さんは何で人里にいるんです？」

妖夢さんがそうきくと霊夢さんはつまらなさそうに

「なんか人間で、妖怪をみた！つていう人が今朝で3人もいたのよ、それで一応仕事だから見に来てるつて言うわけ」

そういつた

僕が霊夢さんに聞く

「妖怪つて……文さんもそうですよね？」

霊夢さんが怪訝な顔で僕に尋ねる

「文さん？……ああ……あの天狗のことか……で？  
なんで今あの天狗が出てくるのよ？」

「ああ、ええと……それはですね……」

く少女説明中く

「はあ……天狗のところに居候……ねえ……」

霊夢さんが哀れみともとれる視線を僕に向ける。がそれを気にせず僕は

「居候ではないですけど……まあ助手として働かせていただきます！」  
と元気に答えた

「あんだ、あれによくついていけるわね（いろんな意味で）」

霊夢さんの、今度は同情の目に僕は苦笑いで返した。

すると妖夢さんが霊夢さんにきいた

「それで、妖怪つて具体的にはどんなやつなんですか？」

「ああええと・・・・・・・・それが・・・・・・・・」

霊夢さんが少し視線をずらしたかと思うと

頭を掻きながら

「なんだか要領をえないのよ・・・・・・・・つていうのも、今朝妖怪をみたつて言う人たちは、黒い煙のようなものがゆらゆらと揺れながら近づいてきたー、つていうだけで、それ以上は何にも知らないつて言うし・・・・・・・・はつきり言つて見間違えの可能性が高いわね」

そういつた

「はあ、そうなんですか・・・・・・・・」

「ま、一応はあんたたちも気をつけときなさい」

霊夢さんはそういうと僕らがやってきた方向に走つていつた

奇跡、【通常ではほぼありえない、確率論では0に等しい可能性】を意味する、だった  
と・・・・・・・・思う・・・・・・・・



なんなんです!?

あああああどうしようどうしよう……妖怪つて、人食べ  
るのかな……、あああ僕は今死ぬかもしれない

そんなどうでもいいことを考えるのに思考をフル回転させる間も、煙は着々と近づい  
てきていた。

「ひやああああ!ごめんささいごめんささい」

体育座りで頭を抱え、ブルブルと震えながら後ずさるといふ離れ業をやつてのけた僕  
は少しだけ、霞む目で煙を見やった

そこにはさっきの三倍はあろう大きさの煙が少しずつ、近づいてきていた。

その光景を見た僕は声を出すことすらできず、

ただただ絶句した、

しかし、そんな僕にはお構いなく、煙は、

急に速度を上げて近づいてきた。

「!？」

突然のことに僕は対応できず、目を見開いただけだった。

そしてすぐそこまで煙が近づいてきたときにやっと僕ができたこと……それ  
れは



(こないでっ！)

心の中でそう絶叫するだけだった、

煙は……いなくなっていた、

あの後僕が目を開けると、そこにはなにもなく、

ただの静かな道だけがあった。

その光景に呆気にとられていた僕はしばらくは全く動くことができなかつた。

しばらくして妖夢さんが戻ってきて、腰を抜かしている僕を見て心配そうに

「何かあったんですか？」

と聞いてきてくれた

僕はその問いに、ゆっくりと考えてそして

「いいえ、何でもないですよ」

と笑顔で答えた。

続く……

小さなオマケく妖怪生訳兼話く

私は……生涯孤独な人生であつた。

貧しい親の元に生まれ、寺子屋などには通えず、人とはなすことなどできないし、また、はなす気にもなれなかった

そして私は、恋人はおろか友人さえいない、へつまらないを形にしたような生涯を過ごし、そして、誰にも気づかれず静かに死んでいった。

．．．．．こうなったのは誰のせいだ？親か？それとも神か？

そんなこと知る由もない、それに知ったところで、何にもなるはずがないではないか？

それなら、ただただ運命を呪おう、そして

——自分を呪い続けよう——

——なんだ？どういうことだ？なにがおきてる？

私は死んだはずだろう？何故意識がある？それにここは？人里．．．．．？

有り得ない。コレは幻想か何かだろう．．．．．

——いや、まて、前にこんな話を聞いたことがあつたな。

人間が妖怪になったという．．．．．まあ子供だましの童話だったかもしれんが。

もしや、．．．．．

やはり、そうなのか．．．．．信じられないが、事実そうなのだか

らしかたがない

どうやら、私は妖怪になったようだ……。

—————

どうする？妖怪になったんだから何かすればいい。何か……。

……そうだ、そんなこと決まっているじゃないか、復讐だ、私を受け入れなかつた世界に、復讐しよう。

へこの世界をぶちこわしてやろう

さて、生きている間もまともに外にでたことがなかつたから仕方がないが、人里はこのようなになっていたのか……。

まあそれはどうでもいい、とにかく、この体でどこまでのことができるものか……。

ん？あれは……子供？

ちようどいいあの子供を使ってなにができるか調べてみよう、

—————

なんだ……もう気づいたのか。ふはっはっ！私をみておそれているのか、なんと心地よいつ！

さあ、死ぬまでいたぶってやろう、どうしてやろうか……

――

なんだ、なにを言っている？「こないでっ！」？

そんなこと、祈っても無駄……

……

んな!? どういうことだ。うそだろ？ おいっふざけるなっそんなっそんなっ……

こんなはずでは……何故？ 何故だ？ 何故……

―そして人里では独りの〈魂〉が消えていった―

## 2章 4話くまたまた、ですか．．．く

ひい．．．．．ひい．．．．．ひい．．．．．ひい．．．．．

はああああ

今僕は、お察しの通り、階段を上っています。

「ひい．．．．．ひい．．．．．ひい．．．．．」

体中が汗だくで、意識は朦朧としてきた。

「．．．．．大丈夫？。ですか？」

横からいつさい疲れを見せていない妖夢さんが聞いてくるのが、かろうじて分かった。

「はあ．．．．．え？ああ、大丈夫ですよ．．．．．ははっ．．．．．」

光のない目で僕が応えると、妖夢さんは

何ともいえない顔で、心配そうに階段を上るのを続けた。

く数分後く

「ひい．．．．．ひい．．．．．もう、無理．．．．．」

ですう．．．．．」

僕はそう言って、前に倒れる、そこには、石造りの道があった。

石造りの・・・・・・・・道・・・・・・・・？

僕はそれまでの疲労を忘れてバツと顔を上げた。

そこには白玉楼があった。

うつすらと僕の目に涙が映る、

「やつと・・・・・・・・ついで・・・・・・・・た・・・・・・・・」

そのまま、体中の力が抜けて前に倒れた、

「だ、大丈夫ですか!？」

そこに妖夢さんが駆け寄ってくる。

が、僕は登り切ったことに対する達成感に酔っていてそれどころではなかった。

「やりましたよ文さん!一人で登り切ったんですよ!」

そう興奮気味に言う僕を、縁側に座る文さんと、今妖夢さんが買ってきたお菓子を食べている幽々子さんが見る

「さいですか」

文さんが答える

え?それだけ?

「え? いや? 自力で登り切ったんですよ!」

「さいですか」

なおも語る僕に文さんは気のない返事を続けた。

その返事に若干不満を持ちながら僕は簡単に人里であったことを文さんに伝えた。すると今度は文さんが興奮気味に、人里に妖怪が!?!と身を乗り出して聞いてきた

僕は妖怪のことを知っている限り文さんに伝えた

「黒い煙のような妖怪……で、目撃者は少ないが、鞆があつたというのなら実在するのでしょうか……それで体を大きくすることができて、かなり速い……こいつはネタのにおいがぶんぶんしますねえ」

文さんは心底楽しそうに言う、いつも持ち歩いているネタ帳と呼んでいる、手のひらサイズのノートに、サラサラと新しく書き込みを加えた。

幽々子さんが一枚のせんべいをカプツとくわえて

楽しそうに笑った。

僕はなおも妖夢さんの取材を続けていると、妖夢さんはおもむろに庭に繰り出し、腰に差した剣二つをスツと抜いて、素振りを始めた。

その様子はなんだかとても凜々しくてかっこよかった。

相も変わらず縁側で幽々子さんと談笑している文さんは妖夢さんを見て、ほうと小さく呟くと

「相変わらず精が出ますねえ」

と笑った

相変わらず、ということとは、ずっと続けているのだろうか？

そう考えながら、僕は妖夢さんを見つめていた。

「すごいなあ・・・・・・・・・・」

自分すら意識せずに僕は感嘆の声を漏らした、

「手合わせ・・・・・・・・・・願ってみますか？」

ふと、後ろから楽しそうな声が聞こえてきた。

「ひゃあっ!!」

僕はおきまりのごとく驚いた後、涙目で

「だからふつうに話しかけてくださいっ!」

と文さんに言った。

そうしてからさっきの文さんの言葉について少しだけ平静に戻った頭で吟味する。

「手合わせ!!」

僕は吟味した上でそう叫んだ



「はい！手合わせです」

文さんは心底楽しそうにそういった。

「手合わせ・・・・・・・・・・ですか・・・・・・・・・・？」

妖夢さんが不思議そうな顔で文さんにきく

「そうです、といつても真剣で斬り合うわけではなく、木刀を貸すのでそれで、まあ相手に当てるなり、突きつけるなりしたら勝ちです」

「はあ・・・・・・・・・・」

まだ納得がいかない様子で妖夢さんが頷いた。

僕が文さんに問う

「なんで・・・・・・・・・・いつもそんなに戦闘の訓練をすることにこだわるんですか？」

文さんはいつぞやの回答と同じく

「だから、ここ幻想郷はとても危険な——」

「それはもう聞きました！」

僕はそういうとどうにか、戦闘を避けられないかとほかのいいわけを考える、そして「それに妖夢さんはよくても幽々子さんが大事な庭師さんを傷つけないかもしれないかもしれないじゃないですか！」

そう言つて幽々子さんをみた、

急に振られた幽々子さんは

「いいわよ、」

と穏やかな声で言つた、

——僕に救いはないのだろうか？

そして、なんやかんやで結局またまた、戦闘訓練をすることになったわけですが・・・・・・・・・・

ふふふ——僕は心の中で笑つていた。

こんなこともあるうかと、実は毎日文さんに気づかれないように、体力づくり、イメージトレーニング、その他諸々をやつてきていたのだ！

出来る限り闘うことは避けたがったが決まってしまったものは仕方ない。

今なら、勝てはしないまでもそこそこいい勝負を繰り広げられるはずだ。

ふふふ——妖夢さんには悪いですがここは本気でやらせてもらいます

！

そう心の中で明言すると僕は前を見て木刀二本を構える妖夢さんと向かい合つた。

空気を読んだのか風がヒューッと吹き抜けた。

スツと妖夢さんが踏み込む、それをみた僕は注意深く妖夢さんの動きをみた。その次の瞬間僕の後ろには妖夢さんがいた。

それに僕は反射的に、持っていた短剣（鞘つき）を後ろに回してかがんだ。「ゴツ」という鈍い音がして僕は後ろに転がった、

すぐに体制を立て直し、僕は冷静にした頭の中で考える、

ん？え？・・・ええええええ!?なに？今の、速くない？え？速くない？いや、ちよと、え？無理でしょ!?

意味が分からないまま妖夢さんがもう一度踏み込む、

今度こそはと僕は妖夢さんの動きに全神経を集中させる。

今度は正面から突っ込んできた、

「っ!」

さっきので少し分かっているつもりだったんだけど、さすがに速くて、怯む。

今回もほとんど反射に近い形で妖夢さんの動きに反応し短剣で受け止める。

今度とはばされることはなかったけどすぐに次の木刀が飛んでくる、

7回目の木刀をギリギリでよけた後で僕は一度後ろに下がって落ち着いた、

とにかく、妖夢さんが予想以上に強かったのは把握できた・・・

それで・・・どうする？どうすればベストだ？普通に闘ったって確実に

勝ち目はないし・・・・・・・・・・

僕は思考を限界まで加速させる、そして、一つの答えにたどり着いた。

ふつうに闘って勝てないから、へふつうに闘わなければいいんだ――

この状況に至った上で、僕は不敵に笑った

その様子を見た妖夢さんの表情に若干動揺がみられた。

僕は・・・・・・・・・・僕は・・・・・・・・・・

持っている短剣を・・・・・・・・・・妖夢さんに投げつけた・・・・・・・・・・!!

妖夢さんはもちろん、縁側でみていた幽々子さんと文さんも

「えっ!?!」

と驚きの声を上げた。

投げつけた短剣は円をえがきながら妖夢さんの顔めがけて、飛んでいく。

妖夢さんは驚きながらもスツと横に転がることで短剣を避けた。

大丈夫、それでいい、ひるんでくれれば、大丈夫・・・・・・・・・・

僕は妖夢さんに全力で走っていく・・・・・・・・・・

そう、走っていく――ハズだった

僕はそこでグルッと視界が反転するような感覚を覚える

「あれっ?」

気の抜けた声が脳内にこだまする。

(嘘っ?なんで・・・また・・・)

僕の意識はそこで途切れた。

うつすらとした意識のまま僕は目を開けて周りの状況を確認する。

僕の顔をのぞき込む顔が3つ、それは当然のごとく、文さん、妖夢さん、幽々子さんの三人だった

「お、気がつきましたね」

文さんが笑顔でそういうと、僕はすぐに、布団から起き上がった、

そして、

「すいません・・・僕・・・また、気絶しちゃったみたいで・・・」

それを聞いた文さんが

「いえいえ謝る事じゃないですし、気にしないでいいと思いますよ」

文さんはそういつてくれるが、こうも毎回気絶しているんじゃないかと気がなる

それにこれのせいでいろんな人に迷惑がかかるのは、申し訳ないし・・・。

そう思っているとふと、あることに気づく、

「あの・・・・・・・・妖夢さん、怪我とかはなかったですか？」

その問いに、何か考えていた様子だった妖夢さんが、我に返り答える

「え？ああ、大丈夫です、」

「そうですか・・・・・・・・良かった・・・・・・・・それにしてもこの勝負、僕の完敗ですね・・・・・・・・」

僕が苦笑しながら言うのと妖夢さんが若干怪訝そうな顔をしたような気がしたが、すぐに話しかけてきた文さんのおかげであまり気にすることはなかった。

「そうです、鞘、今のままではそのうち怖い妖怪に食べられちゃうかもしれませんよ？」

文さんが笑いながら手を前に垂らすようにおどけて言った

さっきの煙のこともあって、僕は少し顔をひきつらせながら

「はい、・・・・・・・・精進します・・・・・・・・」

と答えた。

そして布団の横に置いてあつた短剣を腰に戻した。

続く・・・・・・・・

小さなおまけく妖夢視点の戦闘訓練く

戦闘訓練………なんだかよくわからないまま始まったわけだが……さて、どうするか、………まあ鞘さん相手にてこずることはない……とは思うが。油断は禁物だ

油断なんかしてたら負けても不思議はない。

絶対手を抜くな………

そう自分に言い聞かせて一歩踏み込んだ、

鞘さんの後ろに回り込んで寸止めできるように少しだけ手加減して木刀を放った、

鞘さんなら避けられないだろう、そう思っていた

が、予想に反し鞘さんは鞘のついた短剣で木刀を防ぐ

それでもぶつかつた反動で後ろに転がっていった。

あれを防ぐのか………これは思ったより厄介かもな………

そう考えながらも一度鞘さんに向かって踏み出す。

今度は威力を押さえて連続で放つ、

が、こちらも全てそらすなり受け止めるなりされた。

「嘘……!?!」

心の中でつぶやく、はつきり言つて避けさせるつもりはなかつたのだ  
が………

避けられた・・・・・・・・・・ということに若干のショックを抱きながら

次の攻撃を仕掛けようとしたとき・・・・・・・・・・

ふと鞘さんを見やる、そこには不敵に・・・・・・・・・・いや獯猛という方がしつく

りくるような表情で笑っていた

(まずっ！)

そう思ったときにはもう遅かった。

鞘さんは手に持っていた短剣を私に向かってへ投げた

武器として持っているものを手放すなど、自殺行為ではあるが、事実、鞘さんは投げた。

全く予期していなかった攻撃にバランスを崩して横に転がる。

マズい、そう考える前に体が動く。

立ち上がって攻撃に備えられる体勢になる、

——目の前には鞘さんが立っていた——

後ろに回られたわけでも、前にかがんでいたわけでもない、ただ目の前に直立していた、

反射的に目をつむった。

しかし、短剣が突きつけられた感触はない、



そつと目を開けるとそこには気絶する鞆さんの姿があつた。その顔はさつきとは打つて変わつて穏やかな表情をしていた。

幽々子様は頭を上げながら言う

「すみません……………負けてしまいました」

幽々子様は笑いながら大丈夫よ、といつてくださつた、が「でも、人間の女の子に負けているようじゃ、まだまだよ？」

と付け足された……………ん？

「え？女の子？鞆さんがですか？」

まあ女の子と言われればそう見えなくはないが、僕と言つていたからつきり……………

「あら、気づいてなかつたのね……………」

幽々子様は気づいていたらしい、そしてちいさく

「まあ、人間の女の子……………つていうのは怪しいかもしれないわね」といつて笑つた。

## 2章 5話～取材終了～

僕は目の前の光景に絶句する、そこにはとても4人分とは思えない、おびただしい数の豪華な料理が並んでいた。

「うわぁ・・・・・・・・・・・・・・・・！」

5回目の感嘆の声が漏れる。

僕が妖夢さんに言う。

「すごいですね！どれもこれもこれもおいしいそうで・・・・・・・・ただ・・・・・・・・さすがに4人でこの量は・・・・・・・・」

白玉楼でご飯をいただくことになった僕達は今、大きなテーブルの前で正座している。

「え？あの・・・・・・・・えつと、これは全部幽々子様の方で文さんと鞘さんの分は今、持つてきますよ？」

ん？、

僕は笑顔のままその場に硬直する、

幽々子様の方？ん？

僕はもう一度目の前のテーブルを見る

そこにはさつき見たのと変わらない豪華な料理が、おびただしい数で列をなしている。

えつと………何かの間違いだろう。僕は妖夢さんに聞く

「えつと、この料理は何人分なんですか？」

妖夢さんは怪訝そうに眉をひそめるともう一度

「ですから、これは全部幽々子様の分ですよ？」

といった。

視界の端で文さんがにやにやしてるのが見えた。

僕は目の前の幽々子さんに呆気を取られる。

幽々子さんはおそらく下品にならないギリギリのレベルで目の前の料理を平らげていく。

文さんも半分呆れ気味に幽々子さんを見る。

「すごい………ですね………」

僕が何とか絞り出した言葉に文さんが

「同感します」

と苦笑した。

僕が幽々子さんをずっと見ていると、しばらくして妖夢さんが料理を持ってきてくれた。

その料理はどれもおいしそうなものばかりで、食欲がそえられるものだった。

「うわあ．．．さつきも言いましたけど凄いですね！」

「そうですか？」

妖夢さんが少しだけうれしそうに答えた。

僕は妖夢さんが持ってきてくれた料理をいただいた。

「おいしいー！」

その言葉に妖夢さんが再度少しだけ嬉しそうに微笑んだ。

「ふう．．．ごちそうさまでした．．．」

僕が満足して呟く。すると横で妖夢さんが

「おそまつさまです」

と口にした。

ちなみに幽々子さんは、かなり前に食べ終わっていて、満足そうにお茶を飲んでくつろいでいた。

僕は文さんの横に行つて、

「幽々子さんつていつもこんなに食べるんですか？」

と聞いた。すると近くにいた妖夢さんが苦笑しながら

「まあ、そうですね、宴会なんかになると、もつと食べますよ？」

もつと、食べる……幽々子さんの胃袋はどうなってるんだらうか？

ん？宴会つて何だらう？

「あの、宴会つて、何ですか？」

そう聞くと文さんが

「ああ言つてなかったでしたっけ？」

そういつて、文さんは話し始めた。

「宴会、ええと、どう説明すればいいでしょう……そうですね、博霊神社で行われることが多い不定期の、人が、というか妖怪や神様が多く集まるイベント……つて認識で差し支えないかと……」

ええと、ん？妖怪は何となく分かる……神様？

「え？あの、神様つて……」

僕その問いに文さんは

「ああ……ええとそのうち分かると思うんで省きます。」



すると台所の方からガタツ、ゴロゴロと音がして、不覚にも僕は

「ひゃっ!？」

と声を上げて驚いてしまいました。

しかし、ガタツという音から察するに恐らく、お鍋か何かが落ちたんだろうと思い、台所に足を踏み入れました。

台所には案の定、机が一つ倒れていて、そこに乗っていたと思われる、野菜たちが転がっていた。

「ああああ」

僕は音の正体が何の不思議もないものでとりあえず胸をなで下ろす。

そして僕は机を立て直して、転がっている野菜を拾い上げていききました。

丁度最後の野菜を手にとったときのことです、また奥の戸棚から妙な音が聞こえてきました。

‘ぽり………ぽりぽり、………’

僕はその音を聞き、また体をふるわせました、

それでも勇気を振り絞り、戸棚を開けました、すると

———そこには白い大きな人魂がいた。

「っ!？」





僕はそういつて恥ずかしさを隠すようにお風呂場まで走っていった。

背後で文さんが笑っていたのはきつと気のせいなんだろう、そう！そうにきまつている。

僕はのれんをくぐり脱衣所に入った。

ふう、今日も疲れた・・・

さすがにあの階段を上り下りするのは足に響く、おかげでくたくたで今すぐにでも横になりたいんだけど、まあそういうわけにもいかないし、お風呂に入れるだけ感謝しかない！

そう思い僕は、お風呂の扉を開けた。

「みよんっ!」

・・・同時に、お風呂場にあまり聞き慣れない叫び声が響いた。

僕がそつちをみると、妖夢さんが真つ赤な顔でこちらをみていた

「あ！妖夢さんも入ってたんですか、ご一緒しても大丈夫ですか？」

その問いに答えることはなく、妖夢さんは僕の体を凝視した後、無言で顔を噴火しそうな色にして俯いた。

その反応に若干疑問を抱きながら、僕は湯船に使った、

妖夢さんは尚もゆでだこ状態で僕を一瞬見ては一瞬で目をそらし……という動作を続けていた

さすがに心配になり、

「あの、妖夢さん……大丈夫ですか？どこか調子でも……」  
 そして僕はこのタイミングであることに気づく、

へ妖夢さんもしかして、僕のこと男の子だと思つてたんじゃ……

そう思つた瞬間に僕の体温もマツハで上昇し、顔も紅葉より赤く染まつた。

数分間の沈黙の後、僕が口を開く。

「あの……えっと、そのお、妖夢さんは、僕のこと、その……あの、男性だと思つてましたか？」

そういつた瞬間妖夢さんは俯いていた顔を一瞬だけ上げ、頭から煙を出して、また俯いた。

ああ、これ思つていたやつだ……  
 どどどどどうすればいいんだろうか……。

「……………」

沈黙に耐えきれず、僕が口を開く。

「えっと、……………その、だ、だだ…大丈夫、です……………よ?」

その言葉に妖夢さんが少しだけ顔をこちらに向けた。

「その……………前にも間違えられえたことありますし、気にしてないです!」

僕がそういうと妖夢さんは心なしか安心したように微笑し、そしてこつちを向いて

「ありがとうごぼワツ」

何か言い掛けて噴火する。

「だだだだ、大丈夫ですか!?!のぼせました!?!」

僕がそばによると

「だだだだ、大丈夫です!の、のぼせたんで先にあがりますね!?!」

そういう残して、ふらふらする足取りで脱衣所へ行ってしまった。

「大丈夫かな……………」

僕は妖夢さんを心配しながら湯船につかる。

そして疲れ切った体でお風呂を堪能した。

「それでは、取材はこれで終了です!ご協力ありがとうございました!」

文さんが明るく言うのと、

「いいのよ……こつちもたのしかったわ」

幽々子さんが相変わらずおっとりとした口調で言った。

妖夢さんはお風呂場のときのように俯きがちだった。

「それでは今後も文々。新聞をごひいきに」

素晴らしい残して僕たちは白玉楼を後にした。

天狗とその助手がいなくなった白玉楼で妖夢は幽々子に問う

「不思議な子でしたね」

「鞘のこと？」

「はい……あの人間とは思えない身体能力は何か不自然な気がします。」

「そ〜お？ふつうの女の子だったじゃない？」

幽々子が言うど妖夢は、

「そうですね、恐らく杞憂にすぎないと思いますが。」

それに対し幽々子は妖夢にも聞こえない声で呟いた、

「杞憂……だといんだけどね……」

満月の中の、その声はいつもの様子とは違う深刻そうなものだった。

長い長い階段を下りていく途中、僕は言った。

「それにしても、疲れました．．．．．」  
するとすぐさま文さんが

「そうですね、今回はほんとはよく働いてくれました！ありがとうございます」  
ド直球の感謝の言葉に僕は照れ隠ししきれずに

「いやあ．．．．．そんな」

と答える。

「まあ！ネタのストックもたまってきたし！いい調子です」

そんなことを言う文さんを後目に、

僕はふと、こんな日々がずっと続くといいな、と本心から思うのだった。

続く．．．．．

## おまけ編 2

### おまけ編 1話く弾幕・・・ってなんですか?く

目の前を飛んでくる淡い光を放つ小さな球体

僕は無数のそれをただひたすら避け続けた。

そして文さんのところにたどり着き言い放つ

「攻符!」

白玉楼の取材を終えて2日ほどたったある日、

僕はいつものように文さんの仕事場の文献を読んだり、隙を見て体力づくりをしようとしていた。

堂々とやればいい?だってなんか恥ずかしいですし・・・

・・・まあ文献を読んでいたら、ふいに文さんに話しかけられた。

「鞘、今ちよつといいですか?」

「え?・・・ああ!はい、大丈夫です!」

僕がそう答えると文さんは僕の座っているいすの横に座った。

「ええとですね、鞄が読んでいる文献で「スペルカード」について扱ってるものってありましたか？」

スペルカード？僕は初めて聞く言葉に首を傾げた。そして

「いえ……多分無かったと思いますが……」

その答えに文さんはニコリと笑って

「それじゃ教えますね」

そういった

「ええと、まずこの幻想郷には弾幕ごっこ、と呼ばれる決闘法があります。これはですね、ええ……妖怪と人間との力量差を縮めるためにスペルカードルール、というものに基づいておこなわれます。」

僕はいきなり出てきた知らない単語に困惑する。それを見た文さんが説明してくれた。

「ええ、その弾幕ごっこを行うための《スペルカードルール》ですがこれは幻想郷内の揉め事を解決するためのものです。ええ、対決の際には技名を記した、スペルカードという札を所持しておいて、弾に触れれば負けとなります。また、スペルカード使用時には

宣言が必要なので不意打ちは不可能となります。」

「はあ……………」

早口に説明を終えた文さんを見て僕はそんな概念があったことに驚きながらも質問をしていく、

「その、ええと、それは……………当たっても死なないんですね?」

僕の問いに文さんは

「まあ多少痛いですけど、致命傷になることはまずないでしょう。」

と答えた。

その答えに僕は少しだけ安堵する。

すると文さんが実際の弾幕を見せてくれると言った。

僕は文さんにつれられ、仕事場から出る。外は日差しが強かった。

比較的広い場所にでると、文さんは見ていて下さいと言って、少し遠くに移動した。

そして、

「疾風【風神少女】」

そういうと、文さんの周りから無数の淡い光を放つ球体が飛び出してきた。

その球体はかなり速い速度で移動し、やがて消えた



僕は目の前の光景に呆気をとられて、声を出すこともできなかつた。  
文さんが横にやってきて、

「コレが弾幕です。まあ形は様々ですがね。」

そういつた。僕は文さんにやつとのことで

「ど、どどどどうやって出したんです？」

と、一番気になったことを聞く。すると

「今から教えますから」

文さんはそう微笑して、僕を再び仕事場へと連れて行った。

僕は文さんの仕事場に戻り、〈スペルカード〉と〈弾幕〉についてきいた。

スペルカードとは自分の技を記したお札のことで、闘う際は攻撃するときに技名を言う必要がある

つまり不意打ちはできないという事だ。

弾幕というのは、すなわちスペルカードで放たれた攻撃のことで、その弾幕を避け、相手を被弾させれば勝利なのだ。

そして、肝心のスペルカードの作り方なのだが、

「はい、できましたよ。」

文さんが一枚の札を僕に差し出しながら言う、

「こんなに、簡単に作れるものなんですか・・・」

僕が言うと文さんは

「まあ弾幕はイメージを具現化させたもので、これは、実際に弾幕を出すのとは関係ないただのお札ですから」

そういい、文さんはポイツとお札を投げた。

それを僕があわててキヤッチする。

「それで、弾幕って言うのは、どうすれば出せるものなんですか」

あまりに直球の質問だったが、それ以外に聞き方が見つからなかった。

「そうですね、実際に言葉で説明するのは難しいんですが・・・強いて言うならばイメージ、ですかねえ」

「イメージ・・・ですか?」

そういえばさつきもそんな言葉を聞いたような、

「そうです、まあ実践あるのみですし!とりあえずもう一度外に出しましょう。」

どうしよう・・・展開が早すぎてついていけない・・・

さて、またまたさつきの場所に戻ってきたわけなんですが、

「じゃあ、とにかくやってみましょう！」

文さんはそういつて、さらに

「スペルカードの名前は決めましたか？」

え？名前？

.....完全に忘れていた。

「その反応から察するに決めてないんですよね」

文さんは苦笑しながらいい、僕はそれに頷いた。

「まあそんなに考えなくても最初ですし適当でいいですよ」

そうはいつてもやっぱり考え込んでしまう。

僕が悩みに悩んでいると、

「うくん、だいたいは○符【○○】っていうのが多いですね」

そう文さんに言われ、さらに数分、数十分？悩んで、悩んだあげく、

「決まりました！」

「おお！そうですか！それじゃ早速やってみましょう」

太陽はまだ高い位置にあり時間の心配はなさそうだった。

僕は文さん前に出て、一度深呼吸をしてから、お札を前につきだして

「功符【棘獄】！」

そういうとともに、無数の細長い弾が空を裂く……………  
のをイメージしたのだが、実際は

——ヒュンツ

情けない音とともに一本の弾丸が力なく飛んでいった。

「……………」

僕が無言で後ろを向くと文さんは

「最初ですし、むしろでる方がすごいですよ……………!」

と、必死に笑いを噛み殺しながら言った。

……………泣きたいです。

「さて！まあとりあえずは弾幕も出せるようになったわけではありますし、今度は一番重要な弾幕をへ避ける～ことについて練習していきましようか!」

文さんにそういうわれて、先ほどの文さんの弾幕を思い出す。

……………大丈夫だろうか……………?

そんな心配は知らずに文さんがどんどんと話を進めていく。

「それでは、鞆には私が出す弾幕をすべて避けた上で、私に弾幕を当ててもらいます。」

え? いやいやいやちよつと待って? え? それはさすがに……………、

「もちろんただやっても難しいと思うので、一つハンデをもうけます!」  
文さんのその発言に僕は素早く顔を上げた。

「ハンデ、ですか?」

「はい、ハンデとして私は、へ一步も動きません」

え? . . . . . 文さんの発言に、僕は驚きを隠せずに目を丸くする。

「そんな、それはさすがに . . . . .」

僕がそういうと、文さんは苦笑しながら、

「ははっ、なめないで下さいよ、それぐらいどうって事はないです!」

「はあ . . . . .」

かくして、僕と文さんの〈弾幕ごっこ〉が始まった。

それにしても、文さんは一步も動かないって . . . . .  
いくら何でもなめすぎだ!

僕は文さんにぎやふんつと言わせてやろうと、気合いを入れ直した。

すると文さんはかなり遠い場所から、

「はじめますよ〜!!」

と大声で言った。

僕が頷いて応答すると文さんがスツとお札を前に構えた、

それを見た僕は一気に全神経を集中させた。

「疾風【風神少女】！」

そういうと文さんの周りから、さつき見たものの3倍近い量の弾幕が飛び出してきた。

「!?」

僕は驚きつつも、声を上げる暇もなく本能的に横に倒れ込むことで避けた、するとその目の前には光を放つ球体、

「マズッ——」

言い終わる前には僕は被弾してしまっていた。

おでこに殴られたような鈍い痛みが走る。

「っ痛たたっ・・・・・・」

僕がそうつぶやくともう、すぐ横には文さんがいて、僕に

「大丈夫ですか？」

と声をかけた、

「え? あ! はいっ! 大丈夫です!」

口ではそういったがまだ少しおでこに痛みを感じる・・・

それにしても……まさかあんなにすぐ、当たつちやうとは……  
僕はかなり落ち込んだ後、文さんに少し期待混じりの視線を向けた。

「もう一回、やりますか？」

文さんが微笑みながら言う。

僕は目を輝かせながら

「はいっ！」

と答えた。

こうして僕は二度目のチャンスを手に入れたんですが……

さあ、どうやって避けよう……がむしやらに避けるのはあんまり賢い選択とはいえないだろうし、

そんなことを考えていると文さんがさつきと同じ位置にいつて、

「いきますよ〜」

と声を上げた。

すかさず僕は文さんを見る、

文さんがお札を手に取り

「疾風【風神少女】！」

と宣言した。先ほどと同じ無数の弾が僕に襲いかかる。

僕は頭の中で考えたことを復唱した

さっきの僕が被弾した原因は、避けたときに体勢を崩したことだ。

それなら、体勢を崩さなければ!

文さんが放った弾幕に集中し、できるだけ小さな動きでかわしていく。

「ほお・・・」

文さんが小さく言ったが、僕はその声も聞こえなほど集中していた、

しかし――

「っ!？」

僕は目の前の弾幕をみて一瞬動きが止まる。

これ、右と左どっちに避ければ・・・

迷っている間にも弾は近づきとっさに右に避ける、

が、避けた先にまた一つの弾、それもかがむことでどうにか避けたが、次の弾はさす

がに、

「間に合わな――」

僕の視界は、一度真っ白になって、通常に戻ったときには頭に痛みを覚えた。

いつものようにいつの間にか横に移動していた文さんが苦笑しながら、



「大丈夫ですか？」

と聞いてくれた、が、僕はその問いを無視してこういった。

「もう一回！お願いします！」

続く・・・・・・・・・・・・・・・・

小さなおまけ〜キヲク〜

「こころ〜！」

自分を呼ぶ声に意は手に持つ紙から目を離して振り向いた。

「あ、えり！どうしたの？」

意がそう聞くと

「なにつて〜期末テスト結果聞きにきたに決まってんじやん！」

明るくえりが答える。

意はそれに対して、

「はは、いつもどうりだったよ〜」

自棄になつていいのか絶望しているのかよくわからない表情で答えた。

意の手にしている成績連絡票は1桁と2桁がちらほら見えるものだった

「うん、次は頑張ろうね……………」

えりがさつきとは打って変わってトーンを落とした声で慰めるように言った。

「まあまあ、それはおいといて、こころって、クリスマスなんか予定あるの?」

えりがそう聞くと意は

「え? いや別にならないけど……………えりはええと、あの……………」

意が思い出せずに言葉が詰まっていると、えりが「籠城先輩?」

「そう! その人と過ごさなくていいの?」

そういうとえりが少しだけつまらなさそうに、

「あの人は忙しいもん……………せつかく付き合えたのに……………」

と愚痴をこぼした。

「つていうか! 意も彼氏ぐらい作りなつて〜」

えりが意に言う、意は苦笑しながら

「いや、私はちよつと……………」

とだけ言った。えりがテンションをあげて言う。

「え〜! だつてあんた絶対もてるよ? 顔可愛いし、仕事きれいだし、スポーツできるし

! 確かテニス県大優勝でしょ? それに性格はこの私が太鼓判を押すぐらいに完璧なん

だから!」

意はほめちぎられて少しだけ照れながら「そんなことないよ………」といった  
「ただ少し頭がかわいそうなだけなのにね」

親友に最後の最後で谷底に突き落とされた意は静かに溜息をついた。

おまけ編 2話～勝てるわけがない・・・・・・・・・・にげる  
んだあ～

「ひにやつ!!?」

「ふぎやあつ!!?」

「ひぎやんつつ!!?」

「うひやつ!!?」

「(グキイツ) 痛つ!!? (足首をくじきました)」

・・・・・・・・・・・・・・・・

僕の悲鳴が8回目を迎えた頃。

「あの、鞆?大丈夫ですか・・・・・・・・?」

文さんが聞いてきた。

「だ、大丈夫に、決まってる・・・・・・・・じゃ・・・・・・・・ない、です・・・・・・・・か・・・・・・・・」

僕は必死に言葉をひねり出す。

「えくと、普通はそれを〈大丈夫〉とは言わないんですが、・・・・・・・・まだ続けますか  
?」

文さんが呆れ8割感心2割で言った。

もちろんお願いします！と言いたかったがそんな余裕はないので、頷いて答えた。

文さんが少しだけ考えるような仕草をした後

「じゃあ……日も暮れてきましたし……次で最後にしましょう。」

「……分かりました。」

できればもつとやつておきたかったが、確かに日も沈みかけてるからしようがないか……

「それじゃ、ラストチャンスです！」

文さんはそう言つてスタート位置まで戻った。

「ふう……」

僕は短く深呼吸をした。全身が弾幕を受けて痛むけど今は気にしない。

さあ、最後の一回、どうすれば勝てるんだ……

文さんは一歩も動かないんだし、勝ち目がない事はないと思うんだけど……

今まで何度かやつてきて分かったことといえば、

……体勢を崩したらほぼ確実に負ける……あとは……

自分の観察眼に心底落胆していると、文さんが

「いきますよ〜」

と、スタートを合図した。

僕はいつも通り全神経を集中させる。

そしていつでも動けるように体制を整えた。

「疾風【風神少女】！」

文さんの声が響いた。無数の弾幕が僕に襲いかかる。

僕は焦らず一つずつ確実に避けていく。

そして・・・・・・・・・・僕はとても大きな発見をした。

「もしかして・・・・・・・・・・パターン・・・・・・・・・・？」

思わず脳をよぎった考えを口に出した。今思えば、文さんの弾幕は僕との対戦の時はすべて同じ方向から同じ数が飛んできている。

自分がそれに気づいたことに対する電流が体を走ったのが分かった。

僕は目の前の弾幕だけではなく、周りの弾幕も視界に入れた。

すると思わぬ事に弾幕はすべて同じ間隔、同じスピードで進んできていた。

今までは目の前の弾幕のみに集中していたが、全体を見通すことだと思つたよりも避けやすくなった。

僕の顔から思わず笑みがこぼれた、

〈勝てる！〉

そう心に言い聞かせてただひたすらに弾幕を避けていった。

ある程度たつと、文さんはもうわずか数メートルという位置に立っていた。

この距離なら……当てられる!!

そして僕は言い放った。

「功符【棘獄】!!」

それとともに細くて弱々しい光の筋が飛び出し、

そして文さんを貫く……

という想像は見事に裏切られ、僕のはなつた弾幕は文さんのかなり上を通り過ぎていった。

文さんが笑いながら

「次は命中させる練習ですね……」

まるで当たるはずがない、と確信していたかのような余裕の表情で言うと、小さく

「風符【風神二扇】」

そう言い、

文さんから放たれた弾幕が僕の体に刺さった。

「うう、・・・・・・・・・・・・・・・・最初から負けるはずがないと踏んでたんですか・・・・・・・・・・？」

僕が文さんに消毒液を塗ってもらいながら尋ねる。

「痛ったた・・・・・・・・。」液が染みて顔をしかめる。

「まあ・・・・・・・・・・そうですnee、あそこまでどり着くのは予想外でしたが、さすがに被弾するとは考えて無かったですnee。」

文さんはそう苦笑した。

「じゃあ、僕は文さんに遊ばれただけ、ってことじゃないですか!!」

僕が訴えると

「いえいえ、ちゃんと訓練としての事でしたよ?、事実半日前まで弾幕を知らなかったとは思えない成長ぶりですし」

文さんにコロコロと笑いながら返され、返す言葉を見失い、ただ頬を膨らませながらふてくされていた。

その僕を見て文さんが声をかける

「まあまあ、そんなに怒らないで下さいよ」

「怒ってないです!」



そう明らかに怒っている様子で言う僕を無視して文さんが続ける。

「それはそうと明日はまたまた取材ですよ」

その言葉に僕は顔を上げ声色を変えて言う。

「え!? そうなんですか! 今度はどこです?」

そう聞くと文さんはさっきまで持っていたはずの本を手にして、

ページを探して、そして僕に見せてくれた

「博霊神社．．．．．ええと、此処つて確か．．．．．」

「はい、鞘が前に会った霊夢さんが巫女を勤める神社です。」

本には大きな鳥居がある立派な神社の写真が貼つてあつた。

「それで、今回も一日取材するんですか?」

「ああ、いえ．．．違いますよ」

予想と違う答えが返つてきたことに僕は少しかだけ驚きつつも

「え? じゃあ何か事件でも?」

文さんに聞いた。

すると文さんは頭を掻きながら

「ああ、．．．．．ええと．．．．．そのですね、．．．ちよつと面白そうなネタが無いんで．．．．．とりあえず行こうかと．．．．．あそこに行けばだいたい何

かありますし・・・・・・・・・・」

笑いながらそう言った。

だいたい何かある・・・・・・・・・・って・・・・・・・・・・どんな神社なんだ・・・・・・・・・・。

「はあ・・・・・・・・・・まあ分かりました！」

僕はとりあえずそう答えると、明日に備えて！と早めに眠ることにした。

「それじゃ、先に失礼しますね」

僕はそう言うのと、日中の疲れもあつてかもの数秒で寝息を立て始めた。

その夜、射命丸文は、一つのノートを取り出して、書き込みを加えた。

そのノートには人間には読めぬ文字で「心音鞆」とだけ書いてあった。

そして射命丸文はページをめくった。

続く・・・・・・・・・・

小さなおまけ♪【心音鞆】♪

今日心音鞆《こころねさや》と名乗る一人の少女が妖怪の山麓で倒れているのを発見

し介抱した。

彼女は人間であり恐らく外来人である。妖怪の山の麓に倒れていて無事だったことから察するによほどの強い運の持ち主なのだろう。

小さな手提げ鞆と鞘と柄が固定された短剣を持っており手提げ鞆には小銭と、文房具、メモが入っていた。

そして短剣だが、これについてはとても謎が深い、封印か何かの類で固定されているのか、ちよつとやそつとでははずれる様子がない。今後調べられる機会を待つことにする。

彼女は特に敵意があるわけではなく、面白そうなので助手として、雇うことにした。

これで当分は退屈しなくなりそうだ。

紅魔館への取材を終えたが鞘について、謎が増えた。

まず、戦闘訓練と称して身体能力を調べたが、予想通り並以下かと思いきや、時に人間にしては有り得ない速度で動いたりしていた。

紅美鈴の蹴りを肉眼で避けるなど、驚異的な身体能力を発揮するときもあるが、簡単な荷物運びでばてるなど、状況によって様々である。

能力と何か関係があるのかもしれないため今後も調べていくことにする。

外来本から見つけた「サバイバルゲーム」と呼ばれる、遊戯を再現して取材したが、今

回もまた鞘は恐ろしいほどの身体能力を發揮した。

交戦中、私が上空から見ている中、「私さえ目で追えない速度」で敵の背後に回り込んだ。

しかし前回の戦闘訓練のときからも分かったが、驚異的な身体能力を見せた直後には気絶するようである。

また、本人はそのことを自覚しておらず、完全に無意識で行っているようなのである、更に調べられることを楽しみに待つことにする。

ちなみに、気絶した彼女を介抱するときに調べたのだが

スリーサイズはB6・・・・・・・・・・

## 博霊神社の取材

## 3章 1話く早起きは三文……のどく?く

僕は今、何故か神社の掃除をさせられています。

なんで、……こうなつたんだろう……

僕は箒をはきながら小さく溜息をついた

「鞆! 鞆! 起きて下さい! 鞆っ!」

自分を呼ぶ声に反応し、僕は重い瞼を開けかけて、そして

「あと、……あと……あと……5分、いけ……ます……スヤア」

僕のその答えにムツとした文さんが告げる。

「鞆が眠っているんだつたら今のうちにスカートはかせてあげまし「起きました! 起きました! おはようございます文さんっ!」

僕が体を起こして言うと呆れ顔で文さんが

「調子いいですねえ」

と聞いた。

「それで、こんなに朝早くから取材ですか？」

僕があくびをしながら訊くと、

「はい！善は急げといいますしね、」

身支度をしながら文さんが振り向かずには答える。

そして

「それに、朝早く行くからこそ意味のあることもあるんですよ！」

そう言つて笑つた。

「はあ・・・・・・・・・・そうですか・・・・・・・・・・」

僕は眠っている意識をどうにか現実の方へと引つ張りながら言う。

そして、手提げに文房具、メモ帳、財布を入れて立ち上がると、文さんが言つた

「それじゃあ行きましょうか」

「やい！またあつたな天狗！」

青い髪の大きなリボンをした女の子がまたまた僕たちに向かつて叫んだ。

しかし文さんは完全にスルーしてスタスタと歩いていく。

「おい！無視するな！あたいはさいきよーなんだぞ！」

女の子がじたばたとしながら言うのと横の優しそうな緑の髪の子が前と同じように宥める。

「や、やめなよ、チルノちゃん……」

チルノと呼ばれた女の子は、これまた前と同じように

「大丈夫だつて大ちゃん！あたいはさいきよーだから！」

そういつて胸を張った。

「あのおう、文さん……どうします？」

僕が一応訊くと

「どうもこうも……関わっていても時間の無駄ですし……この前みた  
く、さつさとこの場を離れましょう。」

そういつて文さんは背中に乗るように僕に指示した。

言われるままに僕が文さんの背中に乗ろうとすると、女の子が叫ぶ

「おい、天狗！また逃げるつもりか？」

そういう女の子を完全に無視していざ文さんが空へ飛ばうとしたとき

「逃げたら面白いこと教えてやらないぞ！」

女の子の発した言葉に文さんの目つきが変わる。

「ほお……」

そう小さく言うのと文さんは女の子の方を見て

「面白いこと・・・・・・・・・・ですか?」

と繰り返す。

「そおだ!どうだ?まいったか!」

なんだかよくわからない理由で胸を張る女の子に対して文さんが告げる。

「よし、いいでしょう。あなたの言う勝負をして、私が勝ったらその面白いこと、というのを教えて下さい。私が負けたら、そうですね・・・・・・・・面白いものをあげましょう」

その顔は自信と余裕と・・・・・・・・何より好奇心に満ちあふれていた。

「よしーじゃあ・・・・・・・・あそこの木になつてる実をとって、ここまで早く戻ってきての方が勝ちだぞ!」

「はい、分かりました」

女の子の言葉に何の躊躇いもなく文さんは笑いながら頷いた。

女の子が指さす方向を見ると、かなり遠くに一つだけ黄色の実をならしている木がポ

ツンとたっていた。

あれなら確かに違う木の実でごまかすことはできなさそうだ。



「それじゃ、いくぞ〜」

女の子は言いながら体制を低くして、

「よ〜い．．．．．ドン!!!」

言う終わるやいなや物凄いスピードで女の子が飛んでいく。

．．．．．この世界の人はこうも簡単に皆飛んでいるのだろうか．．．．．

そして僕は文さんの姿を探すが、全く見つからず、焦っていると、

「朝早くから．．．．．元気ですよねえ．．．．．」

呆れるような声が横から聞こえ、その方向を見ると、

そこには文さんがいた。

僕があわてて言う。

「ええ?!文さん早く取りに行かないと．．．．．負けちゃいま．．．．．」

それに文さんは言葉ではなく手に持った黄色の木の实を見せることで答えた。

僕が驚きながら聞く。

「え?!．．．．．その．．．．．どつどつ、どうやって．．．．．」

文さんは楽しそうに笑いながら

「ははは、見くびらないで下さいよ。これだけの距離ですし」

いとも簡単に裸眼で少しかすんで見えるようなものまでの距離を〈これだけ〉と言い

切った。

すると、ものすごいスピードで女の子が戻ってくる。

地面に激突した勢いで周囲に少しだけ砂埃が舞った。

女の子が息を切らしながら文さんを見て言う。

「はあ・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・ど、どおだ天狗!びっくりして動けなかったか!。」

完全に勝ちきった表情の女の子に文さんが先ほどの木の实を見せて言う。

「それじゃ!面白いことっていうのを教えていただきましょうか?。」

その声は全く息切れしていないいつも通りのものだった。

「おい!おまえいかさましたんだろう!?!あたいはさいきよーだからおまえなんかになんかに負けないんだぞ!。」

頬を膨らませながらそう言う女の子に文さんはわざとらしく、

「え?貴女がもし〈さいきよー〉なら勿論私に面白いこと教えてくれますよね。」

こう言った。

それを聞いて女の子の動きが止まる。

「え?。」

「ま、当然〈さいきよー〉だったら私に教えてくれるでしょうし、心配ありませんが……

もしかして貴女が〈さいきよー〉ではないなんて事はないですよね………

文さんが言い終わつた後、数秒ポカンとしていた女の子がふいに意識を取り戻して「そ、そりゃー！ そうだぞー！ な、なんて言つたつてあたいは〈さいきよー〉だからな!!」  
そう満足げに言つた。

また、文さんも

「ええ⑨ 《さいきよー》ですもんね」

と、満足げに言つた。

「よし！ じゃあ〈さいきよー〉のあたいから、おまえ達に面白いことを教えてやろう！」  
「はい！ ありがとうございませす！」

そう言う文さんの手にはいつの間にかメモ帳とペンがあり、そして目は好奇心によつて光り輝いていた。

「ずばり、昨日の夜あたいが湖のほとりを歩いていたときのことだ。すると、紅魔館に忍び寄る影を見つけた。あたいは〈さいきよー〉だからもちろんそれがどろぼーだつて事に気づいたんだけど」

女の子の口から泥棒という言葉が出てきたのに驚いて僕は文さんに

「あ、文さん！どどど、どろぼ・・・・・・・・・・」

そう言いかけてやめる、

女の子をみる文さんの目は先ほどまでのものとは打って変わっていて、光のない実につまらなさそうなものだった。

しかしそんなことはお構いなしに女の子は続ける。

「あたいがそのどろぼーの元まで飛んでいって、『やい！どろぼー！』って叫んでやったら、どろぼーのやつは一目散に逃げていったね！エヘンツ！」

そういつてふんぞり返る女の子の話をまじめに聞いていたのは僕だけだった。

文さんが言い放つ。

「なるほど、妖精の間では日常茶飯事を面白いこと、と表すんですね。むしろそっちの方が気になりますわ。」

嫌み混じり、というか純度100%の嫌みを素直に受け取った様子の子は

「ふふふ・・・・・・・・・・」

と自慢げに腕を組んでいる。

・・・・・・・・・・あれ？ちよつと待って・・・・・・・・・・日常茶飯事？・・・・・・・・・・

泥棒が？

「えええええ!!」

僕が驚きを思わず声に出すと、その場の三人が一斉にこちらを向いた。

「?・・・・・・・・鞆?どうしたんです?」

文さんに聞かれ、僕は

「え?い、いや・・・・・・・・だって、日常茶飯事って・・・・・・・・どつどつ、泥棒が・・・・・・・・ですか!」

そう聞くと文さんが何の不思議もなさそうに

「ええ、まあ本当に一部の人間のみですがね。」

「ここ幻想郷はかなり治安が悪かったらしい・・・・・・・・・・」

「とにかく時間の無駄でした・・・・・・・・私たちはこれで失礼します。」

文さんはそう言い残し、僕を連れてその場を後にした。

「ううくん無駄な時間を過ごしてしまいました・・・・・・・・早く博霊神社へと向かいましょう。」

そう言つて文さんは僕に背中に乗るようにジエスチャーで示す。

僕がそれに従おうとすると急に文さんがかかんでいた体を起こした。

「あれ、そう言えばここって・・・・・・・・・・」

そう言つて首を傾げる文さんにぼくは訊ねる。

「どうかしたんですか?」

それに対し文さんは

「ああ、いえ前までここに封印を行った跡のようなものがあったんですが・・・・・・・・」

そう言う。その視線の先には何の変哲もない岩があるだけだった。

「見間違いとかじゃないですか?」

僕がそう聞くと、それもそうですねと答えて、もう一度身を屈めた。

僕が文さんの背中に乗つかると、

「それでは行きますよ・・・・・・・・っ!」

そう言つて文字通り目にも留まらぬ速さで博霊神社へと向かった。

続く・・・・・・・・

小さなおまけく妖精と白黒の魔法使いく

紅魔館の湖の畔、時刻は丑三つ時を少しすぎた頃だった。

一つの影が紅魔館へと忍び寄つていった。

霧雨魔理沙、大きな帽子をかぶつた魔法使いで、盗みの常習犯である。本人は借りていくだけ!と主張するが、実質は窃盗と何ら変わらないものである。

彼女が今まさに紅魔館へ忍び込もうとしたとき、不意に後ろから声をかけられあわて後ろを向く。

「なんだよ⑨妖精じゃないか、脅かすなよ。」

その声をかけた少女の正体を知り、彼女は安堵する。

「やいバカつてなんだ！バカつて、あたいはさいきよ．．．」

「だあああ、うつるさい!!分かったからちよつと大人しくしてくれ、あ！そうだコレやるよ、ほれっ！」

彼女はどうにかその⑨を黙らせようとポケットにあつた飴玉を投げる。

「おおお」

ばk．．．．．失礼、．．．．．⑨はその飴玉を受け取つてまじまじと見つめると、満足したように帰って行つた

「ふう、扱いが簡単で助かるぜ．．．．．さてと、」

彼女はそう言うのと目の前の大きな屋敷の前につぶやいた。

「よし！今回はあれと、あれと．．．．．ああ！あとあの写本も欲しいなあ、よし！まあ全部持つてくかあ!!」

その表情は夜の深い闇とは対照的にとても明るかった

### 3章 2話～お金は命より重い～

シユタツ。

そんな音とともに僕と文さんは神社の鳥居前へと降りた。

「ここが博霊神社ですか、……」

そこには一見普通の神社がたっていた。

「そうです。というか鞆は記事の写真で一度見てるでしょう?」

「え? まあそうなんですけど、やっぱり現実で見るとちよつと写真とは違うじゃないですか?」

「……そんなものですかね?」

そういうと文さんは神社の賽銭箱の前まで歩いた。

僕がそれに走って追いつく、そして

「お参りするんですか?」

そう聞くと、文さんは、驚いたように

「え? ああ……ええと、そうですね……ついですしお参りしておきますか……」



そう言うのと、神社の方を向いて手を合わせた。

僕は小銭入れを取り出し、中を確認する。

500円玉3枚、100円玉2枚、10円玉3枚、……

微妙な持ち合わせである。

まあ、ここ幻想郷に来てお金をケチつても仕方ない！そう思つて、全部お賽銭箱に投げ込もうとすると

「ああああーま、待つて下さいー！」

文さんに止められ、投げるポーズをしたまま文さんの方を向く。

すると文さんは少し考えてから

「ええとですね……その……あれです！十分、御縁があるように……っていつてよく15円投げるじゃないですか、だから鞆の手持ちだと、」

そう言つて文さんは僕の手から小銭を僕の目に捕らえられない速度で取つた。

「500円玉と100円玉で、どうでしょう？」

……どうでしょう？といわれても僕はどう言えばいいのかわからないので、なんだか納得いかないまま、お賽銭箱へと510円を投げた。

そう、投げた。……

もちろん僕のコントロールがいいわけなので、その硬貨は緩い放物線を描き、賽銭箱の後ろへと落ちた。

「あー、しまっ「いった、．．．．．ううう、なによ全く．．．．．」

僕が言い終わる前に、なんだか聞いたことがある不機嫌そうな声に、遮られる。

声の主は博霊神社の巫女さん、博霊霊夢さんで、頭を押さえて起きあがってくるところだった。

「ひゃあああ!?!ごめんなさい!、ごめんなさい!」

僕がパニックを起こして叫ぶのをよそに文さんが

「あれ? 霊夢さんじゃないですか、なにしてたんです?。」

そう霊夢さんに声をかける。

それを聞いて霊夢さんが、

「ん? ああ文か．．．．．、それに、あなたは確か．．．．．」

といいながら僕の方を睨むように見た。

「ああ、じよs、．．．．．弟子の鞘です。」

．．．．．文さん、もう助手でいいです．．．．．その気遣いがかえって心に刺さるんです．．．．．。

「ああ、そうだったわね．．．．．で? なに? なんの用? どうせくるならお賽銭の一

つでも……………」

「そういう霊夢さんに僕は

「え?……………」あの、お賽銭ならそこに……………」

僕が転がっていったお賽銭を指さすのと、そのお賽銭が霊夢さんの手に現れるのがほぼ同時だった。

霊夢さんがさつきとは違う、明らかに、かしこまった表情で何の用かしら?と僕に聞いた。

僕は文さんに視線で、助けを求めると、文さんが

「いや、ですね?あの最近ネタが少ないもんでして、何かないか探し回ってるんですよ。」

そう言った、それにたいして霊夢さんが

「……………」で、なんで家にくるのよ?他のところ行ってなさいよ、」

「いやいや、ここにすれば何かと起こってくれるじゃないですか」

文さんが笑いながら言うと、

「あんたねえ……………」家の神社をネタのたまり場だとも言うみたい……………」

そう、明らかに「帰れ」と書いてある表情と目つきで文さんを見る。

しかし、文さんは気にせず、

「あながち間違っていないですし」

と喋ってくすくすと笑った。

それを見た霊夢さんは諦めたように、しかしきっぱりと

「教えてあげてもいいけど……いくら払う?……」

こう告げた。

「情報料を要求するとは……ホントに今月ピンチ何でしょうね」

文さんが呆れたように、哀れむように言うが霊夢さんは

「それぐらいケチってんじゃないわよ」

そう叫ぶ。

「さつき鞆がお賽銭渡渡したでしょう?」

「お賽銭はお賽銭、情報料は情報料。」

霊夢さんはそう言うのと、文さんを睨んだ。

文さんは小さく溜息をつくのと、手に持っている僕の小銭入れ、

……手に持っている僕の小銭入れ……僕の……

小銭入れ。

「ええええええ!!」

僕が叫ぶ。

「うわーびつくりしたー」

文さんが小銭入れを漁りながら棒読みで告げた。

「あ、文さん・・・・・・・・・・いつの間に・・・・・・・・・・」

僕がどうか言葉が発するのを完全に無視して、小銭入れに残っていた全額を霊夢さんに渡す。いつさいの躊躇なく。

「ううう、」

僕が力のない目で抗議するが、全く意味はなかった。

「・・・・・・・・・・私が言うのもなんだけど、さすがに酷じゃない？」

霊夢さんの哀れみの目が痛い、物凄く痛い。

「まあ、一応私が養ってますから、大丈夫・・・・・・・・・・ですかね」

「あんた鬼か？」

「天狗ですか？」

そんな会話が続き、霊夢さんが渡された額を見て、言う。

「なんか、鞆・・・・・・・・・・だったっけ？まあその子には悪いけど、この額はあんまりじゃないの？」

それを聞いた文さんは眉をひそめて

「それなら、諦めますが、お金は返して下さい。」



ええと・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕がいつものごとくパニクっているのを見て、笑いながら、

「ああ、すいませんすいません。言い方が悪かったですね。体で、つていうのは労働力として、という意味です。けしていかがわしい意味ではないです。」

絶対この人わざと勘違いを招くような言い方したと思う。

「ああ、はい・・・・・・・・・・そうですよね、あははは・・・・・・・・・・、  
はあ、びつくりした・・・・・・・・・・」

僕が安心して言うと、霊夢さんが

「・・・・・・・・・・労働力つていったつて・・・・・・・・・・特にやること無いわよ?」

「まあそこは適当に。」

あまりにも投げやりに、僕は労働力、となつて霊夢さんの命令に従うことになった。

そして、下された命令は、

「んと、じゃあ最近落ち葉がすごいことになってるから、そこらへんの掃除でもお願いしようかな」

あまりにも適当だった。

「はあああ・・・・・・・・・・」





けた。

「ううう………なんで僕こんなこと………もつとそれっぽいことすると思つてたのに………」

ふてくされながら呟く僕に、文さんは急に、やさしい、見ている人を安心させるような、そんな表情で

「うーん、まあ………それは鞄にとつては不本意な仕事ですよ。でもです、鞄がそうやってやってくれているおかげで私は霊夢さんから、話を聞けましたよ。とても助かりました。ありがとうございます！」

いつもの調子とは違う文さんに「ありがとうございます」と面と向かつて言われたせいか、急激に顔の温度が上がっていったのがわかった。

「あ、え………あの………その。ええと………はい………」

どう反応していいのかわからず、しどろもどろになりながら僕が答えると。

文さんはそれをカメラに収め。  
満足げに笑った。

「………つ!? ええええ!?! ちよ、ちよつと! けっけけ、消して下さい!!」

そういつものごとく半泣きで抗議する僕に、文さんは短く。

「だが断る」

満面の笑みでこういった。

「なんですかそれええ!」

僕はどうにか文さんのカメラを奪おうと手を伸ばすが、身長が足りなくて全く届かない。  
い。

楽しそうに文さんは笑いながら、撮った写真を表示して、僕に取られないように見せつける。

「ううううう」

僕が弱々しく文さんを睨んでいると

「朝から元気ねえ・・・・・・・・あんたら・・・・・・・・」

霊夢さんが呆れ顔でこちらへ来て、僕の集めた落ち葉の山を見て、

「よく、こんな短時間でここまでやったわね・・・・・・・・まあ結構片づいたし、・・・・・・・・  
これで手伝いは終わりでいいわよ。お疲れさま」

そう言う。

「どうです?すごいでしょう?」

「なんであんたが自慢してんのよ・・・・・・・・」

そんな風にやりとりが続いていると、ふいに霊夢さんが

「あ、お茶入れたけど、鞆、あんた飲む？」

僕に言った、僕はそれに

「あ、はい！お願いします」

そう答えて、博霊神社の縁側へと向かった。

続く・・・・・・・・・・

小さなおまけ　金欠巫女は今日も行く

ふう、なんていうかこう・・・・・・・・・・まずい、ここ二日何も食べてない・・・・・・・・

つまり手持ちの金は文字通り、〈0〉・・・・・・・・

どうしたもんか・・・・・・・・

私、博麗霊夢は頭を抱えていた。

もう恥じることなく言おう、金欠だ、明日を生きていけるかわからない、誰か金をく

れ、金を。

こういう状態なのだ。

・・・・・・・・・・はあ、とりあえず無いとは思うがお賽銭がないか確認を・・・・・・・・

「っ!？」

賽銭箱の後ろには豪華な料理が並んでいた。

「はあ!?! え? なんぞ?」

落ち着け私! こんなの絶対おかしいわよね? 絶対何かの罠よね? こんな怪しいのに普通手を出す訳ないでしょ。

「……だが、しかし。今の私は普通なのか? どう考えても違うだろ?」

目の前にご飯がある。食べる。だろ? なんぞ違うか?

「いいや、何も変わらない。」

「、ということだ……」

「いったつだつきま……す」

私はその料理をとにかく食った。

そして腹が膨れると。

「ああ……やばい……久しぶりにたらふく食べたせいか……」

めっちゃ眠い」

布団に入ろう。

そんな思考よりも先に「寝る」という行為が私の中で重要だと判断されたようだった。

「十数時間後」

ちやりーん！

私の頭に何か小さいものがあつた。

### 3章 3話～喧嘩するほど仲がいい～

ズズ……

僕は手元のお茶を一口飲む。

熱すぎず、けれどぬるくもない、ほどよい熱さで、ついついもう一口くちにする

「おいしいですねー！」

僕が素直な感想を霊夢さんに言うと

「そう？」

とだけぶつきらぼうに返ってきた。

そして霊夢さんもお茶を一口飲む。

「いやあそれにしてー！」

文さんが明るく声を上げた

「さっきの話はおもしろかったですー！うすうす気になつてはいたんですがね……」

さっきの話、というのは僕の全財産と労働力を引き替えに文さんが霊夢さんから聞いた話のことだろう。

僕が文さんに聞く



「この前人里に行つたときにこの子が妖夢とデートしてたのよ。」

そう言う。

僕は必死になつて

「ち、ちち、ちがいますよ!?!、そんな、その、妖夢さんとは別に……」

そう抗議するが文さんは、綺麗な笑顔で

「大丈夫です、私は人の好みにとやかく言う気はありません。同性愛だって一つの愛の形です。」

僕にそう告げる

「だからそんなのじゃないんです!、ほんとですからね!……」

涙目になつて僕が言葉を探していると霊夢さんが不思議そうに言う

「は?同性愛?……え?もしかして……とは思つたけどこの子……」

僕が説明しようと口を開く前に文さんが

「ああ、鞆はれつきとした女の子ですよ?一人称〈僕〉ですけど」

そう言った。

「ふくん。……やっぱりか……」



それに霊夢さんはそう一言だけ言つてまたお茶を口にした。

「あれ？あんまり驚かないんですね。．．．．．」

僕がついつい霊夢さんに言つと、

「別にそんな驚くことでもないでしょ、確かによく見れば顔つき女だし、なんかいろいろと女々しいし、声高いし。」

女の子っぽい、といわれるのは嫌じゃない、むしろこれまで勘違いされてきたせいかうれしいぐらいだ。なのに．．．．．どうしてこんな微妙な心情なんだろうか．．．．．

「さて、おもしろい話も聞けましたし．．．そろそろ帰りましょうか．．．．．」

僕がお茶の最後の一口を飲んだ後、文さんが言った。

「あーはい、わかりました」

僕はそう言つて立ち上がると自分の荷物、．．．といつても手提げ鞆だけだが、まあ、一応確認する。

すると文さんがいつものごとく

「それじゃあーご協力ありがとうございます！」

そう明るく言うのに僕が続いて

「あ、ええと！ありがとうございます！」

そう言った。

「いや、いつでも来ていいのよ、お賽銭さえ持ってくれば……」

霊夢さんがとても優しい笑顔でお賽銭を要求してきたが文さんが無視をしたので僕は取りあえず苦笑いをしておく。

そして僕たちが家路につこうとした瞬間、目の前から

白黒の物体が猛スピードで突進してくるのがかろうじてわかった。

そう認識した直後には、その白黒の物体は真横に着地しており、その姿がしっかりと捉えられた。

「ひゃああああ!!?!」

僕は悲鳴を上げ、文さんは怪訝そうに眉をひそめた

そこにいたのは

「よう！霊夢……ん？そこにいんのは……天狗と……あと、ええと……」

いつかの魔法使いさん、霧雨魔理沙さんだった。

「あの……鞆です……」

僕が控えめに言うのと、

「ああ！そうそう鞆だ鞆だ。いや、もちろん覚えてたぜ？」

そう笑いながら言うと、文さんの方を向いて、

「んで天狗、何でお前等がここにいるんだ？」

そう尋ねた。

文さんは笑顔で

「いえ、ただの情報収集ですよ」

そう言った。

「ふうん、いやまあ、そんなことはどうでもいいんだよ、それよりも・・・」

魔理沙さんはそう言うと霊夢さんの方を見て

「お〜い霊夢！そろそろ宴会の時期だろう？」

そう大声で言った。

いままで他人事のようにしていた霊夢さんは急に自分の名前を呼ばれて面倒くさそうに

「え？ああ・・・そういえばもうそんな時期か・・・」

そういうと頭を掻いた。

「宴会、開くんですか？」

文さんが興味津々できくと、

「・・・まあ近々開くとは思うけど・・・」

これまた面倒くさそうに霊夢さんが言った。

「それじゃ、是非取材させていただきましょう！」

文さんは相変わらずうれしそうに呟いていた。

「宴会と言えば、料理だな……………」

魔理沙さんが楽しそうに呟く。

「料理ねえ、今回はどうするかな……………」

霊夢さんも一見面倒くさそうに見えるがその表情はどこかうれしそうにも見える。

そんな光景を僕が見ていると、文さんが

「鞆、帰りますと言いましたよね……………あれは嘘です。」

僕の横で二人を見ながら心底楽しそうに言った。

「え……………は、はい！」

僕がそう言うのと文さんは笑いながら

「ちよつとおもしろそうですしね。」

そう付け加えた。

「おお！そうだ！」

魔理沙さんがいきなり大きな声を上げると僕等の方を見て、

「おい天狗と、……ええと……鞆！お前等ちよつとなんでもいいから手伝ってくれよ。」

そう言った。

「いいですよ。」

それに対して待つてました！というように文さんが答える。

すると霊夢さんが相変わらず面倒くさそうに、

「ええと、じゃあ……とりあえず、魔理沙は適当に宣伝でも言つてきて……」

んで……その二人は……」

霊夢さんが僕と文さんの二人を見て、そして考える。

考える。

まだ考える。

「うーん、確かに宴会つて言つても、前日ぐらいしか、やること無いしな……、べつに手伝いいらなかつたかもな」

考える霊夢さんをよそに魔理沙さんが言う。

「あーじゃあ、とりあえずこの辺の掃除でも……なんだ？やけにきれいになってるな……もしかして霊夢……掃除したのか……!？」

物凄く驚いた顔で、魔理沙さんが霊夢さんに訊く。

霊夢さんは少しだけ怒った様子で

「だとしたら何。」

とだけ言う。

魔理沙さんは目を見開いた後に天を見上げて、そして

「おいおい、雪．．．．．どころか霰でも降ってくるんじゃないか？」

そう言ったと思えば今度は霊夢さんのそばに行き、霊夢さんの額と自分の額に手を当てて

「熱．．．．．は無いんだよな．．．．．だ、ただ大丈夫か霊夢？金欠でやることないにしても、お前みたいな面倒くさがりが掃除なんて．．．．．もしかして異変．．．（バゴツ）」

霊夢さんが仏のような笑みで魔理沙さんの額に拳を叩きつける。

しかし魔理沙さんも予想はしていたのか、箒で霊夢さんの拳を防いだ。

霊夢さんが明らかに

「チツ」

と舌打ちしたが魔理沙さんは特に気にした様子もなくヘラヘラと笑いながら

「おつと？霰どころか拳が降ってきたぜ、そりゃあ異変も起こるわけだ．．．．．」

霊夢さんを煽る。

掃除したのは僕なのだが、空気を読んで言わなかった、というか言えなかった。

霊夢さんはなおも笑いながら、しかし額には青筋を走らせて、

「魔理沙……?ちよつと調子に乗り過ぎじゃない?」

いつもと違う、ドスの利いた声で言う、

しかし魔理沙さんは怯みもせずに、

「おい天狗、よかつたなあ、ネタが一つ見つかったぞ、異変だ異変」

笑いながら文さんに言った。

その瞬間、霊夢さんが魔理沙さんのお腹めがけて蹴りを放った。

「おっと、」

しかし魔理沙さんはそれをさつきと同じように箒で防ぐ。

しかしさらに霊夢さんは放った右足を地に着け、文字通り目にも留まらぬ速さ、で回

し蹴りを繰り出した。

「っ!?!」

魔理沙さんも必死に対抗するが衝撃に耐えきれず後ろに転がった。

しかしすぐに体勢を立て直し、帽子の位置をなおした後、霊夢さんを軽く睨む。

「ほう、久しぶりに……やるか……?」

そう言う魔理沙さんに霊夢さんは

「あんたには一回きつつくくお灸を据えなきやいけないみたいねえ」

そういつて不適に笑った。

そして、

「おらああああ」「うらあああああ」

女の子の子の声とは思えない雄叫びをあげて両者が取っ組み合いを始めた。

「あわわわわ、あ、ああ、あ………あの………ええと、あ、文さん、と、と………と………止めないと」

僕があわてて言うが、文さんは、

「いえ、このままでも大丈夫でしょう、とか止めに入ると危険な気がします。」

そういつて苦笑した。

確かに僕が止めに入っても、一瞬で弾き飛ばされるだけだろう。

そう冷静に考え、改めて二人をみる。

「あ、てめっコノヤロ！」

「つた、………あんたねえっ！」

やってることはえげつないのだが、客観的に見ると子供同士の喧嘩のように見えた。

「ふっふっ」



こんな状況なのに僕が思わず笑うと、文さんもつられたのか  
「はははっ」

と声を上げて笑った。

無邪気にじやれ合う子供、そんな風に考えると、急に微笑ましく……  
「つて、えええええ！」

僕が大声を上げる、

文さんがびつくりしたようにこちらをみた。

「あやや!? どうしたんですか?」

「いやいや、笑い事じゃないですよね!、これ死人でちやいますよ!これ!」

僕が必死に言う、文さんが不思議そうに

「いや、これぐらいで死ぬほど柔な人たちじゃないですよ? それにあれぐらいのことなら結構やってますし」

「なっ!?!」

これぐらいというには激しすぎる喧嘩なのだが、

いや、ちよつと待て。落ち着こう。イチ、サン、ゴ、⑨、

そうだ、ここは幻想郷だ。常識が通用しないのはとづくにわかってたことだろう?

あんな戦闘でも幻想郷ではただの喧嘩なのかもしれない……



## 3章 4話〈初めて（じゃない）のおつかい〉

はあ………。

僕は今、博霊神社を離れ、人里へと向かっています。

どうしてこうなったか、

それは………。

「だ、ただ、大丈夫なんですよ………？これ………」

僕は文さんに尋ねる。文さんはそれに軽く

「ええ、これぐらい平気だと思いますよ？」

「………はあ………」

僕は目の前の喧嘩………と言うよりは戦闘、といった方がしっくりくる  
それを眺める。

これが………平気………

僕が改めて幻想郷の無茶苦茶加減を実感したところで、

「ただ、鞘がこの場にいると、もしかすると流れ弾でコロツ………と逝っちゃう

かもしれないですね……」

文さんが笑顔で呟いた。

……今すぐ全速力で逃げ出したい。……

するとすぐに文さんが言う

「まあ……冗談ですけどね」

じよ、冗談なのか……

「まあ、流れ弾が怖いのは確かなので、ちよつとお使い頼んでいいですか？」

……お使い。まあこの場から逃げ出せるのなら、もう何でも言い。

僕は

「はい！わかりましたっ！」

文さんの陰に隠れながら、そう即答した。

「それでは人里まで言つて、本を借りてきてもらつてもいいですか？、ええと、【鈴奈庵】っていう貸本屋さんで借りれるみたいなので、お代はこれで。借りてきてほしいのはこの本です。」

そう言う文さんは、僕にお金と、本の名前がかかれたメモを渡してくれた。

メモには、達筆で、……これ……なんて書いてあるんだ……？

どこかの書道家が書いたような、なめらかな線で僕には読めない何かを書いてあった。

僕は文さんに

「これ……なんて書いてあるんですか？」

そう尋ねるが、文さんは

「そうですね……鈴奈庵の店主さんに訊けばわかると思いますよ」

そう笑ってごまかした。

「……?……まあ、わかりました」

僕はそう言うと、人里へとむかって歩きだした。

こんなことがあつて、僕は人里へ向かっていた。

それにしても、僕がいつもやつてることつて、文さんの役に立ってるのだから……お使いだつたり。

取材場所の見学だったり、戦闘訓練だったり、お使いだつたり。

どうにしろ、新聞記者……つぽくはないよなあ。

「はあ……」

僕は小さく溜息をついた。

そんな風になっているといつの間にか、人里へとついていた。

そこで僕は自分の格好が普段のものであることに気づいた。

（あ！．．．．．どうしよう．．．．．取りに戻るにしても、文さんが前みたいに着物持つてるかわからないし．．．．．）

僕はしばらく考えて、用事をさつさと済ませてすぐ戻ってしまうことにした。

ええと．．．．．確か、鈴奈庵．．．．．だったっけ．．．

僕は、辺りを見回しながら、人里を歩く。

思ったより周りの人から気にされることなく、いつもの制服姿でも特に問題はなさそうだった。

そして、

（あ！見つけた！あれかな．．．．．？）

鈴奈庵、という看板を掲げる、年季の入ったお店を見つけた。

とにかく！早めに用事を済ませちゃおう．．．．．！

僕はそう思い、そのお店へと駆けた。

そして、

「ひゃうあ!？」

「ズシヤアアアア。」

妙な叫び声とともに盛大にコケた。

「痛たた……」

そうつぶやきながら、顔を上げる。

幸運にも周りに人はいなく、誰かに見られたなんてことはな……

「おいおい、大丈夫かい？おまえさん。」

……いなんてことはなかった。

いきなり後ろから話しかけられた僕は、いつも通り

「ひゃあああ!?ごめんなさいごめんなさい」

そう半ば叫ぶように言う。

しかしそれに対して声をかけた女の人は、ケラケラと笑いながら

「なんじゃ、大丈夫そうじゃのう。そんなに焦らんでもええよ?」

そう僕に言った。

その人は妙齢の女性で、葉っぱの髪留めのようなものをつけていた。

「は、はい……あ、ありがとうございます。」

僕はお礼を言うと、すぐにその場から去ろうとしたが

その女の人に呼び止められる

「おまえさん、この人間ではないみたいじゃが……外の人かい？」

そして、鋭い目を向けて僕に言う。

外の人、というのは外来人……のことだろう、僕は一瞬本当のことを言おうか迷ったが、この格好ではごまかしが利かないと思い、「……はい」とだけ答えた。

すると、女の人は予想と反して、柔らかな笑顔で、

「そうかい、ま、ここで生きていくのなら気をつけるといい、……いろいろと、な。」

そう告げて、立ち去ろうとした。

僕はそれを呼び止める。そして

「あ、あの……貴女は……」

そう呟くが、女の人は、またケラケラと笑いながら、

「なに、名乗るほどのもんじゃあないさ」

というと、すぐにどこかへ行ってしまった。

僕はしばらく、女の人を立てていた場所を見つめて、呆然としていた。

しばらくすると、意識を取り戻した僕は、人里にきた目的を思い出し、ハツとする。

「そうだ！本借らないと！」

そして、僕は鈴奈庵へと、駆けた。



鈴奈庵、そこは内装も外装と同じように、年季の入ったものだったが、ただ一つ。店番をしている綺麗な飴色の髪に鈴の髪留めをした女の子だけが、ひどく不釣り合いだった。

僕と同じ用な年齢だと思われる彼女は、本棚に本をしまっていた。

僕が入ってきたのを見るとその手を取め、につこりとして、

「あーいらつしやいませ」

と言う。

．．．．．なんとというか、とても可愛らしい笑顔だった。

同性であることも忘れてその笑顔に見とれていると、

不思議そうに、

「．．．．．どうしたんですか？」

と訊かれ、とっさに

「え？、ああ！あの、その．．．．．なな、何でもないです！」

そう答えた。

それを聞くとその女の子は本の整理に戻った。

なんで、こんな僕と似たような年の女の子が店番をしているんだろう．．．．．お

手伝いか何かかな……

そんなことを考えながら僕は、女の子に話しかけた。

「あの、ええと……この本ってありますか？……」

僕はそう言いながらメモを取り出し、女の子に見せる。

女の子は

「あーはい、ちよつと見せて下さい」

というと、僕からメモを受け取った。

そしてそのメモを見つめる。その表情は毎秒ごとに、怪訝そうなものに変わっていった。

やがて、メモを僕に渡して尋ねてきた。

「このメモ……どうしたんですか……？これ、天狗の文字ですよ……」

ビクウツと僕の体が跳ねる。僕は視線を逸らしながら

「え、……あの、その……何というか……」

ええと……」

そう口ごもった。

確か、前に霊夢さんが妖怪を退治にきたって言ったような……じゃあ、ここで文さんの名前を出したら駄目なんじゃ……いや、でも文さんは今霊夢さ

んといえるのか、だったら大丈夫なんだろうか……?。

頭の中で考えが右往左往していると、女の子が、

「まあ、あまり追求する気はないですけど……」

そういうと、納得のいかない様子で本棚へと向かっていった。

……助かった。

僕は溜息をつき、近くにあつたいすに座った。

「あれ?、確かこの辺に……ごめんなさい!ちよつと待つて下さい!」

女の子が本棚を漁りながら声を上げる。

「あ、すいません……」

僕の声が届いているかどうかかわからないが、女の子は尚も本棚を漁った。

さて、どうしようかな……

そう考えながら僕は目に付いた一冊の絵本を手にとった。

《『い妖ー神様ーい』》

表紙が全体的にかすれてしまっていて、タイトルを読むことができない。

僕は表紙をめくった。

すると、表紙の状態とは対照的に綺麗なページが、出てきた。

僕はその本を読み進めた。

「あれ？」

気がつくとは僕は、絵本の最後のページを開いていた。

あれ、・・・・・・・・・・なんで最後のページが？

僕は不思議に思いながらも、本を読もうかとページをめくろうとすると、そのとき

「あ、ありましたー、これですよね」

店主の女の子が声を上げて、三冊の本を抱えてこちらに走ってきた。

「すいませんね、すぐく待たせちゃって・・・・・・・・・・」

女の子が申し訳なさそうに言う。

・・・・・・・・・・そんなに待ただろうか？

「・・・・・・・・・・？、ええと、だ、大丈夫ですよ？」

僕は不思議に思いながらも答える。

そして、女の子は、なにやらノートにさらさらとメモすると、

「お代は〇〇になります」

と笑顔で告げた。

文さんからお金を受け取ったときに、多くないかな？、と思っただけ、結構そんなものなのか・・・・・・・・・・

僕は女の子にお金を渡す。

そして本を受け取って戻ろうとした。

が、予想外なことに、その女の子に呼び止められる。

「あの、あなた……あまり見ない顔ですけど……人里の方ですか？」

またまた僕の肩が跳ねる。

ど、どど。どうしよう……文さんの弟子、とはいえないし、かといって嘘を吐くのは、……

……僕はしばらく迷って、最終的には

「情報関連の仕事の……助手をさせていただいてます。この本はその資料です。」  
といった。

……うん、うそは言っていない……

女の子は、まだ納得がいていない様子だったが、

「そうですか……まあ、がんばって下さいね。」

そう、笑顔で返してくれた。

はあ……今日は幻想郷で初めて、まともな【人】に二人も出会えたなあ……  
僕はそんなことを思いながら、人里を後にして、博霊神社へと向かった。

続く……

小さなおまけく《ーい妖ー神様ーい》

むかしむかしあるところに、とてもとてもわるいようかいがいました。

ようかいは“魂”をあやつり、いろいろなわるさをしました。

かみさまたちはそれをみかねて、そのようかいをころしてしまふことにしました。

しかし、ようかいは“魂”をあやつり、かみさまとたいとうにたたかいました。

たたかいはようかいひとりをあいてに何千年もつづきました。

そんなあるひ、ゆうきあるひとりのわかいかみさまがほかのかみさまたちにいいました。

「わたしがあのにつくきようかいをたおしてごらんにいれましょう」と、

わかいかみさまはそれからいろいろなさくせんをたて、ようかいとたたかいました

《中略》

こうして、わるいようかいはえいえんにふういんされ、せかいはへいわになったのでした。

めでたし、めでたー

## 3章 5話〈記憶という記録〉

「……………はあ……………はあ……………よいしょっとお……………」

荒い息をしながら僕は階段を上がる。

文さんのお使いで本を借りた僕は博霊神社へと向かっていた。

しかし、辞典のような厚みの本3冊をもって、移動というのはかなりキツイ。

僕の頬を一筋の汗が流れる。

重い足を何とかあげて階段を上る。

しかし次の段があるはずのところには何もなくバランスを崩した。

「ひゃああ!?!」

僕はそのまま本を庇う形で横に倒れた。

「ううううう痛つて……………」

僕が涙目で起きあがろうとすると目の前に手が差し出される。

その手を見て僕は

「あー、ありがとう(ござい……………」  
ん?……………ん?……………ん?……………」

その手の元をたどると、見慣れた笑顔、つまり文さんがたつていた。

「大丈夫ですか? . . . . . 帰ってきたと思つたら、いきなり転ぶものですから、驚き  
ましたよ。」

文さんが苦笑しながら言う。

え? 帰ってきた? . . . . . え?

僕は改めて前を見る。

そこには博霊神社と、お茶を飲む霊夢さんの姿があつた。

「あら、帰つたのね靴。」

霊夢さんが、眠そうな声で言った。

僕はいつの間にか博霊神社にたどり着いていたらしい。

「ああ . . . . . ついたのか . . . . . 疲れたあ . . . . .」

僕がそう独り言を呟くと、文さんが

「重い本を持って、ご苦労様でした。少し休んで下さい。」

そう言って僕から本を受け取ると軽々と持って、縁側の隅に置いた。

それを見て霊夢さんが顔をしかめながら

「ちよつと、何勝手においてんのよ、それに軽々しく休んで下さいって、ここ私人家な  
んだけど . . . . . ?」



文さんを睨んだ。

文さんはいつもの調子で

「え？じゃあ、駄目ですか？」

と聞く、霊夢さんはすこし考えた後、溜息をついて

「別にいいわよ、全く……」

諦めたようにそう言った。

「そう言っていただけだと思ってました！」

文さんは心底うれしそうに言った。

僕は文さんと、霊夢さんの言葉に甘えて縁側の端でお茶を飲ませてもらっていた。

横では文さんと霊夢さんがなにやら話していた。

そこで、僕はふと気になったことを訊いてみた

「あの、そう言えば魔理沙さんってどこに行っただんですか？」

1時間ほど前まで霊夢さんと《喧嘩》していた魔法使いさんの居場所についてである。

それについては文さんがすぐに

「魔理沙さんでしたら、宴会のことを皆に知らせに行くことになって今飛び回っていると

思いますよ。」

そう答えてくれた。

宴会・・・・・・・・かあ・・・・・・・・どんな人達が来るんだろう・・・・・・・・

僕は知っている限りの幻想郷の住人を思い出す。

・・・・・・・・

大丈夫だ。変わった人はたった7割ぐらいしかいない♪！。

僕は考えるのをやめて、お茶を飲み干した。

「それでは！そろそろお暇しましょうかね・・・・・・・・。」

文さんが立ち上がって言う。

「！、は、はい！」

僕は文さんに続いて慌てて立ち上がった。

「あら、もう帰るのね。」

霊夢さんがいつもの口調で言った。

文さんはいつも通り

「はい、今日はいろいろありがとうございました！」

笑顔で言う。

そんな文さんに対して霊夢さんは



という魔理沙さんだった……。

あれ？

どこだろう？ここ？

なんか……体がふわふわした感じ……

というか……私……誰……？

何してるの……？

音が聞こえる……何の音だろう……？

サイレン……？救急車かな……？

事故でもあったのかな……？

あれ？

体が動かない……？

目の前も真っ赤だし……？

……そつか、事故にあつたのは私か……

ああ……そういえば体のあちこちが痛いや……



何も見えない……………。

? つまた声が聞こえる……………。

『鞆っ? 大丈夫ですか? 鞆?』

鞆? それが私の名前?

私? あれ……………僕? え……………?

僕は……………何? 何?

何何何何何何何?

僕は?……………僕は……………僕……………

……………私——……………

僕はかかっていた布団をはねのけて飛び起きる。

「はあ……………はあ……………」

「っ!……………」

突然起きあがった僕を見て目を開いて驚く文さん。

僕の額には滝のような汗が流れている。

「はあ．．．はあはあ．．．．．はあ．．．．．はあ．．．」

呼吸は乱れて、眼は焦点があつておらず。

激しい頭痛、めまいに襲われ、五感はほとんど働いていない。

何かを考える余裕など全くなかった。

ただ。

理由もなく。

使命のように。

そのナニカを見据えて。

「誰？．．．．．誰？、誰？．．．誰？誰？誰？誰？」

とだけ叫んだ。

「だ．．．大丈夫ですか!? 鞆っ!」

横にいる誰かが何か叫んでいる。

それでも、．．．．．只ひたすらに、意味もなく

「誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？誰？」

そう叫んだ。

その誰かが僕の肩をつかんで

「大丈夫ですか!? 鞆!」

またそう叫ぶ。

そのとき、ふすまが開き、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何だ何だ!?!」

慎重な面付きの巫女と慌てた様子の白黒の何かが入ってきた。

・・・・・・・・その瞬間・・・・・・・・

視界からすべてが消え去り、そこには何もなくなつた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・つ!?!」

僕は突然飛び込んだ景色に驚く。

そこには霊夢さんがおしぼりを僕の額にのせている姿があつた。

「うわっ!?!」

「ひゅあ!?!」

僕が驚いて起きあがると霊夢さんはかわいい悲鳴を上げて後ろにのけぞつた。

「(ぎょ)めんなさい」

少し冷静になり霊夢さんが僕の看病をしてくれていたのだと理解した。

「看病してあげてたのにいきなり『うわっ!?!』はないでしょ・・・・・・・・」



「い……い……ごめんなさい……」

霊夢さんが不満そうに漏らし、僕が謝った。

「……………」

霊夢さんが無言で僕の顔を凝視する。

「?……………何かついてます?」

僕が訊くが、それを無視して霊夢さんは僕にじりじりと近づいてきた。

「え?……………あー、あの、ちよつ……………」

僕は焦りながら後ろに下がっていくが

僕が下がった分の距離を霊夢さんが詰めてくる。

そしてとうとう僕の背中は壁にぶつかった。

「ひっ!」

小さな悲鳴が漏れる。

霊夢さんは限界まで僕に近づき、そして……………

「大丈夫?」

とだけ言った。

僕はその言葉に

「え?」

としか反応できなかつた。

霊夢さんが繰り返して

「だから！大丈夫か？つて訊いてるの」

そう言った。

「え!?いや!あの……だ、だだ……大丈夫……大丈夫……ですか?」

僕が戸惑いながらも答えると、

「何で疑問系なのよ……」

呆れた顔で霊夢さんが言った。

「いや〜悪かつたな〜ちよつと手元が狂つたもんで」

目の前の魔理沙さんは笑いながら言った。

「だ、大丈夫ですよ……はい……」

僕は言うが魔理沙さんには文さんと霊夢さんの視線が刺さる。

それに気づいたのか魔理沙さんは急に黙った。

「つたく……たいしたことなくて良かったわよ……見かけによらず頑丈なのね」

霊夢さんが呆れたように言う。

「それにしても鞆？なんだか寝てるとき凄く魘されてた様子ですけど大丈夫ですか？」  
そう文さんに訊かれ、僕は霊夢さんのさっきの『大丈夫？』がそういう意味だったのか、と気づいた。

何故か場の空気が一気に張りつめた感じになる。

僕はどんな夢を見たのか思い出そうとする

．．．．．

．．．．．あれ？

確かに記憶はそこにある。

すごく嫌な怖い夢を見た。

でも．．．．．

それがどんな夢で、何処にいて、何をして、何が嫌で、何を怖がっていて、そして……

それが果たして自分なのかも曖昧だった。

それに何故かそれを思い出そうとすると頭が痛くてしようがなかった。

それを文さん達に伝えると、

「そうですね．．．．．まあ無理に思い出すことないですしね．．．」

そう言つてその話は終わった。

「それはそうともう動けそうですか？鞆？」

文さんにそう訊かれ僕は軽く体を動かす。

特に問題はなさそうだった。

「それではもう遅いですし、急いで帰りましょう。」

文さんにそう言われ、僕は霊夢さん、魔理沙さんに挨拶をして、博霊神社を後にした。

続く・・・・・・・・

小さなおまけ〜キヲク〜

「クリスマスに女二人か〜・・・・・・・・空しいねえ・・・・・・・・」

横を歩くえりが苦笑しながら言った。

「はは、彼氏持ちがよく言うよ。」

私がいりに言うといりは「えへへ〜」とにやけながら笑った。

クリスマス、街にはカップルが行き交つてる中私たち二人は買い物したりなんざりし

ていた。

もしかしたら私はズボンを履いて髪はショートカット・・・・・・・・

ええと・・・・・・・・ボーイツシュって言うのかな？

まあ男の子と間違えられて周りからはカップルに見えていたのかもしれない。

とにかく私たちは二人で一緒にクリスマスを楽しんでいた。

夕方になり、私たちは近所の公園に来て、ブランコに並んで座った。

夕方な上クリスマスなので他に人はもちろんいない。

私はそこでえりとしばらく雑談した後、ふいに空を見上げた。

そこには………

「ああ！雪だ!!」

白く輝く結晶達が降りてきていた。

「おお！珍しいね！」

えりも一緒になって騒ぐ。

雪に興奮して子供のようにはしゃいだ。

ある程度たつと二人とも疲れて、帰路につくことになった。

といつても今日はえりのうちに泊めてもらうので、まだ騒ぐだろうけど………

そして私たちは交差点に来た。

信号は青だったので小走りに通り抜ける。

真ん中あたりまでくると後ろでズシヤアアと音がした。

私が振り返るとそこには男の子が転んでしまっていた。

きつと何かを買ってもらって、はしゃいでいたのだろう。

声をかけようと私は男の子に駆け寄ろうとした。  
すると……

キイイイイイイイイイイイイイイイイ

激しいブレーキ音と共に私の視界に入ってきたのは、  
猛スピードでこちらに突っ込んでくるトラックだった。

## おまけ編 3

## おまけ編 1話くボーイツシュって良いですよねく

僕は目の前のソレを見る。

整った顔立ちの美青年二人が体を交ら（ry

僕の周りだけ時間が止まった。

「……………ううむ……………」

文さんが呟く。

「どうしたんですか？」

僕が訊くと文さんは笑いながら

「いえいえ、今日やれることはやってしまったので……………」

そうだった。

やっぱり仕事熱心なんだなあ、と感じつつ、僕は言う。

「最近文さん動きっぱなしですし、少しお休みになったらどうですか？」

しかし文さんは

「う〜ん．．．．．体力は有り余ってるんですよえ．．．．．」

そういつてとても眼では捉えられない速度で腕をブンツブンツと振った。

それとともに少しの風が起きる。

「そうですか．．．．．じゃあどこか取材に？」

僕が提案するが

「明日に宴会の取材がありますし、鞆も疲れるでしょう？」

帰ってきた文さんの言葉に僕は感動しながらも

「そんな！僕のごことは気にしないで下さい!!」

そう言った。

それでも文さんは笑みを浮かべながら

「はは．．．大丈夫ですよ、もともと今日はどこにも行く予定は無かったですし、ネタ探しにふらふらく、って気分でもないですしね。それに鞆は私の弟子ですから、弟子のことを考えるのも師の役目ですからね」

そう言ってくれた。

「あ．．．．．文さん．．．．．」

僕は不覚にも泣いてしまいそうになった。



そんなに僕のことを考えていてくれたなんて……なんて優しいんだろう……僕はあるにずつついて行きます。

このとき僕は、この後自分の身に惨劇が降りかかってくるなど知る由もなかった……

「ん、そうですね……」

文さんが手を顎に当て、考えるポーズをする。

僕は読んでいる本のページを覚えてから閉じて、文さんの方をみる。

珍しく真剣な顔の文さんは、手帳を開いたり閉じたりを繰り返す。

そして！

「あっ！」

と声を上げた。

「なにかあったんですが？」

僕が訊くと、文さんは「ふふふ……」と笑いを漏らしながら、こちらに近づいてきた。

「えっ？」

僕の口から反射的にそんな声が漏れる。

文さんは手を前に出して小刻みに動かしながら、迫ってくる。

ど、どうしよう……

いすに座っていたから逃げ場がない。

僕は文さんをみる。

うつろな目で一直線に僕……の顔の下の方に視線を向けている。

その視線の方向に若干違和感を覚えつつも、僕は逃げる方法を思考する。

そうしてる間に文さんの顔が目の前まで迫っていた。

「ふふふ……堪忍して下さいね……」

た、たすけ……

僕は後ろにのけぞって、そのままいすごと倒れた。

「ひゃあああ!?!」

「おおつと!」

文さんの足も巻き込んで。

文さんの仕事場にドテーンと、音が響く。

「いたたたたた」

僕は頭に痛みを覚えつつ、起きあがろうとする。

が、上に何かが乗っかっていて立ち上がれない。

そこでやっと、文さんも巻き込んで転んでしまったことに気づいた。「す、すみません!!文さ……」

そこには文さんがいた。

が文さんの目は僕の顔の、したに向いている。

つまり、

ええと、文さんが……

その……なんて言うんだろう……

うーんと、僕の……その。む、む……胸……

を、その。なんて言うか……ええと。

触っ……

「いやあ、……やっぱりぺったんこですねえ〜(笑)」

「ひにやあああああああああああああああああああああ……」

僕は速攻で文さんを押しのけようとする、

も、その手は空振り、文さんは立ち上がってにこにこしていた。!!!!!!

僕は動けるようになった体で飛ぶように部屋の中へと移動する。

「ななななななななな!な、なに、なにになな、何してるんですか!!!」

僕は顔を真っ赤にして叫ぶ。

「何って何のことですか?というかそれ……」

文さんはいつも通りの平然とした口調で言い、僕の体を指さした。

僕は自分の体をみる。

「ひやあああああ!?!」

文さんの作業なのか服のボタンははずれ、中に着ていたものは託しあげられて下着が露わになっていた。

光の速度で後ろを向き、光の速度でボタンを付け直す。

ボタンを付け終わり、泣きそうな目で文さんを睨む。

文さんは笑いながらからかうように

「おお……こわいこわい。」

といった。

「もう!なんなんですか!?!」

僕が怒りながら言うと、

「いやあ、やっぱりペったんだなあ〜〜と思って、つい……」

特に悪びれもせず言う。

つい、つて……

大丈夫なんだろうか……

「・・・・・・・・・・」

僕は半眼で文さんを見る。

文さんはそんな僕を写真に収めていた。

「まあまあそんなに怒らないで下さいよ」

文さんがなだめるように僕に言うが僕は文さんを涙目で睨み

「人にセクハラしたあげく、怒ってるところを写真にとって、煽りに煽って、そこから怒らないで、って随分立派なお考えですね!？」

僕が普段言わない嫌みを言うと、文さんは少し笑いながらも普段とは違う真面目な口調で、

「確かに少しやりすぎましたね・・・・・・・・すいません・・・・・・・・反省してます。」

そう謝った。

そんな風に言われると許すしかないじゃないですか・・・・・・・・

僕は、文さんの表情を見てつい許してしまおうとした瞬間、

文さんが小さく

「だが後悔はしていないキリッ」

と呟いた。

・・・前言撤回。

僕はまた頬を膨らませそっぽを向いた。

そんな僕を見ても文さんは楽しそうに笑っている。

すると文さんが唐突に

「まあ、つい。っていうのは冗談なんですけどね」

そう言った。

・・・

・・・

「え？」

僕の口から力の抜けた声が漏れる。

冗談？

「いや、ですから、鞆の胸を見ててついでにっていうのは冗談でして」

文さんはぼかんとする僕に、

マジックのネタバラしでもするように楽しそうに言う。

「実際はですね」

僕は文さんの方に注目する。

文さんは顔の前に人差し指をたてて、

もったいぶった後。本当の理由を言った。

「鞆を女の子にしようと思ひまして。」

。

。

。

数秒の沈黙。

その後、僕の頭でお湯が沸いたかと思うと、

頭から湯気を出しながら倒れた。

「鞆くわかりますか〜？鞆く〜」

うつすらとした意識の中、文さんの声を聞いた。

「う、・・・・・・・・痛ってて・・・・・・・・」

僕は頭を押さえながら起きあがる。

「おお！起きましたか。大丈夫ですか。」

文さんの様子から察するに、また気絶していたんだろう。

この気絶癖・・・・・・・・なおせないかなあ・・・・・・・・

そんなことを考えながら僕は文さんに答える。

「ああ、はい。もう平気で……」

そこで冷静になった頭に先ほどの文さんの言葉がフラッシュバックする。

『お前を女にしてやる……』（イケヴオ）※鞆の脳内処理が追いついておりません。

「ひやあああああああ」

「うわっ、びつくりした。」

突然悲鳴を上げる僕に文さんは笑顔に棒読みで告げる。

僕は文さんに問う。

「ああああああ、あや。文さん……!?僕が寝てる間に。その……ななな、  
なにか、へ、変なこと……しました……?」

文さんはそれを訊いて一瞬きよんとしたあと、すぐにニヤつと笑って。

「変なことって何です?ちゃんと言葉にしないとわからないなあ……」

ふざけてそう言う。僕は必死になって

「もう!ふざけないで下さい!!!」

そう文さんに言い放った。

すると、僕の気迫(?)に押されたのか、文さんはちよつと驚いたように黙った後。

ははつと軽く笑って、

「すみません、すみません。確かにあの言い方だと勘違いしても無理はないですよ。」



私が言ったのはそういう意味ではなくてですね……」

そう途中まで言うと、急に僕の顔をジッと見て

「鞄、男の子と間違えられるの嫌じゃありません？」

そう言った。

「え？」

唐突な質問に僕は戸惑った。

数秒間黙った後、小さく消えそうな声で、

「……それは、もちろん僕だってもっと女の子っぽくなりたいですけど……」

そう呟く。

しかし、蚊の鳴くような声だったのにも関わらず文さんは、ここぞとばかりに

「ね！そうですよね!!ですから！どうすれば鞄が女の子っぽくなれるのか！がんばって

鞄を一目で女の子だとわかるように変身させちゃおう！という意味で【女の子にする】

と言った訳なんですよ。」

そう一気にしゃべる。

「は、はあ……」

文さんの剣幕に押されて、何か言おうにも言えない僕を置き去りに、さらに文さんは続ける。

「それですすね！ 鞆自身、なぜ男の子と間違えられたと思いますか？」

文さんの質問に僕は、少し考えて答える。

「顔？……ですか？……」

「違あああああああああう」

僕の出した答えに文さんは、全力で不正解であることを伝えた。

「顔？……ですか？……ですか？……じゃねえよ。違えよ!!。あんた自分で思っ

るより美形だよクシヨウ。鏡見てこいコノヤロー!!」

混乱しているのかキャラを失いかけている。

そして、僕を罵倒（賞賛？）したあと、冷静に戻り、もう一度言う。

「はあ……それで。なんだと思います？」

「……え、ええと……声……」

僕はおそろおそろ文さんの表情を窺いながら答える。

その答えに文さんは、一度につこりと笑った後。

「なんでだよ!!? どうしてそうなるんだよ!!? んな細かい声の男がそうそういるか……」

!!!?」

表情一つ変えずに叫んだ。

ま、まずい……よくわかんないけど凄く怒ってるみたいだ。

そろそろ、正解しないとやばいかもしれない……。

僕はしばらく悩んだ。

そして、一つの回答にたどり着いた……。

「わかりました！文さん」

僕が文さんにそう言うと、文さんは機嫌悪そうに

「じゃあどうぞ……期待してませんが」

そう言う。

僕は自信満々に答える。

「仕草で……」

「阿呆かあああああああああああ!!??」

続く……

# おまけ編 2話～ボーイッシュって・・・(大事なことなのでry)

「まあですね・・・私が思うにやはり一番の問題は服装じゃないかと」

文さんの仕事場。

文さんは僕に向かって言い聞かせるように言う。

「はあ・・・」

僕は気のない返事をしながら自分の服装をみる。

確かにデニムパンツに、Tシャツ、その上から・・・パーカーを着ている。

フアッションには疎くてよく分からないけど、確かに男の子が着ていても不自然無い服装だった。

「服装・・・」

「そうです服装です」

僕が呟くと文さんがしつかりとした口調で言う。

そしてニコツと笑うと、

「というわけで!!女の子になってみましょう!!」

そう言った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

僕の声の間抜けに響いた。

「あ、あの・・・・・・・・本当にこれ着るんですか。」

僕が文さんに尋ねると

「もちろんです!!」

文さんは力強く頷いた。

僕の手には文さんのいつもも来ている服装のセットが丁寧に畳んでおかれていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は無言でそれを見つめる。

そして

「あ・・・・・・・・やっぱり・・・・・・・・」

「着ます!。」

僕の言葉は文さんにかき消される。

「うう・・・・・・・・」

僕はもう一度まじまじとそれを見た。

そして自分が来ている姿を想像して……………

想像できなくて途中で諦めた。

僕は渋々着替えることにする。そこで

「あの……………着るのは分かりました……………」

「はい！お願いします。どうぞ遠慮なく。」

「え、いや…………あの……………できれば……………」

「なんです？」

文さんが不思議そうに尋ねてくる。

僕は勇気を振り絞り、告げる。

「あの……………着替える間後ろ向いてくれませんか？」

それに文さんはきよんとした様子で心底不思議そうに

「え？何ですか？」

そう訊いてきた。

「え?!いや、その……………は。はず……………恥ずかしいから……………です。かね……………」

僕はしどろもどろになりながら答える。

「ああ。大丈夫ですよ女の子同士なんですから。別に何もしません……………」

文さんは眩しい笑顔でそう言う。

それを言われると反論できないうえ、決してスタイルに自信がないとか、そういうことじゃないから言わない。断じて違う。

「わ、わかりました………」

僕はそそくさと着替え始めた。

そして何事もなく着替え終わり、姿見で自分の姿を見せてもらった。

「おお………」

そこには自分とは思えない人物がたっていた。おそらく自分で間違いないのだろう。

スカートを履いてるっただけでこんなに印象が違うのか………

僕はまじまじと自分の姿を見た。

「おお、似合ってるじゃないですか!………」

文さんは楽しそうに言うが、すぐに「ただ………」と苦笑しながら、

「ちよつと大きかったですかね………?」

そう言った。

ちよつとどころじゃない。だいぶ大きい。

袖から手はでていないし、膝近くまでシャツが来ている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

僕は無言で、伸ばしても手が拝めない裾を涙目で睨む。

そんな僕をみた文さんは言葉を探して、おそろおそろといった感じで、

「あの・・・・・・・・・・もう着替えますか・・・・・・・・・・?」

そう言った。

それに対して僕は誰に言うでもなく・・・・・・・・・・いや自分に言い聞かせるようにして

「まだ伸びますもん!!」

そう叫んだ。

「うう・・・・・・・・・・」

先ほどのことを引きずりながら僕が落ち込んでいると文さんが、

「まあそう気を落とさないで下さい」

そう慰めてくれた

「うう・・・・・・・・・・ありがとうございます。」

僕がお礼を言うのと文さんにはっこり笑って

「ところでなんですが・・・・・・・・・・」



そう話を変えた

「まあ、鞄が男の子と間違えられるのはですね……服装の問題もそうなんです  
が……おそらく一つは」

文さんはそう言うのと右手をスツ……とあげて少し間を持たせた後、ビシイ！つと  
効果音がつきそうな動きで僕のことを指した。

それと同時に

「それです!!」

そう叫ぶ。

それ？

僕は自分ではなく自分の後ろを指したのかな？と思い、振り向く。

が後ろには文さんの机があるだけで、特にこれといったものはない。

もう一度文さんを見るが、変わらず僕の方を指している。

僕が首を傾げると文さんは溜息をついて、僕に訊いた。

「鞄、下を向いてみて下さい。何が見えますか？」

僕は下を向いてみる。無論、見えるのは床である。

「え……床、ですけど……」

余りに当然で不自然な会話だなあ、と思いつつ僕は答えた。

すると文さんは頷いて、次にこう尋ねた。

「そうですね、では、鞆の知っているとこで言うところですか……そうですね……  
幽々子さんなんかは下を向いたとき何が見えると思いますか？」

「……文さんはバカにしているのだろうか……  
不審に思いつつも僕が答える。」

「それはもちろん地面に決まって……あつ。」

「ここでようやく文さんの言いたいことに気づく  
それに気づいたのか文さんは満足そうに頷いた。」

「そうです。あれだけ立派でしたら肩こりとかさぐいんでしょうね。」

そして笑いながらそう言う。

しかしその目はどこか笑ってなかった。

僕はもう一度下を向く。

限りなく平らに近い胸が見える。

あれ？……なんでだろう目から水が……

「ふふふ……ふふふ……」

僕の口から感情の無い笑い声が漏れる。

それを見た文さんが慌てて、

「大丈夫です!.....鞆ならまだ大きくなります!!」  
そうフオローしてくれたが僕の耳には届いていなかった。

「まあ、そんなに気を落とすこと無いと思いますよ?大きすぎても不便でしょうし……  
中には小さい方が好きって人もいるみたいですよ?ですよね?」

文さんが誰かに問いかけると空から「ぺつたんこ最高じゃねえか!!」とか聞こえた気がしたけどきつと何かの間違いだろう。うん。そうに違いない。

そんなことは置いておいて、僕は文さんの胸をみる。

幽々子さん、とまではいえないが、膨らみを持つている。

それに比べて.....

僕はもう一度下を向きかけて、理性でどうにかとどまる。

今、下を向いたら再起不能になるまで落ち込むことになるかもしれない。

そして僕は、天井を見て

「はああ.....」

大きく溜息をついた。

「う〜ん.....」

文さんが何かを考えるように、指先を口の前に持つてくる。

そしてしばらくすると、

「そうですっ!!!」

そう言つて、勢いよく立ち上がった。

「ひゃあっ!?!」

いきなりだったので思わず驚きの声が漏れる。

しかしそんな僕を無視して文さんは、資料の大量においてある本棚へと向かった。  
ガサゴソと音を立てながら本棚を探る。

そして、

「ああ！ありました!!これですこれー!」

そう言つて、古びた、妙に厚さのない本を取り出した。

「……………何の本ですか?それ、」

僕が訊くと、文さんはふふふ。と笑つた後、

「たしか名前は、薄い本!!です。……………正式名称はたしかBL同人誌だったかと。」

「……………そのまんまですね。」

見た目通りのネーミングだったため、思わず肩の力が抜ける。

「まあ、名前とは裏腹に凄いいらしいですよ。これ。」

文さんが本をひらひらとさせながら、楽しそうに語る。

「この本も外来本なんですがね．．．．ある情報によりますと。外の世界では（腐）女子達はみんなこれを読んでいるそうなのです！ですから、鞘もこれを読めば．．．立派な女の子に．．．．．。って、もしかして読んだことありますか？」

文さんに訊かれ首をブンツブンツと振る。

同人誌、って言葉は、どこかで聞いた気がするけど。BLって言うのは聞いたことがなかった。

「それじゃあ！早速読んでみましょう！」

文さんがその．．．．薄い本。を手渡してきた。

受け取って、表紙を眺める。

が、表紙はところどころ破れている上、掠れていて読むことはできない。

そんな状態に僕が顔を顰めると文さんが

「表紙は酷い状態ですけど中は比較的良い状態ですよ。」

苦笑しながら言った。

僕が適当なページを開く。

そして――

そこには――

『ちよつ、先輩。やめつ．．．．やめて．．．下さい．．．．．』

『やめて? ホントはそんなこと思ってないんじゃないのか? 体は正直だぞ? ホラ』

『あつ・・・!!?』

『おいおい女みてえな声だしやがって・・・そんなに気持ちいいか? オラツ』

『あつ! 駄目っこわ、壊れる。あ、あ・・・あああああああ』

—————

僕はそつと本を閉じる。

そして、

「ふううう・・・」

大きく溜息をついた。

そして、

「文さん・・・」

文さんに話しかける。

そして、

「なんてもの見せてるんですかあああ  
!!!???

そう叫んだ。

はあはあ、と息を荒くして肩を上下させる。

顔が真っ赤なのはきつと怒りのせいだろう。

しかし僕の怒りは文さんには伝わってないらしく、不思議そうに首を傾げる。  
「……………とぼける気だろうか……………」

僕はそうはさせまいと文さんを睨むが、どうにも文さんは本気で不思議がつてる様子だった。

すると文さんは僕に

「破廉恥……………っていうことはそういう内容の本なんですネ……………  
いやあよく分からない言葉だらけで、解読に困っていたんですよ……………  
にしても外の世界の人はこんなのを日常的に読むんですね……………」

複雑な表情で言った。

なんだか違う気がするが、ここで何か言っても面倒くさそうなので黙っておく。

僕はそつと持っている本を資料だなに戻した。

「いやあやつぱりそんな簡単に変わるものじゃないですね……………ちよつと残念です。」

文さんは苦笑しながら僕に言った。

「僕はこのままでいいですよ……………男の子と間違えられるのも、別段デメリットがあるわけでもないです……………」

本心は少し違ったが僕はそう答える。

「そうですか」と文さんが残念そうに言うのと、ちよつと楽しそうに

「でも服は似合っていましたし、今度サイズが合うものがあつたら、着てみたらどうですか？」

そう言った。

「いやいや・・・いいですいいです・・・」

スカートはなんだかスースーして落ち着かないので苦手だ。

そんな風に会話していると突然文さんが

「あー」

と声を上げた。

「どうしたんですか？」

と訊くと、文さんはふふふ・・・と笑つて、にやけ顔でこう言った。

「明日の取材に備えて倉庫からだしておきたいものがありましてね・・・ふふふ、驚きますよ・・・」

その文さんの顔はまさにいたずらっ子のように純粹で悪質な笑みで満ちていた。

続く・・・



## 宴会の取材

## 4章 1話 何事も準備から

「それですわねえ〜もう鞆つたら．．．．．」

「文さん．．．．．飲み過ぎですつ！．．．．．」

僕は完全に酔っぱらってしまった文さんと、鬼に、巫女さん。妖怪数人に囲まれていた。

「もう．．．．．」

そう呟くと、僕は手元のお酒をグイツと一気に飲み干した。

「鞆〜行きますよ〜!!」

「は、はい!!ちよつと待って下さい!」

文さんの声に、僕は読んでいた本を慌てて閉じ、本棚にしまった。

机の上に置いてある荷物．．．．．といつてもメモと文房具くらいしか入ってない手提げ鞆だけど、それを持えんつて急いで文さんのところに走りつく。

すると文さんが僕に尋ねた。

「準備OKですか?」

準備と言っても特に何かするわけでもないため、僕は文さんの問いに頷く。

そうすると文さんも満足そうに頷き、

「それでは出発しましょう!」

楽しそうにそう言った。

しかし、その前にちよつとだけ気になったことがあったため、僕が文さんに質問する。

「あの……文さん……?」

「はい?何ですか?」

「その、担いでいる木箱は何ですか……?」

文さんの背中にはよく分からないが小学生ぐらいなら入ることができそうなくらい大きな木箱が担がれてあった。

細身の文さんが担ぐと、まあ文さんじゃなくてもだが異様なほど存在感を放っている。

「ああ、これですか。」

文さんは、後ろの木箱を見た後、少し考えてから、

「ん〜中身は後のお楽しみと言うことで……どうせ宴会で開けますし。」

そういつて、木箱を開けずに済ませた。

まあ特に無理に見る必要もないし、僕は追求することはなかった。

「しかし……誤算でしたねえ……」

隣で歩いている文さんが緊張感のない声で言う。

僕と文さんは山を下りながら、歩いて。博霊神社へと向かっていた。

「木箱を担ぎながらはさすがに飛べませんでしたか……」

文さんが今度は悔しそうに嘆いた。

「そうまでして運ばなきゃいけないものなんですか？まあ、行きは特に問題なさそうですけど帰りは……」

僕は今降りてきた道を振り返る。

なかなか急斜面である。これをその木箱を担ぎながら歩くとなるといくら文さんでもキツイのではないだろうか……

そんな心配をしていることを察したのか、文さんが

「それなら心配ないですよ。帰りはかるーくなってるはずですから。」

そう言つて笑つた。

行きは重くて帰りは軽い……？

ますます僕の中で木箱の中身が謎に包まれていった。

「宴会・・・・・・・・・・かあ・・・・・・・・・・」

僕が思わず呟いた。

今までであった幻想郷の人達と言えば、あまりまともな人は、どうか人自体があまり会わなかったけれど、とにかく僕の常識で見ることだけはできないってことだけは見える。

そんな人達がいっぱい集まってくるんだろうか・・・・・・・・・・。

僕の心を緊張とも恐怖とも興奮ともとれる感情が走る。

「大丈夫かな・・・・・・・・・・」

ふとそんな言葉が僕の口から漏れた。

「心配ですか？」

「へっ!？」

心ここにあらずという状態だったのにも関わらず耳元で囁かれ、つい変な声を上げる。

「宴会・・・・・・・・・・心配ですか？」

再度文さんが僕に尋ねた。

その眼は優しく温かくて、僕はつつい魅とれてしまっていた。

暫くして我に返ると、

「あ、あーご、ごめんなさい!!」

何に対して謝っているのか自分でもわからないが、文さんの眼から視線を逸らす方法がこれ以外思いつかなかったのだと思う。

頭を下げて、気持ちを落ち着かせた後、おそろおそろ顔を上げると、文さんがきよんとした顔で、

「何で謝ってるんですか？」

そう訊いてきた。

「え!?あの、それはですね……………その……………」

僕はうまいいわけを考える。が、そもそもいいわけを考える。という経験がほぼ皆無だったため、予想以上に困難だった。

思いつかず視線を泳がせていると、僕の目に、あるものが留まった。

「……………文さん……………あの木……………変じやないですか……………?」

僕は視線の先にある木を指さす。

一見何の変哲もない木だが、あの木だけ、何か……………何かがおかしかった。

文さんが僕の指さす木を見た。が、不思議そうに

「特に変わった様子はないみたいですけど……………何が変なんですか？」

そう尋ねられる。

何がおかしいか、というより、そこにあること自体がおかしいというか、なんだか自分でわからずモヤモヤとした気持ち悪い感じが募っていく。

僕はそのことを文さんに伝えようとし、  
そしてやめた。

何言ってるかわからないだろうし、第一、言ったところでどうこうなるわけではない。  
僕はできる限り笑顔を繕って、

「見間違えたみたいですよ．．．．．ごめんなさい．．．さあ！早く神社  
に向かいましょう！」

そう、努めて明るく答えた。

「．．．．．？．．．．．そうですね。早いところ着いてしまった方が都合がいい  
ですよ．．．．．先を急ぎますか。」

文さんは釈然としない様子ではあったものの、すぐにいつも通り、笑顔で僕に言っ  
てくれた。

博霊神社横の、開けたスペースに、僕と文さんはたどり着いた。

あれだけの大きさの荷物を持ってかなりの距離を歩いたというのに文さんは汗一つ

書いていない。

やってきた僕たちを見つけて、箒を掃いていた霊夢さんが前と同じ眠そうな声で「あんた達来るの早すぎるでしょ。今から準備よ?」

そう呆れた様子で言った。

確かに、まだお昼前だし、宴会の取材にしてはいくら何でも早すぎる時間帯だろう。

僕はどうしますかという問いの意味を込めて文さんの方をみる。

文さんはそんな僕を見て、一度につこりと笑った後、霊夢さんに、

「早く着いていた方が何かと都合がいいですし……それに何か手伝うことがあるならお手伝いしますよ?」

そう言った。

それを訊いたとたん霊夢さんはさつきまでからは想像できないほど優しい、しかしひどく威圧的な笑顔で

「そうね、そちらの都合があるわよね、じゃあ悪いんだけどちよつと手伝ってもらえるかしら?」

そう猫なで声で言った。

「それにしても……」

宴会用の敷物をせっせと運ぶ僕に、文さんが大きな石に腰を下ろしながら、話しかける。

僕は足を止めて文さんの方に顔を向ける。

「何にも面白いもの無かったですね．．．．．」

どうやら話しかけたのではなく独り言だったようだ。

つまらなそうに博霊神社を見てぶつぶつと文句を言っている。

というか、面白いものがなかった．．．．．って勝手に人の家の、それも神社を物色したんだろうか．．．．．。

「前の時は魔理沙さんの写真が出てきたんですけど．．．．．何処に締まったんだ．．．．．?」

どうやら前科もあるらしい。大丈夫なんだろうか．．．．．いろいろな意味で．．．．．。

もし文さんが暴走しそうになったら弟子として止められるようにしないと  
な．．．．．

僕がそんなことを決意していると、霊夢さんから文さんに向けて野次が飛んでくる。

「コリア!!天狗!!休むなあ!!」

その声を聞いて、文さんはビクツと体を震わすと、次の瞬間には僕の横で何事もな



かったかのように敷物を運んでいた。

もうこれぐらいじゃ悲鳴を上げなくなつたなあ………。

僕はしみじみと自分の成長ぶりに喜びと悲しみを5分5分で感じた。

——作業開始から1時間ほどたった頃。

「おお！やつてるやつてる！」

明るい声に僕が振り向くと、魔理沙さんが箒にまたがって笑顔で手を振っていた。

「あつ！魔理沙さ、モゴツ！」

僕が声をかけようとするとすぐに魔理沙さんに口元を押さえられた。

何が起こつたかわからずに僕は叫ぼうとするが、それを押さえつけて魔理沙さんは、

（静かにするんだぜ………今霊夢に見つかったら絶対、手伝わされる羽目になる

だろ？それだけはおめんだぜ）

そう言つて笑つた。

僕は頷いて、ようやく手から解放される。

「そういえば天狗はどこだ？一緒じゃないのか？」

魔理沙さんが小声で尋ねてきた。

僕はそれに、同じように小声で

「文さんならさつきフラフラくつとどこかに行っちゃいましたよ？ そんなに遠くには行つてないと思いますけど。」

そう告げると、魔理沙さんは「いや、」と

「あの天狗のことだし、とんでもないとどこまで行つてるかもしれないぜ？」

僕はそれに全く反論できずに、苦笑いするばかりだった。

すると魔理沙さんは、

「んじや、宴会が始まるまでまだかかりそうだし、それまで適当に時間をつぶすかな………」

そう言つて頭を搔く。

じつとしていられない……つて点では魔理沙さんと文さんは似たもの同士なのかもなあ。ふと、僕はそんなことを思った。

「まあ、任せて悪いが準備はよろしくだ………」「あら、魔理沙じゃない。」

魔理沙さんがこの場を去ろうとした瞬間、いつの間にか後ろにいた霊夢さんに肩をつかまれる。

その瞬間魔理沙さんが苦い顔をして「うげっ！」と叫んだ。

「あらーとつても奇遇ねーそうねー折角だし、準備手伝ってもらおうかしらー」

僕がかつて聞いた中で暫定トップの棒読みだった。

魔理沙さんは額に汗を浮かべながら、

「あ、よ、よう！ 霊夢！ えん、宴会の準備か？。わわ、悪いんだがちよつと、紅魔館に本を返しに行かなきゃ行かないから、ちよつと手伝うのは無理だなあ……」

しどろもどろにそう言うが、霊夢さんにはつこりと笑って表情をピクリとも動かさず「あらー、それならパチュリーはどうか知らないけど、レミリアや昨夜が来るから、宴会の時に返せばいいんじゃない？」

ここう返す。しかし魔理沙さんも負けじと言い返す。

「いや、やつぱり、借りた本人にしつかり顔見て返すのが礼儀だろう？」

「あら、前までは借りたら死ぬまで俺のものーって言ってたのに随分律儀になったのねー？」

「だ………。だろう？ だから今日はすまんが……」

「だったら！、いつも入り浸ってる神社にちよつとぐらいご奉仕してもいいんじゃないかしら？」

「………」

「………」

両者がにらみ合い、沈黙が流れる。そして、

「拒否権は？」

魔理沙さんが尋ねる。そして

「ない」

霊夢さんが答える。

そして

「慈悲は？」

魔理沙さんが尋ねる。そして

「ない」

霊夢さんが答える。

最後に魔理沙さんが

「時給は？」

と聞くが、当然のごとく霊夢さんは

「あるわけではない」

と答えた。

魔理沙さんが一つ溜息をつき、

「これは貸しだからな？」

そう霊夢さんに言うが、

「あら、今までの借りを全部返しきった気でいたのね」

言い返されて、黙って黙々と作業に移った。

霊夢さんは勝ち誇ったようにフンと鼻を鳴らすと、そちらも作業に戻った。

僕は、どうしたらいいかわからず、若干戸惑った後。．．．．．すぐに作業を再開した。

楽しい宴会の裏側にはこんなことがあつたんだと来る人達に伝えたい．．．．．。

続く．．．．．

小さなおまけ　く文の一人調査く

「ふう、来てみたはいいもの．．．．．やつぱり勘違いでしたかねえ．．．．．」  
射命丸文はそう呟いた。そして目の前の岩を隅々まで調べ上げる。

「ううむ、やつぱり、かなり古いときからありそうですし、昔に封印が行われたつてこともあり得そうですよねえ．．．．．」

そう独り言を漏らしながらもテキパキと作業をこなす。

そして、

「あや?．．．．．」

なにかが彼女の目に留まった。

「御札……ですか……。見たところかなり古いものみたいですが……。」  
そう言ってそれを丁寧にハンカチで包み、鞆にしまった。

## 4章 2話く空中散歩も楽じゃないく

「うーうーっ」

僕は縁側に座り、手を精一杯上にあげて足を前に突き出す。

数秒ほどしてから、一気に全身の力を抜く。

そうやってからだの疲れを癒した。

「お疲れ様。」

横から話し掛けられてそっちを向くと、霊夢さんが隣でお茶をすすっていた。

「あの天狗にコキ使われてるからか知らないけど、いい働きっぷりだったわよ。」

「はは……」

霊夢さんにそう言われて僕はとりあえず苦笑いをした。

「いやあこんなにすぐ終わるとは思ってたなかつたぜ。」

気づけば魔理沙さんも横に座って、笑っていた。

しかし、すぐに霊夢さんが魔理沙さんを睨んで

「あんたの担当するところはまだ終わってないでしょうが。」

そう言う。

しかし魔理沙さんはケラケラと笑って、

「そんな細かいこといいだろ？ たかだか料理のいくつかがぐらい、」

余裕で言い返す。

「……………はあ」

霊夢さんは何か言おうとして代わりに溜息を吐き出した。

そして魔理沙さんが霊夢さんにお茶を頼み、僕もお茶をいただいた。

仕事も終わり、のんびりとした空気が漂ってるなか、博霊神社に訪問者があった。

「ん？ ありやあ……………」

魔理沙さんが呟くと目を凝らして遠くを見る動作をする。

「咲夜じゃないか？」

そして、こちらに向かって歩いてくる人影の正体を口にした。

確かに、その人影は僕にも見覚えがある、いつぞやのメイドさんだった。

「あら？ 宴会にはまだ早いわよ？。」

霊夢さんが咲夜さんに告げる。

咲夜さんは少しだけ眉をしかめて、

「それぐらい分かってるわよ。」

そう言う。



「じゃあ何でこんな時間に？」

「…………… ちよつとした用事でね。」

僕が尋ねると咲夜さんは誤魔化すように曖昧に答えた。

その反応に若干の違和感を覚えながらも僕は追求することなく、

「そうですか。」

とだけ返事をした。

すると咲夜さんが僕にむかつて

「それよりも何であなたがここにいるの？」

こう訊いた。

僕は意味がわからずに首をかしげる。

その反応を見て咲夜さんは

「あの天狗、さつき見かけたからってつきり一緒にいるのかと思ってたわ」

こう続けた。

僕は咲夜さんに僕が霊夢さんの手伝いをしている経緯を説明する。

すると咲夜さんは納得したように

「ああ、そうなの」

と呟いた。

そこで魔理沙さんが咲夜さんに尋ねる。

「で、その天狗を見たつてのはどこのことなんだ？」

咲夜さんは魔理沙さんを見て、答えるか迷うようにしたあと。

「妖怪の山の麓よ」

そう短く呟くように答えた。

「妖怪の山の麓ねえ……」

魔理沙さんが咲夜さんの言葉を復唱した。

妖怪の山、というと文さんの仕事場がある場所だ。

何か忘れ物でもしたんだろうか？と僕が考えていると、

「どうする？見に行つてみるか？」

魔理沙さんが僕に話しかけた。

「え？」

僕が思わずこう漏らすと、魔理沙さんが楽しそうに

「どうせ宴会まではまだまだ時間があるんだし、それまでの時間つぶしにでも。」

そう言った。

しかしすぐに霊夢さんが

「あんな仕事は？」

そう冷たく言い放つ。

魔理沙さんは

「それぐらいどうにでもなるだろ？ 咲夜にでも手伝ってもらえよ」

そう言い、いきなり名前を出された咲夜さんは数秒遅れて、

「……え!？」

と驚きの声を上げる。

「じゃーそういうことで！ 咲夜、よろしくなっ！」

誰にも有無をいわせない勢いで魔理沙さんはことを決めた。

そして僕を引きずって箒にまたがる。

かと思えばすぐに陸を離れて出発していた。

出発していた？。

「えええええ!!」

僕が箒の上で大声を上げる。

その反応を見て楽しむように魔理沙さんは

「なんだ？飛ぶのは初めてか？」

悪戯っぽく笑った。

「よく考えてみれば空を飛ぶのは文さんに乗せてもらったことがあるから初めてではないのだが……」

さすがにここまで急展開で上空までつれてこられればさすがに驚く。

それに文さんのように脳内処理を振り切るようなスピードがあるわけでもなく、遅いわけでもない。

絶妙に怖い状況だった。

「だ、ただ大丈夫なんですよね……？？」

僕が魔理沙さんの肩にしがみつきガクガクと震えながら尋ねる。

魔理沙さんは尚も笑いながら、

「大丈夫、大丈夫。私の運転技術をなめるんじゃないぜ。」

とウインクとともに返した。

そうして、蛇行運転をしたりして僕の反応を愉しんでいた。

「生きてる？生きてる……？生きてる……」

僕は地面を踏みしめて、これでもかというほど自分の生存を確認していた。

正直箒酔い……？のせいで大分気持ち悪かったがそれよりも自分の生存の確認が大事だ。

「そんな大袈裟な……」

魔理沙さんが呆れるように苦笑いしながらいう。

「あはは……」

僕は力なく笑った。

「しつかし……ここらへんだと思うんだがな……」

魔理沙さんが辺りを見回しながら呟く。

ここは文さんの仕事場の周辺だ、いるとすればおそらくこのあたりだろう。

そんな風に考えながら文さんを探していると、これまた見覚えのある人影が。

「お、チルノじゃないか。」

「あ!!白黒!!」

チルノと呼ばれた女の子がそう叫ぶ。

白黒、つていうのは魔理沙さんのことだろう。

確かに魔理沙さんは服の全体的な色合いが白と黒の感じだから、と納得する。

「やい!見たぞ!!前にお前が紅魔館に忍び込んだ……」

「ああああああ!!やややくしくなるから今それを言うな!!」

チルノちゃんが何か言おうとしていたけど魔理沙さんがそれを遮る。

チルノちゃんはきよとんとして、なにがややこしいのか分からないといった風に首を傾げている。

魔理沙さんが話を逸らすように慌てて

「そ、そういえば… お前天狗を見なかったか？ちよつと探してるんだが。」

そう尋ねた。

「天狗？」

チルノちゃんがきよとんとする。

そしてすぐに

「ああ！天狗か！天狗なら向こうの方にいたぞ。」

森の方を指さした。

「おお！サンキューな。」

魔理沙さんは短くお礼を言うとともに僕の手を引いて指された方向へと走った。

その様子をチルノちゃんはジツと見ていた。

「うくん、いねえなあ……」

魔理沙さんが草をかき分けながら進み、僕はそれについて行く。

かれこれ30分近くたっている。

「あいつ…… デタラメ言ったんじやねえだろうな……」

魔理沙さんは苛立ちを隠すことなく言葉を吐いた。

僕は文さんの姿を探して周りを見渡す。

すると、

「あ！文さん!!」

文さんは予想外なところから姿を現した。

「おまえ…… いつからそこにいたんだよ……」

魔理沙さんは疲れを吐き出すように文さんに尋ねた。

文さんはクスツと笑った後

「5分ほど前から：草の中を探したって私がいることはないですよ？」

そう、僕らの頭上から声を浴びせた。

文さんは僕らの上の木の幹に腰掛けていた。

「つたく…… なにしてたんだよ。」

魔理沙さんが頭を掻きながら言う。

「ちよつとしたことですよ。本当に……」

文さんは微笑みながらそう返した。

魔理沙さんは釈然としない様子だったがそれ以上追求はしなかった。

「それじゃあ、博霊神社に戻りますか？」

僕がこう言うのと文さんがああ！と声を上げて、

「その前に、一つだけ寄り道をさせて下さい。」

そう言った。

「はあ……なんだよ、何処に行くんだ？」

魔理沙さんが目に見えてイライラしながら尋ねる。

どうもこの二人は相性が悪いらしい……

というよりも、魔理沙さんが文さんと相性が悪いのかな……？。

そんなことを思っていると、文さんが

「つきましたよ、ここです。」

そう言った。

僕は周りを見回す。

特にこれといったものはないが、どうにも暗くて人目には付かなそうなところだ。

「ちよつと危険なので下がって下さいね。」

そう言うのと、文さんは、一際目立つ大きな岩を



「よいしょ、」

軽いかけ声とともにあまりにも軽々と持ち上げた。

そして魔理沙さんはそれに対し何の驚きもなく、岩がおいてあつた場所をみた。

「なんだこりや……壺か……？」

「漬け物ですよ……お酒とよく合うんです。」

魔理沙さんの問いに文さんは嬉しそうに答えた。

それを聞いた魔理沙さんも心なしか嬉しそうに、おお！と呟いて、

「じゃあ、とつとつこれ持って宴会に行こうぜ？、そろそろ人も集まつてるだろ。」

そう言った。

そして魔理沙さんが漬け物を担いで僕たちは宴会へと向かった。

「おおおお、やつてるやつてる！」

魔理沙さんが箒の上で博霊神社を見て楽しそうに言った。

僕は文さんにいわれて魔理沙さんの箒にのつて博霊神社に向かつていた。

壺が乗っているからなのか魔理沙さんの運転はさつきより危なっかしい気がして気がではなかつた。

そして長い長い移動を終えて博霊神社へとたどり着いた。

「つ… ついた」

例によって僕は自分の生存を確認していた。

そして、

「うわあ… …！」

僕は目の前の光景に思わず声を上げた。

続く… …

久しぶりの鞆

ええ、今回！

友人D、ことチョロ松さんが鞆と文を描いてくれましたくくく!!!

いやあ… … うますぎて自信が完全に喪失しました（白目）

ちなみにですがチョロ松というのは、あの六つ子とは関係ないようです。

たまたまあだ名がかぶってしまったそうです。偶然ってすごいですね… …

余談ですが彩風の推し松はチヨロ……

## 4章 3話〈賑やかな宴会〉

僕の目の前には、いろいろと……本当に……いろいろな人達がお酒を飲んだり談笑したりしていた。

宴会と言うこともあってみんながみんな明るい顔をしていた。

「すごいなあ……！」

何がすごいかといわれればうまく説明できる自信はないけど、率直な感想はそれだった。

そんななか、文さんを見つめます。

文さんはあちこちで写真を撮って回っていた。

僕はそんな文さんに話しかける。

「ああ、鞆：！もう来てたんですね！」

そう告げる文さんの顔は活気に満ちていた。

「あら、鞆だっただかしら？お久しぶり。」

ふいに文さんの向こうから声をかけられる

そこには、前に取材した吸血鬼の女の子。レミアさんが座っていた。

横には魔法使いのパチュリーさんも一緒に座っている。

しかしパチュリーさんの方はかなり青白い顔をしていて、つらそうだった。

「あの……パチュリーさん……？大丈夫ですか……？」

僕が恐る恐る尋ねる。

「え……？ああ、だ……大丈夫よ。これくら……い……。なんとも……な

い……わ。」

あ……大丈夫じゃないらしい。何があつたのだろうか……？

僕がレミアアさんに視線を送ると、レミアアさんは肩をすくめて苦笑いをしていた。

続いて文さんを見る。文さんは静かに笑った後、

「彼女はともじやないですがアウトドアな人とはほど遠いので、紅魔館からやつてきたというならこれだけ疲労するのも無理はないでしょう。しかし、なぜそうまでして宴会に？」

そうパチュリーさんに尋ねる。

「……はあ……はあ……別に……ただの気まぐれよ。」

パチュリーさんは肩で息をしながら、何とか言葉をひねり出したように言った。

なんだか、誤魔化すようで少し怪しかった。

僕がそんなパチュリーさんに違和感を感じていると、隣で文さんが

「ああ、なるほど。」

そうニヤツと笑いながら呟いた。

「そうですか、じゃあ、私たちはそろそろ……」

そして、そういうと文さんはスツとパチュリーさんの前にかがんで

「はい！じゃあ撮りますよ？」

そう言つてから、答えは聞かずにシャッターをきつた。

パチュリーさんは無言で文さんを見ると、

「普通被写体に許可を取つてから、撮影するものでしょう？」

ジト目でそう呟いた。

文さんは笑いながら、

「まあ、まあ…… おかげでこんなに良い写真が撮れましたよ？これはサービスです。」

撮つた写真をパチュリーさんに渡した。

パチュリーさんは渡されたその写真を見る。

…… 次の瞬間、顔を真っ赤にしてうずくまっていた。

そのパチュリーさんの反応にレミリアさんと僕が呆気にとられる。

何を渡したんですか!?

そう尋ねようと思つたが、尋ねる前に文さんに引つ張られて、聞くタイミングを逃し

てしまった。

博霊神社の宴会。

その中でもかなり盛り上がりつつあるといえる一角。

即席のステージでライブが行われている。

僕と文さんはそのライブステージの前へと向かった。

「みなさん盛り上がりつつありますかー！ー!?」

ステージ上の女の子が問うと、観客が歓声で答える。

文さんは絶え間なく写真を撮っていた。

僕が文さんにひそひそと尋ねる。

「あの、この方達は？」

「え？、ああこの方達ですか？この方達は、プリズムリバー3姉妹です。見ての通り音楽隊ですね。ヴァイオリンを弾いているのが、長女のルナサ・プリズムリバー、トランペットを吹いているのがメルラン・プリズムry。キーボードを弾いているのがリリカ・ぷryです。」

最後のほうが適当だったけれど、まあ、今は良いか。

するとステージ上の、ええと、メルランさんが声を上げる。

「それでは、次の曲に参りましょう!!」

そういつて、演奏を始める。

音楽の善し悪しはよく分からないけど、なんだかとても温まるような演奏だった。

それにこの曲、どこかで聞いたことあるような。

あれ、この曲………

「♪」

自分の中で時間が逆流するような感覚に襲われる。

苦しいし、楽しいし、辛いし、眠いし、暑いし寒いし嬉しいし悲しいし泣いているし笑っているし怒っているし呆れているし、溺れているし墜ちているし撃たれているし刺されているしぶつかっているし笑われているし憎まれているし……

感情の波が溢れてきて言いようのない感覚に襲われる。

そんな中、それらを押しさえつけるようにして我に返った。

あれ、僕………歌ってる………？

「♪」

周りの人は皆驚いてこちらを向いている。



文さんや音楽隊の人達も例外ではない。

僕はそつと口を閉じて、目を閉じる。

それとともに拍手と歓声が耳を覆った。

僕は困惑する。

いつの間にか無自覚に歌っていたことにも驚いたが、それ以上に知らない曲を歌えていたことに驚いた。

今僕が歌っていた曲は歌詞どころかメロディーすら聴いたことのないものだった。

なぜそれを自分が歌えていたのかが不思議だった。

それに、さつき感じたあの感覚は……？感情、以外のものも混ざってたけれど、いろいろなものが大量に押し寄せてきてつづれそうなの。

それに、今拍手をもらっていることが不快でたまらない。

気を抜いたら倒れそうなのほど気分が悪い。

「大丈夫ですか？」

文さんの声にふと我に戻る。

我に返った結果、わかったことは……

「ひゃあっ!？」

文さんに右手で肩を持ちながら左手で膝の裏を支えられている。

要するに……俗に言う《お姫様抱っこ》をされていたことだった。

「なつななな！何してるんですか!？」

「ああいえ、なんだか気分が悪そうだったので、静かなところに、と思ひまして。」

文さんはニコツツと笑いながら言う。

……その笑顔に同姓であることを忘れて顔が上気する。

いやいやいや、そんなことで騙されちゃいけない。

文さんのことだ……。何を考えているのか分かったもんじやない。

「うう……。何たくらんでるんですか……。」

僕が警戒しながら尋ねる。

すると、文さんが顔を軽くしかめて、

「なつ……。心外ですね……。何もたくらんでないませんよ……。」

「……。お尻触りながら言っても信憑性ないですからね!？」

僕は文さんの手を払おうとして体勢を起こそうとするが、文さんに押さええられて体勢を起こせない。

「はは、すきんしつぷですよーやだなー」

「もうっ！真面目に言ってるんですからっ!!」

僕は、赤面したのを隠しながら語調を強めて言った。

しかし、文さんは笑うばかりでまじめに聞くことがない。  
「もうっ……っ。」

僕は諦めて、溜息をついた。

「あつ、ところで、体調はどうなんですか？」

「えっ？」

今のやりとりで完全に忘れていた……。

さつきみたいな感情が逆流して押しつぶされそうな………。何てことはないけど。

なんだったんだろう、あれ………。

「あ、もうすっかり大丈夫です。心配かけてすいませんでした。」

僕は笑顔を作るように努めて言った。

文さんはあまり納得した感じではなかったけど、

「そうですか………。明日からも忙しいですし、無理はしないようお願いしますね」

そう心配そうに言ってくれた。

まあ、そんなにつらいわけでもないから明日は大丈夫だろう。

つて、え………？明日？

「明日も取材に行くんですか？」

僕は初めて聞いた事実には驚きながら尋ねる。

「ああ、言つてなかつたでしたっけ？ちよつと面白い情報が入つたものですから調査に行こうかと。」

いきなり取材が決まるのは今回が初めてつてわけじゃないからそこまで驚くことはないけど、面白い情報、つてなんだろう………僕は聞こうと、口を開けかけたが、もったいぶるつてことはきいても答えてくれないんだらうな………。

そう思つて口を閉じた。

「おう！天狗じゃないか。」

宴会の会場を文さんと一緒にふらふらと歩いていると、ふと声をかけられる。

高くて元気のある女の子の声だ。

声のした方向を見ると女の子がひょうたんを片手に手を振っていた。

女の子は体に三角、四角、丸の形をしたアクセサリー………にしてはちよつと大きいけど、まあ何かをつけていた。

頬がほのかに赤く染まつており、酔っぱらつてるようだ。

どう見ても未成年なんだけどそこには触れないでおこう。

「す、萃香さん………」

文さんは心なしかかしまつた態度になっている。

普段見られない文さんの姿に僕は違和感を覚えた。

「なんだ？宴会だつてのに取材かい？……せつかくなんだからもっと楽しめばいいじゃないか。」

文さんに萃香。と呼ばれた女の子はケラケラと笑いながら言う。

「は、はあ……そうですね……」

文さんは笑いながら言うがその顔にはいつものような余裕が一切見られなかった。おそらく文さんは萃香さんが苦手なんだろう。

文さんにも苦手な人っているんだなあ。

あ、いや……人じゃないか……

彼女の頭には二本の角が生えていた。

ほとんど合間をあげずにひょうたんのものなものを飲み続けている。

中身は多分お酒だろう。

僕はひそひそと文さんに尋ねる。

「この方は……？」

文さんは、珍しく表情を露わにして気を張っているようだった。

「え？ああ、この方は伊吹萃香さん。鬼です。」

「……鬼……ですか……」

もうこんなことで驚かなくなったことに若干不安を感じながら考える。

鬼…… というと。桃太郎の悪役とか、泣いた赤鬼とか、節分の可哀相な役とか、ブルーベリー色の変なのとか、いろんなイメージがあるけどどれも敵ついイメージで目の前の小さな少女には当てはまらなかった。

そんな僕の考えをよそに萃香さんが文さんに言う。

「天狗、なんかつまみとか持つてないか、…… ヒイック」

その言葉に文さんはさつきまでの表情とは打って変わって心底楽しそうに。

「ああ！そういうえば忘れてました!!」

そう声を上げ、神社の方へと目で追えない速度で何かを取りに行った。

続く……

小さなおまけ　く恋する乙女く

紅魔館、この館の図書館の主。パチュリー・ノーレッジ。彼女は今日行われる宴会へと向かおうとしていた。

普段は気にすることのない服装についてこれでもかと言うほど気を使う。

といつても服をそんなに持っているわけではないためどうしても、普段と同じような服装になってしまう。

「パチエ？宴会に行くんじゃないの？」

パチユリーの親友である吸血鬼、レミリアに声をかけられる。

メイド長の咲夜も一緒だ。

パチユリーは思い切つて尋ねる。

「ねえ、ちよつと……レミイ……この服…変……？」

柄にもないことを言つたためか二人は驚いた様子で目を見開き頭には「？」を浮かべている。

パチユリーはすぐに

「いや、何でもないわ、出発するの？」

こういつた。

パチユリーは不機嫌だった。

インドア派の彼女にとつて長距離の移動は拷問に等しい。

しかし、ある目的のためにその拷問に耐えてここまでやってきたのだ。

だが、しかしだ。その目的がどうにも見あたらぬ。いないということはないと思う

のだが……

パチユリーは一つ溜息を付く。

するといつかの天狗と少女がやってきた。

しかし今の気分では彼女らの話など聞く気にはならないため、適当に返答をする。

すると突然に天狗が私に向けてシャツターをきつた。

「普通被写体に許可を取ってから撮影するんじゃない……？」

パチユリーが不満を露わにして言う。が、天狗はヘラヘラと笑いながら撮った写真をパチユリーに渡してきた。

パチユリーは無言でその写真に目を通す。そこには……

不機嫌そうな自分と、その後ろにふざけ半分なのか、カメラに気づいてカメラに向かって笑顔でピースするお目当てのもの……人間の、霧雨魔理沙が写っていた。

パチユリーはこの写真を永遠に保管しようと心に決めた。



## 4章 4話く下戸や未成年はジュー 《自主規制》く

文さんが神社の隅から持ってきたもの。

それは見覚えのある木箱と壺、木箱の方は最初から文さんが持ってきていた得体の知れないもので、壺の方は確かお酒に合う漬物だったはずだ。

ここまで来て、やっと僕は木箱の中身について察しが付いた。

文さんが木箱を開ける。

すると木箱の中から丁度木箱にすっぽり入るぐらいの大きな盗が顔を出した。

「何だ…？それ？」

萃香さんが盗を眺めながら文さんに尋ねる。

文さんは僕の予想の通り

「お酒ですよ。そっちの壺には漬け物が入っています。お酒がよく進みますよ？」

こう答えた。

萃香さんはそれを聞くと目を輝かせて、

「おおー、なんだか悪いねえ！それじゃ遠慮なくいただくとするよ。でもお酒は間に合ってるんだ。それはあんた達で飲みな。」

そういつて、ひょうたんに口を付ける。

さつきからすつと飲んでいるのに中身は無くならないのだろうか？

そんな僕の素朴な疑問をよそに文さんは、萃香さんに耳打ちする。

耳打ち、とは言っても、声のボリュームはいつも通りだったので僕にも聞こえた。

「実はこのお酒ただのお酒じゃないんですよ。」

……… なんだか随分と怪しく見えるけど今は突っ込むのはよそう。

「《おにごろし》って知ってます？」

その単語に、萃香さんが「おつ」と反応する。

僕はたまらず文さんに尋ねる。

「あのっ………！その、おにごろし……… って何ですか？」

文さんは僕の方へとゆっくり振り向く。

そしてニヤアと笑ったかと思うと、

「簡単に言えばとんでもなく強いお酒です。基本的にお酒に呑まれることはない鬼や天

狗すらもベロベロに酔わせてしまうという代物ですよ。」

楽しそうに笑う。いやもうこれは嗤うと言った方がいいのかもしれない。

「どうです？ 鞘、飲んでみますっ？」

……… やっぱりそうくるのか……。

「いやいや……！僕未成年ですし、それにお酒なんて飲んだこともないですよ!!」  
僕は思いつく限り正当な理由で拒む。

しかし、

「幻想郷では未成年なんて関係ないですよ。それに初めてかどうかなんておにごろしの前では関係ないですし。」

ううう、未成年であつてもお酒を飲ませるなんて……

僕はそれでも反論しようと試みるが僕の語彙力では文さんには討論では勝つことができないだろう……。

「はあ…… わかりました。一口だけですからね……?」

そう言つて、いつの間にかお猪口に入れられていた鬼ごろしに口を付けようとした。付けようとしたら……

「やめときなさい……。」

後ろから呆れるように声をかけられる。

振り向くと霊夢さんが声の通り呆れた様子で立っていた。

「そんな怪しいもの飲んだら、どうなるか分かつたもんじゃないわよ……。」  
そういう霊夢さんの顔は他の人と同じように赤らんでおり酔っているようだ。

「まず、それ…… 人間が飲んでも大丈夫なものなんでしょうね……?」

霊夢さんは文さんに尋ねる。

人間が飲むことはできないほどのお酒……………。

僕はそつとお猪口を置いた。

「…………… 大丈夫でしょうか？単純にアルコール度数が高いというのと、過度な興奮作用があるだけのはずですから。」

「何が大丈夫よ、問題じゃないじゃない。」

霊夢さんが眉をしかめながら訝しげに言う。

そんな霊夢さんに文さんは笑いながら、

「まあまあ、とりあえず一口だけ。」

そういつて、僕の口に《おにごろし》を流し込んだ。

なんだか、今日の文さん変じゃないかな……………？、もしかして先におにごろしを少し

飲んだんじゃないだろうか？

僕におにごろしを飲ませた文さんは驚いたように僕を見つめる。

……………

……………

……

あれっ？

ええええええええええええええええええ

飲まされた!!??

!!!!???

おにごろしを？

僕はとんでもないものを飲んでしまった恐怖感からなのか、ワナワナとふるえながら涙目で霊夢さんに助けを求めろ。

しかし霊夢さんも目を見開き驚いたようにこちらを見るだけだった。と、ここで僕はやつとある違和感に気づく。

お酒なんて飲んだことあるはずもないから分からないけど、水を飲んだ後のように自分の体に変化が見られなかった。

文さんがとても強いお酒と言っていたし、霊夢さんに至ってはどうなるか分かったも

のではない、とすら言っていたのでなおさら違和感を覚える。

その違和感は正しかったようで文さんが口を開いた。

「あの…… 鞆……？なんともないんですか？」

恐る恐るといった口調で、文さんにしては珍しく目に見えて動揺しているようだった。

僕は改めて自分の体を確認する。

酔う。つていうのがどんな感覚なのか知らないけど、別段気分がいいと言うことはないし、体が火照る感覚もない。

「はい…… たぶん…… 本当にお酒なんですか？それ。」

僕は一応そう伝える。

文さんは顎に手を当てながら、ぶつぶつと呟く。

「おかしいですね…… 飲んだ瞬間目を回しながら倒れてもらう予定だったんですが……」

「聞こえてますからね?!?!」

本当に油断も隙もない……。

僕は、体に本当に異常がないかしつこく確認した。

「うーん…… 中身はおにごろしで間違いないはずなんですが……」

文さんは、そういつて盜の中身をすくい口元へと運ぶ。

その後、ペロツと舐めて、一気にグイツと飲み干す。

すると、

すぐさま文さんに変化が見られた。

まず白い顔が紅く色を持ち、目がトロンとして、顔にはいつもとは違う雰囲気的笑み

を浮かべていた。

く少女飲酒中く

「それでですねくもうく鞆ったら……」

「文さん!! 飲み過ぎです!!」

僕は、フラフラとする文さんの体を押さえながら文さんに言う。

しかし、聞こえてる可能性は低いだろう。

文さんは、はははと笑いながら、半ば独り言のように同じことを繰り返している。

要するに、酔っているのだ。それもかなり、

霊夢さんに少しだけ聞いたのだけれど、文さんが言っていたように、天狗や鬼といっ

た種族? 妖怪? の類はお酒に対する耐性が異常に強いらしい。

そのため、霊夢さんも天狗や鬼が、ここまで酔っているのは初めて見たのだそうだ。

しかし、やはり不思議なのが僕が平気だった理由だ。

文さんが飲んだものと僕が飲んだものは同じ盗の中のものだし、それに……僕が今現在も片手に持つているお猪口の中のお酒……霊夢さんによると匂いを嗅いだだけで軽く頭がくらくらするのだそうだ。

しかし、確かに匂いはキツいと思うし、とんでもないお酒なのではあると思うけど、僕は今飲んでいてもこのおにごろしはまるで水でも飲んでいるかのようなすつきりとした感じがした。

ゴクゴクと飲めてしまう。

僕は手元のお猪口のお酒を一気に飲み干す。

横では霊夢さんが変なものを見るような呆れるような目でこちらを見る。

そんな僕らを萃香さんはケラケラと笑いながら見ていた。

いつの間にか文さんは眠ってしまったようだ。

右手にはお猪口、左手にはメモ帳とペンを持つて、僕の肩に寄りかかりながら幸せそうな顔で眠っている。

「ああ！文さん！風邪ひいちゃいますよ!!」

僕はそういつて文さんの肩を軽く揺さぶる。

「んうっ……」

文さんは妙に艶めかしい声を上げるが、起きる様子はない。



僕は自分の着ているパーカーを文さんに着せる。

文さんは半袖なので寒そうでしょうがない。

たしか、文さんの仕事場にはマフラーがあっただはずだが身につけているところは見たことがなかった。

文さんを、シートの上にそのまま寝かせておくのは忍びないし、神社の中に連れて行くようにも僕にそんな力はない……………。

僕はそんなことを考えながら文さんを肩に寄りかからせたままだった。  
すると……………

「あら、本当に天狗がつぶれてるのね……………」

後ろから聞き覚えのない声が聞こえる。

「ひゃあっ!?!」

いつものごとく僕は驚きの声を上げながら、振り向く。

文さんが倒れなかったことに安心し、僕は声の主の姿を確認する。

その人は、おそらく……………人……………だろう。

日除けなのか傘を差していて全体から溢れる妖艶な雰囲気、僕は少し怯む。

「ふふ、なかなか……………おもしろいものね……………」

そういつて笑う彼女の笑みは、なんというか……不思議。という言葉がよく似合っていて、

見た目だけでは、年齢が分からなかった。

妙齢にも見えれば、かなり若いようにも見える。

「それで、あなたが心音鞆ね？」

唐突に彼女に話しかけられる。

「え？あ、はい！そ……そうですつ！」

相手が僕の名前を知っていたことに少し違和感を覚えながらも、僕は答えた。

「本当に生きていたのね……」

そして、彼女がこう呟く。

その言葉に僕は少しだけ寒気がしたような気がした。

まるで死んでいるはずだ、とでも言わんばかりの口調に言いようのない感情を抱きながら、

「ど……どういう……いみです、か……？」

僕は息が詰まるような感覚の中、なんとか言葉をひねり出す。

すると、彼女は笑って、

「いや、大したことではないのよ。」

そう言つて、僕の隣に腰を下ろした。

「私はこの幻想郷の境界線、結界を管理しているの。それであなたがこの幻想郷に入ってきたのも見ていたのよ。といつても私じゃなくて私の式神が……だけどね……」  
彼女は微かに微笑むところ続ける。

「それでも、幻想郷に入つてきたあなたはすぐに私の監視下から消えてしまった。きつと、そこらの妖怪に殺られてしまったと思つていたんだけど、風の噂で見慣れない顔が天狗の助手をしていると聞いたものだから。」

なるほど、だから生きていたのね……と言つたのか……

にしても、今の話だと……監視下から消えたつて言うのは多分氣を失つたからなのだと思うけど、もし文さんじゃない凶暴な妖怪に見つかつていたら、今頃僕は……その先を想像しようとして……そしてやめる。

今氣絶してしまつてはこまるだろう。

「まあ、詳細はわからないけれど……とにかく！、幻想郷へようこそ。」

彼女は……、ことあと文さんに聞いて、名前を《紫》とかいて、ゆかりさん。と  
いうのだと聞いた。

紫さんは相変わらず妖艶な笑みを浮かべながらそういつた。

僕は、なぜかこの人に苦手意識を覚えた。

そして、ほどなくして、僕はお酒の効果なのかいつの間にか夢の中へと墮ちていつてしまっていた。

続く……

## 4章 5話くお酒は二十歳になつてからく

僕は、寝ぼけ眼で布団から体を起こす。

「あれ？」

僕は昨日のことを、うまく働かない頭で思い出す。

確か、僕はお酒を飲まされて……………、それで……………、

「あら、起きたの。」

すると、ふと後ろから声がかかる。

振り向くと霊夢さんがお盆にいくつかの水をのせて、呆れ顔でこちらを見ていた。

僕は周りを見渡す。

ここは……………、多分、博霊神社だろう……………。

横には僕と同じように布団に横になった文さん。

その横には、看病をしていたようで、魔理沙さんが腕を組んであぐらをかいて座っていた。

座っていたといっても、頭がコクリコクリと動いている。多分寝ているんだろう。

《ズキツ》

「うっ……!!？」

僕は突如として襲ってきた頭痛に文字通り頭を抱える。

ズキズキツと小刻みに襲ってくる痛み顔に顔をしかめる。

「何？二日酔い？昨日は大丈夫そうだったけど……？」

霊夢さんが呆れ半分心配半分と言った様子で言う。

「二日酔い……… なんですかね……… ?よく分からないですけど。」

僕は相変わらず痛む頭を押さえながら答える。

「まあ、あんな怪しいもん飲んだんだったらしょうがないか……。」

霊夢さんは肩をすくめながら言うのと、僕に水を持ってきてくれた。

「あ、ありがとうございます……… !」

僕はお礼を言つて、水を一気に飲み干す。

心なしか少し楽になる感じがする。

「ふう……。」

僕は深く溜息をついた。

恐らく、僕はお酒に呑まれたんだろう。

文さんや霊夢さんもとても強いお酒だと言っていたし、お酒を飲んだことがない僕な

ら尚更吞まれても不思議はないだろう……。

「痛あ……。」

ふと横から声が聞こえてくる。

僕が横を見ると、思った通り文さんが頭を押さえながらゆつくりと起きあがっていた。た。

「大丈夫ですか……文さん……？」

「うう……これが俗に言う『二日酔い』って奴ですか……初めて味わう感覚ですけど、とても良いものとはいえませんね……。」

心なしか文さんも顔を青くしてフラフラとしている。

いや……まあ……二日酔いならしょうがないか。

それにしても……

「文さん……初めて味わうって……いままで二日酔いになったこと無いんですか？」

昨日の様子を見ると、とても普段はあまりお酒を飲むことはない……何てことはなさそうだったのだが……。

「え？あぁ……昨日言いませんでしたっけ？、私たち……天狗や鬼は妖怪の中で

も特に、お酒に対して強い耐性を持っている種族でして……ちよつとやそつとで

酔っぱらうなんて無いはずなんですけど……ましてや二日酔いとは……。」

文さんは溜息をつきながら呟いた。

「ふふ…… なかなか面白かったわよ……天狗が酔ってるところなんてなかなか見れるものでもないしね。」

霊夢さんがそういうといたずらっぽく笑う。

文さんは調子が狂うと言った顔で……。

「あの……私……何かしました……？」

おそるおそるそう尋ねる。

霊夢さんは下手に出て尋ねる文さんに対して少し考えた後……

とびきり嫌な笑みを浮かべて……

「教えてほしい……？」

煽るように文さんに向けて呟く。

「……」

文さんはどう答えるか迷って……迷った結果……

「はあ……いいです……。どうせ言わないんでしょう？」

「……まあ、そうだけどね？」

霊夢さんは笑うと、文さんに水を渡した。



「あ、ありがとうございます、いただきます。」

文さんはそう、簡単にお礼を言うと、水を飲み干した。

「ぷはあっ！」

文さんは水を飲み干した後、一気に酸素を取り込むように大きく息を吸い込んだ。

「あゝなんだか頭がポーツとしますね。」

「まあ、二日酔いだからそりやそうでしょ……。」

「うう……。なかなか不便なものですね……。いたた……。」

文さんが痛みに悶える姿に苦笑いしながら僕は文さんに一つ尋ねようと声を出しかけたのだけど……。

「ん…… ああ？。ああ寝てたのか私……。」

横からかかる声に邪魔されて言うことができなかつた。

「あら？起きたの？」

顔を上げた魔理沙さんに霊夢さんが言う。

魔理沙さんは顔を青くして、頭を押さえて。

「ああ……頭痛え……二日酔いか……。」

そう呟くと。「ううっ……。」と呻き声を上げた。

「大丈夫？もう……はい……水。」

そんな魔理沙さんに呆れ顔で霊夢さんが水を手渡す。

それを受け取り、魔理沙さんは笑いながら。

「おお……悪いな。」

そういつて、水を受け取りさっさと飲み干す。

そしてあつと言う間に中身がなくなったコップを霊夢さんに渡した。

「ふう……いやあ……飲み過ぎたな………ははっ……」

魔理沙さんは苦笑いしながら誰に言うでもなく呟く。

そんな魔理沙さんを見たからなのか文さんが僕の方を見て、

そういうえば、と前置きをしてから

「鞘……？あんなお酒を飲んだって言うのに結構平気そうですね。私がこうなっ  
たってことはお酒は本物だったようですし………」

そう言った。

「ん……まあ、少しだけ頭痛が痛いですけど……確かにそんなにひどくはないです  
ね。」

僕がそういうと周りの三人……霊夢さんと魔理沙さん、文さんが何か言いたげに僕を  
ジト目で見る。

不思議に思つて、小首を傾げながら

「どうしたんですか？何か変なこと言いました？僕……。」

そういうと、なんだか哀れんだような雰囲気で霊夢さんが文さんに

「文……。」

そう短く呟く。

それに対して文さんは

「はい……。今度寺子屋にでも連れて行きましょう……。」

そう溜息をつきながら言った。

「しかも自覚無いみたいだしな……。」

魔理沙さんまで真面目な表情になって言う。

なんだか良く分からないまま、時間が過ぎていつてしまった。

結局あの雰囲気は何だったのだろうか？

「さて、では！あまり長居もできませんし！そろそろ仕事にもど……痛つて……。」

文さんが言葉の途中で頭を抱える。文字通りの意味で。

「だ！大丈夫ですか!？」

僕がすぐに文さんに駆け寄って声をかける。

文さんはグツと歯を食いしばりながら

「うう…… ちよつとおにごろしを嘗めすぎましたね……。まさかここまでとは……。」

そう悔しげに呟く。

顔面蒼白とはまさにこんなことを言うんだろう……。

さつきと同じで文字通りとつたとしたならだけど。

「病院とか…… 行つた方が……。」

僕は言葉を探して、思考を回転させる。

そうやって出した言葉に文さんは力なく笑いながら。

「ああ……。私が知っている限り優秀な医者はいても、まともな医者はいませんねえ……。」

そうひねり出すように言う。

すると今まで喋っていなかった魔理沙さんが、

「ああ……。それは同感するよ……。」

苦笑いしながらそう肯定した。

優秀なお医者さんなのに、まともじゃない……。

僕は頭の中で人物像を思い描く。

そして、俗に言う《まつどさいえんていすと》みたいなものができあがったためいち早く記憶から消し去る作業に入った。

僕が頭を小刻みに振っていると、魔理沙さんが文さんに

「そんなに辛いんなら、ちよつと博霊神社で休んでつたらどうだ？」

そう優しい言葉をかけた。

しかし霊夢さんは

「あんだねえ……人の家を自分の家みたいに……。」

眉をしかめながら不快そうに言う。

「じゃあ、駄目なのか？」

「じゃあ、駄目なんですか？」

そんな霊夢さんに文さんと魔理沙さんが同時に尋ねる。

この二人を見て霊夢さんは、グツと黙った後……数秒考え……そして。

「はあ……良いわよ……もう……。」

溜息をつきながらそういった。

どうやら霊夢さんはこういう押しには弱いようだ。

霊夢さんと魔理沙さんが顔を合わせてニヒヒと悪戯つ子のように笑った。

そんな様子を見て霊夢さんはもう一度深く深く溜息をついた。

僕は文さんに尋ねる。

「そういえば次に行く取材はどんな取材なんですか？」

文さんは布団に横になりながら隣で座っている僕に顔だけ向けて答える。

「え？ ああ、ええと。前も言ったように少し面白い情報を手に入れたんですよ。その取材に……！」

「その……ですから……！ その情報について教えて下さい！」

僕は思いきってそう言う。

いつももつたいぶつていられるときさすがに身が持たない気がするからだ……。

そんな僕に文さんは少し驚いたように目を見開いた後。

「っこりと笑って、「そうですねえ」というと。

「じゃあ、教えましょう。」

そう続けた。

「ええとですね……情報元はあかせませんけど……いや、行けば嫌でも分かると

思いますけど……とにかく！ 情報がありまして、その内容がですね……どうやら、

人が抜け殻のようになってしまおうというものなんです。まあ、正確に言えば人ではなく妖精ですが……そして、その抜け殻、になってしまった妖精ですが……明らかに心

臓は動いているのですが、息をしていないそうなのです。それで一度取材に……と。そう思っていたんですが…… どうですか？」

文さんは一通り説明した後満足そうに笑いながら僕の方をみる。

僕は、それを聞いて、

「抜け殻……なんだか怖いすね……」

そう率直な感想を述べた。

文さんは、ははつと笑うと……

「まあ幻想郷ではそんなに珍しいことでもないですよ。」

そういった。

「はあ……」

僕は納得がいかないまま答える。

やはり、ここ幻想郷はとんでもない場所らしい。

それでも、とにかく次の取材に向けて気持ちを整えなくては!!

そう思い、僕は文さんに一言言ってから博霊神社の外にでた。

……

続く。

小さなおまけく犠牲く

私は紅魔館につとめるメイドの一人だ。

紅魔館には複数のメイドがいるし、お嬢様からすれば私など名前を覚えてもらえてすらいないと思う。

いや、でもそこはどうでも良い。私は紅魔館につとめる以上、仕事はやりきるつもりだ。

今日は…… 数人のメイドとともに美鈴様のお手伝いとしてお庭の手入れを命じられた。

お庭の手入れ…… まあ仕事とすれば楽な部類であろう……。

そう思い私はすぐに仕事に取りかかった。

美鈴様は…… 寝ていたけど…… 後でメイド長に報告しておこう……。

私はテキパキと仕事をこなしていく。

すると…… ここで門の方に、ふいに人影が見えた。

「誰……？」

そう呟く。

いや…… 呟いたつもりだった。



その途端、急に体験したことがない感覚に襲われる。

自分の心が心臓が、中枢の何かが……暴力的に、無理矢理、乱暴に奪われていくよ  
うな。

「がっ……あ……あっ……」

声がうまくでない。

周りのメイド達が心配そうに私に駆け寄る。

私は最期に、有らん限りの声を張り上げて。

実際はかすれて聞き取れるものだったかわからないが……  
こう言った。

「わ……の……しの……た……を……い……おね……い……が  
いだ……ら……か……して……!!」

おまけ編 4

おまけ編 1話～魔法使いVS人～

僕は魔理沙さんへと短剣を突きつけ、普段では考えられないような鋭い目で言い放つた。

「僕の勝ちです。」

そういうと、魔理沙さんの細い喉に短剣を走らせる。

しかし、やはり、例の如く。

理不尽にも、僕の意識は暗転した。

僕は博霊神社から外へと出て、思いつき呼吸をした。

その後大きく伸びをし、軽く体操して体を慣らす。

そうして準備してから僕は鞘付きの短剣を取り出し、構える。

目をつむり、十分に集中した後、剣を振り始めた。

目の前に敵を想像しながら動きを確認する。

頭の中では実は少し妖夢さんを意識していたりする。

「やっ!。」

軽いかけ声とともに懇親の一振りを繰り出す。

その一撃は想像の敵を切り裂く……

ことなく、綺麗な白い手に親指と人差し指でつままれた。

「えっ?。」

いろいろなことに対する驚きで僕は間の抜けた声をあげる。

さっきまでいなかったはずの霊夢さんが目の前にいること。

懇親の一振りをつまむだけでおさえられたこと。

僕はその姿勢のまましばらく動けなかった。

呆気にとられる僕をみて心なしか楽しそうに、

「熱心なのね? 二日酔いは大丈夫なの?。」

霊夢さんが笑いかける。

その一言で我に返った僕は、裏返しそうな声で

「は、はい! だ、だだ! 大丈夫です。」

こう答える。

そんな僕が可笑しかったのか霊夢さんがクスクスと笑った。

僕は思わず赤面した。

「なんだなんだ？ やけにたのしそうだな……………」

唐突に聞こえてきた声に僕と霊夢さんは神社の方をみる。

「あら… 魔理沙…………… あんた二日酔いは？」

「え…………… ああ、ぜんぜん大丈夫だぜ！」

霊夢さんの問いに対し魔理沙さんは元気に笑いながら言った。

「そういうところはタフよねえ。」

そんな魔理沙さんを見て霊夢さんは呆れたように溜息をついた。

魔理沙さんが僕等の方に近づきながら尋ねる。

「で…………… 何してたんだ？」

霊夢さんが僕の方をみて答えるように促した。

僕は霊夢さんに促され、

「あ、ええと…………… 訓練……………？ と言いますか……………。とにかく。自分の身ぐらいは守れ

るように…………… と思っただけ……………」

しどろもどろになりながらも答える。

「ああ…………… まあ、何かと物騒だしな、鞆なんかは真っ先に食べられそうだし。」

おどけながら魔理沙さんが言った。

僕が苦笑いを返すと、急に霊夢さんがこんなことを言い出した。「じゃあ、手合わせしてあげれば？」

唐突な言葉に僕は驚きを隠せずに霊夢さんを見る。

魔理沙さんは「おお！」と言って僕の方をみた。

……幻想郷の人……いや、住人さん達は皆……好戦的……？なんだろうか……

「い、いえいえ。悪いですよ！。それに、僕じや魔理沙さん達とは相手にならないでしょうし……」

僕はブンブンツと顔を左右に振りながら言う。

しかし、何となくそんな予感はしていたが、

「ああああ……！そういうのはいいから、私は本気出さないから、やってみようぜ？」

魔理沙さんが僕の背中を押しながら、強引に話を進める。

「どうやらまたこの流れのようだ。」

「はあ……」

僕は小さく溜息をついた。

「んじゃ！遠慮なく、本気でかかってきてきて良いぜ？」

目の前で魔理沙さんが余裕の表情で手をこつちに向けてひらひらとふる。

僕は短剣を構え、一点に魔理沙さんの動きをみる。

五感が普段よりも遙かに研ぎ澄まされるような感覚。

魔理沙さんや霊夢さんの強さは前の喧嘩(?)を目撃してある程度知っている。

まずまともに戦って勝てるわけがないのは分かっていた。

かといって、前の妖夢さんとの手合わせの時のように相手の裏をつくようなことをする気もない。

僕だってあれからある程度強くなったつもりだ。

本気でやれば少しはまともに戦えるはずだろう。

戦えると……思う。

うん。多分……。

僕はそんな考えを振り切ってもう一度魔理沙さんを見つめる。

そして、

《ガンッ!》

予備動作を極力なくして放った一発を魔理沙さんの八角形の何かによって抑えられ

る。もしも当たりそうになったときのためスピードを落としてしまったせいだろう。

きっとそうだ。そうに違いない。

僕は間髪入れずに空いている左手を魔理沙さんの懐に放り込んだ。

「っつわ。」

しかしその拳は魔理沙さんに簡単にかわされてしまう。

大丈夫。それでいい。

もともと、あてるつもりでやった攻撃ではない。

あたったとして僕のパンチなど、威力はたかがしれている。

隙ができればそれで良い。

僕は渾身の力で右足の蹴りを繰り返す。

僕はおそらく今まででもっとも頭を回転させて戦ったと思う。

しかし、どうしてもかなわない相手というのはいるもので、

僕は虚しく空を切った右足を驚愕の目で見つめる。

あれ…!? なんて!?

ふと頭に浮かんだのはこんな言葉だった。

「なかなか良い動きしてると思うぜ?」

無情にも後ろから声が聞こえる。

後ろを振り向くと、魔理沙さんがっこりと笑いながら短剣を弄んでいた。

僕の短剣を。

僕の……？

「ええ!？」

思わずさつきまで短剣を握っていたはずの右手を凝視した。

「おっと、つい悪い癖が。」

魔理沙さんはそういうと弄んでいた短剣を僕に向かってポイツと投げる。

「わっ」

僕はどうにかそれを受け取った。

「思ったよりも強かったな。だがまだまだかな……。」

魔理沙さんはそういうとはははと笑った。

僕は受け取った短剣を呆然と見る。

縁側で観戦していた霊夢さんが僕たちに近づき、煎餅をかじりながら、

「お疲れさま。」

そう短く言った。

せつかくのお言葉だったのだけど僕は呆然としてまともに聞いていなかったと

思う。

そんな僕をみて、霊夢さんが魔理沙さんにコソコソと耳打ちする。



しかし、どうも僕は地獄耳らしくそれらを聞き取ることができた。

といつても耳に入ってくる、というだけで意味をしつかり理解はできなかったが。

「あんたねえ……… もうちよつと手加減してあげなさいよ…… 鞆、多分落ち込んじやうわよ。」

霊夢さんがちらちらとこちらをみながら言う。

そんな霊夢さんに魔理沙さんはヘラヘラと笑いながら、

「ん？あぁ、大丈夫大丈夫。多分このタイプは………。」

そういうと僕の方をみた。

僕は短剣をみつめてワナワナと震える。

そんな僕を見てなのか、霊夢さんが心配そうに、僕に何か掛ける言葉を探しているようだった。

「か……。」

「ん？なんて？」

魔理沙さんが僕に言う。

「か……。」

「か？」

霊夢さんも僕に尋ねる。

「かっこいいい!!!」

僕が目を輝かせながら魔理沙さんに尊敬の目を向ける。

僕の反応が予想外だったのか霊夢さんが呆れたような不思議そうな顔になる。

それに対して魔理沙さんは予想通りの反応で満足。といったように頷いて笑った。

「違う違う。相手がこうしてきたときは空いてる左手で。」

「ああ!なるほど。」

「そうそう!んで、そうすると相手がこうしてくるから。」

「へ?ひやあ!」

「仲良いわね……………」

霊夢さんが僕たちのやりとりをみながら呟く。

「嫉妬ですか?らしくないですね。」

突如として後ろから声をかけられたにも関わらず霊夢さんは振り返りもせずに答える。

「嫉妬?……………んな訳ないでしょ?だいたい何に嫉妬しろつてのよ。」

その声はどことなく不機嫌な雰囲気だった。

文さんは霊夢さんの反応を見てニコツと笑うと、

「そうですね。ちよつと的外れだったかもしれないです。」

「盛大にファウルしてるわよ。」

霊夢さんはそういうとほのかに色づいた頬を隠すように一気にお茶を飲み干した。

「どうです？動きは良くなってきましたか？。」

肩で呼吸する僕に文さんが笑顔で尋ねる。

「ひゃ!？」

後ろから尋ねられ、思わず僕は前に倒れそうになる。

「ととつ。」

そこを魔理沙さんに支えられる。

僕はすぐに元の体勢に戻り、

「(い、い、い)。ごめんなさい!!」

魔理沙さんに頭を下げる。

すると魔理沙さんはにこつと笑って

「おお、気にすんな。」

そう言った。

文さんがカメラを構えていたがそこには触れないで置こう。

そして僕は文さんの方を向いて弱々しく言う。

「文さん……………いいかげんこんな風に登場するのやめてくださいお……………僕の内臓が持ちません……………」

そんな僕を見て、文さんは少しは罪悪感にかられたのか頭を掻きながら、「あんまり驚かせるつもりはないんですけどね……………?」

こう言った。

僕は小さく溜息をついてから心配そうな声色で文さんに訊く「それで、二日酔いは良くなったんですか。」

その問いに文さんはいつも通りの表情でケロツとして、

「ああ、問題ないですよ?私にかかればチヨロいもんです!!」  
力強くそう言う。

今朝までフラフラしていたのが嘘のようだった。

そのかわり様に僕や霊夢さん魔理沙さんまでもが呆れていた。

「ずずず……………ぷはあ……………」

僕は湯飲みから口をはなし大きく息を吸った。

やつぱり体を動かし了後の一杯はおいしい。

そんなことをしみじみと思いながらお茶を飲み干す。

「ずいぶんとおいしそうに飲むのね……。」

横から霊夢さんに話しかけられる。

「あはは……。そうですかね。」

僕が照れながら言う。

博霊神社の縁側には平穏な空気が流れていた。

「んじゃ……。もう一頑張りするか!。」

「あーは、はい!!」

魔理沙さんの声で僕は我に返り、返事をする。

そんな僕たちに霊夢さんと文さんが驚いたように、

「あんだけやって、まだやるの? 鞆の体力持たないでしょ?」

「鞆、努力家なのはいいですが、明日の取材に響かないようにお願いしますよ。」

僕は二人の言葉に何も言い返せずに固まる。

確かに……このままでは体力が持ちそうにない……。

僕がそんな風に考えていると、

魔理沙さんがじゃあ!と短く言って、そしてこう続けた。

「最後に私と手合わせして終わりにしようぜ。今日の特訓の成果を見せてくれよ!。」

「え…………… あーはい！お、お願いします！」  
僕は少しだけ力んだ声で答えた。

続く……………

## おまけ編 2話く魔法使いVS人(?)く

僕は先程と同じように魔理沙さんと向き合う。

そして、深呼吸の後ゆっくりと集中した。

視覚、聴覚、その他の感覚が限界まで研ぎ澄まされる。

風の音が耳に痛い。

僕はもう一度目を見開き魔理沙さんの動きに集中した。

沈黙が流れる。

スツ。

魔理沙さんの手が微かに動いた。

そう認識した時点で魔理沙さんの拳が鼻先をかすめる。

間一髪で避けた僕はすぐに距離をとって思考する。

この状況で、勝つには……。

僕は自分でも信じられないほど冷静に考える。

しかし、魔理沙さんは落ち着いて考えさせてくれないようで、

「よつとぉ!!」

すぐに間合いを詰めてくる。

「くっ……!!」

悔しげに唸った後、僕は飛んでくる魔理沙さんの攻撃をギリギリにかわしていく。

魔理沙さんの攻撃は一つ一つの威力は高そうだけど、そのぶんある程度の間ができる。

だから、攻撃を入れるチャンスはそれなりに……ある!。

僕は魔理沙さんの蹴りを屈んでかわし、魔理沙さんの股下へと潜り込む。

「やあっ!!」

軽いかげ声とともに魔理沙さんへと短剣を突く。

「惜しい惜しい!。」

魔理沙さんは笑いながら身を翻し、短剣を避けた。

「っ……!!。」

僕は微かに動揺したがすぐに集中し直す。

そして短剣を突き上げた姿勢からそのまま魔理沙さんへと向けて振り下げる。

「ほっ。」

その一撃を後ろに転がって避けた魔理沙さんはほとんど間髪入れずに突っ込んできた。



……、そんな体勢からどうやって踏み込んだら……？。

若干疑問だったがそんなことを深く考える余裕があるはずもなく僕は魔理沙さんの攻撃をどうにかかわしていく。

「どうした？受けてるだけか？」

絶え間なく攻撃を仕掛けながら魔理沙さんが挑発するように言う。

当然、僕に答える余裕なんてあるはずもなく、ただ、淡々と魔理沙さんの攻撃を避けたり受け止めたりしていた。

防戦一方で徐々に後ろに下がっていく。

すると……。

《ゴンッ》

「っ!？」

背中に何か当たったような感覚。

おそらく木にでもぶつかっただろう。

今は何にぶつかっただかなんてどうでも良い。問題は、

「もらった！」

飛んでくる魔理沙さんの一撃をどう避けるかだ。

屈む？

いや上から振り下げているんだから意味がない。  
横に転がるか？

体勢を崩せばそこを畳みかけられるだろう。

受け止める？

いや、間に合わない。

どうする………？

どうする………。

思考をフル回転させて対処法を考える。

なんだか時間が止まっているような感覚だ。

そして、実質コンマ数秒の思考の後僕が出した答えは。

《ドドンッ。》

「んなっ!？」

魔理沙さんが驚きの声を上げる。

まあ、目の前の敵がいきなり体当たりしてくればそれは驚くだろう。

運のいいことに体勢を崩した魔理沙さんに僕が上からのしかかる形になった。

反撃されないようにすぐにトドメとして首に短剣をあてる。

いや、あてた……… つもりだった。

短剣は魔理沙さんの首から15cmほど上の方でぶるぶると震える。

要するに……、首元までもつていくまえに魔理沙さんに受け止められてしまった。

こんな状況だというのに魔理沙さんは軽く笑いながら、

「いやあ…… 若干油断したなあ…… はは。」

そう告げる。

僕は短剣を持つ手に一層力を込めて言う。

「いいんですか……？ このままじゃ負けちゃいますよ……。」

僕にしては珍しく挑発的な言葉だった。

僕の言葉に魔理沙さんは一瞬きよんとした後、すぐに笑って。

「そうか、そりやあまずいな…… よおつと！」

おどけたように言った後、のしかかられた状態であるにも関わらず僕を押し退けた。

「ひゃあっ!？」

僕は後ろにしりもちを付く。

鈍い痛み顔に顔をしかめたが、すぐに冷静に戻る。

まずっ！

「お疲れさま。」

爽やかな笑顔で魔理沙さんが僕に言い放つ。

視界の端には魔理沙さんのローキックが飛んでくる様子が映っていた。

僕は思わず眼を閉じる。

僕の視界が暗転した。

あれ？

僕は不思議な感覚に首を傾げる。

なんだかぼーつとしていてうまく頭が回らない。

前にもどこかであつたような感覚。

時間が止まっているようだ。

不意に視界が明瞭になる。

目の前で魔理沙さんが背中を向けて何も無い方向に蹴りを放っている。

何をしているんだろう………？。

するとゆっくりと魔理沙さんが振り向き、僕と眼があつた。

魔理沙さんの顔がどんだん驚いた風に変わっていく。

何に驚いてるんだろう………？。

僕は半眼で首を傾げ、魔理沙さんをジッとみる。

魔理沙さんが焦ったように右手のストレートを打ってくる。

ただ、何故かとてもゆっくりだった。

僕はとんでくる右手を落ちて着いて左手で包み込むようにつかんだ。

自分の手が小さいせいかわ、しっかりとつかめなかった。

僕は落ちて着いてゆっくりと、魔理沙さんの腕を捻り、地面に叩きつける。

「つつ!!?」

魔理沙さんが痛みに顔をゆがめる。

僕は膝をついた魔理沙さんのお腹に蹴りを入れる。

「ガッ!」

鈍いうめき声の後、魔理沙さんの体が数m吹っ飛ぶ。

「アハハッ………」

何が面白いのか僕が静かに嗤った。

蔑むようにお腹を押さえる魔理沙さんを観た後。

更に、魔理沙さんに追い打ちを仕掛ける。

襟元をつかみ、持ち上げる。

といつても魔理沙さんの方が身長が高いから魔理沙さんの足は地面に付いていた。

「フフ。」

僕は少しだけ笑った後。

人差し指と中指をピンと立てた状態で魔理沙さんのお腹に向けて突きさす。

何の遠慮もなく手加減なく。

内蔵ごと貫くつもりで。

《カントツ》

軽い音が響き僕の手が弾かれる。

僕は表情を変えずに、

「痛。」

そうとだけ呟いた。

魔理沙さんのお腹の周りには青く薄いガラスのようなものが衝撃を与えた一瞬だけ見えた。

何だろう……これ……?。

「結界?」

僕が呟く。

そんな間に魔理沙さんが僕の手から離れて、後ろに距離をとる。

「まっつてくくださいよ。」

感情のこもらない声で呟くと僕は魔理沙さんの後ろに回り込む。

そして軽く殴りを入れていく。

魔理沙さんはそれをどうにかかわしていく。

僕はそんな魔理沙さんにつこりと笑いながら、

「受けるだけですか？」

そう告げる。

もちろん魔理沙さんに答える暇などなく……。

「ああもう。クソッ。」

悔しげにそう呟くとどこからか箒を取り出し宙に浮いた。

そして、見上げればいけない高さへと到達しよくわからない魔法弾をいくつか放ってきた。

「ずるいなあ…… キヤハハッ。」

僕は楽しげに嗤った後、右手を魔理沙さんと魔法弾に向けて突きだし、そして。

クイツ。

その右手を捻る。

それと共に魔法弾が全て消え去り、魔理沙さんの箒が二つに折れる。

「へっ!?!。のわああっ!?!」

魔理沙さんの驚きの声と共に魔理沙さんが箒と共に落ちてくる。

かなり高いところから落ちたにも関わらず魔理沙さんはしっかりと着地して体勢を崩すことはなかった。

だから、

「うわっ。」

足を引っかけられて魔理沙さんが声を上げる。

そして体勢を崩し地面へと手を付いた。

「しまっ……。」

魔理沙さんが声を上げるがその瞬間にはもう僕の短剣が文字通り眼の前だった。

気のせいかわ魔理沙さんの顔がおびえたように歪み、僕は可笑しくてくすくすと笑う。

そして、

「僕の勝ちです。」

穏やかな表情で僕が言い放つ。

そして、魔理沙さんの眼球へと短剣を突き立てる。

しかし、その瞬間、腕がしびれるような感覚に陥る。

体の奥で何かが暴れているような、そんな言いようもない感覚。

痛い、痛い痛い痛い。



今すぐにも叫びたいが声が出ない。

そして、僕の視界は……………。

いつも通り暗転した。

僕は目を覚ます。

何日も眠っていたような錯覚に陥る。

僕はガンガンと痛む頭を押さえて布団から起きあがる。

横には霊夢さん、文さん、魔理沙さんが心配そうにこちらをみていた。

「えっ？ ああ……………。僕、気絶してましたか……………」

僕はさっきの戦闘の記憶を甦らせる。

そうか……………。魔理沙さんのローキックを食らって……………。そのせいで……………。

僕は魔理沙さんの方を向いて笑顔で言う。

「えへへ……………。さすが魔理沙さんですね手も足も出ませんでした……………。もつと訓練しなきゃなあ……………」

心なしが霊夢さんと魔理沙さんが訝しげな顔をする。

しかし僕はそんなことには気づかず文さんの

「そうですね……。ですが、そこそこいい動きになっていたと思いますよ……。?。」

この言葉に目を輝かせ、ホントですか!!と声を弾ませた。

しかし、

「文…… あんた寝てたんじゃなかったの……。?。」

霊夢さんの一言で手放しには喜ぶことはできなかった。

「それでは！そろそろ帰りましょうか……。?。」

文さんの一言に僕が布団から飛び起きる。

「は！はい！。分かりました。」

そう言うのと痛む頭を抑えてすぐに準備をする。

そして、文さんがいつものように

「それでは、取材の協力ありがとうございます。」

そういうと、そそくさと博霊神社を後にしてしまった。

なんだか随分あつけない気がしたけど、僕は特に何も言わずにいた。

帰路の途中、僕は文さんの背中の上で景色に浸る。

「綺麗ですね……。?。」

僕は日の沈みかける景色をみた率直な感想をもらした。  
しかし文さんはそれを無視して、

「鞆……。今日の訓練どうでしたか？」

そう尋ねた。そしてその声はどこか不安げに聞こえた。

僕は少し不思議そうにしたあと。

笑って、

「なかなか良い体験ができたと思ってますよ！」

そういった。

「そうですか。」

文さんははにかみながらそう答える。

その表情はどこか安心したような不安げなものであった。

続く……。

小さなおまけ〜謎〜

「いやあ……意外……。とうかなんというか……。」

気絶した心音鞆を見ながら霧雨魔理沙が呟く。

「全く、だから油断するなっっていったじゃない。」

そんな魔理沙に博霊霊夢が呆れたように言った。

それに対し魔理沙は

「いやあ…… どうせ結界が張ってあるのは知ってたしな……。ちいつと油断しち  
まっただぜ。」

はにかみながら言う。

そんな魔理沙に霊夢が溜息をついた。

その後、霊夢は横にいる射命丸文に話しかけた。

「で、どういふことなのよ、あの結界、妖怪の類にしか反応しないはずなんだけ  
ど……って……。」

しかし頭をカクカクと揺らしながら寝息を立てる姿に絶句する。

それを見て魔理沙が笑いなながら

「はは、よほど鬼ごろしが効いたらしいな。」

そう言う。

「……んっ?」

文が目を開けて周りをみる。

すると霊夢が一言だけ文に告げた。

「あの子……………気をつけなさいよ……………」

「え？はあ……………」

文は不思議そうに首を傾げた後不安そうに表情を曇らせた。

## 異変の取材

### 5章 1話～新たな出会い～

「やあ！私はエルだよ！魂を宿らせることができるの!!」  
「……………」

僕の目の前の女の子がそう言った。

僕は不思議なものを見るような眼でその二人を見ていた。

「ふわあ……………」

大きな欠伸と共に体を起こす。

寝ぼけ眼の視界が鮮明になった頃、僕は布団から起きあがり、顔を洗ったりなど一連のことをすませた。

そうして、文さんが見あたらないことに気づき軽く探し始める。

「文さんどこですか？」

そう言いながら仕事場を歩き回る。

台所やお風呂など、見て回るが姿はなかった。

ちなみに、水回りについてどこから水を引つ張つてきているのか前に聞いたことがあつただけだ、

聞いてみると、文さんにはっこりと笑いながら

「河童の科学力は世界一。ですから。」

そう言われた。

なんだか誤魔化されたような感じだったが、それ以上追求はしなかった。

「ああー鞆。起きてたんですね。」

ふと後ろから声がかかる。

もちろん文さんの声だ。

ただ、いつものように真後ろゼロ距離からの声ではなく、ある程度離れたところからの声だった。

そのため驚くことはない。

後ろを振り向くと文さんは仕事場の小窓から手を振っていた。

外にいたようである。

僕は文さんがいたことに安心しながら文さんの元に歩いていった。

「外で何していたんですか？」

僕が文さんに尋ねる。

すると文さんはいつものようにはにかみながら、

「ああ、ちよつと朝の体操を……。」

ふざけるように言った。まあ本当ではないだろう。

僕は諦めたように溜息をついて、

「そうですか。」

そう呟いた。

「それで、今日の取材はいつ出発ですか?」

僕は軽く準備をしながら文さんに訊く。

まあ、多分今から行きます。という答えが返ってくるのだろう。

そして、予想通り、

「ああ……多分分かってると思いますが今からですよ。」

そう言った。

文さんはカメラを二種類持ち、ネタ帳をつかむとすぐに仕事場を後にする。

僕はそれをすぐに追い始めた。

文さんと共に珍しくのんびりと歩いていく。



「それで、今回の取材はどこに行くんですか……？」

僕の声に文さんは「ああ……。」と呟いた後。

「鞆も知っている場所ですよ？」

そう笑いながら言った。

僕は首を傾げる

「勿体ぶらないで教えてくださいよ。」

すると文さんはためにためた後、こう言った。

「その場所とは…… 紅魔館です!!」

僕は聞き覚えのある単語にきよんとする。

「紅魔館って…… ああ、紅魔館ですか？」

「はい……。あの紅魔館です。」

何だか不思議な会話をしながら僕と文さんは紅魔館へと向かった。

紅魔館への道の途中、またいつものごとく彼女が現れた。

「やい！天狗、とそつてしt……。」

「鞆、今かまつてる暇ないんで無視で行きましょう。」

「え？あ。はい。」



僕は心の中で大きく溜息をついた後、ひきつり気味の笑顔を浮かべながら

「あの……… 何すれば……… いいですか………?」

そう尋ねた。

「ええと。要するに、友達のこと……… 大ちゃん? がいなくなってしまうたんですね。」

「そうだ。だから一緒に探してくれ!!。」

「……… わ、分かりました。」

そうは言ったものの詳しくは分かっていたいなかった。

とにかく! チルノちゃんといつも一緒にいる緑色の髪の子が唐突にいなくなってしまったのだという。

人探しなら何故僕なんだろうと疑問に思わないでもなかったが、ここで手伝わぬのはさすがに酷だと思い、僕はチルノちゃんと一緒に大ちゃんを探し始めた。

「うう……… いらないですね………」

数十分ほど探し回り、姿一つ見えなかったためついつい嘆いてしまう。

しかしそれでも親友が急にいなくなってしまったチルノちゃんの気持ちを考えると休んでなどいられない。

すぐにチルノちゃんの方を見て発言を取り消す。

「あーごめんね！もうちよつと頑張つて……… ってあれ。」

大きな岩にもたれていびきをかくチルノちゃんを見て僕は何ともいえない表情になる。

その後苦笑いを浮かべ、チルノちゃんを木陰までどうにか運び、できるだけ楽な姿勢にした後もういちど大ちゃんを探し始めた。

「うう……… いない………」

僕は呟いて溜息をつく。

よくよく考えてみればかくれんぼをしているんじゃないんだし周辺をちよつと探したところで見つかるはずがないんだけど………。

チルノちゃんには悪いけどここは置き手紙でも残して紅魔館に向かうか………。

そんなことを考えているとふと声が聞こえてくるのに気づく。

僕は声の聞こえる方へと耳を澄まし、声の方向へと目を向ける。

「ねくえくチー。見つからないのお？」

「五月蠅い。しゃべってる暇あんなら手動かせ。」

「いやあ。人探しなんだから動かすのは眼と耳ぐらいじゃん。」

「……………」

すると容姿のよく似た二人の女の子がなにやら喋りながら何かを探しているようだった。

もしかして……この子たちもチルノちゃんに頼まれて大ちゃん。を探しているんだらうか？

ふとそんな考えが浮かび女の子たちに声をかけようとする。

「あ……あの!!」

そう言った瞬間。

目の前の女の子たちが消えてしまった。

消えてしまった。

「え………」

突然の出来事に思わずこの一文字が口から漏れる。

しかし、すぐに冷静になる。

よく考えれば文さんで馴れっこだ。

そう考えてから深呼吸をする。

それで……あの二人はどこに消えてしまったんだろう………

「やつほ——何してるの、君?」

唐突に背後から声をかけられる。

僕はどこぞのスイナパーではないけどどうにもこれが苦手だった。

「ひっ!？」

情けない声を上げて前のめりに倒れる。

その後すぐさま後ろを向いて臨戦態勢をとる。

すると僕の後ろにいた女の子があははと笑う。

「ごめんごめん! 驚かせちゃったか……。にしてもお兄さんなかなか良い動きしてるね!。私びつくりしちゃった!」

そうして愉快そうに手をたたく。

さっきまではよく見ていなかったけどその女の子は長い青色の髪をしていてピンク色の髪留めをつけていた。

そして少しだけ眼を鋭くしてこう続ける。

「うん。本当に良い動きだ。人間の子供とは思えない。まあ。ただ……………」

「まだ甘い。」

再び後ろからの声に臨戦態勢だった僕はビクツと体を震わせた後直ちに振り向く。

すると前にいる女の子とはほぼ全く同じ顔をした女の子がもう一人僕のことを冷たい目で見下ろす。

右手の人差し指は僕のおでこを押さえていた。

その表情と状況に思わず僕はひるむ。

しかしすぐに鋭い目の女の子は興味をなくしたように腕の力を抜いた。それと共に僕も力を抜く。

「もう〜！ちー。いきなりそんなことしないの。」

もう一人の女の子に諭されるように言われて、ちーと呼ばれた女の子は小さく舌打ちする。

「ごめんね〜この子いつもこんななの……………とところで君の名前は？」

僕はそう尋ねられ、ついに行けてない頭を振り払って答える。

「え？………… ああ！はい！こ、心音鞘。つていいいます。刀を入れる鞘と書いて《さや》と読みます。」

「鞘………… かあ。はは。何だか女の子みたいだね。」

女の子が可笑しそうに笑う。

まあ………… 女の子なんだけど。面倒なので訂正はしない。

「ああ！そう言えば！私の名前を言っただけでなかったね。」

女の子はそう言っただけで腰を下ろしている僕の視線まで屈む。

そして笑顔で、

「私はエル。魂を宿らせることができるの!!」

こう言った。

……魂を宿らせる……………？

このワードが僕の頭に引つかかる。

魂を……………。

そんな僕を気にせずエルと名乗った女の子がこう続ける。

「んで……………。こつちの愛想悪いのが……………ちー。ええと……………チールだよ。こつちは魂を奪うことができるの。」

今度は奪う……………かあ……………。

それにしても……………魂……………。

この単語がどうしても僕の心には引つかかっていた。

多分魂を宿らせる……………だったり奪う……………っていうのは幻想郷の能力……………？のことなんだとおもう。

そういえば今更なんだけど僕には能力がないんだらうか。

何だか悲しいようなそうでもないような……………。

僕は複雑な気持ちを浮かべる。

「んじや！私たちは探し人がいるもんで！それじゃあね鞘さん！」

チールさん……………いや……………エルさん。かな？





## 5章 2話（同類）

「私はエル！。魂を宿らせることができるの！」

自分の頭の中でその声はずつとこだましている。

僕には彼女。エルさん……？の言ったその言葉がずつと引つかかっていた。

何がどうして、引つかかっているのかは自分でもよく分からない。

でも……何だか気持ち悪いような……。そんな感覚がまとわりついていた。

「ああ……もう……。何なんだろう……。これ……。」

僕が声を荒げるのを抑えて呟く。

何だかスッキリとしないまま僕は紅魔館へと向かった。

さて……。

いやあ……。すがすがしい空だ。

青く澄んでいて、雲一つない快晴。

おまけにポカポカの陽気がこの上なく眠気を誘う。

このまま寝ころんですぐに襲い来る睡魔に身を委ねてしまいたい。

ああ…… 気持ちいいなあ。もう何もかも気にせずにごしていたい。  
人間っていいなあ……。

ええと…… 何故清々しい笑顔でこんな事を思っているかというところ……。

察しが付くだろうか。

…… 大変申し上げにくいのですが……。

現在……。

「ははは…… ここ…… どこなんだろ……。」

完全に迷子です☆

…… いやいや!? 冷静に考えたら笑い事じゃないよね!?

幻想郷には危険がいっぱいで危ないから、危険が危なくて…… あわわ……。

僕はパニックになって、理由もなく手をぐるぐると動かす。

「どうしよう…… どうしよう、ドウシヨウ…… DOUSIYOU……。」

バカみたいに同じことを繰り返して呟いていると、横の方で草をかき分けるような音が聞こえた。

それに脊髄反射で振り向き、遅れて口から「誰?」と漏れる。

僕の反応に驚いたのかそこに立っている女の子が「ひっ!」と短く悲鳴を上げた。

…… そして、僕はそこに立っていた女の子を見て思わず「あっ!!」と叫んでしまっ

た。

そこにいたのは綺麗な緑色の髪をした女の子。

そう…… 先程までずっと探していたチルノちゃんの友達。大ちゃんだった。

「大ちゃん!!居たんですか!!。チルノちゃんがさがs……。」

「え…… !!あの!!!私のこと知ってるんですか?!」

僕の言葉を遮って大ちゃんがそう言う。

予想しなかった言葉に僕は「え?」と間の抜けた声を上げた。

知っているのか?……と言われても……何回か会っているし…… いや…… でも覚

えてもらえてないってだけかも……。

僕があれこれ思考を巡らせているうちに、大ちゃんが更に不可解な発言をした。

「それに…… チルノちゃん…… その人と私はどんな関係なんです!?!」

驚きに見開かれた僕の目を見てなのか大ちゃんが不思議そうに小首を傾げる。

チルノちゃんを知らない……?

関係の薄い僕なら分かるけど…… 親友(?)であるチルノちゃんのことを忘れたりす

るだろうか……?。

もしかして…… チルノちゃんたちの友情はチルノちゃんの一方通行だったのだろ

うか……。

ああ…… かわいそうなチルノちゃん。いなくなってしまった親友を必死に(?)探し  
ていたのに、まさか親友だと思っていた友達に存在を忘れられてしまっているだなん  
て……。

本人が知ればどれほどのショックを受けてしまうのだろうか……。

嗚呼。なんてかわいそうなチルノちゃ……。

違う違う。落ち着け、落ち着け僕。

そんな訳ないじゃないか。

多分これは…… 僕と同じ……。

「記憶喪失……？」

驚きを隠せずに半ば独り言のように僕が呟く。

すると……。大ちゃんが凶星を突かれたように表情を歪めた後。

認めたくない。と言わんばかりに俯いてしまった。

「やっぱり記憶がないんですね。」

見たところ大ちゃんは僕より歳が低いように見えるけど、なぜだか敬語で話しかけて  
しまう。



「あ、あの…… ええと。その……。」

言葉を探して僕の視線があちらこちらに泳ぐ。

そして、最終的に僕が選んだのは……。

「ちよつと……。僕と一緒に来てもらって良いですか……？」

文さんに任せる。という選択肢だった。

久しぶりにみる紅のお城は、相変わらず大きくて綺麗で少しだけ不気味だった。

僕は横でマジマジと紅魔館をみる大ちゃんに話しかける。

「ここは紅魔館っていつて吸血鬼さんたちが住んでいます。」

少しだけ驚かせるつもりで言ったのだけれど大ちゃんは、なるほど。と真面目に頷いた。

記憶喪失。とはいっても完全に何もかも忘れているわけではないようだ。

僕は安心半分驚いてもらえなかったことに対する不満半分で微妙な表情をつくる。

そして、紅魔館に入るときと言えば……。

「……。やっぱり寝てるんだなあ……。」

僕が苦笑しながら言う。

どうにもこの門番さんは寝不足のようだ。

そんなことを考えて僕は門を通ろうとした。

しかしここであることを思い出す。

前に文さんと共に門を通ったときのこと……………

「睡拳……………」

思わずそう呟く。

そうだった。美鈴さんは眠っていても門を守れるんだった。

……………だからあんなに余裕の表情で眠っていたのか……………

僕が変なところで納得しているとすつと黙っていた大ちゃんが横でこう呟いた。

「大丈夫ですよ。この時間帯は爆睡してますから……………安全です。」

「……………え？」

僕が呆気にと取られているのを気にせずスタスタと通り過ぎる。

何とも自然に、ごく当然のように大ちゃんはそう言っていた。

僕は思わず声をかけた。

「あの一……………記憶……………」

最後まで言うことはなかったが、大ちゃんには通じたらしくハツとした表情を作る。

そしてすぐに頭を抱え何かを思い出そうとする。

「私……………わたし……………」



苦しそうにする大ちゃんに何とか声をかけようとするが、適当な言葉が思い浮かばず言葉を飲む。

何かを思い出せそうなのか、はたまた何一つ思い出せないのか大ちゃんが苦しげに呻き声を上げる。

そんな姿を見かねて僕は大丈夫ですか？と声をかけようとした。

しかし、明るい声が僕の言葉を遮った。

「ああ!! 鞆。もう来てたんですか。もう少しかかるものだt.....。」

そして途中で言葉を留めた。

僕の陰になって見えなかったのか、初めて大ちゃんを見つけたように顔をしかめ。

すぐに営業スマイルを浮かべ、

「どうしたんです？ その妖精.....？ というかあの氷精は.....。」

僕にそう尋ねる。

僕はばつの悪い笑みを浮かべ、

「えっと..... 話せば長くなるですけど.....。」

そう言つて文さんに経緯を話し始めた。

少女説明中

「はあ……………なるほど…記憶喪失……………ですか。」

文さんが半信半疑といった風に大ちゃんをみる。

それに怯えてなのか、大ちゃんが僕の陰に隠れた。

「た…多分！嘘じゃない……………と……思います、よ?。」

確証はないため断言はできないものの僕はどうか大ちゃんをかばおうとする。

「ん、まあいいでしょう。それより！面白いものがみれますよ?。」

文さんは悪戯つ子のように笑うと、こつちです。といって僕らに手招きをした。

紅魔館の庭園、その片隅、僕と大ちゃんは文さんに連れられてそこにやってきた。

そして、そこにいたのは……………。

「……………メイドさん…ですか……………?。」

紅魔館に仕えているメイドさんの格好をした女の人だった。

前の取材の時にもいたような気がしないでもない。

ただ一つ変なところは……………。

「動いて……………ない……………?。」

微動だにせず、色のない顔を見ながら僕は呟いた。

僕は文さんの言葉を思い出す。

「人が抜け殻のようになってしまう。」

軽い眩暈が僕を襲った。

「大丈夫ですか……？」

文さんの声で我に返る。

「え…… ああ！はい……… 大丈夫……… です………」

とりあえずそう答えたものの吐き気と眩暈でとても大丈夫といえる状態ではなかった。

動かないメイドさんをもう一度まじまじとみる。

一瞬眼があつたような気がしてすぐに視線をずらした。

「ちよつと刺激が強すぎましたか……… とにかく！休憩も兼ねて、紅魔館に入

りましょうか………」

文さんが気を遣うように言った。

僕は素直に頷き、文さんの言葉に従うことにした。

「それでは、あなたも一緒に………」

文さんが大ちゃんに言い掛けて、途中で言葉を止めた。

僕はそれを不審に思い、大ちゃんをみる。

「いや……… うそ……… なんで……… いや、いやいやいや！」

半分パニックを起こしたように眩いていた。

額には大きな冷や汗を浮かべ、眼の焦点は合っていない。

「だ！大丈夫ですか?!?!」

僕がつい声をかけると、大ちゃんは怯えた眼で「ひっ!」と、そう悲鳴を上げると、  
「いやあああ!!」

そう叫びながらどこかに走り去ってしまった。

僕はその姿を呆然と見つめていた。

文さんはそれを、「ほう……………」そう笑みを浮かべながら眩いて、見つめていた。

続く……………。

## 5章 3話〈状況整理は手短かに〉

「まあ、とりあえずこれでも飲んで落ち着きなさい。」

「あ、ありがとう……ございます。」

僕は軽くお礼を言つて咲夜さんから紅茶を受け取つた。

正直上品な味は良く理解できなかったが、とにかくいつたん頭の中を整理しよう。

あ、あと素数も数えておかなくては……。

1、2、3、5、7、⑨……。

「鞆……？大丈夫？」

咲夜さんの心配するような、不思議がるような声で我に返る。

そうだ！素数数えてる場合じゃねえ。

咲夜さんにできるだけ笑顔を作り大丈夫です。とそう返した。

そうだ、まずは頭の中を整理しよう。(2回目)

ええとここに来るまでの出来事だけ……。

まず、紅魔館に来るまでにチルノちゃんに会つたんだよね……。それでチルノちゃんはいなくなったという大ちゃんを探していた。それでその周辺にはいなかったから

諦めかけてた頃に不思議な二人組に出会って、確かその二人の名前は……エルさんとチールさんだったかな？。で、その二人が言うには彼女らの能力は「魂を奪う」「魂を宿らせる」なんだそうだ。

能力っていうのは幻想郷の人達が持つ力のことだろう。

ここで一つ気になったことがあって思考をいったん中断する。

「あの…… そういえば咲夜さんや文さんの…… その…… 能力ってどんなものなんですか？」

僕が控えめに尋ねる。

ずっとメモ帳に顔を向けていた文さんはスツと顔を上げた。

「能力？ですか。どうしたんです？急に。」

文さんが楽しそうに笑う。

「あ、いえ…… ちょっと気になったので……。」

僕は曖昧に答えておく。

「まあ、いいでしょう。私の能力はですね…… 《風を操る程度の能力》です。」

文さんにはこやかに言う。

なるほど、確かにそうきくとそんな感じだ。

ただ…… 程度の…… っていうのは何なんだろうか？。

そんなどうでも良い疑問は置いておいて僕は続けて尋ねる。

「それで咲夜さんの能力は……………?」

咲夜さんはああ。と面倒そうに、

「時を操る程度の能力。」

そうとだけ呟く。

「へえ〜」

思わずそんな声が漏れる。

時を操る…………… the world!!。とかだろっか?。

そんなバカなことを考えていると、文さんがふざけるように

「バストを操る程度のn…。」

そして、僕はまたまた不思議な出来事を体験した。

咲夜さんの表情と姿勢が一瞬で変わったかと思うと、文さんの周りには無数のナイフが突き刺さっている。

しかし文さんは飄々としていて、相変わらず挑発するような表情で咲夜さんを見ていた。

「いやーいきなり酷いですねー……………」

文さんがクスクスと笑う。

「ちっ……。」

咲夜さんがいつもとは違う敵視剥き出しの眼で文さんを睨む。

「おお怖い怖い。」

「文さん……。」

愉快そうにする文さんに呆れながら僕が言った。

「まあまあ今争つても仕方ないですし……。」

「なっ！誰のせいだと……。」

咲夜さんは声を荒げようとしたがすぐに冷静になったようで、ため息を一つつくど、

「それで、鞘にはどこから話せばいいわけ？」

そう尋ねた。

「その……。それで、アレは何なんですか？」

僕が言葉が見つからず、わかりにくい言い方で尋ねる。

しかし咲夜さんは理解してくれたりらしく、

「ああ、鞘が前にきた時から暫くしてからなんだけど、あのメイドを含む数人に庭の手入れを頼んだの。それで、暫くしたらメイドの一人が血相変えて走ってきて、メイドの一人が気を失ってしまった！っていうの。だから急いで駆けつけるとあの子があの子の状態にいるのよ。最初は本当に気をうしなってるだけだと思っただけど、眼も開いてる



し、にしてはどんなに待っても起きないし、いろんな手段を試したけど起きるようすが  
ないのよ。といつても心臓は動いているようだし、呼吸も微かだけどしている  
わ……………」

こう一気に説明してくれた。

「なるほど……だから抜け殻のようになる……ですか。」

「そういうことです。」

僕が呟くと文さんが相変わらず楽しそうに言った。

今の話を聞くとどうやらあのメイドの人は死んでしまっているわけではないようだ。  
なんだか、安心したようなよけい不気味に感じるような。

あといろんな手段つて…… 具体的には何を…………… いや考えるのはよそう……………  
僕が頭の中で思考を巡らせていると……………

「それよりも、その妖精？ それについて詳しく教えなさいよ。」  
文さんに向かって咲夜さんがそう言った。

「ん？ ああ、それについては私より鞆の方が詳しく知っていると思うので鞆に任せま  
す。」

文さんはそう言つて僕に丸投げした。

……………  
丸投げした？

…… まるなげした？

…… maruna……

「んくすがにこのネタはもうくどいか……。」

天井…… 違った、天上から何か声が聞こえた気がしないでもないが気にしないで  
おこう。

いやいや、違う違う。丸投げされたんだった。

うくん…… とにかくなんとか説明しないと……

僕は頭の中で言うことを整理してから話し始めた。

くシヨウジヨセツメイチユウく

「記憶喪失…… ねえ……。」

何だか文さんといたような反応で咲夜さんが言った。

やはり半信半疑なのであろう。

僕だけならまだしもこんな短期間に二人も…… となれば尚更だ。

納得できなくとも無理はない。

でも本当に僕はそう言うしかなかった。

咲夜さんが釈然としないような顔で質問を続ける。

「まあ…… 記憶喪失…… つてのは分かったけど…… それで何でメイドを見たら急

いで逃げていくのよ……？」

……確かに……。僕もそこはとても気になっていた。

「分かりません……。でも……あの様子は……。何か重大な……。何かがあるんだと思います。」

「何かって？」

「……それは……。」

僕が返す言葉が見つからずに黙り込む。

そのまま俯いてしまった。

十分な根拠もなく勢いで言ってしまったことで事態の整理がややこしくなってしまうたかもしれない……。

何だか……。迷惑かけてばかりだな……。僕。

ため息の一つでもつきそうになったがそれをどうにか抑えて咲夜さんとの会話を続ける。

「ごめんなさい。勢いでしゃべっちゃって……。。」

「まあまあ。鞆を責めても仕方ありませんよ。」

すると文さんが僕をフォローしてくれた。

「別に責めてなんか無いわよ……。」

咲夜さんが文さんに心外だとばかりに言い返すと、僕に

「きつい言い方しちゃったかもね……ごめんなさい。」

申し訳なさそうに謝る。

僕は予想外の行動について慌ててしまった。

「え？ いえいえいえ！ そんなことないです!!。」

顔を横にブンツブンツと振りながらこういった。

そして、気まずい沈黙が流れる。

暫くして咲夜さんが沈黙を破った。

「そう言えばさつき何か知ってそうな感じだったけど……あなた何か隠してないわよね？」

「？」

文さんが問いつめられるように迫られる。

しかし相も変わらず飄々とした文さんは、

「いえいえ、何も知りませんよ？ 私自身ついさつき鞆と会ったばかりですし……。知

りようがないですよ？……。まああくまで私は、ですけど……。」

最後に何だか意味深な言葉を添えて言った。

「私は……って、どういこと？……。」

咲夜さんが文さんを睨む。

そんな視線を受けてか文さんが笑いながら答える。

「冗談です冗談!!。何となく意味ありげなことを言ってみただけです。特に深い意味はありませんよ……………」

しかし、そう言う文さんの言葉はやはりどこか嘘っぽくとても信じられなかった。いや、でも。どちらが嘘でどちらが本当なのだろう。

意味がないのが本当ならさっきの意味深な発言は適当で要するに文さんは本当に何も知らなくて、だから文さんは……………あれ?えつと……………だから……………ええ?。

そのうちに脳が考えることを放棄したため僕は二人の会話の続きに耳を傾けた。

「……………はあ……………もう良いわ。とにかく、もう一度しっかりあの子を見に行きましょう……………」

咲夜さんがため息をつく。

文さんはそれを聞き、すぐに立ち上がって

「そうですね!!」

そう言う。しかしすぐに何かに気づいたように「あ!」と声を上げると

「そう言えば鞆……………大丈夫そうですか?」

僕にこんな声をかけてくれた。

「だ！大丈夫です！多分。」

正直自信はなかったが大丈夫じゃないと言うわけにもいかない。

文さんは心配そうな表情を作る。

「そうですか……余り無理はしないでくださいね？」

「は、はい！」

僕はどうにか決心をつけてスタスタと歩いていく二人の背中を追いかけた。

《ぶにつ》

《ぶにぶにつ》

《ぶにいーっ》

「ん……やはり意識はないみたいですね。」

「……あの、文さん？仮に寝てたとしてもほっぺたつつくだけじゃ起きないと思います

よ……」

「あやや……？そうですかね？」

僕は呆れながら文さんに言う。

すると文さんは可愛くニコツとはにかんだ。

その表情に微かにドキツとしたことを隠そうと僕は抜け殻へと視線を移す。

……が、その瞬間視線を動かしたことを後悔した。

意識はないようなのにパツチリと開いた眼と視線がぶつかる。

「うっ……。」

言いようのない感覚が僕を襲った。

「大丈夫？無理はしない方が……。」

咲夜さんの声にどうにか笑顔を取り繕って、

「大丈夫です。余り迷惑かけられないですから……。」

何とか、そう答えた。

「うーん……。」

文さんが、悔しげに唸る。

「やはり脈はありますし、呼吸もわずかながらしているみたいですね……。」

ペンをクルクルと弄びつつ呟いた。

暫くして文さんは咲夜さんに顔を向けて、

「そう言えばこの子何か能力は……？。」

能力、という単語に僕が無意識に反応する。

咲夜さんは思い出そうと頭に手を押さえつけながら、

「ええと……………。確か……………。何だったかな。とにかく覚えていない程度のもつてことよ。」

思考の結果、かなり適当に咲夜さんは答えた。

そんな咲夜さんに文さんはジト眼を向ける。

「はあ…………… まあいいです。そうですね……………。とにかく何故こうなったか推理してみましようか……………。」

文さんはため息混じりにそう言った。

続く……………

小さなおまけ～二人の捜し物～

「ねくえくちー。いないよくく。」

「うるさい。」

「もうこんなとこ探してたつて見つかりようがないつてえくく帰ろく。」

「うるさいな。もとはといえはお前がへマするからで……………。」

「しっ！静かに……………。」



「んな…何だよ…。」

「いや…：…　なんで、…：…：…　なんで…　あああああ!!!」

「…：…：…。」

「やっと思つけた!。」

「やあやあしばらくぶりだね妖精さん。調子はどうお?」

「え!?!」

「んじゃ!おとなしくしててね〜。」

「な!?!…　いや!!誰!?!?」

「いやいや、怪しいもんじゃないよ?まあただ。」

「ちよつと死んでもらうけどな…：…：…。」

## 5章 4話～取り調べの時間～

「推理……ですか……？」

僕は文さんが言った単語に反応する。

推理と言えば……見た目は子供で中身は大人なのかな……？。せやかて工d……  
僕の頭の中で眼鏡の少年が「パーロー」とジト眼でいつてくる。

同じく頭の中で謝りつつ、僕は現実へと意識を戻した。

「推理って……。具体的には何を……？」

「……。」

文さんは僕の質問に対し数秒黙った後……。

「…… やっぱり聞き込みですかね……？」

疑問系で答えた。

何も考えずに言っていたらしい……。

「それじゃ普段とやっつてること変わらないじゃない……。」

咲夜さんに突っ込まれ、文さんは苦笑する。

「とにかく！聞き込みのため、紅魔館に攻め込みましょう!!」

「攻め込むって……。」

咲夜さんが顔をしかめたが文さんは全く気にせず紅魔館へと戻っていった。

「はああ。」

咲夜さんの深いため息に僕は苦笑いで返し、僕たちも紅魔館の中に戻った。

「さて、まずはあのメイドと一緒に仕事をしてたメイドに話を……、つて……なんだか誰が誰かややこしいですね。」

文さんがうーんと唸りながら呟く。

「そうですね……あのメイドに名前は……？」

文さんの質問に焦ったように咲夜さんがそっぽを向く。

それを見た文さんは咲夜さんに呆れたように言い放つ。

「……あの……まさかとは思いますが……。」

「……しょうがないでしょ……一人一人の名前なんて覚えてないわよ……。あるかどうかすら定かじやないし……。」

珍しくバツが悪そうに咲夜さんが言う。

何だか拗ねる子供みたいで少し可愛かった。

そんなことを考えてのほほんとしてっていると、唐突にとんでもない言葉が飛んできた。

「そうですね……何か適当なあだ名でも付けますか……、鞆、お願いします。」  
「へ？」

思わず間拔けな声が漏れる。

「な、名前ですか……？」

微かに声を震わせながら尋ねる僕に文さんは笑いながら、

「いやいや、そんな大層な物じゃないですよ……？たかが数日呼ぶだけのあだ名です。」

そう言った。

とは言っても、やっぱりある程度のプレッシャーがかかる。

僕はどうにか……悩みに悩んで……。

「アンネ……さん……？。」

そう絞り出した。

文さんと咲夜さんはキョトンとする。

「な……なんでそんな反応なんですかあ……。」

僕が涙目に抗議すると文さんがつまらなさそうに、

「いえ……鞆のことだからとんでもなく、センスの欠片もないようなネーミングを  
すると思つたら、案外ふつうというか……。」

そう言う。

「そんなあ……僕なりに考えたんですよお？」

僕の抗議を聴いてか今まで空気になりかけていた咲夜さんが、

「なんでアンネなのよ？」

そう尋ねる。

その質問に答えようと僕が得意顔を作っていると文さんが

「恐らく記憶喪失を英語に言いかえた《amnesia》からとったのかと……。」

つまらなそうに、僕が頭をフル回転させてどうにか絞り出した名前の由来を説明してくれた。

僕が灰になって固まる。

そんな僕を無視して二人は会話を続ける。

「英語ねえ……なんであなたそんな言語知ってるのよ。」

咲夜さんは不思議そうに文さんをみた。

「ふふふ……これでも新聞記者ですからね。言語についてはそれなりに詳しいつもりですよ？」

文さんは胸を張って答える。

その後そういえばと呟いて、

「なんであなたは知らないんですか……あなたの主もそのお友達も普通に使えてい

たと記憶してますが……。」

呆れたようにそう続けた。

その言葉に咲夜さんはムツとして

「そんなの分かる訳ないでしょう。そもそもお嬢様やパチャリー様が英語が使えるなんて聞いたこともないわよ。」

「いえいえ、かなり前に郵便をたのまれたことがありましたけど確か二人とも英語で書かれてましたよ？それも結構達者なものだったと……。」

そう答える文さんに咲夜さんは軽蔑の眼を向けて。

「まさかとは思うけど……預かった手紙……盗み見てたりしないわよね……？」

おそろおそろそう尋ねる。

しかし案の定文さんの答えは、

「ああ、封を開けた痕跡は完璧に消しておきましたので心配ないですよ！」

こんな物だった。

文さんの爽やかな笑みに咲夜さんは軽く舌打ちした後。

何かを言おうとして、言葉を飲み込み、代わりにため息を吐き出した。

何だか危なげな会話を終えて、文さんが心ここにあらずの僕に声をかける。

「それよりも！何で鞆が英語を知っているんですか……？。」

僕は頭の中でぼやける文さんの言葉を数秒かけて理解すると、あわてて答えた。

「えい！。ああ……。ええと……。別に知っていると言うほど理解しているつもりはないですけど……。これでも一応読書はする方なんですよ！」

少し自慢げな声色になる。でも、記憶喪失して単語はたまたま文さんの仕事場の資料棚の奥に眠っていた小説にでてきた。ってだけなんだけど……。

「そうですか……。その割には、この前『頭痛が痛い』って言ってましたけど……。」

「？……。どこがおかしいですかね？」

「……………」

二人の哀れむような不思議がるような呆れるような視線を、僕は意味が分からずただただ見つめていた。

その後少しだけ歩き、紅魔館の中ではお手洗いの次に小さいという部屋に着いた。

咲夜さんがアンネさんと一緒にいたというメイドさんと呼ぶように手配してくれたのでまもなく来てくれるだろう。

僕たちは部屋へと足を踏み入れる。

…そこは僕が初めて紅魔館に来て通された部屋より一回り小さい程度の、相変わらず大きな部屋だった。

これが紅魔館では小さい…なのか。

「どうしたのよ。」

呆然と立ち尽くしていると咲夜さんに横から声をかけられる。

まるで、何を驚いているのか全く分からないと言った様子だ。

とうかまるで、じゃなくて本当に分かっていないのだろう。

環境って怖いなあ……。そうしみじみと感じた。

思わず文さんを見ると、表情をいつさい崩さず、咲夜さんには聞こえない程度に舌打ちをしていた。

……………

「失礼します。」

するとドアが開き黒色の長い髪をしたメイドさんが恭しく入ってきた。

「ああ……。仕事中に悪いわね。」

「いえ！……。それで……。話して……。あと、この方たちは。」

メイドさんは不安げに尋ねる。

「話つて言うのは予想はしてると思うけど先日件の件よ。それで今回はここの記者擬きが



質問するからそれに答えて。」

咲夜さんは優しげな声色で言う。

文さんが何か言いたげな眼で咲夜さんを睨んだが咲夜さんは無視を強行した。

「はあ……。」

文さんは小さくため息をつくど、

「それでは、聞き込みを開始しますね。」

にこやかにそう言った。

「まず、あのメイド…… 仮に《アンネ》とさせていただきますが……。アンネさんがあんなつたときのことについてできるだけ詳しく聞かせてもらえますか？」

何だかドラマに出てきそうな雰囲気です。文さん質問する。

それに圧されたのかメイドさんが緊張したような面付きで、

「ええと…… その日はお庭のお手入れを頼まれていたのですが……、お手入れを始めてすぐ、急に彼女が呻き声を上げました。驚いて駆け寄りましたが、彼女は過呼吸、涙目で掠れた声で何かを言うだけでそのまま《ああ》なってしまうんです。」

「ちなみに、なんて言ったかは……？」

「すいません。声が掠れていたのなんて言っていたかまでは……。」

「そうですか…………… つらいことを掘り返すようで申し訳ないですが、協力をお願いします。……………」

文さんの恭しい態度に僕は驚き、ちよつと見直した。

それとは対照的に咲夜さんが不気味がるように文さんを見る。

「それでは質問を変えましょう。」

文さんがメイドさんを安心させるためか微笑みながら言う。

少し表情が硬かったメイドさんはいくらか緊張がほぐれた様子だった。

僕も見ているだけなのに力が入っていたのに気づき力を抜いた。

「それでは次は…………… アンネさん本人について教えていただきます。」

「本人……………？」

メイドさんがキョトンとして首を傾げる。

「アンネさんはどんな人でしたか？」

「ああ…………… ええと。とても、真面目でしたよ。冷静でしつかり周りを見られる人でした…………… というかこの質問はメイド長にした方が……………？」

「いいわ。続けて……………」

「……………？」

咲夜さんが間髪入れずに答えた。

メイドさんは不思議そうに咲夜さんを見つめる。

咲夜さんはいつも通りクールな表情を保っていた。

ただその額に冷や汗らしき物が映ったのはきつと見間違いないだろう。

「…… ええと……。そうですね。じゃあ……。アンネさんのみに当てられていた仕事等はありませんか?。」

「さあ……。なかったと思いますよ……。?って……。それこそメイド長が一番理解していると思いますよ?。」

「そうなんですか?。」

文さんの問いに対して咲夜さんは短くうなづく。

それを確認すると、文さんはうーーと軽く唸りながらペンを弄ぶ手を加速させる。

「それでは……。彼女の……。そうですね……。」。

文さんが次に続く言葉を探している。

「はあ……。メイド長……。!!……。はあ……。ここに……。はあ……。いらしたんですか……。!!」

今質問しているメイドさんとはほぼ同じ姿をしたメイドさんが息を切らしながら部屋へと入ってくる。

「どうしたの?。」

「……………様が……………はあ……………はあ……………お呼びです……………」

息が切れているせいか最初の方が聞き取れなかったが、

「お嬢様が？わかつたわすぐに……………」

「あ！いえ……………はあ……………。お嬢様では……………なく……………！。」

すぐに向かおうとする咲夜さんをメイドさんが苦しそうに息をしながら引き留める。

そしてこう続けた……………。

「呼んでいるのは……………はあ……………。パチユリー様の方です。」

「パチユリー様が……………？わかつたわ。すぐいく……………」

咲夜さん気のせいか表情を先程よりも強ばらせ、答えた。

続く……………。

## 5章 5話〈進展〉

「で、……………なんであんた等までついてきてるのよ……………」

咲夜さんの冷たい視線が刺さる。

僕は申し訳ない気持ちで苦笑いを浮かべる。

文さんはクスクスと笑いながら、

「まあまあ、良いじゃないですか。こっちの方が面白そうですし。」

「基本原動力はそこなんです。」

僕が呆れたように文さんに言うと、文さんはふざけるように

「そんな褒めないで下さい。」

そう言った。

咲夜さんは無言で鋭い視線を送り続ける。

しかし文さんには無駄だと悟ったのかため息を一つつき、パチュリーさんのもとへと歩を進めた。

「悪いわね、仕事中に。」

「いえ、とんでもない。それで……分かったのですか？」

「ええ……まあそれらしい情報は見つかったわ。」

お決まりの会話の後。パチュリーさんが手に持っていた本へと視線を移す。

そしてその後に僕たちを訝しげに睨んで。

「で、この天狗とその助手はなんなの？」

そう冷たく呟く。

文さんはどうも。とヒラヒラと手を振る。

僕は………天狗の助手は……どうすればいいか分からず、もはやお得意の苦笑いを浮かべた。

パチュリーさんは不満そうに顔をしかめると咲夜さんに

「続けて良いかしら？」

そう訊いた。

「はい。気にせずお願いします。」

咲夜さんの答えにパチュリーさんは短く頷くと続けて話し始めた。

「魂ですか………」

咲夜さんが手を顎に当てながら呟く。

なんだか展開についていけなかったがここでもうにか理解が追いつく。

どうやら咲夜さんはパチュリーさんにアンネさんのことについて調べてもらっていたらしい。

そしてパチュリーさんが言うには彼女のあの状態は、

『魂』が抜けてしまった状態。

だそうだ。

魂。最近一度聞いたことあるような……ないような……。

僕は必死で思い出そうと頭を抑えるがどうしても思い出すことはできなかった。

聞いた気はするんだけど……。

僕が悶々と悩んでいるのを気にせず文さんはパチュリーさんに質問をぶつけた。

「そういえば……古い文献で見たことがあるような気がしますね……。それでも詳しく

くは書いてなかったんですが具体的にどのような状態なんですか？」

文さんにしては珍しく真面目な質問だった。

「……。まあ、どちらにせよ話さなきゃいけないでしょうし……。」

パチュリーさんは面倒くさそうにため息を一つつくど、僕たちをしつかりと見据えて

説明を始めた。

「いい？生物は二つの概念でできあがってるの。一つは体。そしてもう一つは魂よ。この二つが在ることによって始めて『生きる』ことができるの。ただ、この二つの概念の

重さは等しいわけではないわ。一般的に言われる『死ぬ』というのは概念のうちの体が壊れてしまうことを指しているのよ。」

パチュリーさんはなおも話し続ける。

「この概念の、体というのはいわば料理という名の魂をのせる器のようなもの……器が壊れればそこに料理をのせておくことはできないわ。こぼれた料理はそう時間を経ることなくダメになってしまう。つまり、体が壊れてしまえば、それは魂が壊れるのと同じことなの。」

もう暫く前から頭が着いていけないがなおもパチュリーさんは続ける。

「ただ、壊れるのが魂ならそれは、『死ぬ』ということではないの。まあ、限りなく死んでいる状態に近いけれど……。魂のみが壊れたならばそれは理論上はただの人形になってしまふ、つてこと。生物の記憶や能力なんかは魂が司っているわ。だから一度魂が壊れてしまえば恐らく、その人が還ってくることはない。といえるわね。」

頭の中で色々なワードが飛び回る。

もう正直なところ僕にはちんぷんかんぷんだった。

文さんと咲夜さんも似たようなものなのか渋い表情を作っている。

文さんが眉をひそめながら苦しそうに言葉をひねり出す。

「あ……。とてもわかりやすい説明感謝します。ただ……、読んでくれてる人が8割



減りましたよコレ。」

読んでいる人とか聞こえたけどちよつと何言ってるか分からないのでスルーしておこう。

「わかりやすく3行にまとめてもらえますか？」

文さんがかなりきつい注文をする。

パチユリーさんは数秒間を置いて、

「・人は魂と体で形成されてる。

・体が壊れると魂も壊れる。

・魂のみが壊れれば生物は人形のようになる。

・大まかに言うところな感じね。」

文さんは少しだけ黙って、

「最後の行は要りますか？」

呆れたようにそう言う。

その後、「はあ……。最初からそう言ってくれば楽だったのに。」

そうボヤいた。

「それで、それが件の彼女と何の関係があるんですか？」

続けて言った文さんにパチユリーさんが明らかにげつそりした様子で

「あなたねえ……話聞いてなかったの？」

顔をしかめる。

「すいません。どうにも難しい話は苦手なもので……。」

文さんが笑うとパチュリーさんはため息を一つつく。

そしてまた仕方なく話し始めた。

「まず、さっきの3行の説明は分かったわね？」

4行でしたけど……。という文さんのつつこみを無視してパチュリーさんは続ける。

「それで、件の彼女はおそらく、説明で言うところの、魂が抜けた状態。つまり人形のようになっていると思われるわ。」

人形……。

その単語とアンネさんの姿を思い出し僕は身震いをした。

「……………」

文さんが考え込む。

やがて、口を開く。

「先程もそうでしたけど、『魂のみが壊れる』ことに関しては《おそらく》とか《思われる》とか《理論上》と、なんだかハッキリしないしやべり方なのは何故です。」

パチュリーさんは文さんの指摘に黙り込む。

そしてたつぷりと数秒の間を経て、

「あり得ないからよ。」

そう短く、暗く呟いた。

「あり得ない……とは？」

咲夜さんがどこか不安げに尋ねる。

「先程から言ってるように生物は二つの概念、魂、体。によって形成されているの。そのうち体が壊れてしまうことを、一般的に《死》と表現されるわ。死ねばそうしないうちに魂も土に還ってしまう。ただ、生物の体は脆いからとても簡単に壊れてしまう。逆に魂は宿った体と強く結びついているわ。物理的に引き離すことは不可能といえる。」

「じゃあ、何故人形のようになってしまおうと？」

文さんのもつともな疑問にパチュリーさんはふう。と一息を着くと。

「古い文献に……こうあったわ。」

手元にある本を一冊開いて僕たちに見えるように向きを変える。

文さんは真つ先に本をのぞき込み眼で文章をサラサラと追うと、

「なるほど……」

顎に手を当て呟いた。

続けて咲夜さんが本をのぞき込む。

「……………」

咲夜さんも文さんと似たような反応を示した。

続けて僕も……………」

「……………」

にこやかな表情を浮かべ額に冷や汗を浮かべる。

目の前の本には僕の人生では一回も目にしたことのない様な文字がズラズラと列をなしていた。

「まあ、こんな感じね……………」

「え!?!」

全員が見終わったからかパチュリーさんが本を元の位置に戻す。

「長年記者として活動してきましたけどこんな話を聞いたのは初めてですね……………」

文さんが、神妙な面持ちで呟く。

咲夜さんは依然として黙っている。

「あ!あの……………」

「まあ… 実際こんな事例があったみたいなのよこの本以外にも数件……………」

僕の呟きを無視してパチュリーさんが言う。

「で、原因は判明していませんのですか?」

「ええ。どの文献にも。」

文さんの質問にパチュリーさんは首を振った。

「うーん……。」

文さんが唸る。

「きー聞いてくださいー。」

さつきよりも少しだけ口調を強めて僕が言う。

それに驚いたように三人が僕の方へ振り向いた。

「何?」

パチュリーさんが尋ねる。

しどろもどろになりながら僕は答えた。

「ああ……ええと。その……。さつきの本なんですけど……。」

「さつきの本が?」

文さんが続きを言うように促す。

そして促されるままに僕は

「その……なんて書いてあったんです?」

そう尋ねた。

「まあ、確かにかなり前に使われてた文字だし鞆が分からないのも無理はないわね。」  
落ち込む僕に咲夜さんがフォローするように言ってくれた。

「正確には古い時代の吸血鬼の言語ですがね……。」

文さんがそう補足する。

そう言えば紅魔館の主の女の子は吸血鬼だったっけな……。

僕がのんきに考えているとパチュリーさんが簡単に説明してくれた。

「さっきの記事は大昔の新聞みたいな物なんだけど、それによると。数十年前にも今回と似たようなことが起こってるのよ。妖怪が急に呻き声を上げはじめたかと思うと『魂が……。』と眩きながら人形のようになり動かなくなってしまうた。ってね。」

「……なるほど。」

僕がこう呟く。

「他にも同じような事例がいくつかあったわ。でもいずれも解決には至ってない……。」

パチュリーさんはこう締めくくった。

やはり僕の頭の中では『魂』という単語が引つかかる。

どこかで聞いたような……。

「うん……彼女の状態は分かっても状況は良くはならないですね……。」

文さんが考え込むように自分のこめかみをペンで抑える。

「なにか……ほんの些細なことでも手掛かりになるようなことは？」

咲夜さんも似たような仕草をしながら尋ねる。

パチュリーさんは少し間をあけて。

「そう言えば……！」

そう呟いたかと思うと、机の上に連なる本をかき分けて一冊の本を探し始めた。

その光景を僕は呆然と見つめる。

数秒後……。

「あったわー！」

パチュリーさんが一冊の本を取り出した。

そしてページをばらばらとめくって、机の上にバンツと置いた。

「この本によると、約130年前の事件では一種の病として処理されているように……まあ、根拠のないこじつけだとは思うけど……。」

パチュリーさんは本の一文を指さして言う。

相変わらず書いてある文字は全く読めない。

「こじつけだとしても何の行動もしないよりはましです。病……となると……やはりあそこでしょうか……。」

文さんが楽しそうに言う。

咲夜さんは疲れたように、

「まあ…… あそこでしようね……。」

文さんに肯定する。

かくして僕たちは《あそこ》に向かうことになった。

……どこ?。

続く……

5



## おまけ編 5

## おまけ編 1話〈百合の花つてきれいですよね〉

「いらつしやいま……うわあ……」

店に足を踏み入れた僕に小鈴さんがこんな言葉をかける。

僕……何かしたっけ……？。

「鞆、ちよつといいですか？」

文さんに声をかけられ僕は見ていた本から顔を上げる。

そう。見ていた……。のだ。読んでいたわけじゃない。

早いところいろんな言葉を覚えないと……。。

「ええと……この資料なんですけど……」

文さんは仕事机の横に山積みにされている本を横目にみる。

「いったん整理したいんですよね……で……暇そうだったので……」

そうやって文さんは笑う。

特に問題はないため僕は頷いて整理の方法を詳しく聞く。

「分かりました。でも、どこにどの資料を？」

「ああ、基本的にはジャンル別、50音順に分けてありますけど、ある程度分ければ適当でかまいませんよ？」

文さんは手元に目線を移して言う。

「適当って……………」

僕は内心呆れながら、山のような本達に手を着けた。

「文さん…………。この本は…………どこに？」

「ああ、ええと。これは随筆ですから上から二番目の棚の右端です。」

「わかりました。」

こんな風に会話を挟みながら順調に整理を進める。

……………でも重なる資料が減る様子は全くない。

これは……………日暮れまでかかるのではないだろうか？

僕はため息を一つついて整理を続けた。

机の横の資料が元々の3分の2程度になった頃僕の目にある本が留まった。

「文さん…………これ…………？」

「ん？それは外来本ですから左の棚の……」

「あ…… いやそういうことじゃなく……」

僕の言葉に文さんが不思議そうに首を傾げる。

「ええと……この本……」

「この本がどうしました？」

文さんが僕の持っている本をマジマジと見つめる。

「…… 前に貸本屋さんで借りた本じゃなかったですか？」

その一言に文さんが黙り込む。

そして、数秒の沈黙。

それを経て文さんがこう言った。

「鞆…… お使いを頼んでも？」

文さんは目の前の本をかなりのスピードで読み進めている。

借りた本の中で何冊か読めてない物があったらしい。

それで、返す前にはらばらと読んでいるそうだ。

…… 本当にはらばらとページをめくっているようにしか見えない。

「ん……」

すると、ここで今まで信じられないスピードで読み進めていた文さんの手が止まる。そして、資料の中から特に分厚い辞書のような物を取り出し何かを探すようにページを行ったり来たりする。

文さんは少しの間辞書と睨めっこすると、その後諦めたように辞書を閉じた。そして「うーん……。」と苦しげに唸った。

「どうかしたんですか？」

そんな文さんに僕が声をかける。

文さんは難しそうな顔をして……。

「いえ……、これ…… 外来本なんです…… どうにも余り見たことのない言語で記してありまして……。」

少しだけ眉をひそめた。

「言語なら詳しいんじゃないんですか？」

なんの悪気もない純粋な言葉のつもりだったのだが……

文さんには嫌みのように聞こえてしまったらしく不満そうな顔をして、

「ムッ。どこにも載っていない言語なんですよ？ だいいち日本語も満足に使えない人に言われたくないですよ！。」

そう言い返した。

「あ！え、ええと…… いや！その…… そう言う意味ではなくて!!。」  
焦りつつも僕はそう弁解する。

すると文さんが「そうです！」と言って手をたたいた。  
いきなりの文さんの行動に驚きつつ

「どうしたんですか？」

と尋ねた。

「この本は外来本で、外で使われている文字のようです。」

文さんは本のページを指さして言う。

「そして鞆は外来人です。」

続けて文さんの指は真っ直ぐと僕に向けられる。

僕は先が何となく予想される上で恐る恐る尋ねる。

「それで……どうしたんです？」

怯えたような僕の表情を見て、文さんはニンマリと笑みを浮かべると。

すぐに爽やかな笑みに切り替わり、

「読んでください！」

親に読みかかせをねだる子供のようには僕に本を押しつける。

そして好奇心で目を輝かせていた。

「ええと、じゃあ…貸してください。」

僕は文さんから本を受け取る。

正直文さんが読めなかったのに僕に読めるはずがないと分かっていたはずが、記憶がないとはいえ一応は外の世界にいた（はずの）人間だ！

外の世界の言語なら分かるかもしれない！。

そんな淡い期待をしながら借りた本を開いた。

「……………」

ええと……………結果から言えば案の定読むことはできなかった。

しかし、見たことのある文字だった。

何という文字だっただろうか……………。

僕は数秒ほど考えて思考の結果を口に出す。

「えつと……………たしか……………昔の文字だったと思います……………」

文さんは若干疑わしげな視線を作る。

「で……………何という文字なんですか？」

「……………」

僕は全力で明後日の方向を見つめる。

いやあ…… 明後日はどんな日になるんだ……。

「分らないんですね……。」

文さんの溜息がダイレクトに心に突き刺さる。

どうせ…… どうせ僕なんて……。

自嘲的になりながら僕は机に突つ伏す。

「まあ…… そう落ち込まないでください。生きてればいいことありますよ。」

なおも色々な辞書で調べながら文さんが僕を慰めてくれる。

「ははは…… もういいんですよ…… どうせ僕なんてなんの役にも立たないんです……。」

しかし、自嘲モードに入ってしまった僕はそんな言葉も耳に入れずに続ける。

「もう……、なんかこう、役には立たないし役には立たないし…… あとは…… 役に立たないし……。」

「とりあえず役に立たないってのが言いたいのには分かりました。」

なおも僕はぶつぶつと続ける。

だいたい僕の語彙力の欠片もない脳味噌では似たような言葉が繰り返されているのだが……。

そんな僕を見かねてなのか文さんが言う。

「まったく……、いいですか鞆……。顔を上げてください。」

その言葉に僕がパツと顔を上げると……。

「ひゃっ!？」

ついついそんな声を上げてしまうほど近くに文さんの顔があった。

ありきたりな表現だが……透き通るような白い肌を目の前に顔が上気するのを感じる。

「ど、ど、どど。どどど、どうしたたた……んです……。か？」

かつてないほどに回らないろれつで顔を真っ赤っかにしながら尋ねる。

しかし、僕の声など聞こえないかのように文さんはジツと僕の顔を見つめる。

「ち、ちかいです……。文……さん？」

先程も言ったように真っ白な肌で全く動かないものだから人形なのかと本気で疑ってしまふ。

それでとてつもなく長い時間……とはいっても実際には数秒にも満たなかったのかもしれないが……。僕にはとてつもなく長い時間を感じられた。

まあ、気まずい沈黙が流れた後に文さんが声を出した。

「鞆。よく聞いてくださいいね。」



妙に静かで、それなのにしつかりとした声だった。

その声と文さんの雰囲気に気圧された僕は微動だにせずただただ文さんの声を聴いていた。

「あなたはよく働いてくれてますよ？複数人を同時に取材するときだって人手が足りなかったんですが鞆のおかげで同時進行ができましたし。面白そうな事の実践を協力してくれたりもしましたしね。」

僕は文さんの言葉に照れてしまいつつ、目線をそらす。

むろん言葉に照れたのであつて文さんの顔が目の前にあつて……とかそう言うわけではない。

文さんは女の子で僕も女の子だ。

うん……うん。

「聴いてます？」

文さんの声でふと我に返る。

「へ?!いや!……え、ええと……その、だ……だだ!大丈夫です!ええ……本当に!。」

明らかに大丈夫じゃない返答に文さんは肩をすくめた。

そして、その後。僕の耳元で妙に艶っぽい声で

「しんぱいしなくても……頼りにしてますよ。」

いつも通りのまばゆい笑顔で呟いた。

その瞬間。僕の顔が沸騰したやかんのように一気に色を変えた。

ただでさえ紅かった顔は更に紅潮し全体が鮮やかな赤に染まっている。

心なしか頭のとっぺんからは湯気らしき物がでているようにも感じられた。

「だ、大丈夫ですか?」

文さんの問いにも気づかずに僕は暫く力の抜けたまま立ち尽くす。

その間。ずっと耳元で呟かれた文さんの言葉がこだましていた。

やけに耳に通る艶っぽい声。

聴いただけで体中にゾクゾクツとした感覚が走った。

悪い感覚ではないような……。

そんな風に半ば夢心地でボーっとしていると……

「鞘!!しっかりしてください!!鞘!!」

文さんの声に我に返る。

「えーああ!!はい!」

僕は脊髄反射でこう答えた。

文さんは心配そうに僕を見つめる。

ふと目が合ってしまい、ついつい視線をずらした。

「大丈夫ですか？熱でもあるんじゃない………」

文さんはそう言って手を僕のおでこへと動かす。

「あああああ!!あの!ほ、ほほほ!本当に大丈夫です!はいダイジョウブ!だいじょうぶ!ボクハゲンキデス!!」

これ以上はまずいと僕のポンコツ脳も危機信号を出したのか、文さんの手を半ば強引に振り払うと、

「ほんつとに!ほんつとに大丈夫です!。これ以上は危険が危なくて危ないが危険です!。」

よく分からない日本語を口走った。

「ま、まあ…… 大丈夫ならいいのですが………」

文さんはどうすればいいか分からないと言った様子でそう言う。

僕はある程度落ち着き、苦笑いができるまでになっていた。

「えへへ………」

頭をかきながらこう答える。

すると文さんがいつもの笑顔に戻る。

「ま!まあ!とにかくですね!鞆は立派な私の弟子ですよ?私が言うんですから間違いないありません!!」

思いがけない言葉にまたまた僕は顔を上気させる。

そして、顔がにやけそうになるのを何とか抑える。

「そーそんなことないですよ!」

おきまりの言葉で謙遜するがやはりにやけを止めることはできなかつた。

「そこで! 鞆にお願ひなんですが!」

「はい! なんですか?」

文さんの言葉に僕は先程のテンションのまま応じた。

「お使い! 行つてきてください!!」

文さんは積み上げられた本を僕の方へと突き出しながら満面の笑みを浮かべた。

..... 忘れてた。

僕ははあ。とため息をつき、山積みの本を受け取つた。

「ありがとうございます!」

文さんの爽やかな笑みに何ともいえない表情になりながら改めて: : もう一度ため

息をついた。

続く.....

## おまけ編 2話くこのく木何の木？く

「よいっしょ……………」

僕は数冊の本を風呂敷に包んで抱えた。

服装はいつもの物ではなく白玉楼の取材で人里に来たときと同じく……着物を身につけていた。

しかし、前の時と少し違っていた点があった。

「なんだか……………ちよつと……派手、じゃないですか？」

僕が恥ずかしさに声を小さくして呟くように言う。

「いえいえ。女の子ですしそれくらい普通ですよ？」

文さんは顔をこちらに向けることなく手元の資料に視線を送る。

文さんの言葉に僕はもう一度よく……自分の格好を確認する。

……………確かに……………文さんの言う通り、女の子なら着いても何の不思議もないよう

な程度の派手さだが……………。

ぼ……………僕には似合わないし……………んん……………ええと……………うくん……………。

僕が落ち着かない様子で着物のいろんなどを身を翻したりしてよくよく見る。

「よく似合つてると思いますが?」

文さんは気を遣うように僕に言ってくれる。

「そ… そうですか…!」

気を遣つてくれたお世辞なのだと分かつてはいてもついつい表情がゆるんでしまう。

「ええ…。やはり鞆は女の子なんですネ。」

文さんはそう笑った。

「え…。!ど!どういう意味ですか!?!」

そんなやりとりを経て僕は人里へと向かつていった。

人里へ向かう途中。

いつものパターンならもうそろそろチルノちゃん達が現れるのかな…………。

なんて考えながら僕は道を歩き続けていた。

すると…………。

「あ… あの木!」

ふと、一つの木が目に残まる。

前… 博麗神社の宴会の時にも気になった木だ。

………… やはり、何か違う。

この木だけ……。

見た目は他の木と大した違いはないけど……。

この木だけ…… 他のもとは明らかに違う…… 何か……。

「なんなんだろう。」

僕はその木へと近づいていく。

そして近くで木をじっくりと観察する。

盛り上がった根っこや、幹の隅々まで……。

「……………」

見れば見るほど普通の木との相違点が見あたらぬ。

じゃあ、この違和感の正体は……。

僕は納得行かない気分「うー……………」と唸る。

すると……………。

『誰だ。貴様?』

「え?」

思わず間拔けな声が漏れる。

明らかに声が聞こえた。

聞き間違いなんかじゃない……………鮮明に……………しっかりと……………

『誰だ?』

つて……………

そして、その直後。さらに不可解な現象が起こった。

「た……多分この木からの声……………ひゃあああああああ!!」

盛大な叫び声をあげたのは……べつに木が喋ったからってわけではない。

無論目の前にどこぞの烏天狗の新聞記者さんがいたからでもない。

理由は……………

「ひ……ひ……光って……る?」

何の変哲もないはずの木が光り出したからだ。

幹の真ん中あたりにぼんやりとした黄色の丸い光があった。

「な……なな……何だろうこれ……………」

今までの僕なら数秒で逃げ出していただろうけど……今の僕はそれなりにこういうことに関しては耐性があるんだ!

僕は自分に半ば言い聞かせるようにして光へと近づく。

意識しないうちに手に力が入る。



緊張で若干手が震えていたが気にせず僕は手で光っている幹にさわった。

どこかのお伽噺ならパカーンと割れて中から女の子が顔を出すのかもしれないが、僕の記憶が正しければこの木は竹とは違うはずだ。

案の定、そんな風になることはなく……代わりに………。

《ヒュウウウン》

そんな擬音と共に……光が消えてしまった………。

思ったより安全に終わってしまいホッとしたやら残念やらで僕は暫くその場に立ち尽くしていた。

時間にしてカッププラーメンが一つできあがるぐらいの間その場にいた後、僕は文さんのお使いの途中だったことを思い出し……早足で人里へと向かっていった。

「久しぶりだなあ………」

僕は人里につくと一言そう呟いた。

そんなに長い月日……というか全然久しぶりじゃないんだけど………。

間に起こった出来事が濃すぎて、久しぶりに感じてしまう。

そう言えば、僕が幻想郷に来てからだってそう長い年月はたっていない。

なのに……なんだろう………。

すごく長い間幻想郷を見てきたような感覚だ。  
やはり過ごしてきた内容が濃すぎるのだろう。

僕は一つ苦笑を残して貸本屋さんへと向かった。

僕は前の時の記憶を頼りに人里の道を行ったり来たりする。

「ええと……確かこの辺に……。」

僕は呟いた後に視線の先に『鈴奈庵』の看板を見つける。

それと同時に表情がパアツと明るくなる。

「あつた!!」

僕は風呂敷を抱える力を一層強くして鈴奈庵ののれんへと走った。

その年季の入った貸本屋の戸に手をかけ、開ける。

ガラガラと音を立て扉が開くと、見覚えのある女の子が本を整理しているところだった。

飴色の髪に鈴の髪留めをした元気そうな女の子。

僕が「こんにちは」と挨拶しようとする。

すると……、

「いらつしや…… うわあ……」

女の子が入り口の方を見て、こう言う。

僕…… 何かしたつけ……

僕は女の子の思わぬ対応に凍り付く。

まるで「面倒くさい客がきた……」と言うような反応だ。

というか、結構ハッキリと言っているようなものだ。

僕がこれまでにこの女の子に何かしてしまったか全力で記憶を手繰っていると……

「おいおい。客にそんな反応はないだろう？」

後ろから何だか聞き覚えのある声が聞こえる。

僕が振り向くと予想通り見覚えのある人物が立っていた。

「魔！・魔理沙さん!。」

「よっ。なんだ？お使いか？」

僕が驚いて声を上げたが魔理沙さんは笑顔で答える。

そんな僕らのやりとりを見て女の子は

「ああ、一緒に行らしたわけじゃないんですね。」

そう言うのと魔理沙さんに近づいてまばゆい笑顔を作って尋ねる。

「ところで魔理沙さん？この前に貸し出した妖魔本。もう返却期限なうえに代金も後払

いって言ったつきり払ってもらえないと記憶しているんですけど?」

そんな女の子に魔理沙さんは目をそらし、

「あはは……。」

と誤魔化すように笑った後、女の子と目を合わせて「そのうちな。」そう言って逃げるように店を出て行ってしまった。

「全く……。」

女の子は溜息をついてから、すぐに僕の方へと向き直り、

「あーいらっしやいませー!」

そう言つてニコツと笑った。

どうやらさっきの対応は僕ではなく魔理沙さんに向けての物だったようだ。

僕はちよつとだけホツとして胸をなで下ろす。

それにしても魔理沙さんは何をしたんだろう?

僕は魔理沙さんを頭に思い浮かべる。

ま…… まあ魔理沙さんなら何をしても不思議じゃないけど……。

そんな風に考えていると想像の中の魔理沙さんに「失礼な!」と怒られてしまった。

「あの?どうかしめました?」

すると想像に浸っている僕に女の子から声がかかる。

僕は現実に引つ張り戻されて「はっはい!」……と裏返り気味に答える。  
そんな僕を不思議そうにみた後、女の子は僕の手元風呂敷を見て、

「ああ!返却ですね!」

そう言つて手を差し出す。

僕はそこに風呂敷を渡した。

何冊か本が入つてゐるわけだから結構馬鹿にならない重さのはずだが女の子は馴れているのか軽々と風呂敷を手元に持つて行き、結び目を解いた。

僕は一連の作業をただただ見つめていた。

すると手を動かすのを止めることなく女の子が顔をこちらに向けて、

「本の状態とかを確認するのでちよつと待つてもらえますか?」

氣遣うようにそう言う。

「え?ああ……はい!」

僕はしどろもどろにこう答えると、逃げるように本棚へと向かった。

「何か……ないかなあ……」

そう呟き、指を本棚に沿わせながら目でタイトルを追つていく。

そして……。

「これ……でいつか……」

一冊の本を手取る。

本の題名は……。

『私と天狗の取材記。』

何でだろう……どこかで聞いたことがある気が……。

僕はそんな感覚を引きづったまま椅子に腰掛け本を開く。

内容は、突如異世界へとトリップしてしまった少女がとあるライターと出会い、その助手として雇われ、大変ながらも楽しい日々を送る……。という物だった。

……何だろう……この猛烈な既視感は……。

しかも……何だか素人が書いたみたいでちよつと読みづらい……。

そんな風に思いながらも僕は本を読み進めていった。

「お客さん!!お客さん!!」

ぼやけた声が聞こえる。

それに反応して「ん……。」と唸りながらも目を開ける。

視界には女の子の顔がドアップで映っている。

それを頭が認識した瞬間に、

「ふやあああ!?!」

いつもと同じように叫び声をあげて後ずさった。  
「ひゃあああ!」

僕のその反応に驚いたのか女の子も悲鳴を上げて後ずさりした。  
お互いに自己防御の姿勢をとる。

数秒の時間を経てゆっくりと目を開ける。

すると女の子の方も恐る恐る目を開けるところだった。

「え…… ええと……」

「あ…… あ……」

どちらもまともに言葉を紡がないまま更に時間が流れる。  
さすがに空気に耐えられなくなり僕が先に沈黙を破った。

「その……、ごめんなさい…… 大声だしちゃって……」

蚊の鳴くような声で謝る。

「え?…… いえ! そんな! その…… こちらこそ…… 急に声かけちゃって…… びつくりしましたよね……」

「そーそんなことないです!!」

気まずい空気の中、途切れ途切れに言葉を発する。

「あ、その…… 状態の確認…… 終わりましたよ? とても綺麗でした! 大切に保存してく

れたんですね!」

そんな空気を打ち壊すように女の子が笑顔で言う。

僕は山積みの本の中に埋もれていた事を言おうか一瞬だけ迷いすぐに黙っておくことに決めた。

「どうかしたんですか?」

女の子がキョトンと首を傾げながら聞いてくる。

「な～なな、何でもないです!」

僕は誤魔化すように言う、「ありがとうございました!!」と叫ぶように言い残し、鈴奈庵を後にした。

不思議そうに僕を見る女の子の顔が見えた気がしたが、気のせいだと言いついて家路を急いだ。

続く……………。

小さなおまけく鴉天狗の取材録く

「ヤッ……………」



心音鞆を見送った射命丸文は一つ息を吐き出して、そして。

「それでは！尾行兼護衛をしますか！」

いそいそと尾行の準備を始めた。

「随分とゆつくり行くんですね……。」

射命丸文は、尾行……と言うには余りにも堂々と上空から心音鞆を見下ろす。

「もうちよつと急げば……つてあれ？」

ふとした瞬間に心音鞆を見失い射命丸文は辺りをすぐに見回す。

「ああー！いたいた。ん？……何してるんでしょうか……？」

熱心に一本の木を観察する少女の姿を興味深そうに見つめる。

すると……

「ひゃあああああああ!!??」

心音鞆の悲鳴が辺り「帯に響きその木が唐突に淡い光を帯びた。

「あや？」

射命丸文は面白そうにその光景に見入る。

その後心音鞆が恐る恐るその木へと近づく。

お伽噺なら月の姫でも出て来そうだが正直幻想郷に二人もいらないのでそれはやめ

てほしいが……。

そんなことを考えていると、心音鞘が意を決したように木へと触れた。  
そして、

《ヒュウウウウウン》

そんなありきたりな擬音と共に木に宿っていた淡い光が心音鞘に吸い込まれるようにして消えた。

「やはり、なかなか面白いですねえ……。彼女は……。退屈しません!。」  
射命丸文は楽しそうにそう呟くと、人里へと向かう心音鞘を引き続き尾行した。

## 永遠亭の取材

## 6章 1話くバカはなんとやらく

何処……？（こ）……。

僕は自分の居場所が分からないまま、辺りをさまよう。

進んでも進んでも似たような景色。

「あれ……？（こ）さつきも……？（こ）あれ？」

そんな事を呟きながら僕は文さん達を探して竹林を進んだ……。

「もう……！ 何処なんですかあ……（こ）こお……（こ）……。」

涙目になって嘆く僕の声に答える人など当然いるはずもな……

「だれだ？」

さて…… まず状況を整理しよう。

……とはいつても整理できるほど理解している自信はないのだが……。

ええと……。まず、文さんは咲夜さんから『面白い情報』を仕入れてこの紅魔館に取材に来たんだよな……。

で、その面白い情報って言うのが人が人形のようになってしまふということだった。それで実際にそうなってしまったメイドさんを見たんだ……。うう……。あんまり思い出したくない……。

と、とにかくそのメイドさん……アンネさん（命名：僕）について調べようと仕事仲間のメイドさんや、パチュリーさんに話を聞いたところそのメイドさんは『魂が抜けてしまった状態』だと考えられるらしい。

『魂が抜けてしまった状態』というのは死んでしまっているとは明確に違うらしいけど正直余りよく分からない。

ただ普通には『魂が抜けてしまった状態』になることはないらしく、原因は不明なままなんだそうだ。

ただ、理論上はなることがなくても今回のような事例が過去にあつたらしく、そのうちの一つは『病氣』で片づけられているそうなのだ。

それで、文さんは今からそれに深い関係があるところに行き取材をおこなうと言う。ふう……。一通り整理してはみたものの……。

いつもといえはいつもなんだけど話が現実離れしすぎて……いまいち実感が。

パチュリーさんによると……アンネさんは死んではないものの、もう再び蘇ることはないって言ってたし……。

それって死んでしまったっていうのと何か違いはあるだろうか？。

アンネさんは……死んでしまっている……。

そう考えた瞬間、吐き気と眩暈が僕を襲った。

「大丈夫？ 顔色が悪いけど」

パチュリーさんの声に僕は

「あーいえ、大丈夫です……これぐらい……平気です！」

努めて明るく答えた……がパチュリーさんは不安げな表情を緩めることなく

僕の顔をマジマジと見る。

「本当？」

嘘を吐くなどというようなパチュリーさんの声に少しだけ戸惑いながらも

「ほ、本当です……、……これぐらい。へ……平気です……。」

それを微塵も表面に出すことなく答えた。

パチュリーさんの呆れた様な視線がグサグサと刺さるが、気にしないようにして文さんに尋ねる。

「そーそれで!!その……次はどこに行くんですか？」

僕の質問に文さんは楽しそうに

「ああ！それなんですがね！」

そう言つて振り向くと行き先についてこう続けた。

「鞆も聞いていたとは思うんですが、過去の事例の中には……あの現象について『病気』という処理を行った物があつたようです。今のところ他に手がかりのような物も見あたりませんし……。まずは病気であるという線で捜査してみようかと。」

文さんは手がかり……。とか……。捜査……。とか……。まるで探偵のように話した。

「なんだか探偵さんみたいですわね……。」

僕が思ったとおりのことを口にする文さんは、少しだけうれしそうに反応して……

「ふふ……。なるほど……。探偵ですか……。面白そうですわね……。」

こう呟く、しかし……。せやかて文さん。と言わんが如く咲夜さんが

「探偵……。つて……。別に報酬はでないわよ……。」

呆れたように呟く。

文さんは軽く手を振りながら、

「勿論分かっていますよ？まあ、ネタになれば何でもいいんですケド。」

そう言つて笑うとスツと立ち上がる。

いきなりの行動に驚き僕は文さんの方を見つめる。

「さて！、それではさつそく！向かいましょうか……………」

「それで、向かうことになったのはいいんですが……………」

そう言つて溜息を一つつくとき文さんは僕……………の後ろを見た。

「なんで貴女がついてきていますか……………」

文さんの視線の先には無表情な咲夜さんがいた。

咲夜さんは文さんの言葉に少しだけ不機嫌そうになると、

「んなつ……………何？その言い方……………私だつて好きでこんな探偵ごっこに付き

合つてるんじゃないわよ！」

口調を強めてそう言つた。

「お嬢様もなんで着いて行けなんて……………何か考えがあつてのことなんでしうけど……………」

続けてこうぼやく。

「ちよ！ちよつと待つて下さい……………探偵ごっこ……………とは、聞き捨てなりませんね……………」

すると文さんが目を光らせて言つた。

しかし咲夜さんは肩をすくめながら、

「だってそうじゃない？こんなことで本当にあの子の状態が回復するとは……それに……『魂が抜けてしまった状態』って……いまいち良く分からないし、手がかりだつてそうある訳じゃないんだから。」

呆れたようにそう言った。

文さんはそんな咲夜さんの様子を見てやれやれというようにため息を一つつく。

「まったく……そんなだから貴女はいつまでたつてもPADなんですよ。そんな道具に頼らずにありのままを晒け出してみては？」

文さんの絶妙に人を苛つかせる声と口調と口元に咲夜さんはいつもの無表情を少しだけ歪ませながら

「どういう意味かしら？」

静かにそう尋ねた。

ちなみに文さんの周りに無数のナイフが突き刺さつてた気がする。

ミエテナーイミエテナーイ。

「まあ冗談はさておき……これは探偵ごっこなどではなく崇高な取材です。まあアンネさんがあなつてしまった理由を探るのであながち間違いでもないかもしれませんが……。とにかく、今ある手がかりのできる限りのことはやりましょう。」



珍しくまじめな表情でマトモなことを言う文さんを見て、僕と咲夜さんは面食らう。そんな僕たちの表情を見て文さんはジト目で

「なんですか……その顔は……。失礼な。」  
不服そうに呟いた。

「いや、珍しくマトモなこと喋ったもんだから……。」

咲夜さんが齒に衣を着せることなく言い放った。

そんな咲夜さんに文さんは先ほどよりも一層不服そうに、

「躊躇なく言いましたね……。まあ……いいですけど。」

また、呟いた。

「さて……それじゃあ向かいますけど……。さすがに行き先を教えないのもアレなので鞆には教えながら向かいましょうか。」

「はーはいー！お願いしますー！」

何故か緊張気味に僕は答える。

「さてーまあ、先ほども言ったように、軽い調査……のようなもののために病気に関する施設に行きます……。見当は……つきますよね？」

文さんは当然答えられるだろうと言わんばかりに僕に答えを求めた。

無論……いくら僕でもここで答えられないほど頭が悪い訳ではない。

「病院……ですよね？」

僕の回答に文さんは満足そうに

「ご名答。」

そう言うのと片手で小さく丸を作った。

「ばーバカにしないでくださいよ！」

口ではそう言いながらも僕はなんだかうれしくて口元の笑みを隠すのが精一杯だった。

「というところで、病院に向かう訳なんです……。その病院の名前は『永遠亭』といいます。何かの資料で見たりしていませんか？」

「永遠亭……。」

僕はその単語を繰り返した。

それと共に一生懸命記憶を探る。

そして、記憶の隅からそれらしき物を引っ張り出した……。

「たしか……。だいぶ前に読んだ記事ですけど……『永遠亭』って場所について書いてあるのがあったかもしれないです……。たしか……腕利きのお医者さんがいるとか……。」

そう言う、文さんと咲夜さんが苦笑いのような表情を浮かべ……

「腕利き……ですか……」

「腕利き……ねえ……」

にたような反応を示した。

記事によると、安眠用の薬なんかも作っていて、しかも効果は絶大だという。

幻想郷には、ちゃんとした病院はここしかなく……幻想郷で病気などになってしまうと皆此処を頼るそうだ。

ただ、いままで会った中で病気にかかりそうな人は殆どいないけど……

天狗の病氣って普通の人でも治せるのかな……

っていうかまずそのお医者さんは普通の人なんだろうか……

僕が頭の中で色々な考えを巡らせていると……

「さて……着きましたね……」

隣で文さんが呟く。

僕は永遠亭に着いたのだと思い、パツと顔を上げた。

しかし……そこに僕の想像したような『病院』は無く、広い広い竹林があるだけだった。

「あの……文さん？永遠亭って……どれのことですか？」

僕はあちこちを見回す。

幻想郷なら見えない建物や隠れ家みたいな病院があつても……不思議じやない……。なんて事はないけど、無いとは言い切れない！そう考えたからだ。

しかし僕の質問に文さんは「あはは」と軽く笑うと

「違いますよ！。着いたのは永遠亭ではなく……迷いの竹林です。」

「迷いの竹林……ですか？」

僕はそのどことなく怪しげな単語を繰り返して呟いた。

名前の通り迷いやすいのだろうか？

そんなことを考えていると……

「ここだけはどうにも苦手だわ……。」

咲夜さんが苦い顔で呟いた。

「私も……どうにも慣れませんねえ……。」

続けて文さんもこういう。

二人の表情を見て、僕は改めて竹林をしつかりと見据えた。

濃い霧が全体的にかかっている道奥の方は何も見えない……。

「こんなところに……入っていくんですか……？」

答えを予測しながらも、一縷の希望を乗せて文さんに尋ねる。

「まあそうなりますね。」

しかし、文さんの答えは酷くあっさりとした希望を打ち砕く物だった。

僕は一度深く深く深呼吸をしてから、「よし！」と呟き、竹林へと入る決心をした。

続く……………。

小さなおまけくメイド長は今日も行くく

「あの……………今……………なんと……………?」

十六夜咲夜はたつた今耳に入った言葉が信じられずに主にもう一度発言を求めた。

咲夜に促されレミリア・スカーレットは表情を変えることなく、

「だからあの天狗達について行きなさいと言ったのよ。」

ケロツとした様子で言葉を繰り返した。

「ええと……………あのパラッチについて行け……………そう仰られているのですか……………」

普段は無表情な咲夜も少し不満げな表情を浮かべる。

「そうよ。もともと情報をあげたのは私達だし、当のあの娘は紅魔館のメイドよ……………つ

いて行くぐらい当然のことだと思おうわよ？」

「し、しかし……。その間仕事は……。」

反論しようとした咲夜にレミリアはそんな時間を与えることもなく

「咲夜、彼女達について行きなさい……。これは命令よ。」

静かにそう言った。

そのレミリアの声に咲夜は数秒間押し黙ると、やがて何かを決意したように目を閉じ。

「承知しました。」

そう短く呟いた。

## 6章 2話〈迷える子兔〉

どうにか竹林へと入っていく決心をしたものの実際はなかなか最初の一步が踏み出せなかった。

それで決心と言っているのかはともかく、僕は竹林の前で立ち尽くす。

目の前の竹林を眺めると、道と言っているのか分からないような砂利の細い線が永く続いている……………様に見える……………。

霧がかかっているせいなのか、どことなく……………なんだろう……………神隠し……………?とかにあつてしまいそうな雰囲気だ。

うう……………やっぱ若干怖い。何だか紅魔館などとは違う不気味さで入るのを躊躇ってしまった。文さんや咲夜さんと一緒だと分かっている……………どうにも……………。

すると……………唐突に……………いつもはポンコツであるはずの僕の脳が回転したのを感じた。

何とも情けないことに、こういうことになる人間というのは頭が働くようだ。

「そうです…文さん。」

僕は自分の提案に目を輝かせながら文さんに声をかけた。

「何ですか？」

文さんはいつも通りの笑顔で返す。

「思いついちゃいました!!!」

僕が自信満々にドヤ顔を貼り付けて言うのと、文さんは手をたたき

「わーなんですか？。すごくたのしみですー。きつとすごいことなんだろうなー。」

先ほどと変わらぬ笑顔を見せる。

しかしどうにも感情のこもっていない声になる。

咲夜さんに至っては顔全体でどうせろくなものじゃないだろうと言っている。

「どうせ、ろくなものじゃないでしょう。」

あ…… 本当に言っちゃった。

僕ってそんなにろくな事言ったことがないだろうか？。

僕が軽く傷心していると、

「まあまあ…… とにかく聞いてみましょう。それで思いついた事というのは？」

文さんが慰めるようにして僕に発言を促した。

僕は「は、はい。」と返事して、もう一度気を取り直し……

「それでは！驚かないで聞いてくださいいね!!。」

そして相変わらぬドヤ顔で言う。



咲夜さんも相変わらず疑わしい目をしている。

文さんもまた、相変わらず営業スマイルを貼り付けていた。

そして、僕は勢いよく言い放った……………。

「ああ……………」

「ああ……………」

二人が似たような反応を示す。

無論二人とは文さんと咲夜さんのことだ。

「どうです?…………… いい考えじゃないですか?」

得意顔の僕は二人の表情に気づかない。

「まあ…………… そうくるような気はしてましたけど。やっぱりそうきましたか……………」

文さんは苦笑いを浮かべる。

咲夜さんも、

「まあ…………… そう考える気持ちは分からないことはないけど。」

そう言つてフォローするように僕の肩をたたいた。

あれ?僕の提案…………… 駄目なのだろうか?

僕は自信満々の提案を何だかやんわりと否定されて何ともいえない表情になる。

「決して悪い案ではないんですよ？ただ、少し問題がありました。……。」

文さんは僕を傷つけないためか言葉をオブラートに包みつつ僕の肩をたたいた。

僕は控えめにもう一度言う。

「え…… だってこんな竹林、文さんと飛んで行っちゃえば簡単に……。」

全て言い終わる前に文さんは竹林の上の方を指さした。

その方向を見やる。

「あ……。」

思わずこう声を上げた。

自分の観察力不足にため息をつきたくなる。

竹林に霧がかかっているのだから当然その上を飛ぶのであれば霧の中を飛ぶことになる。

そんな無謀なことはいくら文さんでもしないだろう……。しないよな？

それでも……。

「で、でも、霧よりもつと上の方を通れば……。」

僕は諦めきれずに文さんの無言に反論する。

しかし僕の言葉に文さんと咲夜さんは暫く不思議そうに首を傾げる。

その後文さんが「ああ……。」と何か納得したようなつぶやきをもらすと、

「ええとですね。鞆は多分根本から勘違いしていますけど。永遠亭は『迷いの竹林の中』にあるんです。」

そう苦笑いを浮かべた。

「え……。」

予想外の言葉に僕は間抜けな声を出した。

こんな風にするのも何回目だろうか……。

一向に慣れることはないな……それに、これからも慣れないんだろうな。

……じゃなくて！

「竹林の中って……病院なんですよね!？」

「はい。」

文さんの迷いない回答に今一度竹林を見る。

一言で言い表すのであればそれは……《不気味》という言葉がもつともしっくりくる

であろう。

濃い霧で覆われ、ほとんど先の方を見ることは叶わない。そのためか目の前の道がずっと続いているように錯覚する。

……本当に『竹林を抜けた先』ではなく『竹林の中』に永遠亭があるのだろうか……。

か……。

少なくとも僕は病院へ行くためにこの竹林の中へと進んでいく勇氣も、こんな所にいるお医者さんにやつかいになる勇氣もない。

「本当にこの中に？」

僕の疑いの目に文さんは表情は変わらない。

「はい。」

相変わらずの2文字の返事に僕はため息をもらして今度こそ、しっかりと竹林へと歩み行く決心をつけた。

いや……………この場合諦めをつけた。の方が正しいのかな……………？

ガサツ

「ひいつ!？」

草むらから聞こえた物音に子兎のように体をビクツと震わせながら音のした方向に振り向く。

すると本物の子兎が草むらから飛び出してきた僕たちの前を横切った。

「ふう……………びつくりしたあ……………」

僕は安堵の息をもらし、胸をなで下ろした。

「そんなにびくびくしなくても……………」

そんな僕に咲夜さんが呆れたように呟く。

続けて文さんも

「まあ……あれだけ怯えてましたし……無理もないでしょう……………」

苦笑いしながらそう言った。

「お、お。怯えてなんて、い、いけませんから。」

僕は膝を震わせながら強がる。

「そうですか……それならいいんですケド。」

文さんは全く信じていないという風に笑う。

怖い物は怖いですよ！。

「そ、そんなことより！永遠亭まではあとのくらいの距離が？」

僕はあからさまに話を変える。

「ああ……ええと……たぶん……おそらく……約10分ぐらいで着けるかと……思

われます……。」

文さんはあからさまに目線を逸らしながら答える。

僕と咲夜さんに冷たい目を向けられながらも文さんは知らんぷりを強行した。

「はあ……まあはぐれでもしない限りは大丈夫でしょう。」

咲夜さんは文さんに聞こえるようにわざと大きくため息をつくと言った。

「そうですね……くれぐれもはぐれないように行きましょう……！」

咲夜さんの言葉に文さんが便乗する。

しかし再び僕たちに冷たい目を向けられてすぐに目線を逸らした。

僕は一抹の不安を覚えつつ文さん達と一緒に歩みを進めていった。

「さて、もうそろそろですかね……」

文さんが周りを眺めながら呟く。

僕も周りを見渡すがさつきからの景色とどこが違うのかまったく分からない。

文さんはどうやって判断しているのだろうか……

そんな素朴な疑問を抱くがすぐに考えても無駄だと悟る。

もうすぐで目的地に着くと聞いても目的地が目的地だけに余り喜べない。

永遠亭か…… どんなどころなんだろう。

僕は心の準備をしておこうと思ひ、永遠亭について色々と思考を巡らせる。

今知っている情報と言えば……

まず、病院であること……

そして腕利きのお医者さんがいること……

あと、霧の濃い『迷いの竹林』の中に存在する…… ってこと。

………  
 思ったよりも情報が少なくて渋い顔をする。

これだけの情報では顔を半分縫っていて、高額を請求する無免許の天才外科医ぐらいしか想像つかない。

病院と言えば……… 僕は幻想郷に来てから病気という病気は起こしてないけど……… 体は強い方なのかな？

記憶を取り戻せばそんなことを考える必要もないんだろうけど………

……… ん？いや？ちよつと待てよ………！！

今から行くのはお医者さんなんだよな………

それで、僕は記憶喪失………

………、もしかすると記憶を取り戻すことができるかもしれない………！！

そんな期待に顔を輝かせる。

「文さん!!。永遠亭が病院なら………。つて、あれ？」

しかし僕の視界には文さん………そして咲夜さんの姿は見あたらず、さつきから飽きるほど眺めていた竹林の景色のみが広がっていた。

………

「………え？」

そんな声が竹林に響いた。

「どどどど……どどどど。どうしよう……ドウシヨウ……ドウシヨウ……どうし……」

バカみたいにそれだけ眩きながらぐるぐると円を描くようにせわしく動く。

半ばパニックになりながら……いや……半ばなんかではなく完全にパニックを起

こしながらいつまでも「どうしよう」と同じ言葉を繰り返し眩く。

なんだかデジャヴだ。

………あ……そうか。前に紅魔館に来るときも……道に迷って……

ん？。

ここで、僕はある違和感を覚えた。

「あれ？紅魔館に行く途中……確か……道に迷って……それで……大ちゃんと会っ

て……。その後……大ちゃんの様子がおかしくなって……それで紅魔館に向かって……

このことを文さんに伝えただよな……。ん？」

再び違和感を覚える。

何かが引つかかる……。何かが……



「そうだ………！」

思わず声に出して手をたたいた。

「迷ったはずなのに……… なんてその後、普通に紅魔館に向かえたんだろう………？。」

違和感の正体に気づき、今度はその矛盾について考え始める。

なんで？ なんで？ と頭の中で色々な思考を巡らす。

しかし、一向に結論はでることなく……… 考えても仕方ないと判断し、何らかのはずみでコロツと紅魔館への道を思い出したという事にしておくことにした。

……… 少し無理があるだろうか………。

……… 今はそのこと考えてる暇はない!!。

どうにかしてこの危機を乗り越える方法を考えなくては………。

僕は腕を組み、目を瞑ってじっくりと思考する。

危うく居眠りを始めようとする頭をどうにか起こしつつ熟考の末、出した結論は………。

《とりあえず歩き回ってみる》

という紙がかったものだった。

「はあ……………」

続く……………」

## 6章 3話〈迷子は迷子センターまで〉

「……………」

僕は辺りを見回し、警戒しながら竹林を進んでいく。

特に警戒する必要はないのかもしれないけど、ついついそうしてしまう。

環境は人を変える……ってどこかの偉い人が言ってたけど本当にそうなのかもしれない。

「うー…………。景色が変わらなくて進んでる実感が全く湧かない…………。」

ぶつぶつと呟きながらただただ歩き回る。すると代わり映えのない景色に少しだけ変化が生じた。

「あ……………この石。」

細い道のど真ん中に手のひらを目一杯広げたぐらいのサイズの石が二つ重なっていた。

「あれ？じゃあ……………さっきも？」

他でもない。僕が目印の代わりに積んでおいたものだ。

「……………はあ」

それが意味するのはつまり、同じ場所へ戻ってきたという事。

「真つ直ぐしか進んでないはずなのに……………」

訳が分からなくなり僕は頭を抱える。

そんな風に混乱してくると目の前の目印が本当に自分で積み上げた物なのか不安になつてくる。

こんな形だつたつけ？

こんな色だつたつけ？

もう少し小さかったかも……………」

一度不安になつてしまうと、そこから風船のようにもわもわと疑念が大きくなつていく。

「もう！何処なんですかあ……………ここお……………」

涙目になつて嘆く僕に答える声など当然あるはずもな……………」

「誰だ？」

「ひゃあああああ!!??」

まったく気配がなかったのに唐突に声をかけられ僕は飛び上がり、すぐさま後ろを振

り向いて声の主を確認する。

そんな僕の反応に驚いたのか声の主は若干後ずさった。

目の前の女性は綺麗な白い髪に御札……………？のような飾りをつけている。

白いシャツと赤いズボンにサスペンダー……………っていうのかな？そういうのには疎いから良く分からないけど……………。

まあ、そんなに特徴的な格好ではなかった。

幻想郷に来て、感覚が麻痺しただけなのかもしれないけど……………。

「あんた……………何してんだ？」

彼女は不思議な物を見るような目で僕を見つめる。

「あえ……………？ええと……………僕は……………。その……………」

別に訊かれてまずいわけでもないのに目を地面の方へと逸らした。

そして数秒にも満たない思考の後、

「文さ……………ああ……………ええと……………。永遠亭の取材に……………」

こう答える。

別に文さんの名前を伏せる必要はないのかもしれないけど何となく……………。

「永遠亭……………取材……………。？あんた天狗の仲間か？」

女性に続けて訊ねられる。

「ん…………。ああ… そんなようなものです。」

わざわざ訂正する必要もないし、何より助手つて言うよりも断然聞こえがいい。心の中でちよつとだけ喜んだ。

「で………… ここです迷っていたと？」

すると女性が凶星をついてくる。

「あはは…………。」

僕は思わず苦笑した。

「それより… 永遠亭に取材ねえ………… 物好きなこつた…………。」

女性は呆れたように呟く。

この反応からするとやはり永遠亭はろくな場所ではないのだろうか…………。

「あ、そういうえば名前がまだだったな。私は藤原妹紅。妹紅でいいよ。」

つぎつぎと話が変わって若干置いていかれているが、とりあえず自己紹介が始まったので自分も名乗る。

「あ… ええと。心音鞆と言います…。刀を入れる鞆とかいてさやです。」

「ああ… よろしく。」

妹紅さんは軽く笑うとそう言った。

印象としてはどこことなく男勝りで魔理沙さんと似たような感じだ。

ともかく、決して悪い人ではなさそうだから安心する。

「妹紅さんはここで何を？」

今度は僕が妹紅さんに質問する。

「ん……ああ、散歩かな……。」

「散歩……ですか」

こんな竹林でわざわざ……？と訊きたかったが何か都合があるのだろう。

深く追求するものでもないと思ひ、それ以上訊くことはなかった。

代わりに違う質問をする。

「ここで散歩……って、迷うことないんですか？」

明らかに散歩に適している場所ではないし、第一戻ってくる事ができるとは思えない。  
い。

しかし妹紅さんの答えは

「ああ……慣れだな。慣れ。」

こんな軽めなものだった。

「慣れ……ですか……。」

驚きの余りポカンとした表情になっていたと思う。

しかしすぐに表情を正し、

「すごいですね…。こんな場所で迷わないなんて。」

そう素直な感想を述べた。

「ははは…。そんなことないよ」

妹紅さんは笑いながら謙遜した。

「それより、永遠亭に行きたいんだろ？連れてってやるよ。」

すると妹紅さんが思わぬ提案をしてくれた。

「ほ、本当ですか!？」

嬉しさのあまりペアつと顔を輝かせる。

「ああ、別に減るもんでもないし、このままほつとくわけにもいかないしな。」

そう言っつてちよつとだけ照れたように笑った。

「幻想郷にはこんなに良い人もいたんですね……………」

「… 大袈裟だなあ……………」

今度はしつかり照れる。

そんな様子がとても可愛かった。

「にしても、さつきも言っつたが永遠亭に取材とは物好きだな……………何を取材するんだ

?」

永遠亭へと向かう道中、妹紅さんが僕に訊ねた。



「ああ…… ええとですね……。 ううんと……。」

僕は全て教えてしまってもいいのか迷う。

しかし、助けてもらったのに何も喋らないっていうのは失礼かな……。

そんな風に返答を迷っていると、

「ああ、悪いな……。 そりやそういうことやってるといえないこともあるよな。」

妹紅さんが察してくれたのか、そう言つて会話を終わらせた。

「ご、ごめんなさい……………」

僕は一言謝ると再び妹紅さんと永遠亭へと向かう歩みを進めた。

「……………」

永遠亭へと向かう間沈黙が流れる。

「……………」

なんとも気まずい沈黙だ。

妹紅さんは何ともなさそうだけどちよつと僕には耐え難い。

何か話した方がいいんだろうか……………」

いや、でも相手は話す気がないのに一方的に話すのはちよつと……。

でも、ずつと何も喋らないのはなあ……………」

僕がもんもんと思考を巡らせていると……。

「ここを真つ直ぐ行つたらすぐに着くよ。気をつけてな。」

「え!? あ、はい!」

急に妹紅さんに言われ、変な声で返事をする。

どうやら永遠亭の近くに着いたようだ。

「妹紅さんは来ないんですか?」

「ん? . . . ああ、私はいいいよ。別に用があるわけでもないし。」

妹紅さんは少しだけ苦笑しながら答える。

「あ、そうですよね. . . 。ごめんなさい. . . 。」

余計なお世話だっただろうか。

ともかく、連れて来てくれた妹紅さんにお礼を言う。

「はは. . . いいよいいよそういうのは。永遠亭の奴等によろしく言つてくれ。」

妹紅さんは爽やかに言う、最後に僕にそう頼んだ。

どこことなく心ない言い方に聞こえたが気のせいだろうか。

「分かりました。」

僕はそう言つて微笑むと妹紅さんと別れて永遠亭へと急いだ。

「あ! 鞆じゃないですか! 探したんですよ!」

妹紅さんと別れた直後、文さん達と出会った。

「あー文さん。」

妹紅さんと離れ、また一人になり、不安になっていたところの再会だったからか自然と表情がゆるむ。

ホツと安堵の息を漏らした。

「いやあ、いつの間にかいなくなってしまうものですから焦りましたよ……無事ですよかったです。」

「文さん……。」

文さんの優しい言葉に涙腺が崩れかける。

しかし、

「よく言うわ。『永遠亭の周りにいればそのうちどうにかしてやってくるでしょう……多分。』とか言ってたくせに。」

すぐに頑丈な防波堤を築き始めた

「……………」

文さんにはこやかな笑顔のまま明後日の方向を向く。

「うう……ちよつと喜んで損しました……………」

僕が恨めしそうに文さんを睨みつけると文さんは「えへへ……」とバツが悪そうに苦笑

した。

「そ、そんなことしたって惑わされませんからね!!」

若干惑わされそうになりながら強気に言い放つ。

「まあそんなことは置いておいて早速永遠亭に向かいましょう。」

すると文さんが話を変えた。

なんだかはぐらかされたような気がするが確かに急いだ方がいいだろう。

「そうですね……。アンネさんも、早く診てもらった方がいいでしょうし。」

咲夜さんが担いでいるアンネさんを横目に言った。

この状態では診せるのに早いも遅いもないのかもしれないけど……。

「章の真ん中をとうに通り越しているのに未だに目的地に着いていないなんて前代未聞ですよ……全く。」

文さんが何だかよく分からないことを呟いている。

《章》とか《真ん中》とか何のことだろう？

でも気にしたら負けなのかなと思ひ、深く追求するのは自重した。

「さて、着きましたね……。」

文さんがやれやれといった様子で言う。

「ふう……。」

咲夜さんも疲れを吐き出すようにため息をついた。

「(一)が……永遠亭……ですか……。」

僕は今まで想像してきた永遠亭と目の前の永遠亭を比べてみる。

まず、一番の印象は、『思ったよりまともそうな場所』ってことだ。

施設自体はちよつと年季が入っていて、いかにも老舗……って感じた。

お医者さんに対して老舗って言葉は使えるのかな……？

周りには適度に植物もあつて結構良い雰囲気である。

施設の印象は思っていたよりも数倍よかつた。

まあ……こんな竹林の中にある……ってことを除いてだけ……。

そんなことを考えていると不意に足下に不思議な感触がはしる。

「えっ!？」

すぐに足下を見やる。

そこで僕の足に構って欲しそうにすり寄ってきていたのは……。

「あ……!! 文さん……!!」

僕は震え気味の声で文さんと呼ぶ。

「なんですか……ってあやや……。」

文さんは微笑ましいと言うように微笑する。

「あらあら… 人懐っこいわね…。」

咲夜さんも心なしか羨ましそうな声色で、呟く。「

う… う…。」

そう。僕の足にすり寄ってきていたのは…。

「うさちゃん!!… かわいいくく!!」

僕はすぐに足下のウサギを抱き抱える。

クウンと小さく鳴いて気持ちよさそうにくつろぐ。

「文さん!!モフモフしてます!!モフモフです!」

ウサギをなでながら僕は興奮気味に言う。

顔は嬉々としていただろう。

「ははは。」

文さんは微笑みながら答える。

「咲夜さんも言っていましたけど人懐っこいですね…。何も抵抗しないなんて…。」

なおもウサギをモフリつつ呟く。

顔は恐らくとろけていたことだろう。

そんな疑問を抱いていると後ろから声が聞こえてきた。  
「おーい……。そんなところにいたのー？」

続く……………。

## 6章 4話～寂しいと死んじゃう～

後ろから聞こえた高めめの声に僕はすぐに振り向いた。

するとそこには小さな女の子が僕の方を見て息を切らしていた。

「おやおや、珍しい顔がいっぱいだね……？ どうしたの……？」

女の子らしいピンクの可愛らしいワンピースを着ていて、胸元には大きな人参のネットクスをつけている。

頭には付け耳……？ だろうか……。 兎のように、白い耳がついていた。

見たところ…… チルノちゃん達と同じくらいの歳だろうか？

「あや……？ 貴女ですか……。」

文さんは今にもため息をつきそうな表情で呟く。

「で、咲夜はソレ。何担いでるの？」

女の子は咲夜さんの背中中のアンネさんを指して言った。

文さんが短く

「病人ですよ。」

と答えると。女の子は納得したように頷いた。



「それと、その子を抱えてる君……。見ない顔だけ……。人間？」

女の子に訊かれ僕は「え？」と声を漏らす。

「は、はい……。そう……。ですよ……。？」

「何で疑問系……？」

咲夜さんに突つ込まれてハハ……。と苦笑いを浮かべる。

「その子が親以外に懐くなんて……。人間には懐きやすいのかな？」

女の子の言葉に、僕は腕の中のウサギを見る。

気持ちよさそうに眼を細めて僕の腕に頭を擦りつける。

「あんまり懐かないんですか？このウサちゃん。」

モフモフすると、小さくクウンと鳴く。

とても人に懐きにくいようには見えないけど……。

「あんまりなんてもんじゃないのよ。その子物心ついてからずっと一人でいてね……。親の言うことはそれなりに聞くんだけど、他の子や私の言う事なんて全然。」

女の子は困ったものだと言うように肩をすくめた。

ここで、動物が喋るんですか？と訊くのは幻想郷においては可笑しな質問になるのだろうか……。

少しだけ考えて、飛び出かけた言葉を呑み込んだ。

「貴女は：： 確かこの辺のウサギを続けているんじゃないやなかつたんですか？」

文さんの質問に女の子は

「そのはずなんだけどね。どうもこの子だけは言うこと聞いてくれなくて：：：。」

苦笑してそう言った。

ウサギを：： 続ける：：：。この子はうさちゃん達のリーダーみたいなのだからか？

そんなことを考えているといつの間にか咲夜さんがすぐ目の前に移動していることに気づく。

「ひゃあっ!？」

「えあ：：？ご、ごめんなさい。」

反射的に悲鳴を上げると、咲夜さんはいつもと違う弱々しい声で謝った。

「ど、どど：：： どうしたんですか：：？」

僕は咲夜さんの様子に戸惑いつつ笑顔を作つて尋ねる。

「あ、いや：：： 人間に懐くんだったら私にも懐くのかなあ：：： とか：：。」

咲夜さんはバツが悪そうに視線をずらしながら答えた。

頬はほのかに朱くなっているように：：： 見えなくも：：： なくも：：： ない：：： かな：：：？

「あ……。ええと……どうぞ……。」

僕はそんな咲夜さんにうさちやんを差し出した。

「えあ……。その……やうう……。」

咲夜さんは蚊の鳴くような声で唸ると、うさちやんへと手を伸ばした。

少しだけ震えている。

そして、咲夜さんの手が触れようとした瞬間。

「ううううううう……！！」

僕の腕のうさちやんが低く吠えた。

突然のことに僕はつい手を離しそうになる。

しかし、咲夜さんはもつと驚いたようである。いつの間にか僕と3メートルほど距離を置いていた。

「あ……ごめん……なさい……。」

またもや聞き取るのが難しいぐらいに小さな声で言った。

「クスツ……。」

横で文さんが小さく嘲る。

「人間には懐くってわけではないみたいね……。」

女の子も苦笑する。

「……………あ……うう……………」

「こころなしか涙目の咲夜さんは言葉になっていない言葉を紡ぐ。

「あ、あの……………咲夜さん……………？ええと……………その……………」

「僕は懸命にフォローの言葉を探したが今この状態で何か言葉をかけたとしても全て逆効果だろうと思ひ自重する。

「じゃあ、なんで君には懐いてるんだろかね……………？」

「女の子が不思議そうに言う。

「腕の中のうさちゃんも咲夜さんが離れたと分かると、すぐにまたくつろぎ始めた。

「単に咲夜さんに懐かないだけなんじゃないですか？」

「文さんがからかうように咲夜さんに言う。

「いつもの咲夜さんなら人を殺せる目で文さんを睨みそうなものだけど今回の咲夜さんは拗ねたようにそっぽを向いていた。

「どうやらよほどダメージが大きかったらしい。

「さすがに文さんも空気を読んだのかそれ以上は何もいわなかった。

「うくん……………君……………名前は何？」

「女の子に訊かれ

「あ……………ええと。心音鞆と言います……………。刀を入れる鞆と書いてさやです。」

いつもの通りそう答えた。

「そう。．．女の子みたいな名前だね。私はてゐる。因幡てゐよ。」

もう慣れてしまったのか、性別の訂正をするのを横着し、苦笑ですませた。

それはそうと。．．この子、見た目の割にしっかりしているようだ。

いくつなんだろうか。．．？まあ、小さい子とはいっても女の子だし歳を訊くのは失礼

だと思ひ、やめておいた。

「そうだな。．．人間に懐く訳じゃないなら。．．、最近人参食べた？」

てゐちゃんが僕に尋ねる。

人参。．．．うさちゃんつて本当に漫画みたいに人参が好きなんだろうか？

野菜なら結構何でも食べちゃいそうだけど。．．．。

「いえ。．．．食べてないと思いますけど。．．。」

「まあ、それだけだったら私や他の子とも仲良くできるよね。．．．。そんな匂いもし

ないし。」

てゐちゃんはうくと唸りながら小さな手を顎にあてる。

「動物に懐かれやすい体質だとか？」

「うん。多分そんなことないと思いますけど。．．。」

「先祖がウサギとか？」

「ない……ですよ……。多分。」

「そういう能力？」

「……………それは……分からないですけど……？」

てるちゃんに色々と訊かれたが最後の質問だけはしっかりと否定できなかった。

動物に懐かれる能力……………？

うくん……………うれしくないことは全然ないんだけど……………。

パツとしないというか……………うくん……………。

「鞘！」「鞘！」

そんなことを考えていると、声をかけられていることに気づく。

「え？ああ！はい！な、なんですか？」

「あ、いや。別に特に何。と言うわけではないのですが……考え込んでいる様子だったので。」

文さんは少しだけ心配そうにそう言った。

「ああ、いえ。ちよつと考え事を……………」

僕は笑顔を作り、告げた。

文さんは納得いかないような表情で首を傾げるが、追求はしてこなかった。

「ん？？？悩み事？」

するとてゐちゃんが少し嬉しそうに呟く。

てゐちゃんの方をみると、キラキラと輝く面持ちで手元には『お賽銭』とかかれた箱を持つていた。

それを見て文さんはゲツと言うように表情を濁した。

「お賽銭?.....」

僕が呟くとてゐちゃんが可愛らしい笑顔でうん。と頷いた。

「私はね? 実は幸運を呼ぶウサギなんだ。だからお賽銭を入れればあなたにもきつと幸せが訪れるよ? 悩みなんてすつ飛ぶよ?」

なんだか妙に事務的な雰囲気と言った。

言つてゐることは無茶苦茶な気がしないでもないけど.....

まあこんな小さい子が言うことを頭ごなしに否定するのもな.....

「また、それですか.....。なかなかえげつない詐欺の手口ですね。初対面なら言つてることが多少おかしくても見た目で騙されそうですし.....。」

横で否定する人がいました。

「だ〜か〜ら〜詐欺とは人間きの悪い.....。実際、幸せになれるのは本当だしね.....。」

てゐちゃんは不満そうに頬を膨らませた。

文さんは訝しげにてみちゃんを見ると、

「お金を払う必要があるには思いませんが。」

冷たく言い放つ。

「そもそもお賽銭つて言うのはそんな風に回収するものじゃないでしょう。」

文さんは尚も言い続ける。

「…… まあ！信じる信じないは彼次第だからね……。どう？」

てみちゃんは期待の眼を僕に向ける。

僕はどう答えて良いか戸惑う。

…… とりあえず精一杯申し訳ない雰囲気をかもし出しながら……。

「んと…… ごめんね……？ 僕、今お金持つてなくて……。気持ちだけってこと  
で……。」

こう、答えた。

それと共に軽く文さんを睨む。

僕の財布をすつからかんにした張本人が口笛を吹きながら眼を逸らした。

反省してないな…… この人……。

「ええ……。」

てみちゃんは露骨に残念そうな表情を見せる。



若干心が痛んだけど本当に無いものはどうしようもない。  
改めてもう一度文さんを睨んだ。

「まあ……手持ちがないならしようがないか……。」

てゐちゃんは呟くと賽銭箱をしまった。

……『しまった。』なんて簡単に言ってしまったけどあの大きさのものを小

さな体の何処にしまったんだろうか……？

「それじゃあ、その子は親のところに帰らせないと……。」

そしててゐちゃんは僕の腕のうさちゃんを受け取った。

「あ……。」

僕からてゐちゃんへと移動したうさちゃんは少しだけジタバタと暴れたけどすぐに大人しくなった。

確かに僕にだけ懐くっていうのは本当らしい。

「それじゃあ、また今度ねお兄さん。」

てゐさんはそういつてウインクすると竹林の中に消えていった。

「……………。行っちゃいましたね。」

その場に立ち尽くし文さんに話しかける。

「行っちゃいましたね。」

文さんは適当に返す。

少しだけうさちゃんの余韻に浸りながらぼーっとしていると、咲夜さんを忘れていたことに気づく。

「あ！…… 咲夜さん……… ひいつ!？」

僕は咲夜さんの方を向き、ついつい悲鳴をあげてしまった。

振り向いた眼の前には咲夜さんの顔があつた。

「どつどつ…… どうしたんですか？」

冷や汗をかきながら少しだけ後ずさる。

「いえ。別に……… 行きましようか……。」

咲夜さんはいつも通り…… いや。いつもより爽やかな笑顔で言った。

だけど眼が笑ってない。

色を持たない眼はずっと見ていると吸い込まれそうな気がする。

冷や汗が背中まで伝うのが分かった。

「そうですね……… 思わぬところで時間を喰ってしまいました……。」

文さんがそう言う。

咲夜さんは全然笑ってない笑みを張り付けたまま。

「そうね。」

と応答した。

そして、やつとのことで僕たちは目的地である永遠亭へと踏み入れた。

続く……。

## 6章 5話〜クスリはリスク〜

「……………」

僕は眼を開ける。

「……………あれ？」

意識が朦朧としている。

僕……………永遠亭に……………文さん達と……………

「どうしたの？」

隣から声が聞こえる。

聞いたことがない懐かしい声だ。

「大丈夫？」

ぼやけた視界がだんだんと鮮明になってきた。

「また寝てたの〜？」

横で見たことのない友人が苦笑する。

「あれ？おーい、聞こえてるー？ちよつと〜帰ってこ〜い。」

目の前で手をひらひらとされる。

あれ？ここは…どこ？文さん達は？永遠亭は？

ああ、そつか次体育か…じゃあ…着替えないと…。。。

「……コ……く？ チョツ〇……※んトニ△い丈ブく？ ◎▼ンシつ行☆ウカく」

そうだ。僕永遠亭ニ着いてすぐ倒れちゃって。

そうか。前ノジユ業田上せん生だったから……私寝ちやツてたのか……。

それで、今は……永エン亭のナカ……？

早く着替えチャわナイと……？

あれ？お……し……な。

私？……とも……僕……？

チ……ウ…………わ……は…………。

「!？」

僕は布団から身を起こした。

「あ、気がついた？」

横からの声に肩をビクツと若干震わせた。

体中に嫌な汗が流れる。

酷く嫌な夢を見た気がする。

思い出せない。

思い出したくない。

思い出しちゃいけない。

自分の中の理性のような何かが記憶を手繰るのを拒む。

そこにある。

そこに記憶はある。

でも触れられない。

もどかしい。

それに、何か強烈な既視感を覚える。

前にもこんなことがあった筈だ。

それも1回じゃない。

何回か……。

「大丈夫？」

完全に自分の世界に入っていた僕に不意に言葉がかかる。

さつきも声をかけてくれた人だった。

黒っぽいブレザーを着ていて長い薄紫の髪は透明感がある。

あと、特徴的なのは、頭の上に付いている付け耳だ。

てめちゃんと同じで兔を模した耳に見える。

それに……とても綺麗な赤色の眼をしている。

なんだか見つめていると吸い込まれそうだ。

「綺麗ですね……」

気づくと思わずそう呟いた後だった。

「え？……あつ！」

その女の人は一瞬呆気にとられたように固まった後、すぐに自分の眼を手のひらで覆った。

「ああーっ、っっ……ごめんなさい急に……。驚きましたよね……？」

「あ……いや……だ、大丈夫。」



僕が焦りながらもすぐにそう言った。

その女の人は戸惑ったように視線をそらす。

どこか僕を不審に思っている様子だった。

それはそうか、いきなりあんなこと言っちゃったわけだし……。

僕とその女のひととの間に微妙な距離感が生まれる。

「ええと……ここは……永遠亭なんですよね？」

このままでは少しの間気まずい空気に包まれることになりそうなので何とか会話を繋げる。

それにさつきから軽く眩暈がして記憶が定かじゃない。

一応現在地の確認をしておきたかった。

「……そうよ。いきなり天狗があなたを担いで来るもんだから驚いたわ。」

どうやらここは永遠亭で間違いないらしい。

それに、これは夢じゃなく現実のようだ。

少しだけ安堵する。

それにしても……また倒れちゃったのか……、いくら何でもこう頻発すると心配になつてくる。

そういう体質なのかな……。

「それで、今意識はすっかりとしてる？」

すると女の人が僕に訊く。

「熱は多分引いてると思うけど……。」

熱があつたのか……。

僕は自分の額へと手を当てる。

どうやら平熱のようだ。意識もすっかりとしているし特にどこか痛むわけでもない。強いて言うなら変に頭痛がしていたけど今はそれももう影も形もなくなっていた。

「ええと……大丈夫……だと思えます。貴女が看病を？」

僕が尋ねると女の人はコクリと頷いた。

「すいません。ご迷惑かけちゃつて。」

僕が頭を下げる。

「いやいや、ここは病院だから。」

女の人は笑みを浮かべて答える。

どうやら悪い人ではなさそうだ。

そもそも看病してもらつたのにこんな言いぐさは失礼かもな……。

「えっと、僕は心音靴と言います。刀を入れる靴とかいてさやです。あの……宜しくお願います。」

僕がいつものように自己紹介をする。

するとその女の人は自分も紹介し返さなきゃいけないと考えたのか

「あ、私は鈴仙よ……宜しく。」

そう言つて微笑んだ。

「そう言えば……文さんたちは今どこに？」

「え？……ああ、天狗たちならお師匠様のところにいる筈だけど……、そう言えばなんだかおかしい患者を連れていたけどあの人は何？格好はメイドみたいだったけど。」

僕の質問に対して答えた後、質問が返つてきた。

と言うよりお師匠様？つてことはこの人はお弟子さんなんだろうか？

だとしたら僕と同じ……じゃないか……僕は助手だもんね、雑用だもんね。

そんなことより訊かれた事に答えよう。

でも少しだけ、どう答える迷う。

………というよりはどう答えようか考える。

僕も全て理解してるわけじゃないし………。

むしろ殆ど理解できてないし………。

そんな風にぐにやぐにやと曲がる思考を何とか固めようとしていると。

「……………あら、鞘じゃない。」

意外にも、聞き覚えのある声がかかった。

この声は……………!

「れ、霊夢さん!?なんでここに?」

振り向いた直後にすぐ尋ねる。

そこにいたのはお金に目がない巫女さんだった。

どうにも霊夢さんとは何かと会うことが多いなあ、何かの縁があるのかもしれない。

「病院にいる理由なんてそう多くないと思うけど?」

霊夢さんはため息をつきながらそう言う。

「あ、貴女寝てなくていいんですか?」

鈴仙さんが尋ねる。

訊かれた霊夢さんは何ともない、といった風に手をヒラヒラとさせ、

「不安なぐらいすこぶる調子良いわよ、あの妙なクスリのおかげで……………味は酷かった

けど……………」

そう言つて乾いた笑いを浮かべる。

妙な……………クスリ…。

「妙な、とは聞き捨てなりませんね……………。師匠が直々に配合した特殊な頭痛薬ですよ?」

「これ以上ないくらい怪しいじゃない。それにあの味は流石に酷いわよ。」  
煽るように言う霊夢さんを鈴仙さんが睨みつける。

マンガなんかでよく見る火花が散る演出が眼に見える。

なんだか自分がここにいてもいいのかわ不安になってきた。

「巫女つて意外と教養無いのね『良薬は口に苦し』つて諺知ってる?」

「今のご時世、薬の一つぐらい子供でも飲めるようにしないと医者としてどうかと思うわね。」

霊夢さんがなんだか無茶苦茶な理屈で反論する。

どうにもこの二人は仲が悪いらしい。

こういうのはあんまり関わらない方がいいだろうと僕は傍観者を努める。

そのまま数十秒ほど言い合いを聞いた後ふと霊夢さんが僕に話しかける。

「あ、そういうえば鞘こそなんでここに?」

どうやら言い合いの末勝利したのは霊夢さんだったようだ。

鈴仙さんは恨めしそうな眼で霊夢さんを睨んでいる。

「ああ……ええと、実はですね……。」

僕は永遠亭に来ることになった経緯を簡単に説明した。

といつてもやっぱり僕だって理解できてないから何だかわ変な説明になってしまった。

「はあ……まあ大方は理解したわ。多分。」

霊夢さんは額に人差し指をあて考えをまとめるように眼を閉じる。

鈴仙さんは途中から完全に首を傾げて理解が追いついてないという様子だった。

「まあ、兎にも角にも文に聞くのが良さそうね……。」

霊夢さんは呟くと鈴仙さんに文さんの居場所を尋ねる。

「その……アンネ……さん？を看てる師匠と一緒にいるはずだから……。」

鈴仙さんはそう言うところまで案内すると言ってくれた。

「あら、起きたのね？それに霊夢も……。」

鈴仙さんに連れられ診療室のような部屋へたどり着く。

というよりもそこにいる女性をみる限り診療室で間違い無いだろう。

そこに座っている女性は赤と青で分かれたナース服……？を着ている。

長い銀髪を後ろで結んでいて何だか『大人の女性』ってオーラを醸し出している。

ベッドに横にされたアンネさんを注意深く観察するようにしていたところだった。

部屋の端には咲夜さんと文さんが邪魔にならないようにかちよこんと座っていた。

「おお、お目覚めですか。気分はどうです？」

「あ、えつと……はい。大丈夫です、迷惑かけちゃってスイマセン……。」

僕がその場の全員に伝えるつもりで言った。

「いいのよこれぐらい……気にしないで……。」

ナース服の女性が微笑む。

何だか今まで聞いてきた噂の割には普通な感じだ。

まあ、病院が建っている場所が場所だけ……今のところは美人のお医者さんってイメージしか抱けない。

「そういえば貴方、なかなか面白い体をしてたわね。」

そんなことを考えているとナース服の女性に急に話しかけられる。

「え……? あ、は……はい……えっ!？」

言われたことを理解した瞬間驚きに声を上げる。

面白い体……? ?

ということとは寝てる間に何かされたのだろうか……。

バツタ人間みたいに改造されていないだろうか……。

僕は自分の体をマジマジと観察する。

「人間の女の子らしい体つきだけど何だか不思議なところもあつたわね。貴方名前は？」

「え? 女の子?」

横で鈴仙さんが驚いたように呟く。

僕は男の子と間違えられなかったことに少し驚きつつ、

「ああ……ええと心音鞆と言います……。刀を入れる鞆と書いてさやです。」

そう自己紹介した。

「心音鞆……ね。覚えておくわ。私は八意永林よ……宜しく。また今度詳しく体を診せてくれないかしら？」

永林さんはそう言うのと妖艶な笑みを浮かべた。

なんだか背筋がグツと伸びる。

さらに冷たい汗が流れるのが分かった。

来るまでに聞いていた情報も何となく間違っていない気がした。

「そう言えば鞆は何か永林さんに聞きたいことがあったのでは？」

すると文さんが僕にそう尋ねる。

そうだ！能力のことについて、永林さん、お医者さんなら何か分かるかもしれない！

と思っていたんだ。

あれ？でも、何で文さんがそれを知っているんだ？。

僕の記憶上そのことを文さんに話した覚えはない。

僕みたいに単純な思考をしている人間の考えていることなんて手に取るように分か



る………ということだろうか？。

まあ、今はそこはどうでもいい。

とにかく永林さんに訊いてみよう。

もしかしたら僕のその……能力……も明らかになるのかもしれない。

僕は淡い期待を胸に抱きながら永林さんにその旨を伝えた。

しかし帰ってきた答えは予想とは反して、

「ごめんなさい。そういうのは分からないの……生物の魂に直接関係してくることだから……。」

こんな答えだった。

「そうですか……。」

僕はガツクリと肩を落とす。

やはり結局能力に関しては分からずじまいなのだろうか……。

「そういうのに関してはあるが専門じゃない？」

すると思わぬことに永林さんが僕の後ろを指さして言った。

その指の先には……

「へ？」

急に話を振られポカンとする霊夢さんがいた。



## おまけ編 6

## おまけ編 1話く暇な時間ほど辛い時間はないく

「あれ？なにやってるんですか？文さん？」

僕はガサゴソと棚を漁る文さんに後ろから声をかける。

「あやや！ビックリしましたー。鞆、いたんですか？」

「ビックリしてないですよね……………」

棚を漁る手を止めず視線を棚から外さない文さんのため息混じりに呟く。

「見ての通り探し物をしてますけど……………、何か用ですか？」

文さんはきよとんと僕に尋ねる。

「いや！別に特に何か用がある……………ってわけでも無かったんですけど…。」

ただ単にさつきまで読んでいた本を読み終え、することもなかったので仕事場を特に目的もなく歩き回っていただけなのだ。

「ええと……………、探し物手伝いますよ？なにを探してるんです？」

僕は文さんに提案する。

しかし文さんは

「あ……いえ。別にたいしたものでもないですし大丈夫ですよ？鞆はゆつくりしててください。」

そう言うのと棚を探っていた手を横に積み上げてある資料の方へと向けた。

「あ……そうですか……ごめんなさい……。」

僕は断られてシユンとしながらさつきまで本を読んでいた部屋まで、戻った。

「……。」

「……。」

「オー……や。」

「……。」

「……やーきこ……てますか？」

「……。」

「鞆！……起きてください！」

「ひにや？」

文さんにはつぺをぺちぺちと叩かれ僕は重いまぶたをどうにか開ける。

半眼に映る世界はどうにも不鮮明で脳が状況を把握するまで時間を要する。

「……あれ……う……ど……？」

思わずそんなことを呟く。

ぼやけた視界と半分寝ている頭ではそんなことすらも不確かだ。

「……………なに寝ぼけてるんですか……………？ 私の仕事場ですけど……………？」

文さんは呆れたように言う。僕のおでこへと右手を向かわせる。

……………そして……………。

《ペシン！》

「ふあや!？」

軽い音と共に頭部に唐突な痛みを覚え、僕は言葉になつていない言葉を発する。

両手を自分のおでこへと当てて、ささる。

「なな……………なにするんですかあ!?!文さん!」

僕は文さんに向けて抗議の目を向ける。

「いや、目が覚めると思つて……………」

文さんはそう言つて可愛く笑い、照れるように後頭部を搔いた。

「うう……………」

そんな風にされると……………、どうにも責めにくい。

もしかして文さんはそこまで考慮してこんな風になっているだろうか？

……………恐ろしい娘……………!

「それで……探し物は見つかったんですか？」

ちよつと不機嫌な僕が尋ねると、文さんは僕の隣に腰掛け、

「ええ、見つかりましたよ。ちよつと手間取っちゃいましたが……。」

右手のペンを弄る。

手間取った………つていうことは僕は結構寝ていたのだろうか？

今更漟がついてないか不安になり確認する。

「大丈夫ですよ漟ついてないですから。」

文さんに苦笑される。

何だか見透かされたようだ……。

僕は頬が熱くなるのを感じながら右手を引っ込めた。

「ち……ちなみに……探し物って何だったんですか？」

話を変えようと僕は尋ねた。

訊かれた文さんは「あく」と、言うのを渋るように呟くと

「秘密です。」

そう言つてクスクスと笑つた。

「なんですかそれ……。」

こう言うときの文さんに無理に追求しても答えてくれないのは分かっている。

無理に聞くのはやめておこう……。  
そう思い僕は会話を溜め息で止めた。

「暇……………ですね……………」

横で頬杖をつく文さんが言う。

「……………そう……………ですね。」

僕は両手を膝に置いて言った。

「過去最高レベルで暇です。」

文さんは相変わらず微動だにせずに呟く。

「文さんの口から暇なんて言葉が出てくるのはちよつと意外でしたけど……………」

僕が苦笑すると文さんはムツとしたようにこちらを向く。

「んっ……………? どういう意味ですか……………?」

「いや……………文さんって……………何ですかね……………ええつと……………マグロ?……………そう! マグロみたい  
にずつと動いてないと死んじやいそうですもん。」

僕の言葉に文さんは少し機嫌を損ねたのか頬を膨らませて、

「ムツ……………鞆のくせに生意気ですね……………」

そんなことを言う。

「ど……どういう意味ですか!？」

「言葉通りの意味ですよ。」

文さんはそっぽを向いたまま言う。

普段は余り心情が読めない文さんがこんな風にムツとしているのを見るとなんだか面白い。

このまますこしからかっていたいような……。

ハッ……、もしかして僕ってちよつとSっ気があるのかm

「いや……、鞆はどう考えてもM寄りでしょう。」

急に文さんが手のひらを顔の前でひらひらさせながらそう言った。

これが僕に対する言葉だったことに気づくまで数秒を要した。

よく考えれば二人しかいないのだから僕に言ったに決まっているのだが……。

「え!?ちよつ!なんで!？」

もしかして文さんは人の心が読めるのだろうか……?

「なに言ってるんですか……鞆……全部声に出してますけど……。」

文さんの呆れる声に僕は赤面し口元に手を当てた。

「そ……そんなことより!なな……なにかやることはないんですか……。」

話を逸らそうと噛み噛みになりながらも急いで言う。



「うーん……そうですね……。新聞の配達（拒否権はない）はまだいいですし、ネタを探しに行くにしてもこの時間からでは……。」

文さんの言葉に外を見やる。

空はほんのりと朱く染まり夕暮れであることを知らせていた。

「なにかしたくてもなにも……。」

文さんは机に突っ伏すように脱力する。

「そう……ですね……。」

僕は適当に返事をする。

「あれ？文さん？」

気づくと横で机に突っ伏している文さんが微動だにしていない。

「文さーん！」

文さんに呼びかけるが返事がない。

まあ別にただの屍になってしまったわけじゃない……恐らく寝てしまったんだろう。

あれだけ日中活動的なら夜眠くなるのも仕方がない。

……でも……あれ？烏って夜行性じゃないのかな？

「……風邪引きますよー。」

考えても仕方がなさそうなので取り敢えず文さんに毛布を持つてくることにする。

「えつと……確かこの辺に……ああ！あつたあつた。」

すつかりこの生活にもなじんできたなあ……。

そんな風にも心の中で苦笑しながら文さんに毛布をかける。

「んっ……。」

文さんは小さくそう漏らすと寝返りをうつて顔をのぞかせる。

とつても幸せそうな顔だ。

「……………」

何気なく文さんの顔をまじまじと見つめる。

真っ白で透明感のある肌……。

唐突に僕の中に文さんの肌に触れてみたいという欲望が生まれる。

(寝てるんだったら大丈夫……だよね……?)

そんな根拠のない自信の元、ゆっくりと文さんの頬へと人差し指を近づける。

妙な緊張のせいで僕の額を一筋の汗が流れる。

ゴクリ……と唾を飲み込む音が頭に響く。

そして……ついに……文さんの頬に僕の人差し指が……。

「だあああああ！暇です!!」

「ひにゅあああああああ!!??」

触れることはなく……、盛大に椅子とともにひっくり返った。

「大丈夫ですか……?すごい音……と悲鳴でしたけど……?」

「痛つて……だ、大丈夫です。……それより……起きてたんですね……。」

僕はあとでたんこぶが出来るであろう後頭部を抑える。

「?……ええ……、毛布を持ってきてもらったあたりで言い出そうか迷ったんですけど……。」

「そ……そうなんですか……。」

僕は飛び出した溜め息を飲み込み、代わりに作り笑いを浮かべた。

「さて……繰り返ししますが……暇なんです。」

「本当に繰り返しますね……。」

文さんは本日何度目かのその単語を呟いた。

「というわけで鞆……。」

そして手を後ろにまわしてゴソゴソと何かを取り出す。

何だろう……猛烈にいやな予感がする……。

文さんが取り出したのは大きな木の直方体に丸い足が付き、1面には9×9のマス目が彫り込まれたもの。

そして5角形に漢字が彫り込まれた小さな駒の山。

まあ……要するに、

「将棋でもしましょうか……。」

文さんがいい笑顔でそう言った。

「何故唐突に将棋なんですか……?……?……?」

「今思いついたからです?」

あっけらかんとした文さんはもう既に盤の上に駒を並べ始めている。

どうやら拒否権は無いようだ。

僕は小さく溜め息をつく。

「ルールは分かれますよね?」

「まあ……一応は……もし知らなかったらどうするつもりだったんですか。」

僕は将棋盤を挟んで文さんと向き合った。

そして自陣の駒を並べ始める。

「そのときはそのときです。」

「……さいですか。」

クスクスと笑う文さんに呆れながら、自陣に玉将を置いた。

「あの……先に言っておきますけど……僕……弱いですよ?」

将棋盤には両陣営とも全ての駒が配備されている。

均等に並んだ駒は見ていると妙に緊張してくる。

「ムツ……勝負の前に弱音を吐くとは感心しませんね……諦めたらそこで試あ……」

「ああああ!!いいです!それ以上はいけない!」

唐突によくわからないことを言い出す文さんの言葉をよくわからない使命感から遮る。

「?……まあ、ものは試しです。一度お手合わせ願いますよ。」

文さんはやる気まんまんの様子だ。

まあ……別に断る理由もないし……。

「お手柔らかにお願いします……。」

僕は文さんに向けて一礼した。

『カタッ』

『……カタッ』

将棋という遊びは何故こうにもややこしいのだろうか……?」

僕は足りない頭をどうにか回転させて次の手を打つ。

『カタツ』

……なんでそこに飛車を置くんדרらうか…。

文さんの思考を読もうとどうにかイメージを湧かせる。

だけど深読みすればするほど余計に文さんの考えが分からなくなってくる。

「大丈夫ですか?」

「はい!?!」

突然の声に裏返った返事をする。

「あ、いえ。意識があるか微妙だったので…。」

文さんは心配そうにこちらをみる。

「え、あ…:はい!だだ、大丈夫です!」

『カタツ』

異様なほど焦り、適当なところに駒を置いてしまう。

「……う?それならいいですけど。」

不思議そうな文さんは僕が動かしだした盤面を見つめる。

そして3秒ほどの熟考の末……、

「王手」

『カタツ』

そんな短い声とともに文さんの手で駒が移動させられる。

「え……。」

僕は盤面を睨む。

相手の香車が僕の玉将をとらえていた。

「えっと……。」

『カタツ』

金将を使い玉将を守る。

しかし、間髪入れずに

「王手」

『カタツ』

文さんの右手が動く。

「……………」

もう逃げられるところはない。

僕は真つ直ぐ文さんの目を見て、

「参りました……………」

深々と頭を下げた。

続く……。



## おまけ編 2話く暇な時間ほど幸せな時間もないく

「いやあ……………予想通り弱いですね……………」

「だから言ったじゃないですか…。弱いですよ？つて……………」

討ち取った僕の玉将を弄びながら文さんはつまらなそうに言う。

「もう一局します？」

「……………お願いします……………」

文さんの誘いに乗って僕は一礼した。

「お願いします」

向き合つてそう言うのと、僕は自分の歩兵を一步前へと歩ませる。

文さんも反対側の同じ位置にいる駒を同じように動かした。

「そういえば鞘……………記憶は少しでも戻ったりしていませんか？」

手を打つと同時に文さんに尋ねられる。

「え？ああ……………はい…特には……………」

《カタツ》

人は何かに集中し出すと必然的に黙ってしまうものだ。

まあ…そもそも将棋というものは当然ながらもと喋りながら行うものではないのだけど……。

僕はこの手の沈黙がどうにも苦手だ。

だから話しかけてもらえるのはちよつとありがたかったりする。

「そうですか………。何か…記憶を取り戻す手掛かりになるようなもの……?」

《カタツ》

文さんは僕の銀将を打ち取り自分の手元へと持つて行く。

「手掛かり……ですか……?」

僕は手を止めて考えてみる。

特に心当たりはない……。

「スイマセン……。多分ないです……。」

《カタツ》

僕は歩兵を進める。

「ま、そんな簡単にいったら苦労しませんよね……。」

《カタツ》

文さんはため息を漏らし、ほぼ間髪入れずに駒を動かす。

手を読まれていたのだろうか……？

僕は長考に入る。

ええと……あそこに角がいるから、金は動かさなくて……。

香車を取ると……、ああ龍がいるから駄目か……。

じゃあ……手元の歩を囷にして……。

《カタツ》

そんな深読みの末、僕は手持ちの歩を盤上に繰り出す。

「王手」

《カタツ》

すると文さんは僕の深読みを知ってか知らずか何の躊躇いもなく宣言した。

「え!?……お……王手って……。」

僕は身を乗り出して盤上を睨む。

しつかりと地味に桂馬が僕の玉将をロックオンしていた。

「ムッ……。」

僕は玉将の逃げ道を探す。

……。

……。

駄目だ……玉将は完全に包囲されている。

「……………参りました……………」

僕は呻くように言つて頭を下げた。

「はい…。まあ……………そんなところだろうと思つてましたけど…。」

文さんは苦笑しつつそう言う。

「うう……………」

「これじゃ暇つぶしにすらなりませんね……………」

「いくら鞘だとはいつてもここまで弱いとは……………」

「あの…？文さんさつきからかなりグサグサと鋭利な何かが刺さつたような感覚に陥るんですが？」

「いくら鞘とはいつても……………」

無意識だろうか？故意だろうか？

どちらにしても質が悪いのには変わりないけど……………」

「も……………もう一局……………。お願いします……………」

「……………いいですけど……………？結果は変わらないと思いますよ？」

「……………」

相変わらずあつげらんとして文さんは言う。

確かに……このままやったところで僕の勝ちなんて全く見えてこない。

……でも、このまま諦めてしまうというのも悔しい。

「うーん……じゃあ……ハンデつけましょうか……？」

すると文さんはそう提案した。

「……ハンデ……ですか……」

僕は考える……。

もしハンデをもらった上で勝てたとしてもそれで素直に喜ぶことが出来るだろうか

……？

さすがにそこまでひねけているつもりはない。

だが、昔の偉い人はこう言ったらしい。

『勝てば良かろうなn……』

「よろしく願います……」

僕は惨めに頭を下げた。

「まあ……ハンデと一口に言っても色々ありますし……。どうしますかね……」

結局ハンデをつけてもらい、戦うことになった。

文さんがハンデの内容を考え、うくと唸る。

「将棋のハンデって……具体的ににはどんなのがあるんですか？」  
僕が疑問を口にする。

「ん……まあポピュラーなところで言えば駒落ちでしょうか？」

「コマオチ？」

僕がお決まりの聞き返しを行う。

「ええと……言葉通り片方の陣営の駒を減らすってことです。」

駒を減らす……。

そんなことして勝負になるのだろうか？

よく知らないから何ともいえないんですけど……。

「うくん……まあ駒落ちでもいいんですけど……、何かもつとおもしろい……。」

文さんは尚も悩む。

どうやらハンデの採用基準は面白い面白くないであるらしい。

そして……数秒の思考の後……

「そうです！目隠し将棋なんてどうでしょう！」

「目隠し将棋……？」

またまたお決まりの復唱……。

名前からして何となく何をするか分かるけど……。

「目隠しって……そんなこと出来るんですか？」

僕は半信半疑で文さんに問う。

とても目隠しした状態で将棋を打つことが出来るとは思えない。

「出来るんじゃないですか……多分……。」

文さんは見るからに適当に答えた。

「多分って……そんな適当な……。」

僕は呆れつつも内心、文さんが目隠しをするなら僕にも勝機があるのでは……？とほくそ笑んだ。

何度も言うけど……勝てば良からうな……

「とにかく！ものは試しです！やってみましょう！」

僕の脳内の呟きを遮って文さんが言う。

「はあ……。」

そうして僕と文さんは目隠し将棋を行うことになった。

「目隠し出来そうなものは……あ、これでいいですかね。」

文さんはタンスの中を漁り、細長いタオルを取り出す。

今更ながら本当に目隠しをした状態で将棋をするんだろうか……。そんな状態が想像できない。

駒を動かすのは僕が文さんに聞いて盤上で動かせばいいけど……。要するに文さんは盤面を見ないわけだから…。

何だか今更ながらとんでもないことをしようとしている気がしてきた。本当に大丈夫なんだろうか……？

「おーい……鞆……えつと……後ろで縛ってもらっても……？」

文さんがタオルをこちらに差し出してあどけなく尋ねる。

「え？……あ、はい！はい！分かりました。」

僕は了承すると、文さんの後ろに回り込んだ。

髪からフワツとした良い香りが漂う。

文さんの髪って柔らかかそうだよなあ……。

綺麗だし……。

唐突に触れてみたいという衝動にかられるがグツとこらえる。

「あの……？まだですか？」

文さんが手を膝の上に乗せた良い姿勢で尋ねてくる。

「あああああー！ごめんなさい！ごめんなさい！い、今すぐやります!!」



「……………」

焦りを全く隠せずに言う僕に、文さんは不審そうな目線を向ける。

それに気づかない振りをして僕は文さんの目をそつとタオルで覆った。

「……………優しく……………してくださいね……………」

妙に艶っぽい口調に内心ドキッとしつつも、それを面に出さないように努めて、

「ああ……………はい。分かりました分かりました。」

無愛想を装い、答える。

「んな……………。適当に答えるのはどうなんですか……………」

そんな僕に不満そうに文さんが口をとがらせる。

「はいはい！結びますよ……………」

強引に話を終わらせると僕は文さんの頭の後ろで結び目を作る。

痛くないようにそつと……………優しくだ。

「おお……………見事に何も見えませんね。」

文さんはのんきにそう呟く。

「そりゃあ……………、そのための目隠しなんですから……………つてー！ちよつt……………！」

フラフラとする文さんはバランスを崩し僕の方に倒れてくる。

突然のことにうまく反応できず、文さんにのし掛かられる体制になる。

この体制は色々almazい。

何がalmazいっていうと……その……。

とにかくalmazい。

「あーalmazいませぬ。まえがみえなくてはらんすをくずしてしまいましたー。」

「絶対見えてますよね?!?!」

僕はそう叫ぶとなんとか文さんを退ける。

「いやはや失礼しました……。射命丸文、一生の不覚です。」

「絶対対思つてないでしょ……。」

僕は頬を膨らませながら盤上に駒を並べる。

「いえいえ、心の底から反省していますよ……?コウカイハシテマセンケド。」

「おつかしいなあ……。最後のほう変な言葉が聞こえたなあ……!」

そんな調子で準備を終え、それを文さんに伝える。

試合の進め方だけど文さんは口頭で自分の駒の移動を伝え、僕がそれに従って実際に盤上で動かす。

僕の駒の移動も口頭で文さんに伝えるという感じだそうだ。

「お願いします。」

その一言で急に周りの雰囲気が変わる。

ピンツと張りつめた空気に肌がピリピリとする……気がする……。

「ええと……………3四歩で……。」

《カタツ》

僕が駒の移動を伝えるとともに自陣の駒を動かす。

「7六歩で……。」

文さんは目隠しした状態になっこりと言う。

「ええと……………7六歩だと……………。あ、はい…………。」

《カタツ》

こんな調子で試合を進める。

……………

「手元の歩を……………7五歩で…………。」

「そこ二歩（将棋における禁じ手）になりませんか？」

「え？……………あ！本当だ…………。」

僕は置きかけていた駒を手元に引っ込める。

正式な試合ならこの時点でもう反則負けなんだろうけど…。まあ、あくまで暇つぶしだからそこらへんは緩い。

「よく目隠しした状態でそんなこと分かりましたね…………。」

「まあ、頭の中に将棋盤がありますから……。」

僕が言うのとよく分からない答えが返ってきた。

でも何にせよ目隠しして盤上が見えてない状態で相手の反則を指摘するなんて常人の出来ることではないだろう。

僕は素直に感心する。

「じゃあ……ええと…、3七銀で……。」

《カタツ》

「うーん……3七角成で……王手です。」

「え!？」

前の二回と同じように文さんが王手と告げたのを聞いて盤上を睨む。

確かに王手だ。

《カタツ》

文さんの駒を動かし…逃げ道を探す。

……が、やはり完全に包囲されており此処から王を守り抜くのは無理そうだ。

「うー……………」

僕は数秒ほど唸ると、

「参りました……………」

蚊の鳴くような声でそう呟き、文さんには見えていないと分かった上で頭を下げた。「お疲れさまです。」

文さんは自分で目隠しを外し、いい笑顔でさういう。

「うう……………。まさか目隠ししてる人相手に負けるとは……………」

「ふふふ……………そんなに舐めないでくださいよ……………」

文さんはチツチツチと人差し指を横に振った。

別に文さんを舐めているわけではないが、さすがに目隠しした人に負けるというのは悔しい。

もしかしたら勝てるかもしれない…………。とか思っていた自分が恥ずかしく思えてくる。

「あや？もう夜遅いですね……………」

文さんは外を見るとさう言った。

僕も一緒に窓から身を乗り出す。

確かに漆黒に染まった夜空には所々爛々と星が輝いていた。

「良い暇つぶしになりました。ありがとうございます。今日は遅いですし、明日に備えて寝ましょうか……………」

「え？はい……………そうですね。」

夜であるとかわかった途端に睡魔が襲いかかってきた。

今日はグッスリ寝られそうだ……………」

「今度またお手合わせお願いします。」

「……………はい……………喜んで。」

僕はそう答えて微笑む。

そうして、その日は清々しい負けっぷりに逆にすつきりと寝ることが出来た。

続く……………」

小さなおまけく鳥は夜は活発ではないく

心音鞘が寝息を立て始めた頃、射命丸文はスツと起きあがった。

隣にいる鞘を起こさないようにゆつくりと部屋を移動する。

資料で散らかった自分の机へと座り、一度体を大きくのばす。

「ふう……………」

目を瞑り、ゆつくりと息を吐くとすぐに作業に取りかかった。

「さてさて、遊んでいる暇なんて無かったですけどね……………。ま…、結果オーライつてこ

とにしておきましょう。」

文はクスツと一人で苦笑する。

そうして、山のような資料から器用に一冊のノートを取り出した。

## 異変の取材 2

### 7章 1話～挑戦は大事～

「あやや……………もう手掛かりがなくなってしまうでしたね……………」

「ふりだしに戻った……………、つてことよね……………」

咲夜さんや文さんが嘆く。

雰囲気が高く居心地が悪い。

すると僕は重大なことを文さん達に伝えていなかったことに気づく。

「あー！」

僕が上げた声に、その場の全員が一斉にこちらを向いた。

急に話を振られた霊夢さんは間の抜けた声を上げる。

「能力は魂に直接結びついているもの……………となれば貴女の方が専門でしょう？博霊の

巫女さん。」

永林さんが微笑む。



「いや……、まあ確かにそうだけど、そんなもん普通自覚してるもんだし、人の能力を調べるなんてやったこと無いわよ？」

霊夢さんは心底面倒臭そうに頭を掻く。

「出来ないんですか………？」

僕はおそろおそろ尋ねる。

「……………」

霊夢さんは一瞬怯んだように顔をしかめる。

そして数秒ほど黙り込み、悩んだ末……ため息を一つつくど。

「……………分かった。やるだけやってみるわよ……。」

「本当ですか!!」

僕は喜びをそのまま表情に映しだして叫んだ。

「ただし、期待しないでよ………？出来るなんて保証ないんだから。」

霊夢さんは目を輝かせる僕を鬱陶しそうに手で制し、念を押す。

「あ、………めんなさいー！」

僕はどうにか興奮を抑える。

しかし、ずつと気になっていた自分の能力を知ることが出来ると思えると、なかなか速まる鼓動を抑えることが出来ない。

「じゃあ……、何か適当な1部屋借りるわよ？いいでしょ？」

霊夢さんは、調子が狂うといったように表情を濁らせる。

「ええ……使つてない病室があるからそこを使うといいわ。鈴仙……案内して上げなさい。くれぐれも散らかさないようにね。」

永林さんは妖艶に笑うとそう告げた。

そして、再びアンネさんを看始める。

「え？はーはい！師匠！」

指名を受けた鈴仙さんは急いで返事をして、僕と霊夢さんを連れて空き部屋へと向かった。

「あ……あの……こんな風にするものなんですか……？」

僕は手を後ろに回して縛られ、体のあちこちにお札を貼られた状態で尋ねる。

部屋全体はまさに《儀式》といったように薄暗い灯りに照らされ、壁の所々にも僕の体と同じようにお札が貼つてある。

「言つたでしょ？こんなことしたことないって……。だから手探りでやってくしかないのよ。少しぐらいいは我慢しなさい。」

そういう霊夢さんは腕捲りをして、ハチマキを巻いている。

我慢………とはいっても、この禍々しい状況で身動きがとれないのは精神的にきつい部分がある。

気が狂いそう………とまではいわないけど何か変な感覚に陥りそうだ。

でも………乗り切れば自分の能力を知ることが出来るのかもしれないんだ。

僕はそれだけを自分に言い聞かせる。

「分かりました………がんばります！」

僕は意気込んで霊夢さんにそう伝えた。

残念ながら縛られているせいで手と一緒に決意を表現することは叶わない。

「そう？まあ、もう少し待って。」

霊夢さんはどこか不審なものを見るような目で僕を一瞥すると、壁にお札を追加した。

「よし………じゃあ………始めるわよ………力抜いて。」

霊夢さんは僕の後ろに回りそう言った。

一気に緊張感が高まる。

ふう………。

心の中で落ち着くように深呼吸をする。

「……………」

そのまま沈黙が流れる。

後ろに霊夢さんの気配を感じる。

「鞆……………」

「はい!？」

霊夢さんの声に咄嗟に声を上げる。

「緊張してる…………？」

「しし…………ししし！してないですよ…………？」

僕は精一杯緊張などしてないことを伝える。

「……………鞆……………、昨日何食べたか覚えてる？」

「え？昨日…………ですか？…………ええと…………」

「せいっ……………」

僕がどうにか記憶を手繰っている背中中に強い衝撃を感じた。

それとともに僕の中の何か…………《核》のようなものが弾き出される感覚に陥る。

痛みに声をあげたが上手く音にならなかつた。

そして、僕の視界はゆっくりと…………暗転…………。

ふわふわとした感覚のなか途切れ気味に声が聞こえる…………。

「まっ……く……単じゆ……ね……。でもあ……こと……あるし……調べ……いと……。」

霊夢さんの声だろうか……？

慎重な声だ……。

だんだんと聞こえる声鮮明になってくる。

「あのデタラメな力……。人間の女の子の筈よね……。能力に何か関係するのだとは思うけれど……。」

デタラメな力……。？誰のことを言ってるんだろう？

うまく思考を働かせることが出来ない。

「とにかく……やってみる……か……。」

霊夢さんは再び慎重に呟く……。

僕は再び強い痛みを感じる……。

それから意識がなくなるまで……約0.5秒……。

「んう……？」

不鮮明な世界が段々と開けていく……。

何だか気を失ったり起きたりしているせいでこの感覚も慣れたものだ……。

「あら……起きたの？」

儀式……を執り行ったはずの部屋はすっかり元通りになっており、あの不気味な雰囲気は影も形もなくなっていた。

椅子に座ったまま寝ていたようで、首が少し痛む。

しかしそんなことは気にせず、霊夢さんに尋ねる。

「そーそれで!!結果は!!……結果はどうだったんですか!?!」

霊夢さんはむしやぶりついてくる僕に困り顔を作る。

「ちよ……一旦……離れて……。」

「え?……ああ!ごめんなさい!」

僕は自分がしていたことに気づき、赤面して霊夢さんから離れる。

僕が距離を置くと少し安心したように霊夢さんはふう……と溜め息をつく。

「ええと……それで……肝心の結果だけど……。」

そして……霊夢さんは僕の能力名を口にした。

「あら、終わったの?」

戻ってきた僕達に、入り口のそばに立っていた咲夜さんが尋ねた。

「はい！」

「ええ……。」

僕と霊夢さんは異なるテンションでおなじ答えを咲夜さんに告げる。

「それで……結果はどうだったんですか……う？」

文さんは興味津々といった様子で僕達の方に振り返る。

「あ、それは……。」

「それはですね!!」

僕は説明しようとした霊夢さんを割って入る。

「僕の能力は……。」

僕はたっぷりと間をおいて……そして……。

「ずばり!! 覆す程度の能力……だ、そうです。」

「ですよ? と、確認の意味を込めて霊夢さんを見やる。

「ええ……恐らくは……ね。」

霊夢さんは『恐らく』という語を妙に強調していた。

「覆す程度の能力……ですか……。名前だけじゃ具体的なことは分かりかねますね

……。」

文さんはどうにもパツとしない様子だ。

いや……文さんだけじゃない。その場の全員が何だか微妙な表情をしている。

……確かに能力名を聞いただけじゃよく分からない……。

自分にも能力があつたことで舞い上がり過ぎて、肝心の能力の内容について聞いていないなかつた。

覆す程度の能力……。

頭の中で復唱してみるが、やはり具体的なイメージが湧いてこない……。

こうなればこの能力を導き出してくれた張本人に尋ねるのが一番早いだろう。

「ええと……どんな能力なんですか……？ 霊夢さん。」

僕は後ろを振り向き張本人に尋ねた。

「さあ？」

しかし、返ってきた2文字の返答に言葉を失う。

「えっ……さ、さあ？……ってどういうことですか？」

僕はまさかとは思いつつも一応訊いておく。

そんな、まさか……能力を調べてくれた霊夢さん自身がその内容を知らないなんてそんなことあるはずもな……。

「分からないって意味よ。」

現実逃避に励んでいた僕に霊夢さんの無慈悲な声が刺さる。



……ですよね。

「大丈夫です鞘、生きてればいいことあります。」

文さんの慰める気などさらさらならないような雑な慰めがむしろ胸に痛い。

「私はあんたの魂を一度浮かび上がらせたの……まあ軽い幽体離脱みたいなもんね。それで、その浮かび上がらせた魂から直接能力について調べたの。だから内容については全く解らないのよ。」

だから。という接続詞を使われても僕には全く持つて理解できないのだが……。

「まあ、そのうち自分の能力ぐらいなら扱えるようになるでしょ……。これで能力があることは分かっただし……。」

霊夢さんは落ち込む僕を見かねたのか慰めるように言う。

「そうですね……訓練してればいつかきつと……!」

僕は一縷の希望を胸に自分に言い聞かせるようにしていった。

「訓練って……何を訓練するの?」

咲夜さんがもつともな疑問を口にするが聞こえないフリをする。

考えたら負けだと思っんです。

僕は嬉しいやら悲しいやらの複雑な気分でふうと溜め息を吐いた。

「そういえば、アンネさんはどうだったんですか？」

僕は自分のことでもいいっぱいになっていたことに気づく。

永遠亭へと来た本来の理由はアンネさんのことについて聞くためだった。

「うーん……恐らく失神しているだけだとは思うけど……。」

永林さんはアンネさんの首元に手を当てている。

そしてその手を自分の口元へもっていった。

「それにしてもおかしなところも多いわね……生気が全く感じられないし……。」

そして永林さんは訝しげにアンネさんを見つめる。

「先ほども言ったように130年程前にも同じ様な事例があり……そのときには一種の病として処理されたらしいのですが……それについては何も知りませんか？」

「聞いたこともないわね……もし実際にあったとしたらあなたが嗅ぎつけてるんじゃない？」

「……………それもそうですね……………」

僕は目の前で行われる会話をただただ聞いている。

なぜ130年前にあった事柄を文さんが嗅ぎつけられるんだろう……………？

「たしか吸血鬼の言語で書かれた文献だったんでしょ？それだったら吸血鬼に聞くのが一番手っ取り早いんじゃない……？」

永林さんの言葉に僕や文さん、咲夜さんは黙り込む。

「ええと…………やはり貴女はそれに対して知っていることはないんですよね…………？」  
文さんは永林さんの意見に触れずに尋ねる…………。

「ええ…………まあ…………そういうことになるわね。」

永林さんは少し申し訳なさそうに答える。

その後、誰もしゃべらなくなる。

数十秒後。

「戻りますか…………紅魔館…………。」

「そうね。」

ここに来た意味はなんだったのかと言わんばかりに溜め息混じりで文さんと咲夜さんが言った。

僕は収穫があったから二人のように無駄な移動だったっていう気持ちはないけど…………。

なんだかよろしくない空気のまま僕達は永遠亭を後にすることが決まった…………。

続く…………。

小さなおまけく博霊の巫女は博霊の巫女く

「ふう……………」

慣れない一仕事を終えた博霊霊夢は力を抜くようにして息を吐いた。

ハチマキを外し、必要なくなった御札を雑に引き剥がしていく。

「何事もやってみるもんね……………」。ただ…長時間結界張り続けんのはきついわ……………」

眩きながら凝った自身の首を強く揉む。

そして大きく伸びをしたあと、目の前に寝ている心音鞆の周りの御札を剥がしにかかった。

正確には寝ているのではなく、一時的に魂とのつながりを甘くさせられたことによるシヨックで気を失っているだけなのだが……………、まあすぐに起きるだろう。多分。

「それにしても……………」

霊夢は鞆を正面から見据えて眩く。

『覆す程度の能力』……………ねえ。

机の上に積もった書類を押し退けるように、散らかった脳内に空きを作り、考えを巡

らせる。

覆す………前の魔理沙との戦いのアレは………試合展開を《覆した》？

じゃあ、どこまでを操ることが出来るの？

どちらにしてもあの力を放つとくのは危ないわね………。

何か手を打たないと………。

考えに耽る霊夢を見て彼女は微かに嗤った。

## 7章 2話～無事帰還いたしました～

「はあ……………」

溜め息と共に俯く二人。

どちらもげんなりした様子だ。

「あ……………あの……………」

「何……………」

「何ですか……………」

「あ……………ええつと……………いえ……………何でも。」

二人の機嫌悪そうな声に怖じ気付いて言葉をかけられずに飲み込む。

僕が話すのを躊躇ったのを見て、二人とも元の方の方向に向き直り…

「はあ……………」

また大きく溜め息を吐いた。

「はるばる来てもらったのに悪いわね……………」

永林さんは申し訳なさそうに言う。

「いえ……………大丈夫ですよ。」

文さんは力のない笑顔を作った。

「取り敢えず何か分かるかもしれないから患者は預かるわよ……？」

「ええ……お願ひします。」

咲夜さんも力のない声で言った。

「えつと……駄目でした……ね……？」

僕は恐る恐る文さんに話しかける。

「そうですね……何か収穫はあると思っていたんですが……。」

文さんは溜め息と共に肩を落とした。

「まあ！駄目だったものは仕方ありません……！気を取り直して紅魔館に向かいますよー！」

しかしすぐに声色をグンツツと変えてその場を元気づけるように文さんが言った。

「そうね……、お嬢様も心配だし……急いで向かいましょう。」

咲夜さんも眼に少し光が帯びる。

「ああ……お嬢様……今頃私が恋しくて仕方がないことでしょうか……。」

そして、そのまま自分の世界へと入っていく。

「確実に逆ですよね？」

文さんが呆れて言うが咲夜さんの耳には届いていない様子だった。

「そうと決まればこんなこととしていられないわ！」

咲夜さんは何かに縛られるように病室を出る。

「何というか……………大変ね……………」

「そうですね……………」

文さん達が哀れみの視線を送る。

しかしもう部屋を出た咲夜さんにそれが届くことはない。

知らぬが仏……………つてやつだろうか？

「それじゃあ……………失礼しますね。」

「ええ……………気をつけてね。」

そして、僕達も席を立つ。

「はい……………ありがとうございます。」

永林さんの言葉にお礼を言いながら僕達は部屋を出ようと襖に手をかけた。

しかし……………

「ちよつと、文……………」

霊夢さんに呼び止められる。

「?……………はい?何ですか……………?」

文さんは不思議そうに首を傾げながら振り向く。



「今回のこれ……何か分かったらすぐに私に知らせなさい……。なんだか嫌な予感がする……………」

そう言う霊夢さんの声はどことなく不安げだ。

文さんも珍しく神妙な面持ちで話を聞いている。

「基本的には神社にいると思うから……、いい？絶対にならなさいよ？」

霊夢さんは念を押すように言つて、文さんの前に人差し指を突き出す。

急なことに怯んだのか、文さんは少し後ろに仰け反つた。

「……………分かりました。……………分かりましたけど……………着いてくれば良いだけじゃないですか？どうせ暇でしょう？」

「なつ、私だつてやることぐらいあるわよ失礼ね……………」

僕は前に博霊神社に行った時のことを思い出す。

お賽銭箱の奥で寝ていた気がする……………。

「とにかく、私は着いて行けないのよ……………だから……………何か分かったらすぐ報告……………良いわね……………」

霊夢さんは一方的かつ強引に話を終わらせた。

「はあ……………まあ、分かりましたけど……………」

文さんは腑に落ちない様子で霊夢さんを見る。

一方霊夢さんは満足げに頷く。

「何してるのよ……？早く行くわよ！」

部屋の外から咲夜さんの急かす声が聞こえてくる。

「……。それでは、行きましようか……。」

「……………そうですね……。」

文さんの怪訝そうな視線を受け流しながら霊夢さんは椅子に腰掛けた。

「気をつけてね…、報告忘れないように！」

霊夢さんはこれでもかと念を押してくる。

「分かりましたって……。じゃあ、失礼します。」

そんな霊夢さんに苦笑いしつつ、文さんは永林さん達に一礼する。

「ええ……患者の方は任せなさい。必ず何か見つけてみせるわ。」

永林さんは頼もしい笑みを浮かべた。

その笑みには本当に何か見つけてくれると思わせる不思議な力があつた。

こうして、僕達は永遠亭を後にすることとなった。

「いやあ……戻ってききましたね……疲れました……。」

横で文さんが額の汗を拭う動作をする。

「何言ってるんですか……。まだ出発してから3分経ってないですよ……。」  
そんな文さんを見て呆れながら呟く。

僕が言ったように永遠亭を出てからまだ3分も経っていない。

「ちっちゃ。分かっていませんね。鞘が突っ込みさえしなければ今頃、紅魔館の前でしたよ。」

「……………何言ってるんですか？」

ドヤ顔で意味の分からないことを言う文さんに首を傾げつつ先を急いだ。

「いやあ……………戻ってきましたね……………疲れました……………」

横で文さんが全くかいていない額の汗を拭う。

「そうですね……………はあ、疲れました。」

僕は息を切らしながら少し遠くの紅魔館を見つめる。

永遠亭を出て、ながいながい物語があつて、やっと紅魔館へと戻ってきたのだ。  
「ほら、言ったでしょう？ 突っ込みさえしなければすぐに着くつて。」

「……………？ 何言ってるんですか？……………大変な道のりだったじゃないですか……………」

ドヤ顔でよく分からないことを言う文さんに首を傾げつつ紅魔館の門へと進む。

そして、まあ……………紅魔館の門といえば……………あの人がいるわけ……………。

「寝てますね……………」

「……………寝てますね。」

幸せそうに寝息をたてる美鈴さんを見つめる。

すると、横から殺気のようなものを感じる。

「……………」

咲夜さんがにつこりと笑いながら美鈴さんの前に立っていた。

「……………」

何も良わずに、さらには表情を一つも動かさずに美鈴さんの方を見続ける。

「あの……………咲夜さん?……………どうしたんですか……………」

僕は恐る恐る咲夜さんに尋ねる。

「……………」

しかし、咲夜さんの表情が変わることはなく、相変わらず良い笑顔のままだ。

対する美鈴さんも目の前で喋っているというのにまったく起きる様子はなく、相変わ

らず幸せそうな顔で眠っている。

「職務怠慢ですね。」

文さんは苦笑しながら呟いた。

すると、ここですつきまで微動だにしていなかった咲夜さんが動いた。

スツと美鈴さんのおでこに指を向ける。  
そして……………。

『スパアーンツ』

幻想郷の空にキレの良い音を響かせた。

「うわっ……………。痛そう……………。」

思わず顔をしかめる。

「ひゃあっ!？」

さすがに美鈴さんも痛みからなのか声をあげる。

「……………何してるのかしら……………?美鈴?」

静かに清楚に、しかし凄みの聞いた声で咲夜さんが美鈴さんに尋ねる。

とんでもない迫力に、思わず震えあがった。

しかし美鈴さんはさつき声をあげた後から一言も喋らない。

それがかんに障ったのか咲夜さんはこめかみをピクツと震わせる。

「何とか言いなさい……………?」

上げた口角を元に戻すことなくもう一度咲夜さんは美鈴さんに尋ねる。

「……………。」

しかし、やはり美鈴さんは何も言うことはない。

いや……これはもしかして……………。

「もしかして……う？寝てます。」

美鈴さんの顔を見ながら呟いた。

帽子で表情が半分隠れていたが、よく見たら完全に眠ってしまっているようだった。さつき声をあげていたというのに……もう寝ているとは……………。

僕は少しだけ感心した。

「いやあ……さすがと言うかなんと言うか……………」

文さんもうどう表情を作れば分からないのか呆れているような、苦笑しているような顔をしている。

「……………」

咲夜さんはだまっただまま美鈴さんのほつぺを軽くつねった。

「痛たたた……………。起きてますよ。起きてます……………スヤア。」

美鈴さんは寝ながら必死に起きていることをアピールした。

もしかして、夢の中でも咲夜さんに怒られているんじゃないだろうか……………。

咲夜さんに手を離された美鈴さんは、また何やら寝言を呟きながら寝返りをうった。

「それじゃあ、お嬢様のところにいきましょうか……………きつと待っておいでだから……………」

咲夜さんの一言と共に僕達は門をくぐった。

ロープでぐるぐる巻きにされて拘束された美鈴さんを後目に……………。

もちろん、このあと美鈴さんがどんな仕打ちを受けるかは僕には知りようがなかった。

「あら……………？随分と早いお帰りなのね…。」

レミリアさんが紅茶を片手に意外そうに言った。

ベランダで優雅にティータイムを楽しむ様子を見るかぎり咲夜さんの言っていたように寂しがつている風には見えない。

「ええ、予想以上に収穫が少なかったもので……………」

言葉とは裏腹に咲夜さんの声はうれしそうだ。

「へえ……………なるほどね……………。それで…………その少ない収穫というのは？」  
レミリアさんは紅茶を口に運ぶ。

空になったカップを見て咲夜さんはすかさず紅茶のおかわりを注いだ。

「ああ…………ええと、実はかくかくしかじかでして……………」

文さんはレミリアさんに簡単に永遠亭のことを話した。

「……………なるほどね……………」

レミリアさんは話を聞き終わると、短くそう呟いた。

「まあ、収穫と言うよりは振り出しに戻っただけ。と言った方が正確ですが……。」  
文さんは苦笑を浮かべながら言う。

確かに文さんの言うとおり結果的には振り出しに戻ってきただけなのだ。

「で、でも！可能性が一つ潰れたわけですし……。全く無駄だったってわけでも……。」

僕は自分の中の暗い考えを振り払う意味も含めて口に出す。

「……そうですね……。！手掛かりが完全に途絶えてしまった訳でもありませんし。」

僕の言葉に文さんがそう言った。

そうだった。紅魔館に戻ってきた理由。

レミリアさんにあの資料について尋ねるためだった。

「……………」

視線を向けられているのを感じたのかレミリアさんが首を傾げる。

「ええと、レミリアさん？……少々聞きたいことがあります……。！」

文さんはメモ帳を構えると、事情聴取のようにレミリアさんに話を聞き始めた……。

「……………」つまり、何も知らないと……。そう言うことですか……。！」



「まあ……そうなるわね……。」

事情聴取の末、手に入れた情報は手掛かりが本当に全てなくなることの意味していた。

「……………はあ……、とりあえず整理させてください。」

溜め息混じりに文さんはメモ帳に視線を落とす。

そして、レミリアさんの供述を整理し始めた。

続く……。

小さなおまけくお久しぶりですく

「ねえーちー。おなかすいたー。」「

「ああ、もう………お前30秒以上黙れねえの？」

裾を掴んでくる相方にチールは舌打ち混じりに呟く。

「だつてつままないんだもん………あーきーたー。」「

「あー………もう！五月蠅えな。ほら、お前の番。」「

「んー………。」

脱力したままエルはなにやら手を動かした。

「ちよつとお前！そんな適当にやったら………。」

「あ!!ミスった。」

「………。」

「………。」

二人は溜め息をつき、また作業を再開した。

## 7章 3話〈情報交換はお早めに〉

「ええと……つまりこういうことですよね？」

文さんはペンを弄びながら手帳をめくる。

「あなたは大図書館の本には全く関心はなく、知りたくば管理している小悪魔さんやパチューリーさんに聞けと？」

確認の意を込めて文さんはレミリアさんに視線を送った。

レミリアさんはええ、と頷く。

「まあ、簡単に言えばそういうことね。あんなに長つたらしい質疑応答は必要だったの……？」

「勿論です。情報は信憑性を追求してこそ価値のあるものになるのですよ。」

「……………そう……。」

力を込めて語る文さんに疲れたようにレミリアさんが呟く。

「私に聞いても意味ないわよ。」

「ほえあつ!？」

「?パチユリー様?」

「あら、パチエ。」

「おや?わざわざそちらから出向いていただけるとは……手間が省けました。」

唐突に現れたパチユリーさんに全員が違う反応をする。

驚いているのが僕だけなのは、僕がおかしいからなのだろうか?

「あそこにある本全部を私が集めたわけじゃないし、管理はしていても全て把握なんてしていないわ。」

パチユリーさんは安定しない足取りでふらふらと椅子へと移動する。

咲夜さんが椅子を差し出すと「ありがと」と小さくお礼を言つて腰掛けた。

「では、あの本に関しては何も分からない?」

「分かることと言えばあれが吸血鬼の言語で書かれた昔の新聞だつてこと。他の気になる文献もほとんど吸血鬼の言語のものが多いわね……。」

分からないかと聞かれて、逆に分かることを示した。

以外と負けず嫌いなのもかもしれない。

「吸血鬼の言語ですか……。」

文さんは静かに呟いて、ある人に視線を向けた。

同じように僕もある人を見る。

「……………」

僕達の視線に半眼で不満そうにレミリアさんが答える。

「何よ……………」

「いえ、やはりこの状況で真つ先に疑われるのは貴女なわけで……………」

「……………」

咲夜さんがもの凄い笑顔で僕らを睨む。

怖い。あれは何人が殺つてる眼だ……………」

僕は思わず視線をそらす。

しかし、文さんはそんなことはものともせずレミリアさんに言葉を投げかける。

「まず、吸血鬼の新聞でたかが130年前に載っているような事を貴女が知らないのはおかしくないですか？」

130年前にたかがという副詞がくつついてくるのに違和感を感じたが突っ込むのはよしておく。

『『魂』について詳しく知っているご友人もいらつしやるみたいですか？』

文さんは挑発するように笑った。

すると、さすがにイラついたのかレミリアさんが立ち上がり、

「一つ言わせてもらおうわ。紅魔館に仕えるメイドを傷つけた犯人が私だと言っているな

らそれは大変な見当違いよ。」

静かに……しかし力強くそう言った。

「私はそいつを許せないの。この手であの子と同じ目に遭わせてやりたいぐらい。……それでも私を疑う？」

レミリアさんは普段は見せない部分を垣間見せたのだろうか？

僕はレミリアさんの強く握られた右手が微かに震えているのを確かに見た。

「落ち着いて……レミィ。」

そんなレミリアさんにパチュリーさんの声がかかる。

「貴女は知らないのかもしれないけど吸血鬼の魂は希少であり人間や他の妖怪のものより綺麗なのよ。だから、吸血鬼が魂に関する情報に敏感なのはごく自然なこと。」

レミリアさんが変わるようにパチュリーさんが続ける。

文さんは表情を変えることなく話を聞いている。

「それにあの資料は全て幻想郷のものじゃないわよ？まあ、外来本ね。幻想郷のもので目に入った資料はなかったわ。」

パチュリーさんは更にこう続けた。

「ろくに考えもしないでお嬢様に疑いを向けるとは……良い度胸ね？」

咲夜さんは天使も裸足で逃げ出しそんな笑顔を浮かべる。

「いや……多分これぐらいのことは彼女でも……」

「ええ、知っていましたよ?」

するとパチュリーさんの言葉をケロッと文さんは繋げた。

あまりにも軽くサツパリと……。

「は?」

「はい?」

「え?」

僕を含める三人が目を点にして眩いた。

「いやいや、あの資料が幻想郷のものではないことぐらい知っていましたよ。伊達に情報を扱う仕事してるわけじゃないです。」

文さんはケラケラと楽しそうに笑いながら言う。

「んな……じゃあ、なんであんなこと……。」

咲夜さんは文さんの意図が分からないからか訝しげに視線を送る。

しかし、やはり文さんは気にしないのか……

「んー……まあどちらにしても吸血鬼が怪しいのは確かですし、ああああそんなに怖い顔しないでください。あくまでも怪しいだけです。それにそちらのご主人様だけのことを言っているわけではないですよ。なにも本気で言ったわけではないですって。」

どーどー、と宥める様に言った。

「……………」

しかし咲夜さんやレミリアさんの表情が緩むことはない。

「……………」

パチュリーさんも不満げだ。

でも、文さんはそんなことは気にも留めず、何やらメモをとり始めた。

「その……………そ、それで……………これからどうするんですか？」

文さんの言葉にレミリアさん達は黙ったままだ。

その場の空気をどうにか変えようと言葉を紡ぐ。

文さんは一瞬だけ黙り、そしてパチュリーさんを見やる。

「念のため訊いておきますが……………あの他にめぼしい資料などは……………？」

「ないわよ。……………いえ、あるにはあるけど似たようなものばかりだったわね……………」

「……………そうですか。」

パチュリーさんは文さんの問いに即答し紅茶を一口飲む。

「あやや……………もう手掛かりがなくなってしまうでしたね……………」

「ふりだしに戻った……………、ってことよね……………」



咲夜さんや文さんが嘆く。

雰囲気が高く居心地が悪い。

すると僕は重大なことを文さん達に伝えていなかったことに気づく。

「あー！」

僕が上げた声に、その場の全員が一斉にこちらを向いた。

「……………？どうしたんですか？」

文さんに尋ねられる。

「あーその……………ええと……………！」

言葉を探して言い淀む。

ええと。と連呼しながらあたふたする。

「大丈夫ですか？落ち着いてください……………」

文さんに言われて一度深呼吸をした。

久しぶりに素数も数えた。2、⑨……………。

そうして落ち着いた後、僕は話し始めた。

「ええと……………大分前の話になるんですけど……………二回目に紅魔館にくる途中、文さんに置いて行かれたじゃないですか……………？」

「記憶にございません。」

文さんは皆の、置いて行ったのか？という疑いの目に笑顔で応える。

「あ、いや……………別にそれはいいんですけど……………、そのときチルノちゃんと一緒に大ちゃんを探してと頼まれて……………」

「ああ……………そういえば、そんなこと言ってましたね。」

自分に注がれ続ける疑惑の視線を軽くスルーして文さんは思い出したように手を叩いた。

うん。別にいいとは言ったけど訂正しようかな……………？

「まあ……………それで、探すのを手伝っていたんですけど……………そのとき二人の女の子を見つけたんです。」

その場の皆が相槌をうちながら僕の話真剣に聞いている。

今更ながら何だか緊張してきた。

「え、ええと……………そーそれで！その女の子たちと少しだけ話をしたんですか……………そのとき彼女等が言っていた自分達の能力というのが……………」

ここで一度言葉を切る。

「能力というのが……………」

案の定文さんから催促がかかる。

思った通りにいって僕は満足して頷き……………。

そして文さんの催促に答えた。

「『魂を宿らせる程度の能力』と『魂を奪う程度の能力』だったんです……。」

「……………なるほど……………」

僕の言葉に文さんは手を顎に当てて考え込む。

「鞘にしてはまともなことを言いましたね……………！褒めて遣わす。」

「何ですかね？素直に喜べないのは。」

僕は半眼で乾いた笑いを漏らした。

「さあ、そんな重要なことを今まで黙ってたからですかね？」

「うぐっ……………」

文さんの息をするような嫌味がクリティカルヒットする。

「なにげにえげつないわよね……………」

咲夜さんが呆れたように言う。

「だ、大丈夫です。な……………慣れましたから。」

言葉のナイフが突き刺さった腹部を押さえながら、はは……………と力ない笑いを浮かべる。

パチュリーさん達の哀れみの視線が痛い。物凄く痛い。

「それより……………その女の子二人についてももう少し詳しく話してもらえますか？」

「えっ？…あーはいー！」

珍しく文さんに真面目な声で言われ、あのときのことを詳しく思い出そうと記憶を手繰る。

そして、頭の中で喋ることをまとめてから話し始めた。

く少女説明ちゅーく

「僕が分かるのはこれぐらいです……………」

「なるほど……………」

何とか前にあつたことを思い出して説明し終える。

文さんは何かを考え込むように真剣な眼差しでメモ帳のページを言ったり来たりする。

「咲夜さんやレミリアさん、パチュリーさんはエルさんとチールさんについて何か知ってますか？」

「いや、知らないわね。」

「私も。」

僕の問いに二人は知らないと、一人は首を振って答えた。

「そうですか……………」

何となく予想していた答えとはいえ、三人もいるからもしかして……………という淡い期待

が裏切られる。

「ところで、説明の中にあつた『後ろに現れていきなり声をかけられた』というのは？」  
すると、メモ帳にかじり付いていた文さんから声がかかる。

「へ？……ああ！えつと。言葉通りですよ？いつの間にかエルさん……チールさん？  
だったかな？二人のどちらかが僕の後ろに回り込んでいて、明るく声をかけられました。」

さして珍しくもないでしょう？と問いかけるように首を傾げる。

「……まあ、そのこと自体は特におかしいことはないのですが……。」

文さんはどこか腑に落ちないように呟く。

「……文さんもいつもやってることですしね……。」

僕の苦笑に返事は返ってこなかった。

どうやらよほど真剣に考え込んでいるらしい。

「因みに……その二人組の容姿についてももう少し詳しいことは分からないの？」

「え？……ええと……。」

急に咲夜さんに話しかけられ上擦った声をあげる。

ゆつくりと、訊かれたことを頭の中で整理して記憶を手繰る。

「………すいません……。青い長い髪をしていて……二人ともよく似ていたとしか

……。」

しかし、いまいち思い出すことができずこう答えた。

「そう……………」

咲夜さんは短く呟く。

「さて！それでは！新たな手がかりも手には入ったことですし！！エルさんチールさんを探しに行きますか！」

すると明るい声が耳に入る。

「え？い、今すぐですか？」

文さんの唐突な発言に座っていた椅子ごと倒れかける。

「無論。善は急げです。」

文さんは当然というように人差し指を立てながら言った。

何となく予想はしていたものこのうも突然だとさすがががが……………」

「さあ、急ぎましょう!!」

「え、ひゃん!?ちよ…………ちよつとま…………！待ってくだ……………」

一方的に右腕を掴まれ、引きずられながら叫ぶ。

しかし既に紅魔館を出ていたのか、青空に僕の声が散った。

「彼女も大変ね……………」。

「そうですね……………」。

「咲夜、紅茶のおかわりいいかしら？」

「あ、はい！ただいま！」

続く……

小さなおまけくお久しぶりです2く

「あれ？」

「どうした？」

首を傾げるエルにチールが尋ねた。

「いや、続けざまに二回もおまけに出るっていうのはどういうことなのかな？つて。レギューラー陣の仲間入りする伏線？」

「頼むから黙ってくれ。ほんとに、後生だから。」

えげつないことをサラツと言うエルにチールが頭を抑える。

「まあでも何かしらあるつてことだよねえ……………単純に思い出してほしいだけだとして

もやい。」

エルは悪戯っ子のように笑みを浮かべる。

「お前なあ………本当に大概にしろよ。」

チールはイラつきを隠すことなくエルを睨む。

「ほーら……ちー。そんな怖い顔しないの！リラックスリラックス。」

「……………」

エルは馬を宥めるようにゾーゾーと呟く。

そして次の瞬間には表情をさして変えることなく、目だけを細めて

「どちらにせよ、もうそろそろ来るんだろうし少し準備しておかないとね。」

クスツと笑った。

木にもたれ掛かるソレを横目に……………。



## 7章 4話くかんどーの再会く

「それで……………これからどうするんですか？」

文さんに掴まれていた手が解放され、僕は尋ねる。

割と乱暴に引きずられていたのに痛くないのが不思議だ。

慣れ……………なのだろうか…？

「もちろん、鞆の言っていた二人の女の子を探しますよ？」

当然だと言うように文さんが笑った。

「あ、いや……………そういうことじゃなくて……………どこをどう探すとか……………」

僕が質問し直す。

文さんはああ……………と呟いて暫く間をおく。

「ええと……………そうですね……………。とりあえず鞆が彼女等を見つけた辺り一帯を適当に……………」

「それは……………なかなか具体的な計画ですね……………」

僕の言葉を聞こえない振りで流して文さんは歩き出す。

「ん？ああ!!ちよつと待って下さい!!」

僕はすぐに文さんを追っていった。

「で、どの辺りで見つけたか思い出せますか?」

数分歩いたところで文さんに訊かれた。

周りを見渡すと鬱蒼とした森だ。

正直ほとんど景色が変わらないし、どの辺りか?と言われても正確に答えられる自信はないのだけど……。

「多分もう少し向こう……だと……思います。」

「大丈夫なんですか……?」

僕の自信ない声に疑うように文さんが尋ねる。

僕は短く、重ねて「多分……」とだけ答えた。

「まあ、もう少し歩き回ってみましょう。そのうち明確に思い出せるかもしれないし……。」

文さんはそう口にするのと歩くスピードを少し上げた。

「そうですね。」

僕もそう呟いて文さんの後を追った。

更に数分ほど歩いた後、

相も変わらず深い森の中なのだが、なんとなく見覚えのある付近に来た……気がする。

「なんだか……この辺……の気がします。」

「随分曖昧ですね……。」

文さんの苦笑に同じく苦笑いで返しながら周りを注意深く見渡す。

すると、僕の目に一つの大きな木が留まった。

「この木って……確か……。」

間違いない。寝てしまったチルノちゃんを移動させた木だ。

この幹もなんだか見覚えがある気がしてきた。

「何か思い出せましたか？」

文さんが期待を乗せた声で尋ねてくる。

「はい。ええと……ここがあの木ならあの人たちを見つけたのは……。」

僕は改めて記憶を手繰りながら彼女達を見つけた場所を探る。

「ああ！そうです!!ここです！ここでエルさんとチールさんに出会いました。」

僕のさほど正確ではない記憶力もここだと言っていた。

木々に囲まれていて、狭いが開けた空間があった。

あのとき、確かにここに尻餅をついてチールさんに圧倒されたことを覚えている。

「なるほど……彼女等はここで人を捜していたわけですね？」

「はい。そのはずです。」

「じゃあ……この周辺を一通り探すとしますか……。」

そうですね、と一言の後すぐに周辺を見て回った。

　数分後

ふと冷静になる。

あれ……よく考えたらそんなにずっと同じところに留まっているなんて事があるのだろうか……？

それに彼女らも人捜しをしているんだったら尚更同じところにずっといたりしないだろう。

「あ、あの……文さん。今ふと思ったんですが……。」

僕が、顔を上げて文さんに呼びかける。

文さんは僕が二人と会ったまさにその場所で屈んで地面を熱心に観察していた。

「はい？どうしたんですか？」

僕の呼びかけに文さんも顔を上げた。

「いえ……その……エルさんやチールさんも人捜しをしていたみたいだったって事は言いましたよね？」

文さんがコクリと頷いた。

「それだと……この辺りを探し回ってても成果を得られるかどうかは微妙なんじゃ……。」

僕は出来るだけ控えめに恐る恐る言葉紡いでいく。

そんな僕の様子に文さんはきよとんとした。

そして僕の言いたいことを理解したのか、あく……と首を小刻みに縦に振る。

「なるほど……鞆の言いたい事は分かりました。ですが私達が探しているのは何もエルさんチールさん自体だけではないですよ？」

なんだか意味深な事を言い出した。

「と、言う……。」

僕の質問に文さんは口ではなく手招きをすることで答えた。

怪訝な面もちで文さんの元へと歩み寄る。

文さんは足下の地面を指さしている。

その先を見るとあるものが見つけられた。

「これ……足跡……ですよね……？」

最後に?と付いているのはそれがあまりにもうつすらとしたものだったからだ。

これは……スニーカーだろうか……?

「はい。そのとおり、足跡ですね……。鞞のものかと思っただんですが若干小さいんですよね……………」

なんで僕の足のサイズを知っているんですか?と質問する間もなく文さんが続ける。

「これによると南の方に向かってるみたいですね……………。どうします?向かいますか?」

向かいますか?と訊いているにも関わらず文さんはもう既に歩き始めていた。

どうやら僕に拒否権はないらしい。別に拒否するつもりもないけど……………。

にしても……なんだか文さん、おかしくないだろうか?

というのも、人捜しをしている人の足跡が部分的に残っていて、それが南に向いているとしても南に向かっていったことにはならないだろうし、むしろ探しまわっているなら色々な方向に足跡がある方が自然だ……それだけで南に向かうなんて言うのは余りに安直だとか何というか……………。

文さんらしくない……………気がする。

立ち止まり、思考を続けた。

「あ……………あの……………文さん……………」

僕の声に文さんが振り向——

「ひゃうっ!! んん……んんん!!」

いた瞬間に押さえ込まれ草むらに転がり込んだ。

口を押さえつけられ上手く声が出せない。

僕の上に乗つかるようになっている文さんの表情は逆光を受けていて分からない。

文さんの急な行動にどうすればいいのか分からずただ拘束から逃れようと暴れる。

「んん!! んんん!!」

くぐもった声を上げながら文さんを押し退けようと必死にもがいた。

段々と息が苦しくなってきた。

「助けて!!」

そう、有らん限りの声を上げようとしたそのとき……。

「シー………静かにして下さい………」

文さんが口到人差し指を当てて言った。

「んん………んん!!」

「静かに………」

尚も僕が声を上げようとすると文さんは真剣な声色で言う。

どこか凄みのある声に諭され無言で首を縦に振った。

「……………はあ……………はあ……………」

文さんから解放され荒い息を漏らす。

「どうしたんですか……………急に……………」

僕が尋ねるが文さんは答えず、ただ足跡があつたあたりの方向を指さす。

草むらから眼だけを覗かせて指された方向を見た。

「何も見えませんよ……………」

僕の視界には特に特別なものは見受けられず、さつき調べていた風景と全く同じ空間が広がっている。

何だつて文さんはわざわざ僕を押さえ込んで草むらに隠れたんだろう……………?

文さんを見やるともう少し待てと言うように手で示している。

納得はいかないがとりあえずもう少し待つことにする。

すると、見覚えのある二人が急に姿を現した。

「行つた？」

「ああ……………多分な……………」

きれいな青色の髪によく似た容姿の二人組。

間違いない……………エルさんとチールさんだった。



「あはは………案外見つからないもんだねえ………」

エルさん………?が楽しげ笑う。

「灯台下暗し、つてな………」

続けてチールさんもふふふと笑いを漏らす。

どうやらずっと木の上にいたようだ………。

全く気が付かなかったけど………。

「あ、文さん!あの二人です!エルさんにチールさん!!」

「やはりそうでしたか………。ばればれなんですけどね………」

文さんは二人を軽く嘲るように笑みを浮かべた。

僕は気付けなかったがどうやら文さんにはばればれだったらしい。

「今はまだまずいんだよね………」

「そうだな………もう少し間を置いてからで——」

「何がまずいんです?」

すると視界の先では一人の新聞記者が二人の女の子を持ち上げる光景が広がっていた。  
た。

………。

ゆっくりと横を見る。

当然ながら文さんはいない。

「へ……………」

状況を理解しきれていない様子のエルさんとチールさんが眼を点にしていた。

「いやあ、素晴らしいステルススキルですね……………見習いたいですよ。」

文さんは嫌らしい笑みを浮かべて言う。

「なつ……………!?ちよつ離せ……………!!」

「ち……………行つたんじゃなかったの……………?離してー!!」

二人ともが焦つたように口をそろえる。

「あ、文さん……………。あの……………離してあげて下さいよ……………」

僕は草むらを飛び出し三人の元へ駆け寄る。

「おや……………お兄さん確かあのときの……………おわっ!」

ドサツ。

文さんに手を離され二人が地面に落ちる。

一人はしつかりと着地し、一人は尻餅をついた。

「いったいなあ……………こつっんなに……………か弱い女の子なんだから扱い考えてよ……………」

エルさんはそんな風に軽口を叩きながらも一瞬の内に起き上がり、体勢を整えた状態で文さんと向き合っていた。

「それで……………何で隠れるような真似したんですか？……………あんな分かりやすい上にほぼ意味のない偽装までして……………」

文さんは自分に向かう二人に半眼で問う。

「さあ……………」

「知らないな。」

二人は打ち合わせをしていたかのように順々に答えた。

「あ……………文さん……………？そ……………そんなに怖い顔しなくても……………」

怪訝な視線を送り続ける文さんに恐る恐る言う。

「なんだか二人を警戒しているようだった……………」

「ああ……………いえ。別にそう言う訳ではないんですけど……………」

文さんはどこかスッキリしない表情をしている。

「ええと……………僕達ちよつとエルさんとチールさんに訊きたいことがあって……………」

僕達の前で座る二人にいきなり本題を伝えた。

「あはは、名前覚えててくれたんだあ。嬉しいなあ。君は鞆君……………だったよね？」

「訊きたいことつてのは？」

一人は楽しそうに、一人は不機嫌そうに答える。

「どうやらむじやきな方がエルさんでクールな方がチールさんのようだ。」

「はい。心音鞘です。ええと……訊きたいことというのは……お二人の能力のことで……確か……。」

相手に名前を覚えてもらっていたことに少し表情を緩ませながら尋ねる。

「魂を宿らせる程度の能力だよ。」

「……魂を奪う程度の能力……。」

二人が答える。

僕は黙って文さんの方をみる。

文さんは一度頷きエルさんとチールさんに視線を送り。

「それでは、少し質問させてもらいましょうか……。」

そう言って笑った。

続く……。

## 7章 5話 灯台下暗し

「それで……質問って言うのは？」

エルさんがあどけない顔で尋ねる。

チールさんはムスツとした顔で黙り込んでいた。

……二人とも悪い人じゃないとは思っただけ……文さんは何でこうも警戒しているんだろう？

「簡単なことです。あなた方の能力……えっと、奪うと宿らせる……でしたか？」

文さんの問いに一人は頷いて一人は黙ったまま肯定した。

「単刀直入に言いますとその能力ではどこまでのことができるんですか？」

本当に率直に尋ねた。

何ができるんですか……？ではなく、どこまでのことができるんですか？……と。

エルさんとチールさんは黙り込む。

文さんは全く視線を動かすことなく、ただ一点に二人を見つめていた。

気まずい沈黙が流れる。

その沈黙を破ったのはチールさんの言葉だった。

「答える必要はないだろ。」

吐き捨てるような言葉だったが言い方からは慎重な様子が伝わってくる。

文さんは表情を一切変えることなく返事をした。

「まあ……確かにそうですね。」

なんだか今までには無いタイプの張りつめた空気だ。

肌がピリピリとするのを感じる。

「それなら無理に答える義理は無いな。」

チールさんは文さんから目を逸らす。

エルさんも黙ったままだった。

文さんはふむ……と呟くと顎に手を当てる。

「お二人は紅魔館のメイドのことについて何か知りませんか？」

そして、質問を変えた。

「こまかん？」

「山の麓に湖があつて、その畔に洋館があるでしょう？あそこのことです。」

エルさんに訊かれて文さんが答えた。

文さんの回答にエルさんはああ……と呟きを漏らす。

「で……そのメイドがどうしたって……？」

チールさんが先を急かすように言った。

「メイドの内の一人が先日急に妙な状態になってしまったのですが……。」

「妙な状態？」

お約束の質問の後、文さんが説明を行う。

「脈もあれば呼吸もしているのですがまるで死んでいるかのように動かず、起きることがないので。」

文さんの言葉を二人は真剣に聞いている。

「ある人は『抜け殻のようになる』と表現していましたが……。」

僕は咲夜さんを頭に思い浮かべる。

今頃はいつも通りレミアさんのお世話をしているのだろうか？

「……………そこまでは分かったが、それが私等と何の関係があるんだよ……………？」

チールさんの不機嫌な声で我に返る。

確かにこれだけでは何故自分たちが捕まって質問を受けているか全く分からないだろう。

しかし、文さんの話はまだ終わっていない。

「まだ話は終わっていないでしょう？」

文さんはニコツと威圧的な笑みを浮かべる。

それに気圧されたようにチールさんはたじろぐと、口を噤んだ。

「それで、そのメイドに関して調べていくうちに分かったのですが……これは『魂』が抜けてしまった状態であるそうです。」

文さんは『魂』という語を妙に強調して言った。

そして、文さんが『魂』という語を口にした瞬間エルさんとチールさんの眉がほんの少し。

本当に少しだけ、動いた。

「それで、あなた方の能力は『魂』を奪う、宿らせる程度の能力……納得していただけました？」

最後に文さんが訊くと二人は小さく、首を縦に振った。

「話してくれる気にはなつたでしょうか？」

続く文さんの問いにエルさん・チールさんが黙り込む。

かなり真剣に考え込んでいる様子だ。

文さんは相も変わらず顔に営業スマイルを張り付けたままだ。

この二人は結局何者なのだろうか……？

文さんや咲夜さん達は二人について知らなかったみたいだし、メイドさんのことが起こった時期と彼女等と会った時期、能力のことを考えても無関係とは考えにくい。



かといって本当にこの二人がメイドさんをあんな風にしてしまったのだろうか？  
そんな人たちには見えないのに……………。

……………いや……………。そんなこと言えないか……………。

僕はずっと前からエルさん・チールさんのことを知っている訳じゃない。

たつた数日前に少し会っただけだ。

《そんな人》なんて風に言えるわけないんだ。

「成る程……………お姉さん等の言わんとすることは分かったよ。」

僕の思考を遮るようにエルさんが声を上げた。

両手を上げて目を瞑っている。

格好だけを見れば「参った参った」という言葉がよく似合いそうだ。

そして、続きを振るようにチールさんを肘で突つついた。

チールさんはエルさんのその行動が予想外だったのか軽く驚いたようにエルさんを見る。

その後、小さく溜め息をつき、続きの言葉を紡いだ。

「まあ……………でも……………」

《ガサツ》

チールさんの言葉を遮るように上から物音が聞こえる。

反射的に上を向くと何か小さなものが落下してくる途中だった。

「ひゃっ!？」

思わず身構えるが落ちてきた物体の落下地点は僕の少し前、

《ボスツ》

それは地面にぶつかって止まる。

何が落ちてきたのかと、体を前に乗りだした。

「す、雀……………。ですか…………？」

誰に問うわけでもなく呟く。が、すぐ横から答えが返ってきた。

「そのようですね……………。何故落ちてきたのでしょうか…………？」

「ひゃ!?!び、びび…………びつくりした。」

相も変わらず慣れない登場に鼓動を早める。

このままでは僕の心臓は持たないのではないだろうか……………?

そんな疑問をよそに文さんが続ける。

「どこか怪我をしているわけでも無いように——」

《ガサガサツ》

今度は文さんの言葉を遮って物音がした。

先程と同じように反射的に上を見上げた。

今度は雀なんかとは比べものにならない大ききの物。

いや、比べものにならない大ききの者。

僕の目が正常であるならばそれは人だった。

そう認識したときにはもう遅い。

さつきと違つて今度は真つ直ぐ僕に向かつて落ちてきている。

避けようにも間に合わない。

どうにか身構えることだけはできた。

………。

………。

強く閉じた臉をゆつくりと開く。

小さな衝撃の後何か転がるような音が聞こえたが体に特に痛みはない。

目を開けるとそこは文さんの腕の中だった。

ん……？

意識的に瞬きをした。

そして、目を開けるとそこは文さんの腕の中。

……………。

文さんの、文さん。アヤサンの腕の……中？

文さんの腕の中。あやさんのうでのなか……………。

ゲシユタルト崩壊を起こしそうなほど頭の中で連呼する。

脳が遅れて機能し始め、やっとのことで状況をしっかりと把握する。

今、文さんの腕の中にいる。

びつたりとくつつくようにして抱きつかれたような状態だ。

それで……………顔のこの感覚は……………。

ヒユウウウウウウ……………。

と、やかんが沸騰したような音が聞こえたような気がした。

開いた口が塞がらないという言葉があつたがまさにそんな感じだ。

もし言葉を発せようものなら確実に呂律が回らないだろう。

そもそもどうすればいいのか分からず声を出す余裕などないが。

「だ……………です……………」

ふやけきつた脳に声がかかる。

それが自分にかけられたもので「大丈夫ですか？」といった内容だったことに気づくまで数秒を要した。

「へ!?……ひゃーひあい!!だだ、だいしょうぶ!です!!」

文さんは遅れてきた回答に不思議そうに首を傾げる。

案の定噛み噛みだった。

「本当ですか?耳まで真つ赤ですけど?」

「ほ、ほほ、本当です!!本当に大丈夫!」

何とか文さんの腕の中から出る。

そして半ば逃げ出すように文さんと軽く距離をとる。

すると、あることに気づいた。

「あれ?エルさんとチールさんは……?いない?」

さつきまでいたはずのエルさんにチールさんはまるで初めからいなかったかのよう  
に姿を消していた。

「ええ……逃げられましたね……」。

隣で文さんが悔しげに呟く。

どうやら混乱に乗じて逃げられてしまったらしい。

そもそも何故逃げる必要があるのだろうか………？

やはり件の犯人が彼女たちなのか………？

それにしてもそんな簡単に文さんから逃げられるものだろうか………？

少なくとも僕は絶対に逃げられない自身がある。

そんな思考を巡らせるがそれも途中で遮られた。

「それにしても彼女……何故上から……。」

文さんのそんな眩きが耳に入る。

文さんの言葉の中の彼女は、後の部分から考えても落下してきた人のことを指すのだろう。

僕はその彼女に視線を送った。

それは見覚えのある女の子だった。

緑色の髪に黄色のリボン。

ふわっとした雰囲気の優しそうな少女。

大妖精。

「だ、大ちゃん!？」

いつの間にかちゃん付けをするのが普通になってしまっていた。

チルノちゃんの親友で僕と同じ記憶喪失になってしまった女の子。

体を乗り出して彼女の顔をのぞき込む。

「だ、大丈夫ですか!? け、怪我とかは……………」

必死になつて尋ねるが答えはない。

どうやら氣を失っているようだ。

「あ、ああ！文さん!! だ、大ちゃんは、大丈夫なんですか!?!」

重病に冒された我が子を想い、医者にむしやぶりつく母親のように文さんにしがみつく。

文さんは「落ち着いて下さい」と言うように僕を手で制す。

僕が冷静になり文さんから手を離れた。

文さんは大ちゃんの口元に手をやったり、胸のあたりに耳をおいたり、手首に自分の手を当てたりとまるで専門家のようにてきぱきと作業をこなしていった。

僕は息を飲みながらその様子を見守る。

「……………ど、どうですか……………」

慎重に文さんに尋ねる。

文さんは顎に手をやって考え込むような仕草を挟む。

そしてすぐに笑顔を作り、

「大丈夫です、息はしていますし、心臓も動いています。」

その言葉を聞いて胸をなで下ろす。

肩に乗っていた重い何かが落ちたような感覚を覚えた。

「ですが……。」

しかし文さんの言葉はそこで終わりではなかった。

しかも続いたのはよりによつて逆接である『ですが』……。

少なくとも良い展開が続くことはないのだろう。

それなりの覚悟を持つて文さんの言葉を聞き逃すまいと耳を傾ける。

文さんはすこしだけ間を置いて、言葉を繋げた。

「生気が感じられないですし、何となく……似てるんですよ……。」

あえてなのか文さんはそこで言葉を切った。

まあ、続けずとも続く言葉は予想できた。

「アンネさんと……。」

頭の中の文さんが言葉を紡いだ。

「……………そんなこと……。」

僕は力なく横になっている大ちゃんに視線を移す。

つい先日は僕としゃべっていたのだ。

目を閉じて倒れ込んでいる姿はまるで眠っているようだ。



そう眠って――。

続く……。

小さなおまけ　灯台下暗し

いやあ……あぶなかったねー……。

エルはほっと胸をなで下ろす。

……はあ……クソ……嫌なタイミングで……。

チールは今にも舌打ちしそうな表情を作る。

こらっ！　そんな汚い言葉使わないの！

エルは人差し指を指に当ててチールに注意する。

チールは小さく小さく、音をたてずにため息をつく。

そして二人は下を見下ろした。

『灯台下暗し……っつてな』

『灯台下暗し………つてね』

## おまけ編 7

## おまけ編 1話くアポ無しは良くないく

ガッ……!!

受け止めた、木刀を持つ手にびりびりと衝撃が走る。

しかし、反動のせいか相手は前に体勢を崩した。

……………刹那……………。

僕の目の前にあるのは大きなクレープ。

僕の身長のお3倍はあろうかというその全長に言葉を失った。

どう考えても一人で食べることができない。

そもそも何でこんなところにこんなものが落ちてるんだらうか？

どう考えても怪しい……………。

しかしだ……………。

目の前に大きなクレープがある。  
ならばやることは一つだろう。

「いただきまーす!!」

僕は大きくそう言うとかクレープにかじり付いた。

口の中にクリームの甘みが広がる。

イチゴの酸味によってよけいに甘みが強調されるのだ。

「ん~~~~!!」

何ともいえない感覚に思わず声を上げる。

「美味しいー!!」

これ以上ないくらいとろけた笑みを浮かべた。

ほっぺたが落ちそうだと。という表現があるが今ならよく理解できよう。

こんな感覚だったんだ……………と。

続けてもう一口いただく。

「えへへ……………」

緩みきった表情筋を直すことなく少しずつ少しずつクレープを減らしていった。  
……………そして。

最初はあんなに大きかったクレープも3分の1ほどに減っただろうか。  
そのときだった。

『カー……カー……』

しつかりとK Aと発音して聞こえた鳴き声。

恐らくカラスだろう。

口の端についたクリームを気にせず上を向く。

案の定1匹のカラスが羽をバサバサと音をたてながら振っていた。

問題はそのカラスがいる位置だ。

僕のすぐ目の前。

そう……………目の前。

「……………」

あまりのことに頭が追いつかない。

数秒ほど硬直した後。

「ひゃっ!?!」

僕は声を上げて仰け反った。

そのまま後ろに倒れる。

グチャツという音と共にクリームの中に突っ込んだ。

体中がクリームまみれになる。

ドロツとしていて少し気持ち悪い。

すると後頭部に鋭い痛みが走る。

「痛っ!?!」

思わず叫びながら後ろを振り返るとカラスが僕の頭を突っついていた。

「ああ! わああわ! や……やめ……やめ……」

しつこくコツコツとまめにつついてくるカラスを追い払おうと頭のあたりで腕を振

り回す。

しかし、それがカラスに当たることはなかった。

「お……。鞆……。?」

……?

「お……。い……。か……。か……。?」

痛い……。

「……………幸せ……………な顔……………って……………ね。」

何か……………聞こえる……………？

「起……………て下……………い……………鞆……………？」

頭に……………痛みが……………。

「鞆……………起きて下さい！」

「ふあい!!」

バツと寝ぼけ眼のまま机から顔を起こす。

そこは文さんの仕事場。

「あれ……………？クレープ……………？」

ハッキリとしない意識の中で呟く。

途端に文さんが吹きだした。

「……………。」

だんだんと視界……………そして頭の中が鮮明になっていく。

それに伴って顔が上気していくのが分かった。

「クレープは美味しかったですか？」

目の脇の涙を拭いながら文さんが尋ねる。

僕は返す言葉を探して目を泳がせる。

その両端に水が溜まっていたのは恐らく気のせいだろう。

もちろんプルプルと震えていたりなんかはしない。

ギョツと唇を噛んでゆつくりと机に突っ伏す。

そして……………

「ああああああああ。」

くぐもった絶叫。

バタバタと足で空を蹴る音。

となりから文さんの噛み殺した笑いが聞こえてきた。

「大丈夫ですよ。何も聞いてませんから。」

文さんが僕の肩をぼんぼんと叩く。

「なにが大丈夫なんですかあ……………聞いてますよね……………」

何とか少しだけ落ち着いた僕は両手で顔を覆いながら蚊の鳴くような声で言う。

文さんはにこにここと楽しそうに笑いながら

「さて、なんのことですかねー。」

そう言つて僕の反応を窺ってくる。

「もう良いです……！」



僕はリスが頬袋に餌を詰め込んでいるように片方の頬を膨らませてそっぽを向く。大分子供っぽいと自分でも分かっているのだが、ついついこうしてしまう。

第一、今回のことに関しては何文さんにも非があるだろう。

……まあ、そんなことをぶつぶつと考えていても仕方がない。

僕は何とか話を変えようと考えを巡らせた。

「そういえば……何で起こしたんですか？何か用があったとか……？」

僕の質問に文さんは答えを探すようにああくど呟く。

そしてまばゆいばかりの笑みを浮かべて、

「すごく幸せそうな顔で眠っていたのでつい……。」

「つい……って何ですか？……。」

僕の視線を受け流してメモ帳を開く文さんに嘆息しつつ僕は夢のことを思いだしていった。

大きなクレープ。

思い出しただけで口元がほころぶ。

我ながら随分と幸せな夢を見たものだなあ……。

僕は夢の中の出来事をできるだけ鮮明に思い出そうと記憶を探る。

しかし、やはり夢の中だったと裏付けるようにぼやけた風景しか思い出すことができ

なかった。

「ううーん。」

そう唸りながら頭を捻る僕の耳に急にこんな音が飛び込んだ。

《ガタツ》

「邪魔するわよ……っ？」

「お邪魔します。」

扉を開く音。

そして二つの声。

声のした方向を見ると二人の女性が扉をくぐるところだった。

まず気になったのはその見た目だった。

一人は白い髪に犬のような耳と尻尾がついている。

もう一人は色素が薄いふんわりとした髪をツインテールにしている。全体的に紫色を

基調とした服装をしている。

それぞれは、幻想郷でそれなりに生活してきた今となつては珍しい見た目ではないけど……こんな二人いっしょにいるとなると少なからず違和感を抱いてしまった。

共通点と言えば二人共が頭に文さんと同じ……あの……変なの（頭襟）をつけていることぐらいだ。

「おや、はたて……。それに権も……。どうしたんですか？」

文さんはメモ帳から顔を上げた。

「どうやら知り合いだったようだ。」

「取材よ取材。何か悪い？」

ツインテールの女性は部屋に上がりながら文さんに言い返す。

取材……。……。というと……文さんと同じで新聞記者さんだったりするんだろうか……。？

すると彼女はスツと僕の方に向き……。、

「で、誰……。？その子。」

怪訝な面持ちでそう口にした。

「はーはい……。……！」

ついつい緊張で体が強張る。

しかし、それが余計に怪しく映ったのか彼女の眉は更に真ん中に寄った。

「ああ、彼女についてはかくかくしかじかでして……。……。」

「説明端折らないで下さい……。……。」

笑顔で楽をしようとする文さんに白髪の女の子が呆れたように言った。

当然ながら実際はかくかくしかじかだけでは何も伝わらない。

少女説明中

「助手……………ねえ……………」

ツインテールの女性が僕の顔をまじまじと見る。

「はい。よく働いてくれてますよ。」

文さんの言葉に彼女は少しだけ肩をすくめる。

そして文さんに向かってこそこそと……………しかしわざとなのか、僕に少しだけ聞こえるようにして

「それより……………大丈夫なの……………？山に連れて来ちゃって……………いろいろとまずいんじゃない……………？」

チラチラと横目で僕を見ながら耳打ちした。

「そうですよ。大天狗様とか……………それに他の住民にもバレたりしたら……………」

そこに犬耳がついた女の子も参戦する。

良く分からないが少なくとも歓迎されている様子ではない。

僕は思わず二人の視線から目を逸らした。

すると文さんは他の二人とは対照的にヘラヘラとして手を振ると、

「ははっ、大丈夫ですよ。その辺りはこの射命丸文……………抜かりはありませんから。」

どこぞの夢の国の愉快なネズミのように笑いながら言った。

「抜かりないって……………現に私たちが知らなかったんだけど……………」

「そうですよ。」

しかし二人の女性は一樣に半眼で文さんを見る。

文さんはゆっくりと僕の方に視線を移すと、

「とにかく大丈夫です!」

親指を立てた。

どうしよう……この上なく不安だ。

「それより、はたてが取材とは……明日の天気は槍ですかね?」

するとどうにか話を変えようと文さんがそう切り出した。

それを聞いたツインテールの女性はムツと文さんを睨む。

「何?……普通でしょ?」

「ええ、まあそのはずなんですが……はたて、これ以前で最近取材のために外に出たのはいつですか?」

「………思い出せないけど……?」

恐る恐る言う彼女に文さんは「ほらね」と言わんばかりに肩をすくめる。

「それと、何で私の仕事場に取材に来るんですか………情報あげませんよ?それとも花果子念報は人の記事をパクリようになったんですか?」

「誰が好き好んであんたの記事盗りに来るのよ……。」

二人の目の間に火花が散り始める。

「どうやら彼女は新聞記者のようだ。」

だとすると、もう一人の女の子も記者さんなんだろうか？

僕の考えを読みとったようなタイミングで文さんがもう一人の女の子に話しかける。

「それで……権はどうして……？手伝いですか？」

その問いに対し女の子はツイインテールの女性を横目に見ながら、

「ええ……まあ……たまの休みだというのに手伝わされてます。」

不満げに答えた。

「別に良いじゃない。どうせ暇でしょ？」

「将棋の予定をキャンセルしてきましたけど……？」

「……」

僕たちの目線が一人に集まる。

「……悪かったわね……今度なんかお詫びするわよ……。」

彼女はバツが悪そうに三人の視線から目を逸らした。

「それで、話は戻りますがどうして私のところに？」

やってきた二人は椅子に腰掛けお茶を啜っている。

無論文さんが出したものだ。

考えてみれば……………『助手』である僕が出すべきなのかもしれないが、文さんは「いいですいいです」って言うって淹れさせてくれなかった。

「え？ああ……………特に何も？面白いことでも転がってないかなーって。」

ツインテールの女性は空になった湯飲みを机に置き、肘を突いた。

その答えに文さんは顔をしかめると。

「さつき情報あげないですよ……………って言いましたよね？もう一回言いましたよ……？」

やれやれと肩をすくめて言った。

「……………そこをどうにか！なんかかないの？なんか。」

「だから情報は売りませんって。」

「……………いいじゃない減るもんじゃないし。」

「我々にとつて情報は命でしょうが。」

拜んで頼み込む女性を文さんはぎっくりと切り捨てる。

「はあ〜釣れないな〜……………んっ？」

体重を後ろにかけて椅子の前足を浮かせた彼女と目が合う。

何だろう？と首を傾げると彼女はニヤツと笑って

「そうだ、その子の記事書かせてよ。文々。には載せてなかったでしょ？」

「ええ!!」「ええ?」「はい?」

三人で声を合わせる。

「だから。その子、ええと……鞆だっけ?鞆の記事を書かせてって言うてるの。外人なんですよ?上手いことやればちよつとした記事ぐらいできるでしょ?」

名案だと言わんばかりに早口で語り出す彼女を文さんは嘲るように見る。

「はああ、同業者として恥ずかしいですよはたて……そんなのろくな記事ができる訳ないでしょう?それに鞆の同意もなしにそんなことさせませんよ?」

しかし文さんの返答を予想していたように間髪入れずに、

「そこんところはどなのよ……?保護者兼師匠さん?」

そう尋ねる。

文さんは呆れたようにして即答……すると思ったが……

「……………そうですね……………じゃあ、こうしましょう。」

親指を立てた……………。

「え?」

思わず僕が声を上げるが文さんには届かない。

「今から簡単な勝負をしましょう。我々が勝つたら情報は売りませんし逆に一つ要求さ



せてもらいます。そちらが勝ったらその子の情報をあげます。………どうでしょう?」

文さんがニコツと笑う。

記者の女性は楽しそうに笑って、

「いいわね。で…勝負って言うのは?」

文さんに尋ねる。

そして、文さんは言い放った。

「鞆と椀に闘ってもらいます。」

口角を緩く上げて、首を少しだけ傾げる。

とても良い笑みを浮かべての言葉だった。

「はい?」「へ?」

呆然とした二人の声が虚しく空を掻いた。

続く……。

## おまけ編 2話〈契約事項の確認を〉

「あの……………文さん？本当にやるんですか…？」

獣耳と尾のついた女の子が文さんに尋ねる。

しかしそれに答えたのは文さんではなく…

「今更何言ってるのよ。私の情報のためよ。」

その横にいるツインテールの女性だ。

「はあ……………」

女の子は諦めたようにため息をつくと僕の方へ体を向けた。

「犬走椀です。よろしくお願いします。」

そう言つてペコリと頭を下げる。

「え？あーん、心音鞆といいます！。え、えと……………お手柔らかに……………」

つられて僕もペコペコと忙しなく頭を下げた。

椀さんは顔を上げるともう一人の女性を見る。

ツインテールの女性は視線に気づいたのか「ん？」と声を上げた。

「ああ、そう言えば名乗っていなかったわね……………私は姫海堂はたてよ。こいつと同じで

新聞記者をやつてるわ。」

「一緒にされるのは大変不本意ですね……………発行部数を比べても『同じ』なんて言えますか?」

笑顔で自己紹介したほたてさんに文さんが食いかかる。

「ふん……………なにも発行部数だけで新聞の良さがきまるわけじゃないでしょ!」

「ええ、もちろんそれぐらいのことは存じていますよ?ですが情報の鮮度、記事の面白味……………どれ一つとつても文々。新聞の方が優れていると思えますが……………?」

「私は捏造なんてしたことないわよ?」

「捏造だなんて人聞きの悪い。第一新聞っていうのは——」

そして口論が始まる。

なんというか……………同族嫌悪……………つていうんだらうか?どうにも仲が悪いらしい。

マスメディア関連の人物っていうのは敵を作りやすいと聞いたことがある気がするけど……………仲間内だけでも仲良くしておいた方がいいんじゃないだらうか?

そんなことを心配していると椀さんが仲介に入る。

「二人ともそれくらいにして下さい。」

諫められた二人は渋々といった様子でお互いに口を噤む。

「さて、じゃあ気を取り直しまして……………勝負のルールを説明しましょう!」

すると一転、声色をグンツと明るくして文さんが話し出した。

そして、ルールの説明を始める。

要約するとこんな感じだ。

- ・両者は木刀を持ち、合図で対戦を始める。
- ・勝利条件は木刀を相手に当てる。またはなんらかの方法で「降参」を認めさせる。
- ・基本的には禁止事項なしのフリーダムなもの。
- ・文々。新聞の記事は世界一イイ。

……最後のはいらなかつたのではないだろうか？

まあ内容は前に妖夢さんとお手合わせさせてもらったときと殆ど変わらない。

「弾幕勝負ではないんですか？」

横で椀さんが不思議そうに尋ねる。

ほたてさんもなんだか納得がいかないように眉をひそめている。

「まあ、聞き分けのない妖怪なんかには有無を言わさず喰い殺される可能性だってありますね。そういうときに身を守るためには肉弾戦の技術も必須でしょう？」

しかし文さんは当然だと言うように肩をすくめる。

なんだかтонでもなく不穏な言葉が聞こえた気がするけど僕は何も聞いていない。

聞いていないと思ったら聞いていない。

「んー……まあそうね。人間でも足掻けばどうにかなるかもしれないしね……。」  
ほたてさんが小刻みに頷く。

権さんはまだ納得している様子ではなかったが、そんなことは知らないと言文さんが明るく言い放った。

「……とまあ！そういうことです!!それでは！早速始めましょう!!」

そうしてノリノリの新聞記者二人と溜息混じりの助手二人は仕事場の外へと足を踏み出した。

周りが木に覆われていて少しだけ開けた空間。

お互いに向き合うようにして僕と権さんが立っている。

緊張で汗ばんでいる手をギュツと握った。

「はーいーじゃあ、始めますよー!!」

……とそこに緊張感のない声の一つ、続けて

「権ー。負けるんじゃないわよー!」

一二……。

なんだか自分だけ緊張しているのが馬鹿らしくなってきた。

「あ、すみません！ちよつと待って下さい!」

ほどけた靴ひもを結ぼうと体を屈める。

「しっかし……いいの？万が一にも負ける可能性なんて……？」

「いやいや、甘く見ていては痛い目を見ますよ……。」

「……？」

「あの……！もう大丈夫です！」

僕が文さんたちに聞こえるように叫ぶ。

「よし！それでは始めましょう。私の『開始』の合図で始めて下さい。」

意気揚々といった感じで話す文さんに僕たちが頷く。

僕たちの様子に、文さんは満足そうな表情をつくった……。

そして。

「それでは………開始!!」

文さんのその言葉と共に場の空気が一転する。

権さんは合図直後に動く様子はなかった。こちらの出方を窺っているのだろう。

二人の得物は普通の木刀一本で同じ条件だ。

ハンデと言えば権さんの服の方が動きにくそう……つてぐらいだろうか……。

とにかく……ほとんどフェアな状態での勝負と言うことだ。

今までの経験から言ってまず簡単には勝たせてくれないだろう。

しかし僕も個人情報がかかっている……負けられない戦いなのだ……。

チラツ……と権さんの表情を見やる。

真剣で……鋭い眼だ。

見た目がふわふわとした印象だからかすごく違和感を感じる。

………つて、そんなこと考えている暇はない………！

相手が来ないなら自分から行くまでだ………！！

そう心の中で叫ぶと権さんめがけて猛突進を仕掛ける。

少しは怯んでくれることを期待したのだけれど権さんは表情をびくりともさせずに

構えの姿勢を保っている。

大きく上に振りかぶったひどく乱暴な一手。

隙だらけだが権さんは受け止めようと木刀を構えた。

僕は自分のありつた力の力を込めて木刀を振り下ろす………相手の木刀を吹き飛ば

すつもりで………！！

権さんはゆっくりと………そう………しつかり視認できるほどゆっくりと木刀を前に

突き出す。

それは勢いよく振り下ろされた僕の攻撃を受け止める。

そして、じつくり、丁寧な横に衝撃を流した……。

その勢いで体勢が横に崩れる。

「なっ……!?!」

あまりにもあつさりと避けられた木刀が向かう先はただの地面。

この後にどうすればいいかなど考えるまでもない……。

どうにか身を横に転がす。

一瞬前に僕がいたところに椀さんの木刀が走る。

何とか避けることが出来たのは良いが木刀を離してしまった。

しかし今取り返そうとするのは得策じゃないだろう……。

そう思い、まず間合いを取るのを優先した。

椀さんは横に転がる木刀を蹴り飛ばす。

カランカランと音をたてて椀さんを通して僕の対極へと移動した。

「降参しますか……?」

椀さんがゆつくりと距離を詰めながら訊いてくる。

答えは勿論……

「まさか……まだ負けてないですよー!」



ハッキリNOと椀さんの目を見据える。

「そうですねか……………」

椀さんは気が進まないというように溜め息混じりに呟いた。

そして…………。

強く踏み込んでグンツと間合いを詰められる。

鋭い突き…………。

間一髪で身を翻す。

受け止めることは出来ないから避ける以外に方法はない。

続く攻撃も同じようにぎりぎりでかわす。

椀さんの攻撃は妖夢さんのように攻撃と攻撃のスパンが短いわけではない。

しかしどうにも隙が見当たらない。

木刀を取り戻そうと少しでも背中を見せようものならそこで試合終了だろう。

どうしたものか…………。

そんなことを考える暇も与えずに椀さんの攻撃は続く。

集中力を切らすことが出来ない防戦にだんだんと疲れが現れてくる。

対する椀さんは息の一つも切らさずたんとんと攻撃を続ける。

このままでは負けるのも時間の問題だ…………。

どうすれば……………。

「ああ、もう！何やってるのよ椀……！さっさとしなさいよ……………」

いらだった様子の方。

闘っている二人から少し離れた岩に腰掛けながら二人は観戦に興じる。

「いやあ……………ピンチですね……………」

緊張感のない言葉。

その耳に入ってくるのは「はっ！」とか「やっ！」など短いかげ声のみ。

防戦一方の助手を見ながら呟いた。

「あんたねえ……………もう少し応援してあげなさいよ……………」

「いえいえ私は応援していますよ。表に出さないだけで……………」

微笑みながらそう答えるが目は二人から離れない。

「まあ、どちらにしてもこの勝負……………。もらったわね……………！」

余裕の表情で言い放つが彼女はただ……………

「……………どうですかね……………」

クスクスと笑った。

……。

さすがに疲れからか目の前が不明瞭になってくる。

まずい……………。

まずいのは分かっているけど打開策は見あたらない。

放たれた突きを屈んでかわす。

もう……………一か八かだ……………！

半ば自棄になって体を前に乗り出す。

そうして樫さんの手を掴んだ。

もう一方の手を肩辺りに置く……………そして……………。

「きゃっ!？」

思いっきり突き飛ばした。

小さな声と共に樫さんの体勢がぐらつく——が、すぐに立て直してしまった。

しかし僕のやることは一つ……………。

樫さんから得物を奪い取るのは難しいだろう。

それなら自分の得物を取り戻すまで……………。

僕は転がった木刀の方めがけて一目散に走った。

木刀はまるで待っていたというように見えやすい位置に転がっている。

走りながら木刀を掴み、それと同時に180度体を回転させる。

椀さんが追いかけてきていると思っただからだ。

しかし実際はそんなことはなく倒れていたところでゆっくりと立ち上がっていると  
ころだった。

視線がこちらを向く……。

なんだかさつきより更に更に鋭さを増したというか……まるで獲物を狩る狼のような眼  
をしていた。

それを見て思わず木刀を掴む力をいつそう強くする。

椀さんが動いた……。

その次の瞬間には目の前に振り下ろされた木刀。

咄嗟に自分の木刀で受け止める。

ガッ……!!

受け止めた木刀を持つ手にびりびりと衝撃が走る。

しかし、反動のせいか椀さんは前に体勢を崩した。

………刹那……。

「やあっ!!」

放たれたそれは弧を描きながら椀さんを横からとらえ——

ガンッ…

る直前に音をたてて静止する。

お互いに木刀を持つ手がぶるぶると震えているのが分かった。

頬には相手の息がかかる。

競り合いになれば分が悪いのは分かり切っている。

いったん後ろに跳ねるようにして距離をとる。

しかし椀さんは間髪入れずに距離を詰め、細かく攻撃を放つ。

その一つ一つを受け止め、かわしながら徐々に後退していく。

ガッ…

ガン…

カッ…

そんな音と共に繰り返される単調で、しかし気の抜くことは許されない作業。

ミスした方が……負ける。

集中力を切らすことなく尚も後退を続ける。

そして……。

足がもつれて後ろに倒れる。

「しまっ——」

声を上げる間もなく樵さんが僕に向かって走る。

その途中にこけた。

……。

もう一度言い直そうか……。

その途中にこけた。

かわいらしい悲鳴とともにかなり派手に。

靴紐を結ぶときにもし役に立っただらと思つて足を引っかけるようにして結んでおいた高い草。

え？ずるい？

勝負の世界では勝つか負けるかが全てなんです……。

過程なんてそんなに重要じゃないんですよ……。

計画通り……と新世界の神のように笑うと樵さんの前に走る。

そして、余裕だというように満面の笑みを浮かべながら速度を加減した一振り。

今度こそそれは樵さんをとらえて――。

あれ？

顎に何かが当たった感覚。

樵さんに当たったはずの木刀は空を掻いていた。

そして顎には木刀。

横にはその木刀を持つ樵さん。

「はーい!!そこまです!!」

遠くから聞こえてきた試合終了を告げる声に脱力し僕はその場に滑り込んだ。

樵さんは「ふう……………」と一息つくど僕に一礼した。

僕は力なくなるとか笑顔を作り一言。

「参りました……………」

続く……………。

小さなおまけく本編の尺が足りないく

「いやあ……惜しかったですね。」

「うう………気休めはいいですよ………」

笑いながら肩をポンポンと叩いてくる文さんに顔を覆いながら応じる。

「それじゃあ文……！約束の品を頂戴するわよ。」

落ち込んでいる僕の襟首を掴む細い腕。

振り返るとほたてさんが勝ち誇ったように笑みを浮かべていた。

文さんはやれやれといったように肩をすくめるとほたてさんに向かって新聞を投げた。

「……？」

ほたてさんは訝しげにそれを受け取ると僕から手を離れた。

新聞を広げて中身に目を通して見ている。途中で椛さんを一瞥していた。

椛さんは不思議そうに首を傾げると横から新聞を覗き見る。

そしてその顔はみるみるうちに紅潮していった。

「ちよ、ちよつと文さん!?これ処分してくれるって言ったじゃないですか!?!」



真つ赤にした顔で叫ぶように文さんに尋ねる。

何が書いてあるんだらうか……。

「これ、ちよつと前にあんたが出したやつでしょ？これなら私だつて持つてるわよ」「えつ!?」これが何だつて言うの？」

ほたてさんも半眼で文さんに尋ねる。

文さんはすぐに答えることはせず僕の肩を持つて自分のもとへ引き寄せた。

そしてニコツツと笑顔を作つて……

「私は確かに情報をあげると言いましたね？」

「……。」

ほたてさんが黙つて頷く。

「それで、誰の情報だと言いました？」

文さんの問いかけにその場の全員が黙り込む。

僕が記憶を引つ張り出す前に椀さんが答えた。

「『その子の情報』つて言いましたっけ？」

「ご名答！と文さんは満足げにコクリと頷いた。

「ええ、しつかりと椀の方を指差して言いましたよ？」

いたずらつ子が種を明かすように嬉しそうに楽しそうに言った。

「なっ!?!……………そんなの屁理屈……………」

「屁理屈は理屈の親戚ですよー。」

不服申し立てるほたてさんにヘラヘラと応じながら文さんは笑う。

「はあ……………」 「はあ……………」

重なったため息に権さんと顔を合わせる。

それがおかしくて、互いに少しだけ笑った。

## 人里の取材

## 8章 1話〈幻想郷では常識に囚われてはいけない〉

目の前の光景に言葉をなくす。

耳が働かないせいか、世界から音が消え去ったように静かだ。

出来るならばもう目にしたくなかったそれは……。

清澄に……そして容赦なく。

しつかりと事実として僕の目の前にまた姿を現した。

「さて……どうしますかね……。」

「……………どうするんですか……………」

鬱蒼とした森の中。

動かなくなった妖精を前にして二人は一樣に唸っていた。

彼女の口元に手を寄せる。

微かだが息がかかる。

「きつとただ気絶しているだけですよ……。そうですよね。」

消え入りそうな声で文さんに尋ねる。

「……………」

それには肯定も否定も返ってこなかった。

それが無言という肯定だと理解していないフリをして俯く。

「とりあえずは彼女をどうにかしないといけないですね……………」

文さんはそう言うのと軽々と大ちゃんを持ち上げた。

ヒョイと抱え上げられた大ちゃんが起きる様子はない。

思わず目を背けてしまう。

「具体的にはどうするんです……………？永遠停ですか？」

なんとか視界の中心に入れないようにしながら尋ねる。

そういえば……………とアンネさんのことを思い出した。

何か進展はあったんだろうか？

「そうですね……………まあ……………そうするの——」

「ああ……………やっと思つた……………」

文さんの言葉を遮った声。

聞き慣れた声……………疲れているのが一発で伝わってくるのにどこか凜としている。

博霊神社の巫女さん……。

「霊夢さん!？」

振り返るとそこには見覚えのある人が二人。

「おお。調子はどうだ？ブン屋の助手君よ。」

「探したのよ……つたく……。」

魔理沙さんに霊夢さん……そして見覚えのない人が一人。

「これはまたお揃いで……。早苗さんはどうしたんです……?？」

文さんに尋ねられ霊夢さん達の横に立つ、霊夢さんと同じように巫女服を着た女性が答えた。

「いえ、異変だと聞いて、いても立ってもいられなかったもので……。」

長い緑色の髪をかき分けて微笑む。

「おや、そこにいるのは霊夢さん達が言っていた文さんの助手の方ですか……!？」

「え……?？あ!は、はい!!助手の方です。」

いきなり声をかけられ変な回答をする。

しかし彼女はそんなことは気にせず僕の目の前まで歩み寄ると、

「私は東風谷早苗です!守矢神社の……巫女をやっています!よろしく願います

!」

「え!? えと……? ぼ、僕は心音鞘と言います。刀を入れる鞘とかいてさやです。こちらこそ……お願いします。」

何をよろしくお願いされたのかよく分からないままに自分も自己紹介をする。

早苗さんはニコニコと笑っている。

見たところ普通の人みたいだ……いや……巫女さんって時点で普通という言葉を使うのもおかしいものだが幻想郷ではきつと『普通』の部類に入るだろう。

それより……守矢神社……って言っただけど博霊神社とは別にもう一つ神社があるんだらうか……?

だとしたら霊夢さんと早苗さんは商売敵なのでは……?

そんな考えをすぐさま振り解く。神職ではそういうところはなんかこう……寛容……? なのかもしれない。きつとそうだ。

「つていうか……あんたは何で妖精を背負っているわけ?」

霊夢さんの尤もな疑問に魔理沙さんと早苗さんも頷く。

文さんはどう説明するか迷っているように言葉を詰まらせる。

そして、ふう……と文字通り一息ついた後説明を始めた。

少女説明中

「へえ……なるほどね……エルとチールか……。」

「そりやあ……また露骨に怪しいな……。」

「そうですね……。」

話を聞き終わると全員が一様に考え込むように顎に手を当てる。

「とりあえずそいつらが怪しいのは確かみたいね。」

「能力も無関係とは思えませんしね……。」

そして、僕達を置いて話を盛り上げていく。

「それはいいんですけど……。」

文さんは申し訳なさそうにして三人の話に割ってはいる。

「霊夢さん……さつき確か『探したわよ……』って言っていましたよね……？何か私達に用が？」

すると霊夢さんは思い出したように声をあげて文さんに答える。

「実は人里でちよつと事件が起こってるみたいでね……それがどうも今回の事件と関係あるみたいなのよ。」

「と、言いますと？」

「人が次々抜け殻のようになってしまっているらしいわ。」

霊夢さんの言葉に僕は背筋が凍り付くのを感じた。

何度も聞いたその言葉。

もう聞きたくなかったその言葉。

「なるほど……………そう……………ですか……………」

文さんは何かを考え込むようにしている。

「それで、人里に行く前にお前等と情報を交換しようと思つて探してたつてわけだ。」  
魔理沙さんはそう言つて大ちゃんの方に歩み寄つた。

そして頬を少し捻る。

「で、これがその抜け殻……………と。なるほどな……………」

魔理沙さんは大ちゃんをまじまじと見つめる。

そこに早苗さんも駆け寄る。

物珍しそうに大ちゃんを観察する二人を余所に霊夢さんが文さんに話しかけた。

「で、まあそんなわけだから今から人里に行くんだけど……………来るでしょう?」

「もちろんですよ!!……………と、言いたいところですが……………」

文さんは自分の抱えた大ちゃんを見やる。

「まずは彼女を永遠停に連れて行かないといけないんですね……………」

そして心底残念そうに嘆く。

「ああ……………まあ、適当なところに置いてくわけにもいかないしね……………」

「それに人里となるといろいろと準備がありますし……………」



文さんはうくん……と唸り、そしてゆっくりとこちらの方を向いた。

そして、僕と目があつた瞬間にポンツと手をたたいた。

この感じは……たぶん……。

「そうです……私は永遠停に行つて人里に行くことが出来る服装になつてから向かいますので、鞆だけ連れて先に向かつてもらえませんか？恐らくそう時間はかかりませんから。」

やっぱりか……。

なんとなく予想していた展開にどう反応すればいいか迷う。

「そうね……分かつたわ。ほら、二人ともそういうことだから行くわよ。」

霊夢さんは文さんの提案に二つ返事で了承すると魔理沙さんと早苗さんを大ちゃんから引き剥がす。

「ん？ああ……もうちよつと。」

「駄目よ、依頼人待たせてるんだから。」

二人は渋々と大ちゃんを担いだ文さんから離れた。

「それでは！鞆は新しく聞いたことを一つ残らずメモしておいて下さい！よろしく頼みますよ。」

そう言うとき文さんは風のように何処かに飛んでいってしまった。まあ行き先は当然

永遠停だろうけど。

何か言う暇もないまま飛び立たれてしまい「あ…」と漏らす。

その後、心の中で分かりました、と返事して気合いを入れると、霊夢さん達の方へと向き直る。

「じゃあ……向かいましょうか……。」

「そうだな。」

そして森の中の4人は足早に人里に向かい始めた。

「さて、それで……どこに行けばいいんだ？」

「ええと……人里の端にある大きな屋敷に被害に遭われた方が隔離されているらしいです。皆さん流行病だと思われてるみたいですよ。」

しばらく歩くと、そう時間が経たないうちに人里へとたどり着いた。

しかしそれは僕の知っている人里とは何かが違う気がした。

具体的にはよく分からないけど、なんと……空気が淀んでいるというか、前に来たときのような活気がどこにも見あたらない。

こころなしか表を歩く人の数も前より少ない気がする。

道の端で世間話をする人たちの顔は暗く、何かを心配している様子だ。

「何というか……活気がないですね……。」

早苗さんも僕と同じ感想を漏らした。

「まあ、人が次々あんな風になつてゐるんだつたらしようがないでしょう。……それより早く向かうわよ。」

霊夢さんはカツカツと靴音を鳴らしながら道を歩く。

「……たく……そのエルとチールとかいうのが犯人だつたらさつさと見つけだして懲らしめないかね……。」

「妖怪退治ですね！」

早苗さんが新しいおもちゃを手に入れた子供のように目を輝かせる。

頭を掻きながら溜め息をつき道の真ん中を堂々と歩く霊夢さんはパツと見大分ガラが悪いように見える。

なんかこう……煙草が似合いそうだ……。

そんな失礼なことを考えていると前の方から子供達が走ってきた。

「ほら……つちだぞ！」

「ちよつと待つてよー……。」

駆けっこをしている三人の子供達。

一人の女の子だけ息を切らして必死に他の二人を追いかけていた。

その子は何とか数秒かかって追いつく。

「はあ……はあ……ねえ、ほんとにいいのかな……？せんせーはお家で大人しくしてろって……。」

「別に大丈夫だよ！おれは風邪なんか平気だし!!」

「そうだよ！皆恐がり過ぎなんだって!!」

恐る恐る言った女の子に二人は元氣な笑いと共に返した。

女の子はどうしようかと迷うようにおどおどとしているが他の二人はしらないとばかりにまた走り出そうとしている。

すると……

「ダメですよ皆さん！先生のおっしやることはしっかり守らないと。」

子供達を諭す声。

隣を見るとそこにいるのは霊夢さんと魔理沙さん……さつきまでいたはずの早苗さんはいない。

声のした方を見ると案の定早苗さんが子供達の目線まで屈んでいた。

「だれ？」

子供達は至極尤もな疑問を口にする。

「今はそんなことはどうでもいいんです！とにかく、よい子はお家に帰りなさい——」

「おれは別によいこじゃないもん。」

「そうだそうだ。」

子供達はそう叫びながら早苗さんの脇をすり抜ける。

「ああ!!ちよつと!!」

その叫びを聞いたところで子供達が止まるはずもなく、あつと言う間に早苗さんの前には誰もいなくなる。

きかん坊達は手に持つ木の棒を振り回しながら走る。

そして、彼らの先に立ちほだかる人間が一人。

「うわっ!?!何だ!!」

ぶつかりそうになつた子が何とか立ち止まる。

それを見習うようにして後ろの二人も走るのを止めた。

皆一様に目の前の紅白の巫女を不思議そうに見上げている。

「あんた等。いいこと教えてあげるからしつかり聞きなさい……。」

静かだが……どこか凄みの利いた声。

聞く者を黙らせる魔法でもかかっているように子供達、そして僕達も言葉を発すことなく彼女の声に耳を傾けていた。

「悪い……とは言わないから早く帰った方がいいわよ……。昨日から……でおかしなこ

とが起こってるのはしってるでしよう？」

「……………あんなの平気だよ……………」

やめておけばいいのに一番やんちゃそうな男の子がそう呟いた。

霊夢さんはその子に笑いかける。しかしその目は少しも笑っていない。

鬼や天狗も竦み上がりそうな表情。

「そう？……………それなら好きにしなさい……………」

妙に耳に鮮明に響く不思議な声。

子供達は背筋を伸ばしながらただ一点霊夢さんの方を向いている。

聞いているだけで姿勢が良くなりそうだ……………目の前で聞いている子供達なら尚更だ

ろう。

そして霊夢さんはこう続けた。

「死んでもしらないわよ。」

「……………」 「……………」 「ひっ…!？」

三人の子供達は蜘蛛の子を散らすようにそれぞれ違う方向へと走っていく。

行き先は言うまでもないだろう。

「……………はあ……………」

霊夢さんは一仕事終えたというように大きく呼吸をすると僕達の方へ向き、

「それじゃ、向かうわよ。」

僕は霊夢さんの意外……というほど意外でもない一面にぽかんとする。

しかしそんなことは気にせず、霊夢さん達は先へと進む。

「あ……ま、待って下さい!!」

そんな声をあげながら三人を追いかけて一歩踏み出した。

続く……。

## 8章 2話～一期一会～

「さてと……………それじゃあ先を急ぐとしますか……………」

魔理沙さんが手を頭の後ろで組み、足を投げ出すようにしながら進んでいく。

対する霊夢さんは溜め息混じりにとぼとぼと歩く。

「つたく……………最近の子供は生意気ったらありやしない……………無駄に時間食ってる暇なんてないっていうのに……………」

そしてそう言って歩みを速めた。

「……………」

『おい！大変だ!!まただ、また人が倒れたぞ!』

『おいおい……………嘘だろ……………何人そうなっちゃうんだ……………』

『ああ！あんまり近づきすぎるな!』

「……………さて、向かいますようか。」

霊夢さんは騒ぎを横目にスタスタとその場をとおり過ぎようとする。

「うおおおい?!?!いやいやいや……………ダメだろ！明らかに何かあっただろあれ!」



「うっさいわね……いちいち騒ぎに付き合つてらんないわよ！こつちも依頼人待たせてるんだから！」

一触即発の雰囲気を漂わせながら二人がにらみ合う。

そんな二人にどう声をかければいいのか分からずあわあわとその場に立ち尽くす。

僕たちの向かう先とは別の方向、大通りのような場所を外れた一本道の先では人だかりが出来ていてなんだかあまり明るくない声がちらほらと聞こえてくる。

「ここは少しだけでも見に行つてみるべきだろ！」

「だ、か、ら。人待たせてるつて言つてるでしようが！」

尚も続く口論を割くようにして人ばかりの方から声が響いた。

『おい！見ろ！この女昨日のときもいたはずだぞ!!』

『本当だ!!俺も見たぞ!この女!』

『やめて!近づかないで!あんたが元凶なんでしょう!?!』

「……………」

「……………」

二人共、声の方向を向いて黙り込む。

あがつた罵声は醜く、鋭利な刃物となる。

魔理沙さんには見慣れない半眼で、霊夢さんを見る。

「……………はああ。分かったわよ……………さっさと済ませるわよ。」

霊夢さんは肺の空気を全て出し切ったんじゃないかというほど大きな溜め息を吐き、けだるそうに人だかりの方へと足を向けた。

「こ、これは!!巫女様じゃないですか!!」

「大変なことが起こっているのです!どうかお力をお貸し下さい!」

進むに連れて霊夢さんや早苗さんの周りを取り囲む人の数が増える。

皆同じように二人を拝むようにして乞う。

こうしてみると二人が凄い人なんだと理解せざるを得なかった。

「分かったから……………何があったのか説明して頂戴。」

食いつくようにして取り囲む人々を退けるようにして手を広げると霊夢さんが尋ねた。

すると人混みの中から一人、年配の女性が前へと歩み出る。

「実は昨日から何人も人が倒れていつてね……………今もまた一人倒れたんだよ。気絶しているみたいなんだがこう続けてだとさすがに偶然なんてことはないだろうし

……………。」

「……………!」

お婆さんの言葉に思わず霊夢さん達と顔を見合わせた。

間違いない人が抜け殻のようになっていったことを言っている。

魔理沙さんが「やっぱり来て良かっただろ？」というように笑みをつくると霊夢さんは眉をピクツと震わせ、お婆さんの方に向き直った。

「それで今、倒れた人達は里の端の屋敷に移されているんだけど……聞いたところじゃまだ起きる様子はないらしい。老若男女関係なく倒れていつちまって原因なんぞ分かったもんじゃない……。病か何かだとは思うが……。」

「原因なんて決まってる！全部こいつのせいだ!!」

話を続けるお婆さんを割ってはいいり、若い男性がこう叫んだ。

「俺は見たんだ！昨日の何回かの騒ぎの時もずっとこいつがいたところを……。俺が騒ぎを聞きつけたときには毎回な……。それで倒れた奴を最初に見つけた人に訊いたら人が集まる前にいつの間にかそこにいたって皆が口を揃えて言いやがる……。だからこいつが元凶に決まってる！どんな手を使ったかは知らないがな……。」

男性の言葉で一気にその場がどよめいた。

『本当……?』

『そういえば私もあの人見た気がする……。』

ざわざわと不安の波は広がり、やがて一人の女性への罵声へと変化していった。

しかしそれを受ける女性は表情を一つも変えずに虚ろな目で立ち尽くしている。

「ああ……ちよつといいかしら……?」

霊夢さんが控えめに上げた声に集団は静まりかえった。

「えつと……ひどい言われようだけど……実際のところどうなの……? あなたは何か知ってる?」

「知らない。」

余りにもストレートな質問に余りにもストレートな回答が返ってくる。

「たまたま通りかかったところでした。たまたま人が倒れていて、それがたまたま10回ぐらい続いただけ。」

そして、あまりにも現実味のない補足をした。

「……………そ、それみろ!! やっぱりこいつが犯人だ!」

若干ひきつった笑みを浮かべながら男性が言った。

女性をみる周りの人たちの目も冷たい。

しかし、さつきと同じように女性はそれらを特に気にも留めない様子できよとんと首を傾げている。

見たところ、年齢は10代後半ぐらいのようだ。

身長が高いせいか霊夢さんより少し年上に見える。

きれいな長い黒髪を後ろで束ねていてなんだか上品な感じがする見た目だが、着物が少しくたびれてしまっているのが残念だ。

「……………とりあえず……………今回のことは私達がどうにかするまで何もしないこと……………外にでるのにも必要最低限以外は控えた方が良いわね。ほらほら！野次馬は帰りなさい。」  
霊夢さんがそう言うのと周りの人たちはがやがやと散っていく。

最終的にそこに残ったのは僕達4人に最初に状況を説明してくれたお婆さん、そして疑いを向けられたスラツとした女性だけだった。

いや、もう一人……………塀を背にして座り俯いている僕と同じぐらいの歳に見える女の子。

彼女がこの騒ぎを作った原因なのだろう。

大ちゃんやアンネさんと同じ、魂が無くなり抜け殻となってしまう人。

だが不思議と見ていて軽くええたりすることは無かった。

それが《慣れ》であると告げる思考を振り払い女の子から目を逸らす。

「この子も屋敷に連れて行かんとな……………。全く……………まだ若いっていうのに可哀想に……………」

「ああ……………それだったら私達が連れて行ったらどうだ……………？どうせ目的地なんだからついでにさ。」

魔理沙さんは言うと同時に女の子を抱え上げる。

「おや……う？いいのかい……う？」

申し訳なさそうにするお婆さんに「いいっていいって」と笑みを作る魔理沙さんはなんだかかつこよく見えた。

「そうかい……う？じゃあお願いしようか……。」

お婆さんはペコリと一礼するとスローペースに去っていく。

それを見送った後霊夢さんは一つ、大きく溜め息を吐いた。

そして…

「それで……あんたは何で残ってんのよ……。」

目の前に立ち尽くす女性に半眼を向けた。

「言ったでしょ……？私達が何とかするから解決するまで——。」

「私もついて行く……。」

霊夢さんの言葉を遮るようにして彼女が言った。

その場にいる本人以外の全員が口を開けてぼかんとする。

しかし女性は垂れ目をキリツとさせてなんだかこう……やる気まんまんといった感じだ。

「いや……何があるか分かりませんし……。」

遠回しにやめておくように早苗さんが言い聞かせるが聞き入れる様子はない。鼻をスツツと鳴らしながら霊夢さんの目の前にたっている。

「ああ……………まだほとんど何も分かつていない状態だしハッキリいつて危険よ……………だから早くあなたも……………」

早苗さんと同じように霊夢さんも彼女を論すがやはり動く様子はない。

「まあ、別にいいんじゃないか？何も減るわけじゃないんだから……………」

すると魔理沙さんが苦笑いとともそう言った。

「いや、でも……………」

反論しようとした霊夢さんを掴み魔理沙さんは僕と早苗さんの方へと駆け寄った。

そして4人で輪を作るようにしてコソコソと話し始める。

「大丈夫だよ。何もずつと着いてこさせるわけじゃない。人里にいる間だけ一緒に行動してその後は何でも良いから適当な理由付けて逃げればいいだろ？」

「……………何でそんな面倒なことしなくちゃいけないのよ……………」

「だって、あいつ何言つても着いてきそうぞ？」

改めて女性を見ると僕らの行動を不思議に思ったのか首を傾げていた。

確かにさっきの様子からして適当な理由を付けて「はい。そうですか。」で済みそうな感じではなかった。

「はあ……………」

霊夢さんが本日何度目かの溜め息を吐いた。

そしてお利口に待っている女性の方を向く。

「しようがないわね取り敢えずは着いてきてもいいわよ……………ただし、勝手な行動は控えること。いいわね？」

霊夢さんの言葉に子供のようにパアツと表情を輝かせると彼女はこつちに駆け寄ってきた。

そして、霊夢さんの右手に触れた。

「……………え？……………何？」

突然の行動に戸惑いながら霊夢さんはやんわりと手を離した。

しかしそれにシヨックを受ける様子もなく女性はニツコリと笑みを浮かべている。

「……………じゃあ……………向かうわよ……………？」

霊夢さんはどこかその女性を警戒するようにして言った。

「えつと……………名前はなんて言うんですか？」

屋敷へと向かう途中。

なんだかさつきからだだでさえ少なかった人通りがもうほとんどないような状態に



なり、不安を紛らわせるのも兼ねて女性に尋ねる。

女性是最初不思議そうにしていたがすぐにやわらかい笑みを浮かべて

「ちえ……一十百千の千に恵みって書いて千恵。」

優しい声でそう言った。

「千恵さんですね！よろしくお願いします！」

そこに早苗さんがびよこつと顔を出した。続けて自己紹介をし始める。

僕や魔理沙さんも早苗さんにならって自己紹介をする。

最後に霊夢さんが、

「博霊霊夢。巫女よ。」

そうぶつきらぼうに言った。

「早苗、魔理沙、霊夢、鞆……よろしく。」

千恵さんは僕たち一人一人を見ながら確認し、握手を求めたのか右手を差し出す。

それを魔理沙さん、早苗さんの順に握り、次は僕だというように千恵さんの右手がこちらを向く。

「あ……ええとよ、よろしくお願いします——」

「ひゃっ?!……………」

何故か慌てながら僕が手を触れた瞬間……………弾けるようにして千恵さんは手を離し

た。

その反応についつい戸惑いを顔に出してしまふ。

しかし、当の千恵さんも似たような表情をしていて左手で右手を覆うようにしていた。

何かにひどく驚いた様子だった。

「え？あ、あの……………ええと？」

僕がどうしていいか分からずに霊夢さん達に視線で助けを求めたりしていると千恵さんはハッと我に返り、

「あ、づ……………ごめん……………なさい……………」

消え入りそうな声で呟いた。

「だ、大丈夫です……………よ？こ、こちらこそごめんなさい……………」

よく分からないままに頭を下げる。

正直なところ大分精神的なダメージを負ったけど……………大丈夫……………大丈夫……………

……………

「……………ちよつといいかしら？」

すると霊夢さんが声を上げる。一斉にその場の皆が霊夢さんの方を向く。

「見えてきたわ。たぶんあれよ。」

霊夢さんの指さす方向には一軒の大きな屋敷があった。

その周りに建物はなく孤立しているようにも見えた。

「さあ………ぱっぱと行って、さっさと終わらせましょう。」

霊夢さんは軽く伸びをしながらそう口にする。

そういえば霊夢さんだけが握手をしないまま終わってしまった。

千恵さんを見てみるとさほど気にしていない様子だ。のほほんとした表情で霊夢さんの後を着いて行っている。

そして、やっと僕たちは目的地である人里の端の屋敷へとたどり着いた。

続く……。

## 8章 3話～現実なんてそんなもの～

「ああ！来て下さったんですね！ありがとうございます！！」

屋敷にたどり着いた僕達を迎えたのはそんな明るい声だった。

声の主は若い女性で、後ろで髪を束ねている。

顔には笑みを浮かべているが、その笑顔はどこか陰っている感じがした。

「えっととりあえず中にどうぞ。」

「じゃあ、お邪魔するわよ。」

そう言つて霊夢さんはズカズカと玄関へ足を踏み入れる。

それに続いて早苗さんや千恵さんも屋敷の中に入った。

僕は改めて屋敷を眺める。

パツと見ただけでも相当の大きさだと分かる。

個人が住んでいるような感じじゃないから……何だろうか？村民が何かのイベントと

かで使うのだろうか？

ただ、それにしても里の端にあるみたいだし周りに建物もない。

いったい何のための建物なんだろうか？昔は周りにも建物があつたけど今はもうな

くなっちゃった……とかかな？

「あれ？その方はどうしたんです？」

そんな想像を頭に巡らせているとそんな声に我に返った。つつきり自分にかけてられた声だと思つて答えかけたが実際は違うようで……

「ああ……ここに来る途中で倒れてたんだ。ついでだからここに連れてきたんだよ。」

「え……ああ、そうなんですか。ありがとうございます。」

魔理沙さんが笑顔で言つた答えに女性は申し訳なきさそうにお礼を言うと魔理沙さんから抜け殻となつた女の子を受け取る。

どうにも浮かない顔に見える……まあ明るく振る舞えという方が無理な話かもしれない。

「おーい。鞆？どうしたよ？入らないのか？」

「あ……あ、あ！待つて下さい!!」

不安げにしている女性から視線を外し玄関へと急いだ。

「それで、今何人くらいが倒れてるの？」

5人と人を抱えた1人がぎりぎり並んで通れるぐらい広い廊下を歩く。

「えつと……この方で14人目です……。昨日で9人、今日が5人目です。」

その答えに僕は「え!？」と思わず声を上げた。

「あ……………ごめんなさい。」

皆に視線を向けられ咄嗟に謝る。

それにしても14人……………。そんなにたくさんの方があんな状態になってしまったんだらうか……………。

……………あまり考えたくないが、今からその人たちが休まされているところに行かなくてはいけないのだ。

「14人か……………そりやまた随分と多いな……………」

「ええ……………。急なことで皆戸惑ってしまつて、寺子屋はお休みにしているみたいですけど……………全く外に出ない訳にも行きませんから。」

「あなたはこれらのことは病か何かだと?」

「はい。違うんですか?」

質問に質問で返されて早苗さんは答えを迷っている様子だった。

下手に魂のことなんかを口にしようものなら余計に混乱させることになるだろう。

「まだ、なんともいえないわね。もう少し情報がないことには……………」

そんな早苗さんをフォローしたのか霊夢さんがさりげなく話を繋げた。

「そうですよね……………。あ、つきました。……………」

そんな話をしていると、どうやら倒れた人達がいる部屋に着いたようだった。「じゃ、お邪魔するぜ。」

魔理沙さんは真つ先にドアを開く。

そして僕は自分の見た光景に言葉をなくした。

耳がうまく働かないせいか、世界から音が消え去ったように静かだ。

出来るならばもう目にしたくなかったそれは……。

清澄に……そして容赦なく。

しっかりと事実として僕の目の前にまた姿を現した。

そこには老若男女様々な人達がいた。

白髪のお爺さん。若い女の人に、がたいのいい男の人。5歳くらいに見える女の子までいた。

ただ……全員同じように……

「動かない……ですね。なんだか不気味な感じがします。」

隣で早苗さんが口元を手で押さえる。

僕は思わず部屋に背を向けてしゃがみ込んでしまった。

「だ、大丈夫ですか!？」

すぐに駆け寄ってきてくれる声があったがすぐには答えることができない。

現実を見るのが辛くて仕方なかった。

目の焦点が合わず、視界がぼやける。

「は……はい。大丈夫……です。」

作り笑顔なんてする余裕もなく下手な嘘をつく。

「おい……。無理はするなよ? 大丈夫なんて様子じゃ——」

「大丈夫です……。本当です。」

ただ、辛かったのは紛れもない事実だがそれ以上に逃げたくないという思いがあった。

目を覆うことは簡単だけどそうしてしまえば再び視界を開くことができないような気がした。

「いや休んでおけよ、どう見ても——」

心配してくれたのか僕に休むように言う魔理沙さんを霊夢さんが手で遮る。

魔理沙さんは腑に落ちない様子だったが「無理はするなよ」と、それ以上は何も言わなかった。

その好意はありがたいけど僕にだって意地はある。



一度大きく深呼吸をした後、もう一度顔を部屋の中へと向けた。目を背けたがる脳内を必死に黙らせ目の前の惨状を直視する。

そこにいる人たちは皆、一様にピクリとも動くことはない。開かれた眼は虚ろで焦点は合っていないだろう。

布団が広い部屋に所狭しと敷き詰められているからかどこことなく災害時の避難場所を思わせる。

「こいつは……本当に年齢もなにもバラバラだな……。」

「症状が起こる人にはこれといった関連性はなさそうですね。」

「まだ詳しく調べてないんだし、なにも言えないわよ。分かる範囲で良いから話を聞かせてもらおうわよ?」

「は……はい!」

そして、僕達はそのにいる人達一人一人の詳しい情報。具体的には年齢とか職業なんかをききながら倒れた人達を順々に見ていった。

それを経て、分かったことといえは……。

「なんの統一性もないわね……。」

それぐらいのことだった。要するになにも分かっていないということだ。

霊夢さんにつられて思わず溜め息をつきたくなる。女性に聞いたところ、どうも見た

通り倒れた人達に共通している部分はほとんどなく特徴的ななにかがあるわけでもない。

ここにいる人たちで共通しているのは皆人里に住んでいる『人間』であるぐらいだけ、大ちゃんや紅魔館のメイドさんの例があるから人間だけがこんな風になってしまっている訳ではないだろう。

最初の方は女の子だけなのかとも思っていたがここにはお爺さんや若い男の人もいる。

考えれば考えるほどそこに規則性のようなものは見いだせなかった。

「ん〜……。」

「ねえ……あの人……なんか変。」

僕が足りない頭を捻って考えていると横で千恵さんが声を上げた。

千恵さんの視線はただ一方向を見ている。その先には一人の女性……30代半ばぐらいだろうか……？

見たところ、他の人達と何の違いもないように見えるけど……。

「変って……なにが変なんです？」

そんな問いには耳を貸さず千恵さんはフラフラと覚束ない足取りでその女性の下へ歩いた。

そして、スツと身を屈めると静かに女性の瞳をのぞき込む。

千恵さんの様子を僕達は不思議そうに見つめていた。

伸ばされた白い腕はまっすぐに女性の手に添えられる。

そして……。

それが当たり前であるかのように、自然にムクツと。

起きあがった。

「「えっ！」」

千恵さんと起きあがった女性以外が声を揃える。

起きあがった女性は頭を押さえて苦しそうに表情を歪める。

「だ、大丈夫ですか!？」

すぐに女性の下に皆が駆け寄る。

肩を揺すられて状況を把握できないというように戸惑っていた。

「どうして急に……。」

「……………まあ……………別に悪いことじゃないんだし、いいんじゃないか……………?」

霊夢さんと魔理沙さんが呆気にとられている姿はなんだか新鮮だ。

ってそんなことを考えている場合じゃない……………。

起きあがった女性を改めてまじまじと見る。

「な……………なんなんだい……………」

女性は不安そうに周りを取り囲む僕達を見回した。

「意識はしっかりとしていますか？ 何処か体に異常とかは……………？ なにがあつたかは思い出せますか？」

起きた直後に質問攻めにあい、更に戸惑つたのか女性は「え？ え？」と小刻みに呟きながら退いた。

そんな様子を見ながら僕は前に紅魔館で聞いたパチュリーさんの言葉を思い出す。

『ただ、壊れるのが魂ならそれは、『死ぬ』ということではないの。まあ、限りなく死んでいる状態に近いけれど……………。魂のみが壊れたならばそれは理論上はただの人形になつてしまう……………ってこと。生物の記憶や能力なんかは魂が司っているわ。だから一度魂が壊れてしまえば恐らく、その人が還つてくることはない。といえるわね。』

もし彼女が魂が無くなつてしまった状態であるならば何故再び起きあがる事が出来たのだろうか？

まあ、それに越したことはないのかもしれないけど……………なんだか腑に落ちない。

ただ単にパチュリーさんの情報が間違つていただけ……………というのもあり得るけど……………。

「なにがあつたかつて……あたしは買い物に行つて……それで……」  
起きあがつた女性は状況が読めないままに訊かれたことに答える。

「が、途中で言葉が切れる。そして次の言葉を紡ぐことがないまま時間は過ぎていった。」

何かを思い出そうとするように頭を強く押さえながら

「そのあと……。そのあと……。……。何であたしはこんなところにいるんだ？」

思い出せない現実を逃避するように質問を返した。

「あ、えつと……。あなたは昨日道で倒れているのをここまで運ばれてきたんです。昨日今日とそんな人達がたくさんいたので里では病か何かだと判断して被害にあつた方々を隔離したんです。」

「いきなり倒れた……？それに隔離だつて？」

急な話に着いていけないのか女性は眉をひそめて説明されたことを復唱する。

「倒れたときのことは覚えていないんですか？」

「……。ああ……。買い物から帰つてるところまでは記憶にあるんだが……。」

霊夢さん達はパチュリーさんの話を聞いていないはずだけど、それでもどこかしつくりこないところがあるのか考え込むような様子で起きあがつた女性を見ていた。

「本当なら詳しく話を聞きたいところなんだけど……。その様子じや、あんまり意味無さ

そうね……………」

「……………?よく分からないが悪いね……………」

霊夢さんは自分で自分の肩を揉みほぐしながら溜め息をつく。

「うーん……………。なんだか複雑なことになってきたみたいですね……………」

突如響いたその声に僕達が振り向く。

そこにはやはり、例のごとく……………。

「文さん!？」

ニコニコと笑みを浮かべる一人の新聞記者が立っていた。

続く……………。

小さなおまけ～お家に帰るまでが買い物です。～

今日はすこぶる天気がいい。

やはり天気がいいと足も軽くなり、いつもと同じ買い物からの帰り道がなんだか普段より鮮やかに見えてくる……気がする。

この分なら家事も捗りそうだ……。

ドンツ……。

「あつ……すいません。」

「あ、いや大丈夫だよ。」

角を曲がるときに人とぶつかって後ろに尻餅をついた。

しかしぶつかった相手の方はよろめいたりすることなくぶつかった後も直立していた。

「怪我とかはないですか？」

そういつて差し出された手を遠慮なく取る。

そして……暗転。

## 8章 4話～変身なんて序の口～

「いやあ……………遅くなりました……………申し訳ない。」

「……………この方は……………？」

今の文さんはいつもととは違いジャケットにズボン……………頭襟の代わりにキャステイング帽をかぶっている。

なるほど……………確かに人に紛れても違和感のない服装かもしれない。

それより僕の服装が普段通りであることに気づいた。でも、それに関して何か言われた記憶はとくにない……………。

本当にあのとき着物を着ていく必要はあったんだろうか……………？

「ああ……………えつと……………とりあえず怪しい奴……………ではないわよ。」

霊夢さんが言葉に詰まりながらも何とか答えた。

『怪しい奴ではない』と言い切るのを少し躊躇った様子だったがそれも無理はないだろう。

尋ねた女性からすれば急に自分たちの後ろに現れてニコニコと笑みを浮かべているわけだ。



怪しいを形にしたようなものだろう。

「そう……ですか……。」

訝しげに視線を送られた文さんはそれに答えるようにニコツと微笑んだ。

「いったいいつからそこにいたんですか……？」

「勿論今来たばかりですよ？」

文さんは考える間もなく答えた。……本当かどうか疑わしいものだが疑っても仕方がない。

「しかし……なかなか酷い有様ですね……。これは昨日今日で倒れた方々ですか？」

「ああ……昨日で9人今日で5人、合わせて14人だけ。」

なるほど……と文さんは手に持つペンを顎に当てて何かを考え込んでいる。

そしてサラサラと手帳になにやら書き込んだ。

「まあ、その辺は鞆のメモを見ればだいたいは把握できるでしょう。それでは鞆……メモを……。」

「え？」

僕はきよとんと首を傾げる。

メモ？

めも……？

MEMO!?

「ああ!!」

文さんがやれやれと肩をすくめる様子を見て一つ、とても大事なことを思い出した。

「ごめんなさい!!!」

地面にぶつかつたおでこに走る痛みなど気にすることなく土下座の姿勢を保った。

反射的にとつた行動に下を向いても皆が驚いているのが分かる。

「とりあえず頭を上げて下さい。」

すると文さんの優しい声がかかる。恐る恐る顔を上げるとやわらかくあたたかい人を安心させるような笑みがあつた。

ただ右手が写真機へと添えられているのが凄く気になる。撮つたんですか? 撮つたんですよね?

「ああ……なんとというか。失敗は誰にでもあるものですよ。そんなに気にしなくてもいいですよ……。これまであつたことを伝えてもらえれば……。」

慰めるような声に思わず視界が霞む。

言葉を発そうとしたのに上手く音にならずに空气中に溶けてしまった。

「あら……随分と甘いよね。」

「はは……こういうのは飴と鞭が大切なんです。鞆とハサミは使いようですしね。」  
僕の涙を返して下さい。

とは言っても今回は僕の不注意のせい……というか間抜けだったせいだ。  
「え……えつと、じゃあ説明しますね……。まずは……。」

少女説明中

「なるほど……それはまた随分と面白いことがあったんですね。」

「面白い……って不謹慎でしょ。」

霊夢さんに咎められ文さんは考え直すように視線を下ろすとすぐに人差し指を立てて

「興味深いこと……で、どうでしょう?」

「いや、どうでしょうと言われても……。」

霊夢さんは呆れるようにため息をつき、それから起きあがった女の人の方を向く。

「それで、この人はどうすんの? 人里に帰れるの?」

「あ、まだ完治したとは限りませんし一応もう少しだけここにいてもらうことになるかと……。」

「え!？」

期待と違う答えだったのか女の人は眉間にしわを作り、不満そうに声を上げた。

「あたしは大丈夫だよ!!旦那や子供が待つてるに違いないんだ!!どうにか帰れないのかい?」

「(い)……(い)めんなさい……。」

「……。」

布団を退けて身を乗り出してこられたからか怯みながらも女の人は頭を下げる。

その答えに、起きあがった女の人は頭を掻きながら小さくため息をついた。

機嫌悪そうな眼がふと僕を向く。……いや、僕じゃない……僕の横にいる……千

恵さん?

千恵さんを見る眼がどんとどんと見開かれていき、そこには驚きの色のみが映っていた。

「あんた……そう言えば……。」

彼女の指はまっすぐ千恵さんへと向けられている。

その先の千恵さんはきよとんと首を傾げていた。

「ええと……何だったか……?」

女の人はなかなか続きを言わず、言葉を探して黙り込んでいる。

するとそんな女の人に千恵さんがゆっくりと近づいた。目の前まで行くとすつと屈む。

そして女の人起きあがったときの同じようにそつと右手を差し出した。

その瞬間……………。

フツと糸が切れたかのように先ほど起きあがった女性がまた倒れてしまった。

「「え？」」

全員が声を揃える。正確には千恵さん以外の……………ではあるが……………。

そして千恵さんはフラフラと立ち上がる。顔だけをゆっくりとこちらに向けた。

その顔には感情が映っておらず、なにを思っているかは読みとれない。強いていうなら苛つき……………だろうか？

それには少し見覚えがある気がした。

「チール……………さん？」

恐る恐る呟いた僕に正解だといわんばかりに千恵さん……………いや、チールさんがヘラツと笑みを浮かべた。

瞬間、辺りに緊張が走る。

「この方がチールさんですか……………？」

早苗さんが慎重に呟いた。ただ一人だけ状況を理解できていない女の方は困惑しな

がらも再び倒れてしまった彼女の下へと駆け寄った。

顔、体つき、見た目からはそれがチールさんだなんて思えない……けれど、それは確かに……彼女だった。

皆の表情が強ばるのに対してチールさんはポケットに手をつ込み顔に余裕を映すと……

「お久しぶり……でも言つところか？」

僕と文さんを順に見る。その声はチールさんのものとは少し違うような気がしたが、それでも特徴的な雰囲気は他人とは思えなかった。

「どうも……随分と印象が変わりましたね。それも能力ですか？それに相方がいないようです？」

「ああ、エルならいたよさつきからずつとな。」

一つ目の質問には答えずにクスクスと笑う。そんなエルさんに苛ついたように霊夢さんは一歩前に出た。

「えつと……あんたのことは聞いたわ。単刀直入に訊くわよ……。今回の事件の犯人はあんた？」

そつして本当に単刀直入に尋ねる。

予想だにしない急展開に何も知らない女性はただただ混乱していくようだった。

そんな彼女に追い打ちをかけるようにしてチールさんは……

「ああそうだよ。その通りだ。」

驚くほどあっさりと言行を認めた。

あまりのあつけなさに何だかむしろ怪しく思えてくるぐらいだ。他の皆も同じように感じたのか一様に眉をひそめている。

「私等がこいつになつて里で人の魂を狩つてたんだよ。昨日からな。」

そんな僕達を気にせずにチールさんはスラスラと話を続ける。その様子に嘘が混じっているような様子は見受けられなかった。単に僕が嘘を見抜くのが下手なだけかもしれないけど……。

「どうしてそんなことを……。」

するとずっと傍観していた女の人がこう呟いた。不安げで辛そうで何か乞うような声。

しかし続いた言葉は無慈悲に鋭利な刃となつて突き刺さる。

「意味なんてないよ。ただの暇つぶしだ。」

「そんな！暇つぶしだなんて!!」

思考するよりも先に叫んでいた。

色の映らない眼がこちらを向く。

「た、たかが暇つぶしでこんなこと……。許されるはずないじゃないですか!!!」

俯いて震えながら……。しかし力強く、ハッキリと言いはなった。しかし、答えは間を空けずに返ってくる。

「……何でおまえにそんなことが言えるの？人道に反するだとか非道德的だとか言いたいわけ？悪いけど私等にそういうの求めないでもらえないかな？ルールだとか決まりだとかそんなもの関係ない。私等にとっちゃそんなのは知ったことじゃない」。――。

「チー。そこから辺にしときなさいよ」。

そんなに喋るタイプではないと思っていたチールさんが熱くなっているのを宥めるようにして聞こえた緊張感のない声。

その声の主は先ほど再び倒れたはずの女性。

驚きに言葉をなくす僕達を気にすることなく、ムクツと体を起こすとチールさんの肩に手を置き

「はじめたら可哀想でしよ〜それにそんなにツンツンしてたら友達なくすよ〜?」

あまりにも場に似合わない声色で話す。

「ん〜?あ!どうもどうも。お二人はおひさしぶりだね。エルだよ」。

そしてふとこちらを向いたかと思うとニコニコと笑いながらそう言った。



簡単に整理してみよう。

まず僕達はここに来る途中に千恵さんと出会う。

千恵さんは周りの人たちからこの事件の元凶だと騒がれていたけど本人は否定していた。

新たに被害に遭った女の子を連れて、この屋敷にやってくるそこには14人ものが隔離されていた。

特に収穫もないまま息詰まっていると千恵さんがおもむろに倒れている女性の一人に近づいて、

すると急に倒れていたはずの女性が起き上がった……。

それで驚いて話していると女性が千恵さんを指さして何かを言おうとして

それと見た千恵さんが再び彼女に近づいて彼女はまた倒れてしまった。

すると千恵さんは自分はチールであると告げる。見た目は違えどその言葉には嘘がないような気がした。

そして僕達が話している最中、熱くなったチールさんを宥めるようにして声を上げたのが先ほどチールさんによって蘇り、チールさんによって再び意識を失った女性だった。

そしてその女性は先ほどとは全く違う雰囲気喋っており彼女は自分がエルである

と言っている。

……………全く訳が分からず頭痛が痛くなってくる。

そもそも彼女たちがエルさんとチールさんだって本当なのだろうか？

まあ空を飛んだり得体の知れない弾を繰り出すことが出来るこの世界で人の見た目変わるぐらいそう不思議でもないかもしれないが……。

それに仮に本当にエルさんとチールさんだったとしても行動の意味が分からない。

事件のことは暇つぶしだと言っていたけど……一度僕達から逃げたのに何故もう一度僕達の前に現れたんだろう。

それに倒れていた女性がエルさんだったなら何故被害者に化ける必要があったのだろうか……。

それにそのエルさんに対するチールさんの行動も不可解だ。

溢れそうな疑問に首を傾げているとそんな様子を見たからかエルさんが苦笑する。

「あはは。少しだけ種明かししてあげても良いかな……。」

続く……。

## 8章 5話～理由なんてさほど重要ではない～

「あはは。少しだけ種明かししてあげても良いかな……。」

そう言うとエルさんは人差し指を立てて「まず一つ……」と続ける。

「私の能力は『魂を宿らせる程度の能力』これは宿らせるとはいつても、0から1を作る能力じゃない。」

緊迫した雰囲気の中、僕達の周りをゆっくりと歩く。

「私が出来るのは存在している魂を存在している体に取り込ませること。魂と体を結びつかせることが出来るのが私の能力。それでチーの方の能力は『魂を奪う程度の能力』こっちは名前通りだね。魂を体から無理矢理引き剥がすことができるってわけだよ。」

「これは親切にどうも……。そうやって体を入れ換えているってわけですか……。」「うくん……まあそんなとこだね。あ、因みに前の姿が本当の姿だからね？本来ならもつとピチピチの女の子だから。」

どうでもいい補足をしながらエルさんは笑った。

でも今の説明と状況を比べると魂を体から引き剥がすまでは分かるけどその魂はど

こに行ってしまったかが分からない。

チールさんが人々から魂を『奪った』後にエルさんが何かに魂を『宿らせる』という流れではないのだろうか？

今のエルさんとチールさんは何故かは知らないけど、自分から情報を僕達に伝えてい……思考するよりも訊いた方が早いと口を開けかけるがそれを慎重な声が遮った。

「それなら私達も危険なんじゃ……。」

早苗さんが一步後ずさる。

言われて初めて気づいた。確かに魂を奪うことが出来るならいくら文さんや霊夢さんでもどうにも出来ないんじゃないや……。

「あはは。安心してよ。私達にお姉さん等の魂は扱えない。勿論皆に試してみたけど……すごいよね君達の中の誰も私等の能力じゃどうにも出来なかつたんだから。」

エルさんがクスクスと笑う。まあ確かにそれが出来たら僕達から逃げる必要もなかつただろう。

その言葉に嘘はない……と思う。

「どうしてわざわざそんなことを私達に教えるんですか？あなた方にメリットがあるとは思えませんが……。」

尚も警戒する僕達にエルさんは楽しげに答える。

「そうだよね。不思議だよね……。えっと……簡単にいうと『ゲーム』がしたいんだよ。」  
そしてありきたりな理由を示した。ありきたりとは言ってもそれはB級映画や小説の中の話だ。

現実でこんな事件に発展していながら理由がそんなものだなんてにわかには信じられない……。

「そこのお兄さんは不満があるみたいだけど私等がこの事件を起こしたのは単なる『暇つぶし』なんだ。それ以上でも以下でもない。」

エルさんは手を後ろで組んでニコニコと話す。

「欲しかったのは刺激。ただそれだけだから。」

すると黙っていたチールさんも口を開いた。

エルさんは浮かべていた笑みを一層深める。そして「でもさ……。」と続ける。

「ただ一方的に自分よりも弱い人や妖怪の魂を奪うだけじゃ物足りないでしょ？だから君等に私等を止めて欲しいんだ。妨害があればちよつとは楽しめるでしょ？」

あははと無邪気な笑みを浮かべる裏には計り知れない悪意のようなものが窺えた。

「それでも止める側になんのハンデも無しじゃアンフェアだからね。ヒントをあげたつてわけさ。どう？納得いったかな？」

「いくはずないじゃないですか!!」

思わず声を荒げた。

記憶が戻ってから今まで……そしてきつとその前も感情的になることなんて殆どなかったけど、今はならざるを得なかった。

プルプルと震える僕を見てエルさんは少し驚いたようにきよとんとして、それからすぐに、

「あはは、どうもお兄さんは正義感が強いらしいね……。良いと思うよ。こちらとしてもそういう人が相手の方が燃えるしさ。」

いつも通りの笑みを浮かべる。

「そんなこと言ってるけど私達が相手にしなかったらどうするの?」

「うくん……そんなこと考えたなかったな……。だって無視なんて出来ないでしょ?」

エルさんはわざとらしくとぼけ、いやらしい笑みを浮かべる。

霊夢さんはピクツと眉を震わすと今にも額に青筋を浮かべそうな笑顔をつくる。

「そんな怖い顔しないでよ。綺麗な顔が台無しじゃない。」

その場に一人分の笑い声が響いた。それは場を呑み込んでしまうような不思議な雰囲気をかもし出している。

「笑っていられる内に笑っておきなさい……。」

すると負けじとエルさんと同じように場を呑み込むような笑い声が響く。

思わずぞくぞくと背筋を悪寒が走る。隣を向くと声の主が笑みのような何かを浮かべていた。

もし表情に色があるとするならば今の霊夢さんの表情は間違いなく黒だろう。

そんな霊夢さんに怯んだのか、それともたんに不気味がつているだけなのかエルさんとチールさん。それに魔理沙さんや早苗さんもひきつった顔で霊夢さんを見つめている。

「なにそれ……う？ どういう意味——。」

怪訝そうに恐る恐る口にするエルさんの表情が一瞬で凍った。

チールさんも目を見開いてエルさんと顔を合わせている。

霊夢さんがにやあと嫌な笑みを浮かべ、二人に話しかける。

「どう？ 身動きできない気分は？」

二人が地面に跪いて霊夢さんを睨んでいるところからすると霊夢さんの言葉通り身動きがとれないのだろう。

「あんたらが言う……ゲームだか何だか知らないけど……そんなもん知ったこつちやないわ……。よくあんた等みたいな間抜けが私を利用してようだなんて考えたわね。」

正直なところ今、目の前で何が行われているか全く分からないけど、とりあえず分かるのは霊夢さんが相当頭にキているってことだけだ。



「さあ洗いざらい喋ってもらおうよ……その前に一回痛い目見た方が良かったかしら……？」

エルさんやチールさんの悔しげな様子を見て霊夢さんの表情の色がどんどん爽やかな空色へと変化していく。

一歩一歩、二人の反応を愉しむようにゆつくりと距離を縮めていつている。

僕がもし二人の立場だったら怖さで失神していたかもしれない。

「ほら、何か言いなさいよ。」

霊夢さんの冷たく言いなつた言葉に答える声はない。

「チール………だったかしら？ 黙ってないでなんとか——」

バタツ……。

はかなく響いたそんな音。

目の前ではチールさんの体がエルさんに寄りかかるように横たわっていた。

「……………」

そして横のエルさんが俯いた状態で微かに笑みをこぼす。

「チールは私の方だよ。」

続いてこう言った。

そう。エルさんが「チールは私の方だよ。」と言ったのだ。

その声は確かに先ほどまでのエルさんの声……しかし、妙な説得力のあるその言葉に僕は息を呑んだ。

「……………ハッ……。一個教えてやる。魂に実体はない……体を拘束したところで意味なんてないんだよ。」

つり上がった口角の端から嘲笑が漏れる。

そして、

「あはは。ま、そういうことだね。」

倒れていたチールさんがゆっくりと起きあがった。

……………ええと？これはどういうことだろう……………？

エルさんとチールさんが入れ替わった？

それともお互いにお互いを演じているだけ？

もともと分かっていたわけでもないけど、もう訳が分からない

「にしてもお姉さんは結界を使うのが上手だね……………。鬱陶しいんだよね、これ。」

僕達の理解が追いつくのを待たずにチールさん……いや、エルさんがスツと立ちあがる。

「なっ!？」

エルさんの動きが予想外だったのか霊夢さんが驚きの声をあげた。

そしてすかさずエルさんを捕まえようと一歩踏み込んだ。

闘牛の如く突進してきた霊夢さんに怯むこともなくエルさんは闘牛士のようにヒラリとかわす。

勢い余って体制を崩し、なんとか踏み出した一寸先にはチールさんの足…………。

見事にひつかかった霊夢さんは派手な音をならしながらすすつ転んだ。

「おーきれいだね。」

クスクスと霊夢さんの転び方に短く拍手を送った後、エルさんが視線を移した先は…横で腰を抜かしている女性。

僕と同じでもう何がなにやらといった様子だ。

「そうだね……あなたがこの辺の仕上げ……ってことでどうだろう?」

エルさんの言葉も耳に届いていないのか果然と目の前に立つ二人組を眺めている。

「ま、いいんじゃないか?」

座っていたチールさんも立ち上がり女性の方を向く。

女性は逃げることにすらせずただ黙って不安げな表情を浮かべている。

「大丈夫大丈夫。別に痛くも何ともないからね……たぶん。」

エルさんの手が女性へと伸ばされる。

## 『まげもん』

考えるより先に体が動いていた。

エルさんと女性の間に割り込むようにして突っ込んでいく。

世界がスローモーションで流れて見えた。

エルさんの手が女性の手に触れる瞬間。

それを割くようにして僕の体がぶつかる。

瞑った目に映る暗闇の中でガンツガンツと鈍い音が鳴り響く。

そして、静寂が流れる。

ゆっくりと瞼を上げる。ぼやけた視界に映る曖昧な景色を眺めた。

さつきと同じ、腰を抜かした状態で動いていない女性。

その奥に立っている文さん、魔理沙さん、早苗さん。

横には頭を抑えながら体を起こす霊夢さん。

そして……彼女達は………？

姿が見あたらず数秒ほどせわしなく頭を動かす。

見つけたのは座り込んでいる女性の目の前、床に倒れている状態だった。

「この………よくも………って何よこれ。」

リベンジをしようと駆け寄った霊夢さんが眩く。

「意識があるようには見えませんね……………恐らくこの二人はもう抜け殻なのでしょう。」

文さんが冷静に二人を観察し、溜め息をついた。

それにならうようにして霊夢さんや、魔理沙さんも倒れた二人の顔をのぞく。

「全く……………さつきから何が何だか訳が分からないぜ……………」

魔理沙さんは頭を抱え、皆が思っていることを言葉にしてその場に吐き出した。

「確か魂には実体がない……………とか言っていましたよね……………」

「ああ……………確かに言ってたわね……………。じゃあ何？体だけ置いてどっかに飛んでったとか

いうわけ？」

「彼女達の本来の体は他にあるみたいですしあながち間違っていないかもしれないかもしれませんね

……………」

「はあ……………冗談でしょ……………どうやって退治すりゃいいのよそんなの……………」

霊夢さんは一気に力を抜いたのかドスンとその場に腰を下ろす。

そして盛大に溜め息をついた。

「それで……………これからどうするんですか？」

早苗さんの一言に皆が黙り込む。

本当に実体がないのであれば捕まえようがないような……………。

それに手がかりも何もないし追いようもない……………。  
行き詰まった状態に空気はどんと重くなつていく。

「とりあえず……………もうちよつと里を回つてみましょう。何か見つかるかもしれないし。」

霊夢さんが何とか発したこの言葉も何だか力ないものに思えた。

「それじゃ……………私達は一旦離れるけど……………何かあつたらすぐに助けを呼びなさい。」

「は、はい！ありがとうございます！」

頭を下げる女性を背にして僕達は屋敷を後にした。

続く……………。

小さなおまけ hide and seek

「あははは……………いいねいいね。面白くなつてきた!!」

愉しそうに笑う声。

「相手としては十分だな。」

もう一つの声も心なしかいつもよりトーンが上がっている。

「しっかし……やっぱり使い慣れた体が一番だねえ……。体が軽いよ。」

「そりやそうだろ……。」

びよんびよんと跳ねるように歩く二人が抱えているのは一人の女性。

彼女は抵抗することなく、まるで抜け殻だというようにピクリとも動かない。

二人組は周りにいる十数名と同じように彼女の体を布団にそつと置いた。

「安心しなよ。別にお世話なんてしなくても大丈夫だからさ。」

聞こえているはずがない耳にそう呟くと、二人組はそそくさとその場から離れた。

辺りに静寂だけを残して。

おまけ編 8

おまけ編 1話～信じていけば来てくれます～

「いや……………まあ。そうですけど……………」

躊躇いなく子供達の夢を破壊する文さんに微妙な表情で応じながら溜め息をついた。  
今年には雪が降るのだろうか？

「ああ……………おはようございます……………」

ある清々しい朝。鳥はさえずり澄んだ空気が僕の体を包んでいる。  
出来るならばこのままお昼まで寝ていたいくらいだ。

「お、起きましたか。おはようございます。」

寝癖を立てて目をこすりながらあくびをしている僕とは対照的に文さんはこんな朝から机に向かっている。



規則正しい生活を送るのは良いことだし見習いたいものだ。

そう言えば新聞配達をしている人の朝はとも早いと聞いたことがある。

文さんの新聞は誰が配達しているのかな？

まさか全部一人でやっているわけでは……………文さんならあり得るかもしれない……………。

でも新聞を刷ったりするところは見たことないし仕事場にそんな機械は見あたらない……………。

考えれば考えるほど謎は深まるばかりだろう。

戻ってこれなくなる前に考えるのをやめた。

「いやあ……………それにしても鞆と会ってからもう暫くしますね……………。時が経つのは早いものです。」

「なんだかお年寄りみたいですよ。」

しみじみと言う文さんに苦笑を漏らす。ふと頭に一つ、素朴な疑問が浮かんだ。

付き合い始めてすぐの人には訊けないが、これだけの時間を共にして知らないのはどうかとも思う。

意を決して疑問を質問へと変えて口にする。

「そういえば……………文さんっていくつなんですか？」

文さんの笑顔が微かに震えた気がした。

「いくつ……というと？」

「いえ、年齢のことですけど……。もう会ってからそれなりに経つわけですから知らないのもどうか……。と思って。」

「私は鞆の年齢を知ってますよ？」

「いえ、僕も文さんの歳を……。って何で知ってるんですか!？」

文さんは明らかに話から逃げようとしている……。

別にここで引き下がってもいいのだけれど文さんの秘密を知ることが出来るのかも  
しれない。もう少し粘ってみよう……。

「と、とにかく……。文さんの年齢を教えてくださいよ。」

半ば強引に話を繋げる。文さんはうぐんと唸りながら目を逸らすと笑顔を浮かべた。

「いくつだと思えますか？」

「……………」

出た……。とこぼれかけたのを何とか飲み込む。

いくつに見える？といえれば世の中において5本の指に入るほど面倒な質問だろう。

実年齢より上を言えば勿論アウトだし、若すぎてしまっても考え物だ。

かといって当ててしまっても面白くないと言われてしまう。

ベストなのは実年齢よりも少しだけ下を言い当てること………相手を適度に満足させ、関係性を崩さずに済むのだ。

チラツと文さんを見やる。

ニコニコと浮かべる笑みは一見それなりに人生経験を積んできたものにみえる。

しかし、パツと見では成人しているようには見えない。

ここ幻想郷でのシステムは知らないから何ともいえないけど少なくとも文さんは仕事をしている。

それもジャーナリストという何だか経験を必要としそうな職業だ………詳しくは知らないけど。

これらから僕が考察し、導き出した答えはずばり………19歳………。

だとすれば口にするべき答えはマイナス1をして18歳にでもしておこう。

「18………歳………ですか？」

我ながらベストな選択が出来ただろう………。

しかし自画自賛に酔っている僕に文さんは苦笑を漏らした。

しまった………しくじっただろうか？

顔が緊張で強ばるのを感じる。

「さすがにそこまでではないですね………。」

文さんはクスクスとわざとらしく上品に笑った。

……。

……。

え？それだけ？

文さんは笑顔をキープしたまま言葉を切ってしまった。

そこまですらない……ってどつちだ？

下過ぎたのだろうか？それとも上過ぎた？

かなり自信があっただけに何だかちよつと悔しかった……。

「じゃあ、いくつなんですか？」

「……。」

文さんは笑顔を崩さないまま一言も喋らない。

「えつと……？文さん？聞こえています？」

「……。」

先ほどより文さんの顔がほんの少しだけ近づいた。

顔に陰が出来てちよつと怖い。

これが表すのはなんだろうか？これ以上詮索するなと言いたいのだろうか？

無言の圧力に気圧されながらもここで退いては女が廢ると負けじと訊き返した。

「文さんが僕の年齢を知っていて僕が文さんの年齢を知らないのは不公平ですよ！教えてください！」

「……………」

明らかに無理のある言い分だったが僕の必死さでそれをカバーできたのか文さんはどうするか悩むように唸った。

最後の一押しと文さんに期待の目を向け続ける。

「はあ……………分かりましたよ……………そうですね、教えてあげましょう……………」

溜め息と共に文さんからこぼれた諦めの言葉。これは僕が押し勝ったという認識でいいのだろうか？

ともかくどうにか文さんの年齢を知ることが出来そうだ……………今回は珍しく僕の勝ちだろう。

勝利から来る満足感に浸りながらも文さんの次の言葉に耳を傾ける。

「とは言っても……………こうも長く生きてると詳しい数字なんて忘れちゃってるんですよ。1000余年生きましたかね？」

「……………」

サラッと答えた文さんの顔をまじまじと見る。しようがなく白状してあげた……………といった様子だ。

「何です？私の顔に何か付いてますか？」

疑いの目を向け続ける僕にいつも通りの笑顔を貼り付けてとぼけている。

「それで……………実際のところは？」

気を取り直して尋ねる。文さんのことだ……………ちよつとからかってきただけなのだろう。

「いえ、ですから1000歳ぐらいですって……………」

「……………」

しかし現実には笑いながら同じ答えをする文さんが目の前にいるだけだった。

「真面目に答えてください！怒りますよ！」

子供のように頬を膨らませて不服を申し立てる。

「私は至って真面目に答えてるんですけどね……………」

しかし続いた苦笑に怒る気力すら失われた。どうやら本当に教えたくないみたいだ……………。

「分かりましたよ……………文お婆ちゃん。」

溜め息と共に申し訳程度の嫌味をこぼして会話を終了させた。

このまま粘ったところで本当の答えは教えてくれそうにない。

まさか本当に1000歳なはずはないし20歳ぐらいだと思っておくことにしよう

最後の嫌味が効いたのか文さんはムツと眉をひそめると「まだまだ若いですよ！」とさつきまでの主張と全く違うことを言い出した。

ガタツ。

文さんとの会話にも一旦区切りが付き、僕は椅子に腰掛け、読みかけになっている本を開いた。

えっと……昨日どこまで読んだんだったかな……。あ、ここだここだ。

文字を頭の中で読み上げてゆっくりと本の中に入り込んでいく……。

のが理想的なんだけど……正直ちよつと難しくてスラスラとは読み進められない……。

……。

少し気を抜くだけで眠ってしまいそうだ……。

そういえばさつきも話していたけどもう文さんと出会って結構経つんだな……ここに来てからは気にもしていなかったけど今は何月何日なんだろう？

ふと浮かんだ疑問に思考回路を移す。文さんと会った日から1日ずつ駒を進めるように頭の中で年月を辿っていく……。

昨日が12月24日……そして今日が12月25日……………。

左右の指を何度か往復した末の終着点はそこだった……12月25日……………。

皆さんは聞き覚えがあるだろうか？

ガタツ。

思わず本が閉じるのにも気にせずにもその場で立ち上がった。

「?……………どうしたんですか?」

振り向いて不思議そうに尋ねる文さんに転びそうになりながらも駆け寄るところ言  
い放った。

「今日クリスマスじゃないですかあああああ!!!」

「クリスマス……………ですか?」

文さんは耳慣れない単語にいつの間にか手帖とペンを装備している。

「え?……………まさかとは思いますが知らないんですか?」

「クリスマスと言いましたよね……………。聞いたことはないです……………外の文化でしょうか?」

「ええ……………まあそうですけど……………。」

驚くことに幻想郷ではクリスマスがないらしい……………。まあ確かにクリスマスって





「えつと……さっきの通りいい子達にプレゼントを配るのですが……目立つ赤い服を着て、白髭を生やした優しいおじさんです……多分。トナカイにソリを牽かせて一晩で子供達の家をプレゼントを配って回るんです。」

「ひ……一晩ですか？その子供達とはどれぐらいの人数がいるんですか？」

「え？……えつと100万人……くらい……？」

当然そんなこと僕に分かるはずもなく適当に予想した数字を答えた。

珍しく驚いた様子を表に出す文さんはそれでも腕の動きを止めなかった。

「とんでもないですね……少なくとも人間ではないでしょうけど……単純計算で1秒30人強……ですか。」

何かブツブツと呟きながら尚も手帖にペンを走らせている。

「そう言えば鞆は先ほど多分。って言ってましたけど、実際に見たことはないんですか？」

「あ、ありませんけど……。」

「プレゼントをもらったことは？」

「あ、ありますよ？」

「そもそもどうやって子供の欲しい物の情報を仕入れているのでしょうか？……それ今日以外は何をしているんでしょうか？どうにも謎に包まれた人物ですね……。」

「いや……………まあ。そうですけど……………」

躊躇いなく子供達の夢を破壊する文さんに微妙な表情で応じながら溜め息をついた。  
今年には雪が降るのだろうか？

続く……………。

## おまけ編 2話くあけおめ・そしてことよろく

「明けましておめでとうございます!!文さん!!」

窓に映る初日の出を眺めながら横の文さんに話しかけた。

「鞆。前回のあれがあつてからいきなりそれをぶっ込んでくるのはどうなんでしょうか。」

心惹かれる美しい太陽の光を浴びながら文さんは失笑をこぼす。

「…?前回というのは?」

「何でもないですよ。」

文さんにそう言うつてはぐらかされて何だかスッキリしないまま会話を終える。

そうして目の前の景色に意識を移した。

「改めて文さん!!明けましておめでとうございます!今年もよろしくお願いします!!」

背筋を伸ばして正座をすると深々と頭を下げる。

「ええ、こちらこそ今年も宜しくお願ひしますね。」

文さんは僕の目線まで屈むとニコツと笑みを浮かべた。

「いやあ……………去年はとつても忙しいし内容の濃い一年でした……………」

「新年早々去年の話をするのはどうかと思えますけど……………」

文さんに半眼を向けられて確かに……………と話題を変える。

「文さんは何か今年の目標とかは無いんですか？」

「目標……………ですか……………」

うーんと唸ること5秒ほど……………懐から手帖を取り出すとサラサラと何やら書き込んだ。

そして、ページを一枚破り僕の前に突き出す。そこには達筆で、

『猪突猛進』

……………。

チラつと文さんの顔を見やると満足げな顔で僕の反応を待っている。

「何というか、こう……………とても文さんらしいですね……………」

とりあえずは思ったことをそのまま伝えておいた。

今年の目標になるのかどうか怪しいけど……………これだったらもう達成してしまっているだろう。

「何事にも全力で取り込むことが成功への一番の近道です！手を抜くなんて言語道断で

すよ。」

「……………何だか格好いいことを言っているけど文さんが言っても説得力が無い気がする。」

文さんは兎を狩るときは最低限しか力を出さないタイプの獅子だろう。もしくは爪を景色と擬態させる鷹かな？

あ、でもネタにはなりふり構わず突っ走っていくかもしれない。

「今年はもうネタになりそうなことは何でもして手に入れるぐらいの意気込みで行きますよ!!勿論鞘も。」

「ん?」

今何でもするって……………。僕も?

文さんの言葉通りにならないように祈りを込めて大きく溜め息をついた。

「それで?鞘の方は何かありますか?今年の目標は。」

「僕ですか?」

文さんにペンと手帖を無理矢理手渡される。同じようにここに書いて示せ。ということなのだろう。

「ん……………目標ですか……………」

目を瞑ってゆつくりと考えてみる……………。フリをしてから思いついたように手帖

にペンを走らせた。

きつと訊いたら訊きかえしてくるだろうなと予想していたのだ。

ふふふ……文さんに尋ねる前から答えは準備してある。

丁寧ページを破るとバツと文さんの前に差し出す。

『安全第一』

「……………」

チラッとこちらを見やる文さんに満足げな表情を見せる。

「何と言いますか……………こう……………鞘らしいですね。本当に……………」

しかし期待とは裏腹に文さんの反応は思ったことを適当に口にしたようなものだった。

確かに目標としてはありきたりかもしれないけど……去年の経験を生かして僕が最善だと考えた四字だ。

「幻想郷では常識に囚われちゃいけないと学びました！何事にも慎重によく考えて臨むようにしたいと思います！」

「まあ、いいんじゃないですか？とても大事なことですし。」

そう言う文さんは苦笑いを浮かべている。僕が何か変なこと言っただろうか？

「因みに、『安全第一』の次に何かがあるか知っていますか？」

僕の心配をよそに文さんが人差し指を立てた。

「え？ 続きなんてあるんですか？」

「ええ、どう続くと思いますか？」

安全第一のあと……、多分○○第二と続くのだろう。

安全の次だから……健康………とか？

「……………健康k……………」

ニヤニヤと面白そうに僕の考える様子を見る文さんを見て言いかけた言葉を飲み込む。

果たして本当にそんなに単純なことなのだろうか……。

文さんのことだ……きつと引っかけを用意しているに違いない。

そもそも○○第一なら○○第二なんて簡単な問題を文さんが出すわけがないじゃないか……。

一度思考をリセットする。

まず、安全第一って言葉を見かけるのは基本工事現場だ。

そして、その先に続く言葉………。もしかして○○に心がけよう！とか○○に気をつけよう！のような注意を促すような言葉が入るのでは？

その考えが浮かんだ瞬間僕の体に電撃が走った。



そうだ！きっとそうに違いない!!文さんめ……そんな引っかけに足をかけるような前の僕と同じではありませんよ。

じゃあ、その次に続く言葉は？

工事現場において安全第一……つてことは事故防止ということだろうか？

工事現場の事故……。思い浮かぶことと言えば高い場所で足を踏み外したり鉄骨なんかが上がら落ちてきたり……。

色々なケースがあるだろう。

それらをまとめて防ぐように促すような文句……。

「分かりましたよ文さん……!」

「おおー。そうですか……。それでどんな言葉が続くと?」

自信満々の僕に文さんは言葉の割には感情が籠もっていない声をあげる。

その様子だとうろくな答えが出ないだろうと思っているに違いない。

ふふふ……10秒後、貴様はその考えを覆すことになる……!」

「安全第一……」

とりあえず小さく呟く。

文さんはニコニコと母親が子供の言うことに耳を傾けるようにして僕の方を向いている。

意図しているのかしていないのか分からないけどかなり馬鹿にされている気がする……。

しかし！そんな風にしていられるのも今のうちだ……。

僕は大きく息を吸い込み、たつぷりと間を開けてからこう言い放った。

「周りに気をつけよう！」

ドヤア。

そんな擬音が似合いそうな自信満々の笑みを浮かべる。

そして数秒の沈黙。

「くっ……くっ……くっ……くす…………プホオ!!」

人をいらつかせるという点にかなり長けている笑いが沈黙を破った。

堪えようとしているのか全く堪える気がないのか良く分からないが何にせよちよつとムツとしてしまう。

「ははは………ひい……ひい………。」

腹を抱えて笑い出す文さんに頬を膨らませて半眼で応じる。

そのまま数十秒ほど笑い声が止まることはなかった。

「満足しましたか？」

「悪かったと思つてますって……よく考えればそんなに変な答えでもないですし……

『周りに気をつけよう！（キリッ）……ブツ。』

「もういいです……！」

「ああああ!!ごめんなさいごめんなさい！」

涙目でそっぽを向いた僕の機嫌を取り戻そうとしているのか僕の周りをシュバシユバと移動しながら謝罪の言葉を述べる。

これは挑発というのではないだろうか？

「それで……答えは何なんですか……？？」

ボソツとこぼした僕に文さんはきよとんと首を傾げる。

そして思い出したようにああ！と声を上げると僕の正面の椅子に腰掛ける。

「そうでしたね。伝えてなかったですね。」

そう言ううと手帖から新たに一枚ページを破った。……そんなに破ってしまつていいのだろうか？

スツと差し出されたそこにはまたまた達筆で

《安全第一・品質第二・生産第三》

こう書かれていた。

品質……？？生産？

〇〇第二という考えは合っていたのか深読みしなければ良かった。

にしても、品質と生産……って？

僕が頭を捻っていると僕が考えていることを察したのか

「この言葉はもともとはとある会社の方針のことだったんですよ。因みに最初は安全と生産の順が逆だったそうですけど。安全は二の次だったってことですね。」

「へへ」

そんな豆知識に何だか気の抜けた声を漏らす。

今年の目標として《安全第一》と掲げた後にそれを聞かされると何だか複雑な気分だ。別に品質や生産を気にするような1年になるなんてことはないだろう……。よほどのことでもない限り。

「とまあ……そんなことはどうでもいいんです。」

すると急に真面目な顔になった文さんの顔が近くなる。

「ひえあ!？」

急のことに思わず変な声を上げる。

触れてみなくても自分の顔の表面温度が高くなっているのが分かる。

「改めて！今年も宜しくお願ひしますね!!」

思わず入っていた力を抜く。

「は……………はい。お願いします。」

力ない笑みを浮かべるとそう言つてペコツと頭を下げた。  
どこか満足げな文さんはうんうんと頷くと机に視線を落とした。

さすがの文さんでもお正月くらいは休むのかなと思つていたけどむしろいつもより熱心に机に向かつているように見える。

記事を書いているときは僕に手伝えることは何もない。

「ふう……………」

力を抜いて椅子に腰を下ろした。

何だか妙に眠い、ちよつと寒いからかな？

眠くてぼやけた視界で外を見やる。

それから曖昧な意識が冴えるまで数えるほどもなかった。

「文さん!!」

「はい?」

振り向いた文さんに外を見るように指で窓を指す。

促されるままに窓の外を見た文さんも「おお……………」と声を上げた。

思わず窓の方に駆け寄って円形の景色を眺める。

「雪ですよ!!」

文さんも外を見たのだから当然分かっているだろうけど、つつい自分の視界を言葉にせずにはいられなかった。

しんしんと降り積もるそれに目を奪われ、仕事場の外に足を踏み出した。

「うわぁ……………!!雪です雪! snow!!」

子供のように両腕を空に向けてはしゃぐ僕を見て文さんが苦笑を漏らす。

「活字じゃないと分からないネタをぶっ込むのはどうなんでしょう……鞆、snowじゃなくてsnowですよ。」

「あれ……………?そうでしたっけ。」

そんな間違いを照れ笑いでごまかした。

辺りは真っ白な薄いカーペットで覆われ光を反射して幻想的な風景が広がっている。屈んで触れてみるとふわふわと柔らかいそれはスツと手のひらに溶けた。

新鮮な感覚に何度も手を握ったり開いたりを繰り返していると首もとに何かがつぶ

かった感覚があつた。

「ひゃん!？」

首もとの冷たい何かを一心に払い落とす。

振り向くと文さんが雪玉を片手にニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「それぐらい避けてもらわないとこれから先が不安ですねえ……………」

「……………」

おもむろに周囲の雪をかき集める。

適当に固めると狙いを定めて……………投げた。

「覚悟!!」

そこそこの速度で文さんに向かって投げられた雪玉は文さんにぶつか、  
ることなく無惨に地面で砕けた。

「甘い甘い。」

文さんはクスクスと挑発するように左右にステップを踏む。

「むう……………」

すぐにまた弾薬の補充を始めた。





## 異変の取材 3

## 9章 1話（笑）

「師匠に侵入者を追い返すように言われてるんですよ。お帰り願えますか？」

霊夢さんが首を横に傾けて小気味良い音を響かせる。

恐らくNOだと言いたいのだろう。

鈴仙さんは一つ大きな溜め息をつくとその鋭い眼をこちらに向けた。

「全く……これはまた厄介なのが現れたわね……。」

霊夢さんが椅子に深く腰掛け盛大な溜め息と共に空……というか天井を仰ぐ。

「大事になる前に何か手を打たないとまずいですよね……。」

「手を打つたってどうするのよ。」

辺りを気まずい沈黙が覆う。

誰もが誰とも目を合わせようとしない。気のせいか空気がどんよりと重い感じがする。

「とりあえず……人里であったことをまとめてみませんか……？何だか頭の中がいつぱいいっぱいで……。整理してみたなら何か分かることがあるかもしれないじゃないですか。」

「……そうですね……確かに鞆の言うとおりでしょう。」

恐る恐る口にするのと文さんが同意してくれた。

とにかく少しだけ嫌な空気は払拭できただろう。詰まっていた息がまた流れ出したののかのように安堵の息を吐いた。

「まあ、そうだな……何かしなきゃ始まらない。まずは人里に来たときの騒ぎについて思い返して見ようぜ。」

魔理沙さんは話よりも先にそこにいる皆をまとめるかのように明るく声を上げた。

「さして上手くないですよ。」

「人の心読まないでくださいよ……。」

赤面して俯いた僕を置いて話し合いが始まった。

「まず、私、霊夢、早苗、鞆で……人里に来たわけだよな。それで、館に着くまでの道の途中に騒ぎを見つけた。霊夢は関わることを反対したがどうも見過ごせない様子だったんで結局騒ぎの方に向かったわけだ。結果的にはそれが良かったんだよな。」

「悪かったわね。」

ムスツとした霊夢さんを無視して話は続けられる。

「それでその騒ぎというのが人里で起こっている『人が次々と抜け殻のようになってしまふ事件』の新しい犠牲者を囲むようにして出来ていたわけですよ。今度の犠牲者は女の子……ちようど鞆さんと同じくらいの年齢でしたよね？」

質問に無言で頷く。

「そして騒ぎに駆けつけた人達の中の一人の男性が千恵さんのことを……あ………」

「面倒ですからとりあえずは千恵さんにしておきましょう。」

彼女達のことをなんて呼ぶか迷ったように言葉を切った早苗さんに文さんが話を続けるように促す。

「……ええと。騒ぎの中の一人の男性が千恵さんを『彼女が犯人だ。元凶だ。』と騒ぎ立てました。」

「あの男性が言っていたことは間違つてなかったんですね。」

「そうですね……。その男性によると千恵さんはそれより以前の事件でも同じようにその場に最初から居合わせていたようです。彼らに責め立てられても気にしないように彼女はケロッとしていました。」

「どうせ実証が無けりや何もされないとか考えてたんでしょ……。ああ……。もう！腹

立ってきた……。」

拗ねたり怒ったり霊夢さんの表情を変えるのに忙しそうだ。

「と、とりあえず落ち着いてください!!」

今にも飛び出していきそうな暴れ馬を早苗さんが宥める。

「これ以上ないくらい落ち着いてるわよ。大丈夫。」

今にも舌打ちしそうな表情で霊夢さんはボソボソと呟く。

多分平静を装っているんだろうけど……。すごく分かりやすい。僕もこんなに分かりやすいのだろうか？

「そ、それで……。霊夢さんが集まった人たちを散らせて、倒れた女の子を連れて館に向かうとしていたんですが、千恵さんが『着いてくる』と駄々をこねました。」

「で、まあ別に減るもんでもないし人里にいる間だけってことで着いてこさせたんだよな。」

「その後……。えつと……。館に向かう途中で自己紹介を済ませて、僕達は館にたどり着きました。倒れていた人たちの看病をしていた女性に来る途中に拾った女の子を預けて僕は館へと上がり込むと、悲惨な状況を目の当たりにしたんです……。」

思い出さないようにしていた記憶が一瞬だけ脳裏に映る。

自分の中でわき上がる感情を全て抑えつけ、話を続ける。

「そして看病をしていた女性に、運ばれてきた人たちのことを詳しく聞いて回ったんですが……特に収穫はなく分かったことと言えば『倒れていた人たちに関連性はなく無差別に被害を被つたらしい』ことぐらいでした。」

「ま、何も分からないことが分かった訳だけだな。」

「……そうして行き詰まって悩んでいたところで千恵さんが倒れていた一人の女性に近寄ります。千恵さんがその女性の手を握ったかと思うとその女性が当たり前のように体を起こしました。彼女に話を聞こうと思ったんですがあいにく、倒れたときの記憶が飛んでしまっていたようでまともに話が聞けそうになかったんですね……。」

「何だか最近記憶喪失の患者を多く見る気がするんですけど偶然ですかね？」

「さあ……?とにかく今は状況をまとめるのが先でしょ。」

「失敬。」

「そ、それで……どうしようもなくなっていると文さんが現れたわけです……。」

「なるほど……。そして私が鞆から軽く状況を説明してもらい、さてどうしよう……?ってところで千恵さんが倒れていた女性に近づき今度は彼女が糸が切れたように元の状態に戻ってしまったと……。」

「何がしたいのか全く訳が分からないですよね……。」

「あ……頭痛くなってきた……。」

「そしてそこで千恵さんは本性を現します。どう姿を変えたのかは分かりませんが彼女は私と鞄が知る《チール》であると言いつちました。雰囲気や言っていることからそれは嘘ではないと思われれます。」

「何で姿を変える必要があつたんでしょうか？」

「あんた達に見つかるからマズいからじゃないの？」

「ああ……………。なるほど……………。」

霊夢さんの尤もな意見に思わず手をポンツと叩いた。

「急に正体をバラしたチールさんに続けてエルさんも《先ほどまで倒れていた女性》となつて姿を現します。」

「もう……………何が何だか……………。」

「二人の話によると彼女らは《魂を奪う程度の能力》と《魂を宿らせる程度の能力》を駆使して千恵さんの体に乗っ取り、人里でこれらの事件を起こしていたそうでした……………。動機についてはこれは《ゲーム》だと。刺激が欲しいだけだと言っていましたね。」

「だあーもう!!……………何がゲームよ!? そんなんで秩序破られたらこつちの身が持たないっての……………。」

霊夢さんが頭を抱えて愚痴をこぼす。

「そのゲームにおいて少しでも楽しめるように私達に妨害をして欲しいとも言っていないね。まあ、見逃せないのが分かっていると言ってるんでしょうが……………」

「あいつ等天狗より性格悪いんじゃないの?」

「聞き捨てならない言葉が聞こえた気がしますが今はあえて触れないことにしておきます。」

文さんに半眼を向けられても霊夢さんはそれどころじゃないと言った様子で溜め息をついている。

「それでまあ……………我らが博霊の巫女様（笑）が結界を使って彼女達を物理的に拘束します。」

「おい。」

「一瞬優勢に見えた巫女様（笑）でしたが、ここで驚いたことに先ほどまでエルさんを名乗っていた女性が『私がチールだ』と言い放ちます。まあ、嘘である可能性もあります。私が私にはそういう風には見えませんでしたね。」

「おいコラ……………」

「そしてチールさんだったはずの千恵さんが今度はエルさんへと変身します。しかもあろうことか彼女は博霊の巫女（笑）の結界に拘束されていたはずであるにも関わらずスツと立ち上がります。驚いた巫女（笑）はすぐに彼女に突進攻撃を仕掛けますが簡単

に避けられた上に足をかけられ大袈裟に転びます(笑)」

「よっさすが貧乏巫女(笑)!!」

「……………」

悪ふざけが過ぎる文さんに乗っかって魔理沙さんも挑発を始める。霊夢さんの表情が怖い……………。ものすごく怖い。

「そして二人は『こちら辺の仕上げ』と何だか意味深な発言をしながら倒れた方々の看病をしていた女性に歩み寄ります。そんな状況にも関わらず彼女は何が起こっているのか理解できていないのか立ち上がることにすら難しいようでした。」

「……………」

尚も霊夢さんの目つきは緩まない。

「鞘が身を挺して守ろうとしたからなのか彼女は無事なようで、チールさんエルさんは一瞬で体の力が抜けたように倒れてしまいました。そして貧乏(笑)が人里を見て回ろうと提案したことで今に至る……………というわけですが。」

「腋(笑)の提案だったな。」

「上等よコラその締まりのないならしない口二度と開けないようにしてやるわよ……………」

「何でそんなに怒ってるんですか?」



「いやあ、皆目見当もつかない。」

まるで打ち合わせをしていたかのように息ピッタリにとぼける二人に霊夢さんの拳が振り下ろす。

前に控えめに声が響いた。

「あの………店の中で暴れないでくださいね?」

「……………分かったわよ。悪かったわね急に大人数で押し掛けて。」

「いえ……それは大丈夫ですよ!」

笑顔で答えた小鈴さんは小さく一礼した後カウンターの奥へ移動する。

「あ!!そう言えば!!」

視界の外へと移動する寸前、バツと振り返るとビシツと真っ直ぐに魔理沙さんを指さすと

「延滞料金とんでもないことになってますからね!!」

「分かってる、分かってるから。」

指された張本人は冷や汗を垂れ流し、噛みつきそうな勢いで迫ってきた小鈴さんを仰け反って避けながら早口にそう言った。

「お願いしますよ?」

「ああ、分かってる分かってる。」

小鈴さんは大きな溜め息をつきながらカウンターの奥へと消えていった。

「まだ返してないんですか？」

「いやあ……………そもそもまだ1冊も読んでないんだけど……………」

「……………」

「だから鈴奈庵はやめとこうって言ったんだけどな。」

へへっとはにかみながら言う魔理沙さんの顔に反省の色は見られなかった。

「なに話を逸らしてんのよ。店内が駄目なら表に出りやいいじゃない」

どこかの国の女王様みたいなことを良いながら霊夢さんは親指でビツと出入り口を示した。

ポーズだけ見ればヤンキー以外の何でもない。

「別に良いですよ?」「霊夢もさっきの勇姿(笑)をみる限り鈍っているみたいだな。」

しかもこの二人は売られた喧嘩は漏れなく買い占めるようだ……………。

「あ……………あの……………」

「今はそんなことしてる場合じゃないでしょう!!」

僕の声を遮って代わりに遙かに凛とした声が響く。

「こんなことになってるんですから事件の原因説明の方が先です!!喧嘩してる時間なんて無いんですよ!!」

「「……………」」

早苗先生に諭されて三人はトボトボと席に戻る。

早苗さんが満足げに頷き対照的に霊夢さんは不機嫌そうに頬杖をつく。

そして特大の溜め息を吐き出す。

「じゃあ……………まとめてみた上で何か気づいたこととかある？」

続く……………。

## 9章 2話～話し合いは念入りに～

「じゃあ……まとめてみた上で何か気づいたこととかある？」

霊夢さんが上げた声に答える声はなかった。

皆一様にうーんと唸りながらそれぞれに違う方向を見つめている。

「結局何も無いんじゃないの………。」

霊夢さんは溜め息混じりに呟くと足を投げ出して背もたれに体を預ける。

気づいたことかあ……。

「あの、い……いいですか？」

静かに手を挙げると視線が一気に集まるのを感じた。

「ああ……鞆か………。で、何？」

何だか端から期待していないといった感じに聞こえるけど気のせいだろう。

頭の中で一度話すことを整理してから話し始める。

「ええと……結局僕達が最初の騒ぎで出会った千恵さんはチールさんだったわけですね？」

「まあ、恐らく正確には《千恵さんの体に入ったチールさん》なんでしょうけど。」

「はい。それで、そのときはエルさんは何処にいたんですかね?」

「そりゃあ……あの倒れてたおばさんの中じゃないのか?」

「でも!あの二人の能力からしても二人で一つって感じがしますし一緒にいないのって不自然じゃないですか?」

僕の気づいたことに霊夢さん達は「言われてみれば……」と小さく頷く。

「確かに不自然ではありませんね……。」

「はい!はい!!じゃあ、次は私が!!」

それに続くように魔理沙さんが元気よく手を挙げる。

霊夢さんが足を組み直し、顔をんつと前に出して続けるように促す。

「ええと……私達が最初にあつた千恵はあの時点でチールだったわけだよな?」

どこかで入れ替わつたとは考えにくいしきつとそうだろう。

僕達が頷いたのを見て魔理沙さんは話を続ける。

「あいつ、私達一人一人に握手を求めてただろ?霊夢の手に急にくつついてたりもしてたよな?」

僕はそのときの記憶を頭から引つ張り出す。

確かに握手を求めていたし、霊夢さんの手に自分の手を添えたりしてたっけ……。

魔理沙さんの話を皆が記憶を手繰りながら聞いている。それが面白いのか一層楽し

そうに喋り出した。

「そして、倒れてたおぼさんが起きあがったときだけど、あのときも確か近づいてたよな？それに最後に看病してた彼女に触れようとして鞆に阻まれてた。」

「つまり、魂を奪うとき、もしくは乗り移るときはその人に触れる必要があるっていうことですか……？」

「恐らくな。」

ハツとして僕が言うのと得意げに魔理沙さんは人差し指を立てた。

なるほど……確かに言われてみればそうなのかもしれない……。これは有力な新情報が得ら——

「つて、んなこと分かってんのよ。」

僕が感動しているのを霊夢さんが不機嫌そうに遮った。

「そんなことまとめてる時点で分かってるわよ。そんな猿でも分かること言っていないで新しい何かを見つけなさいよ。」

「なんだよ。ちよつと確認で言ってみただけだぜ？」

「そんな妖精でも気付くようなこと得意げに言っておいて……。」

容赦なく流れ弾を正確にこちらに向けて撃ってくる霊夢さんがふと言葉を止める。

文さんが何かコソコソと耳打ちしていたから多分それが原因だろう。

それより……。

「猿以下……………」

さや は めのまえが まつくらに なった

「ああ……………えつと……………なんかごめんね。」

霊夢さんに雑に慰められる。

「大丈夫です。大丈夫です。」

「え？ 鞆さんどうしたんですか？」

「触れないであげてください。」

「？ は、 はあ……………」

早苗さんは良く分かってないようだった。それにしても猿以下……………。猿以下……………。

「ええ……………約一名戦闘不能になってしまいました……………とりあえず続けましょうか。」

「完全に仲間割れだったけどな。」

「……………わざとじゃないわよ。」

「だ、大丈夫ですよ!!」

「……………?」

どうやら僕のせいで話が中断されてしまったようだ。

とにかく、話し合いを再開させよう。

「そういえば……エルさん達は2日で14人もあんな風にしてしまったわけですよ……?すごくペースが早くないですか?」

「まあ確かにとんでもなく早いペースですね……」

「つて言っても無理な数でもないだろ?現に千恵を見たつて人もいたんだし。」

魔理沙さんが何気なく呟いた言葉に何か違和感を覚える。

「どうやら霊夢さんや文さんも同じ風に感じたのか眉をひそめる。」

「ちよつと待つて、魔理沙その人の証言覚えてる?」

「ん?確か昨日の何回かの騒ぎにも千恵が来ていたつて言つてたな、実際にそいつが見た訳じゃなくてその場にいた知人に聞いたらしいが。」

「……………正体のわからないモヤモヤが僕の頭の中を覆う。」

「妙ですね…………。」「妙ね…………。」

すると二人が同時に呟いた。

「何がですか?」

早苗さんが即座に二人に尋ねた。

僕は何だか問題の答えを見るようで複雑な気分だったが話を遮るわけにも行かない



ので二人の言葉に耳を傾ける。

「千恵の中にはチールがいたわけよね？」

「それは間違いないでしょう。しかしそれだとさつき鞆が言ったように不自然です。」

「あ……そうか……。」「確かに妙ですね……。」

横で魔理沙さんと早苗さんがハツとして呟く。

まずい。これは僕だけついていけない展開だ……。

ちよつと整理しよう……。

えつと、文さんと霊夢さんが反応したのは魔理沙さんのこの言葉。

『つて言つても無理な数でもないだろう？現に千恵を見たつて人もいたんだし。』

『ん？確か昨日の何回かの騒ぎにも千恵が来ていたつて言つてたな、実際にそいつが見た訳じゃなくてその場にいた知人に聞いたらしいが。』

つまりチールさん達を倒れた人たちがいた場所で目撃した人が複数人いるということだ。

でも、誰か一人が全て見たつてわけでもないしそんなにおかしいところがあるようには思えない。

「鞆、証言した人は誰を見たと言つてましたか？」

首をひねる僕に苦笑混じりに文さんがヒントを出した。

「ええと……千恵さんですよ？何かおかしいですか？」

「誰か足りなくないですか？」

足りない……………？

足りない……………。

足りない……………！

「あ！！」

声を上げた僕に4人が微笑む。

確かに最初に僕が疑問を持ったとおり二人で行動していた訳ではないようだ。

二人で一緒にいたとするなら目撃されるのは千恵さんとあの女性の二人じゃないとおかしいはずだ。

ところがどっこい現場にいたのは二人ともではありません。千恵さんのみ……………つまりチールさん……………。

「鞘は時々微妙にネタ突っ込んでできますよね。」

「使いやすいんだろ。」

文さんと魔理沙さんが何か言ってるけど気にしないことにする。

現場で目撃されたのはチールさんだけだった。でも一人でいたとは考えにくい。

そこには恐らくエルさんも一緒にいたはずだろう。

「チールは見つかったけどエルの方は上手く隠れたってことか？」

「ありえなくはないですけどどちらよつと無理がありませんかね？」

「そもそもあの二人の証言が本当だって証拠はないわけだし……何にしても断定は出来ないわね。」

「んー……………嘘には見えなかつたんですけどね……………」

「あんたもケロツと嘘ついたりするでしょうが。」

「なっ!?……………心外ですね……………私はいつでも真実を——」

だんだんと話が脱線してくる。

「えつと……………もしかしたら千恵さんの体の中にエルさんとチールさんの二人が混在していたとしたらどうですか？」

話を戻そうと思いつきの考えを述べてみる。

「……………」

霊夢さんがジツとこちらをみる。

そして腕を組み、目を瞑って俯く。

たつぷり間を空けてからゆっくりと顔を上げると。

「あり得る……………のかしら……………」

難しい顔をしてそう呟いた。

「あ、いや適当に言っただけですし、多分間違っているんじゃない……。」

「いやいやあながち間違ってるとも言いませんよ……なるほど……一人の中に二人、ですか。」

「はー。なるほどな。」

予想外に皆の反応が肯定的で戸惑う。

でも、確かに改めて考えてみるとあり得ない話ではないのかもしれない。

これはもしかや僕のファインプレーが決まったのでは？

そんな淡い期待を抱いていたところなんとももつともな意見が僕に突き刺さった。

「でも、そうだったとしてもそれがどうなるんですか？」

「……。」

早苗さんの恐らく何気ないであろう一言に皆が黙り込む。

「？」

首をちょこんと傾げて不思議そうに僕達を眺める早苗さんは何だか小さな子供を思わせる無垢な雰囲気があった。

「……まあ、一人の人物の中に二つの魂を混在させている可能性があることがわかったわけだから、収穫が全く無かったわけではないわよ……。」

霊夢さんの慰める声に苦笑いで答える。

「あああ————もう！埒あかないわね!!」

隣でいきなりバンツと机を叩いた霊夢さんに思わずビクツと体を震わす。

一度は少しだけ盛り上がった議論もあれ以降完全に勢いを失ってしまい……数分後のこと。

「やっぱり話し合いなんて柄じゃないわ……………」

溜め息と共に立ち上がった霊夢さんがんぐ……と伸びをする。

「じゃあどうするんだ？」

少し呆れたように魔理沙さんが肩をすくめる。

「とりあえずはもともとの予定通り外を回ってみましょう……………」

「回るって言ったって…………どこをどう歩くんですか…………？」

「そんなもん知らないわよ。こういうときは適当に歩いときや何かあるもんなのよ。」

「それは名案ですね。」

文さんの皮肉を軽く受け流して霊夢さんは立ち上がって出口の方へと向かう。

もう外に出る気まんまんのようだ。

「まあ、確かにずっと座ってて疲れてきたところだしな。ちよつと気分転換がてらつてのもいいだろ。」

「案外霊夢さんの言うとおりにコロツと何か見つかるかもしれないね。」

その霊夢さんに続くように魔理沙さん、そして早苗さんも立ち上がる。

「行きますか……。」

文さんが苦笑を漏らす。

つられて僕も笑いながら

「行きましょうか。」

そう言つて立ち上がった。

「それじゃ、邪魔したわよ。」

鈴奈庵ののれんを内側から押しながら霊夢さんが店の奥に向かって一声かける。

しばらくして返ってきた声は

「早く返してくださいねー!!」

魔理沙さんの顔をひきつらせ、僕達は魔理沙さんのあとを追つてそそくさと鈴奈庵を

後にした。

続く……

## 9章 3話 雨に降られば

「しかし、本当に人通りが無いな……………」

風の音がしつかりと聞こえる中で魔理沙さんが呟いた。

「みなさん未知の病を恐れて外出を控えているんでしょうね。」

5人が並んで道を歩くなど普通なら迷惑極まりないが、今に限っては特に問題もないだろう。

あてもなく人里を歩く。

「それで、これからどうするんだ？」

「だから言ったじゃない。人里を見回るのよ。」

「いや、その後の話だよ。」

魔理沙さんの言葉に霊夢さんが言葉を詰まらせる。

多分考えていなかったのだろう。

「それじゃあ……………永遠亭に行ってみませんか？」

すると霊夢さんに代わって文さんが魔理沙さんに答える……………というか提案する。

「……………何で永遠亭なんだ？」

「あ、それはですね……。かくかくしかじか——」

「文さん……。説明ぐらい面倒くさがらないでください。」

文さんは小さく頬を膨らませると溜め息をつけてから、説明を始めた。

く少女説明中く

「へー……。永琳のところに紅魔館のメイドがねえ……。……。」

「そろそろ何か分かった頃かもしれないし行っておいて損はないかと。永琳さんに人里でのことを伝える必要もあるでしょうしね。」

確かに文さんの言うとおり永遠亭を次の目的地とするのは良い案かもしれない。

「そうね……。じゃあ軽く見回った後に永遠亭に向かうってことでいいわね?」

特に誰かが異議を唱えることもなく次の目的地が決まり、僕達は人里の見回りを始めた。

鈴奈庵を出てから10分ほど経っただろうか?

何か目立った発見があるわけでもなく会話も減ってきたころ。

「あれ?」



早苗さんが短く声をあげる。

「どうしたの？」

「いえ……雨が……。」

早苗さんが眩くとポツポツと雨が降り始める。

「うわ、降ってきた！」

「とりあえず屋根があるところに避難しましょう！」

「急に降ってきたわね……。」

雑貨屋さんの小さな屋根に並んでどんよりとした空を眺める。

「通り雨みたいですし少ししたら止むでしょう。」

始めはまばらだった雨が地面に落ちる音が今は途切れることなく聞こえてくる。

僕は雨はそんなに好きじゃない。

とはいっても雨が好きな人ってあまりいないだろうか？

そんなどうでも良いことを考えていると向こうの方から声が聞こえてきた。

「おーい！ 僕もいれてくれー！」

そんな声とともに小走りにこちらに向かってくるのは若い女性。

手を傘にして屋根の下まで来ると、僕らの横に同じように並ぶ。

「ふう……いやあ……急に降り出すから困るよ……。」

苦笑しながら髪を手で軽くとくと上がった息を整えるために深呼吸をする。

20歳ぐらいの見た目に反してしゃべり方からは何だか古風な雰囲気が見えた。

「おたくさん等は連れかい？」

「え？……は、はい！そうです。」

ニコニコと綺麗な笑みを浮かべながら尋ねる女性に総答える。

「あんたは？何でこんなところにいるのよ。」

「何でというと？」

「人里で人が次々に倒れていつてるんだけど……知らないの？」

「ああ………何だか外が騒がしかったがそんなことがあったのかい。」

女性は霊夢さんの言葉を聞いても特に驚いた様子もなくケラケラと笑いながら応じる。

僕からするとそんな様子が不思議でしかたなかった。怖くはないんだろうか？

「どうりでやけに静かだと思っただよ。」

女性は壁に背を預けると何処からかキセルを取り出して紫煙をくゆらせ始めた。

「あんたも出来るだけ大人しくしてなさい。まだ詳しいことはわかっていないから。」

霊夢さんを一瞥し、女性はふう……と煙を吐くと

「ああ……その方がよさそうだ……。それじゃあ雨も少し弱まったようじゃし儂は急ぎ

の用事がある……。」

その後、短い一服を終えて女性は来たときと同じように小走りにその場を去つていった。

「な、何だか不思議な人でしたね。」

「別に珍しくもないわよ。」

思わずそう漏らした僕に霊夢さんは短く答える。

確かに……………幻想郷ではそんなに珍しい人でもないのかな……………？

「そういえば……………あそこって、来るとき女の子が倒れていた場所ですよね。」

すると、早苗さんが女性が向かってきた方向を指す。

「ああ……………そういえばそうだったな……………」

「じゃあ少しだけ見ていってみますか？」

「そうね。」

横に並んでいて互いに顔を合わせることなく短い会話を続ける。

そんな僕達の話聞いていたかのようにパツと雨が止んだ。

「おっ？もう大丈夫そうか？」

「大丈夫そうですね……………それじゃ、再開しましょうか。」

「ここで女の子が魂を奪われ、皆さんがチールさんとあつたというわけですか？」

「はい。その通りです。」

文さんは刑事ドラマの鑑識の人みたいに現場をいろいろな角度から写真に収める。

水を得た魚のように生き生きとした笑みを浮かべているところをみるとやはり文さんは本能的に写真を撮ることを求めているのだろう。

ほかの皆も女の子が倒れていた辺りの地面を熱心に眺めている。

「まあ……そもそも期待してなかったけど特に何も無いわね……。」

周りを見渡してもそこにあるのは道端のごみぐらいで霊夢さんの言うとおり特にめぼしい物は見あたらない。

「あ、鞆……ちよつといいですか?」

「はい。何ですか?」

写真を撮り終わった文さんに声をかけられて、後ろを振り向くと不自然なほどにこやかな笑みがあつた。

嫌な予感を抱きながら文さんの次の言葉に耳を傾ける。

まあ……嫌な予感が外れることはなく、

「ちよつと、女の子が倒れていた状態を再現してみてください。」

「はい?再現?」

思わず聞き返すが文さんの言葉は変化することなく、

「はい。女の子が倒れていた状態を鞆が実際に再現してみてください。」  
「僕がですか？」

自分で自分を指さしながら尋ねると「勿論です」と言わんばかりに文さんが頷く。

……………まあ、文さんの手伝いができるのなら良いんだけど…………。

何だか釈然としないまま塀を背にして腰を下ろす。

地面がまだ湿っているんだけど…………まあ、文句を言っても仕方がない。

「こ、こうですかね？」

力を抜き、記憶を手繰って出来るだけ再現を試みる。

「こうですかね？」と訊かれても私は実物を見てないですからね…………。こんな感じでしたか？」

「うくん…………だいたいこんなだったかしら？」

探すのに飽きたのかいつの間にか文さんの横に立っていた霊夢さんが顎に手を当て答える。

「まあ、とりあえずはこれでいいでしょう。」

文さんはそう呟くとまた色々な角度からシャッターを切り始めた。

考えてみると文さんに不意打ち以外で写真を撮られるのって初めてじゃないだろうか？

そう考えると何故か急に顔が上気する。

「別に力入れなくても大丈夫ですよ？」

カチコチに固まる被写体を不思議そうに眺める文さんに声をかけられ裏返り気味に「は、はい！」と答える。

それを見てさらに不信感を抱いたのか怪訝そうな表情をつくり、またファインダーの先に目を移した。

「はい。もういいですよ。ありがとうございますございました！」

文さんの声で我に返る。

何だか写真を撮られていたときの記憶だけスツポリと抜け落ちてしまっているようだ。

そんなに緊張していたのだろうか？

「み！皆さん！これ見てくださいい！」

すると急に早苗さんが興奮気味に声を上げる。

声の方を見ると早苗さんが顔を輝かせており、右手には茶色の封筒を掴んでいた。

「何それ？」

霊夢さんが極めて簡潔に尋ねる。

「そのごみに紛れて転がってたんです。どうやら新しいようですし何か関係があるんじゃないですか？」

早苗さんの手の封筒は皺などはなく、確かに新しいもののように見えた。

「あ………？そんなもん関係あるわけないでしょう？」

霊夢さんは早苗さんの手から封筒をひったくると封を雑に開いた。

その様子を僕達4人が興味津々といった様子で見つめる。

「開いた後に言うのもなんだけど……これ開けて良かったのかしら……。」

「別にいいんじゃないか？もともとから捨ててあったんだろ？」

「そうですよ。開けちゃいましょう！」

魔理沙さんや早苗さんに背中を押されて霊夢さんは封筒の中身に手を伸ばす。

「どうせただのごみで今回の件に関係なんて無いわよ。」

封筒の中から細長い紙を引っ張り出すとそれを開いた。

僕達も後ろからのぞき込む。

そこにはこう細い字で書かれていた。

《前略 親愛なる新聞記者とその助手のお二方。あとなんか3人ぐらい。

この度は勝手ながら我々の遊びに付き合わせてしまったことを深くお詫びいたしま

す。

今回、文という何とも面倒な方法を取らせていただいたのにはいくつか理由があるのですが……省きましょう。

さて、本題に入りますが……恐らく次に何処に向かえばいいか迷っていると思います。

ということので、私達が次に向かう場所をお教えします。私達が次に向かうのは光の射さない深い森。

その中、人形遣いの小さな家にてお茶を淹れて待つております。

草々 エルとチール》

……どうやら大いに関係があったようだ。

「いろいろと突っ込みたいところはありますが……光の射さない深い森というのは魔法の森ですよね？」

「人形遣いってのはまあ……アリスのことだよな。」

「大変じゃないですか!!助けに行かないと。」

聞き覚えのない名前が出てきたが、どうやらこの手紙はエルさんとチールさんに書かれたものらしい。



そして文さん達の会話から察するにそのアリスさんという人が次の標的とされているようだ。

「それより……何よこれ……………」

しかし霊夢さんはそれとは違うところに反応しているようだった。

手紙を持つ両手はワナワナと震えているように見える。

きつとゲーム感覚の二人が許せないのだろう……。

そして霊夢さんの口から小さく怒りの言葉が漏れ出た。

「なんで文は新聞記者で鞘はその助手って書いてあるのになに？ 私達だけ《あとなんか3人くらい》？ ふざけるのも大概にしときなさいよ？」

……………。

その場の全員が霊夢さんに半眼を向ける。

「……………何よ？」

「いえ、別に……………。それよりどうしますか？一刻も早くアリスさんのところに行つた方が……………」

「んー…………アリスなら大丈夫だろ？ それより先に永遠亭に向かった方がいいんじゃないか？」

魔理沙さんが言うのを聞いて霊夢さんも

「そうね……鞆ですら体に乗っ取られなかったわけだからアリスなら心配ないでしょ。」  
ですら、という言葉がちよつと引つかかるけどこの二人がこんな風に言うことは  
きつとアリスさんって人は相当強いのだろう。

それより、いろいろあつて忘れてたけどエルさんは確か

『この5人の誰の魂も扱えなかった……。』って言つてたっけ……。

何を基準に出来る出来ないが決まっているのか分からないが僕でも霊夢さんや文  
さんと同じ括りの中に入れたということだ……。

思わず笑みが漏れる。

「とりあえずもうちよつと人里を見て回ったら永遠亭に向かいましたよ。」

「そうですね……。」

そんな会話で我に返る。

「それじゃあ、早速行きましようか。」

続く……。

## 9章 4話 迷子の迷子の

「……………さつきも通らなかつたか？」

霧で数メートル先の景色すらぼやけて見える中。

文さん達を見失わないようにと必死に背中を追い続ける。

再びここに足を踏み入れてからも既に1時間ほど経つただろうか？

「……………これは、明らかに妙ですよね。」

「この感じは……………多分…………。」

もう足が疲れ果てていて意識も朦朧としているせいか目の前の会話がうまく頭に入ってこない。

説明しよう！

人里でこれといった成果を得られなかつた私達は次の目的地である永遠亭へと向かいました。

迷いの竹林へと足を踏み入れた私達を待っていたのは行っても行っても景色が変わ

らない、同じところをぐるぐると回っているような錯覚に陥る……迷路のような空間。

果たしてそれは本当に錯覚なのでしょうか……？

そして私達は永遠亭にたどり着くことができるのでしょうか!?

「なにやってるんですか？さつきから……。」

文さんはあらぬ方向に身振り手振りでなにかを説明している。

いったい文さんには何が見えているんだろうか？

「今あらすじが終わってオープニングに入ったところです。」

「あらすじは大切ですからね！」

「今回から見てる奴もいるかもしれないしな。」

「いや、いないでしょ……さすがに。」

訂正しよう。僕以外の皆には何が見えているんだろうか？

僕がおかしいのだろうか？

「つて、そんなことはどうでもいいのよ。それよりこの状況を打破する方法を考えないと……。」

「そうですね……闇雲に歩いていても埒があかなさそうですし。」

そんな会話を聞いて前に来たときのことを思い出す。

文さん達とはぐれてしまったばかりに言いようのない不安を抱くことになったのだ。あのときは妹紅さんがいたからよかったものの今度こそ迷ったら知らない妖怪が出てきてそれで……………

改めて絶対見失わないようにしようと心に誓う。

「そもそもさつきからずつと一本道だったよな？ 何で同じところを回ってるんだ？」

魔理沙さんが尤もな疑問を口にする。

確か僕が迷ったときも一本道を歩いていた気がする。

「横道とかありましたっけ？」

「さあ？ 無かったと思うけど……………」

元々濃かった霧がなんだかさらに濃くなったような気がする。

皆で固まって動いているはずなのに全員のを視認することができない。

どうしようもなく不安になってしまい目の前を歩く文さんの裾をつかむ。

「あや？……………どうしましたか？」

「い、いえ……………別に何でもありません……………」

何だか心細かったのだ。なんて答えるのが恥ずかしくて目を逸らして嘘をついた。

文さんは不思議そうに首を傾げると前に向き直る。

……………いつもの文さんなら写真の一枚でも撮りそうなものだけ……………霧が濃いおかげ

か更に恥ずかしい思いをすることは無かった。

恐らく相当情けない表情をしているだろう。

ガサガサ……。

「ひゃっ!」

するといきなり目の前を白い何かが横切る。

僕の上げた悲鳴に驚いたのかそれはピタッと止まって一瞬こちらをみるとすぐにまたどこかへと行ってしまった。

「大丈夫ですか?」

「あ、ありがとうございます……。」

差し出された手を取って立ち上がり、お尻についた土を軽くはらった。

「今のは……兎……?」

「はい。そうだったみたいです……。」

「兎ぐらいで悲鳴上げてたらキリがないぞ?」

僕はそうですねと苦笑して頬を搔く。一応、こういうのにはある程度耐性ができたつもりだったんだけど……やっぱり急にだとまだ慣れないな……。あれ?前もこんなこと考えてたような。

「何突つ立ってんのよ。置いていくわよ?」

置いていくという言葉が耳に入り、慌てて顔を上げる。  
そのときあるものが目に入った。

「あ、あの!!皆さん!!」

僕の声に、もううつすらとしか見えない四人の影が振り返る。

「何?」

返ってきたのは霊夢さんの短い声。

「いえ……その、さっきまでこんな道あったかなあ……? って思つて……」

「どれですか?」

唐突な耳元の声に一瞬だけ体を震わせたが平静を装つて自分から見て右の竹藪を指し示す。

「あ、本当ですね!道があります!」

「どつちかというときもの道つて感じだけど……」

僕が見つけたのは一本の細道。竹藪に埋もれて見えにくいけど一人一人なら通ることができそうな道だった。

霊夢さんが竹藪をかき分けて道を確認する。

「これだったらぎりぎり通れそうね……どうする?」

「んー……このままさっきの道を進んでもまた戻ってくるだけだろうし、行ってみるのもいいんじゃないか？」

「そうですね……進んでみましょうか。」

どうやら満場一致でこの道を進むことが決まったようだ。

「それにしても……狭いな。」

魔理沙さんを先頭に5人が並んで歩く。

この感じなら民家に入ってタンスから5ゴールド持つて行っても問題なさそうだ。

「これは……もしかして戻った方がいいですかね？」

元はといえばこの道に進むことになったのは僕が原因だし、無駄足だったときのことを考えると申し訳なくてそう提案する。

「ここまで来て戻らないわよ。戻るのは、行けるとこまで行ってから……。」

そう言う霊夢さんの表情もどこか期待している様子が窺えない。

何だかさっきの道よりも霧が濃いような気がしてくる。

やっぱり早めに引き返した方が……。

そんな風に思っていた矢先だった。

「おー抜けたみたいだぜー！」



先頭の方から嬉しそうな声が聞こえてくる。

下がっていた顔をバツ……一気に上げると、僕のマイナス思考を慰めるかのように視界に一筋の光が映った。

延々と続くかとさえ思われた竹藪を抜けて光に包まれる。

喜びと安堵とが胸の内に沸き上がってきてほっと一息をつく。

「良かった……………」

「でも、道を抜けたはいいけど、肝心の永遠亭がどつちにあるか分からないと意味ないじゃない。」

霊夢さんは辺りを見渡すとため息をついた。

確かに細道を抜けて、いくらか広い場所に出ることは出来た。しかし、そこに永遠亭らしきものは見あたらないし霧が完全に晴れたわけでもない。

状況が好転したのかは判断する事ができなかった。

「状況は変わってないってことですか……………」

早苗さんが口に出したことで一気にその場の空気が重くなる。

このまま永遠亭が見つかるまでひたすら歩き続けるしか方法はないのだろうか？

「ん……………そんなこともないみたいですよ。」

文さんの声だった。

先ほどに比べれば霧が薄く、通る視界の中の文さんは一方向を見て微笑んでいる。

「はあ……………抜けてきちゃいましたか……………」

霧の中を僕らに向かつてくる一つの陰。

頭から飛び出した二つの長い耳のシルエツトですぐにその正体を知ることができた。

「つ……………やつぱりあんただったか。」

霊夢さんは小さく舌打ちをするとその人を鋭く睨んだ。

「あ、鈴仙さん！」

僕が名前を呼ぶと、彼女はこちらを向いて軽く会釈した。

何だか妙に重々しい雰囲気だ。状況が読めずに首を傾げる。

「もうちょつと迷っていてもらいたかったんですけど……………」

鈴仙さんはため息とともにゆくりとこちらに向かつてくる。

迷っていてもらいたかった……………？それにさっきの霊夢さんの言葉。

『やつぱりあんただったか……………』

やつぱりって何がだろうか？

「何でこんな面倒なことをするのかしら？」

「師匠に侵入者を追い返すように言われてるんですよ。お帰り願えますか？」

霊夢さんが首を横に傾けて小気味良い音を響かせる。

恐らくNOだと言いたいのだろう。

鈴仙さんは一つ大きな溜め息をつくとその鋭い眼をこちらに向けた。

その瞬間何かに目の前を覆われる。

「わっ!?!」

思わずふりほどこうとするが上手くいかない。

「あー、大丈夫です。もう少し待っていてください。」

すると耳元で静かに囁かれる。何かが背中に這ったようにぞわぞわとした感覚が走った。

どうやら文さんに視界を遮られたようだ。

「あ、文さん!?!どどど、どうしたんですか?」

後ろに立っている人物が誰かわかり、極めて冷静にいつも通り、少しも焦ることなく尋ねる。

「ええと……彼女の眼をみましたか?」

「え?……紅色の綺麗な眼でしたけど……?」

「彼女と眼を合わせると少し面倒なので気をつけて下さいね。」

そう言っつてろくな説明もないまま視界が開ける。

どういうことですか?と尋ねようとして開けた口を閉じる。

そのとき目の前で繰り広げられていたのは……。

「これが……弾幕勝負？」

一方には霊夢さんと魔理沙さん、もう一方には鈴仙さんが宙に浮いた状態で対峙しており、縦横無尽に淡い光を放つ球体が飛び回っていた。

前に文さんと対決させてもらったけどあのときは文さんが手を抜いていたんだと実感する。

客観で見るのはこれが初めてだけど、なかなかの迫力だ。

……………。

それより、何だか今にも流れ弾が飛んできそうな雰囲気なんだけど。というより進行形で飛んできてきている気がする。

マズッ……!!

反射的に右へと体を倒す。そのまま転がっていき体勢を立て直した後で次の段幕に備えた。

前転、後退、ジャンプ、後退。

集中力を切らすことなく飛んでくる弾を避けることだけに意識を向ける。

これ、本当に流れ弾なんだよね？僕に向けて撃ってるわけじゃないんだよね？

そんな疑惑の念が生じるほど次から次へと弾が飛んできていた。

次は……屈んで避け……………。

ふわっ

と、体が一瞬宙に浮く感覚。

反射的に体が受け身をとっていた。

しかしいつこうに地面にぶつかる様子はない。

おそるおそると目を開くと、30mほど離れたところで霊夢さん達が闘っているのが見えた。

霊夢さん達が移動したのかと思ったけど、どうもそうじゃないらしい。

移動したのは僕の方のようだ……………それより未だに宙に浮いたままなのは どうして……………。

上を見上げる。

ニコツと笑顔を見せられる。

何だか……デジャヴだ。

「あー文さん!?お、下ろしてください!!」

「ああ、失礼しました。」

案外あっけなく解放される。

「ど、どど……どどうして?」

さつきとは離れた場所でお姫様だっこされてるんですか!?

口にするのを躊躇って省略して尋ねる。

「助けてなかったら今頃鞆、後ろから被弾してましたよ?」

文さんは遠くで行われるまるで戦争でも起こっているのではないかと錯覚するほどの弾幕と爆発を眺める。

どうやら、後ろにまで気がいってなかったらしい……。迂闊だった……。

「あ……そうなんですか、ご、ごめんなさい迷惑かけちゃって……。」

「いえいえ、別にそれはいいですよ。それより、もうすぐ終わりですよ。」

「え?」

続く……。

## 9章 5話く患部で止まってすぐ溶けるく

「それより、もうすぐ終わりそうですよ。」

文さんが微笑を浮かべて見つめる先、弾幕勝負が行われている光景はなかなか幻想的だ。

あの中に自分が放り込まれたらと考えるとゾツとするけど……。

よく見てみると弾幕の形は全て同じというわけではないようだ……。

綺麗な球体もあれば楕円もある。レーザーのように細長いものもあった。

そう言えば僕が出したのは弱々しい細長いものだった……？

そんな無数に飛び交う弾幕の中で一際目を引く形状のものが一種類。

ミサイルのような……銃弾のようにも見える……。

発射された元を辿っていくと鈴仙さんが出す弾幕のようだった。

なんだろう……この形は……

「相変わらず患部で止まってすぐ溶けそうな形してますね。」

隣で文さんが呟く。

その瞬間、患部で止まってすぐ溶けそうな形の弾幕が目の前まで迫ってきていた。

すんでのところで何とか避ける。

鈴仙さんの方を見ると怒りの笑みを浮かべながらこちらの方を向いていた。

どうやら気にしているらしい。きつと文さんはそれを理解した上でわざわざ煽るようなことを言ったのだろう。

文さんらしいと言うか何というか……。

しかし結果的にはそれが功を奏したのか、よそ見をした鈴仙さんに一つの弾幕が直撃する。

その後はあつという間だった。

体勢を崩した鈴仙さんを他の弾幕が容赦なく襲う。明らかにオーバーキルだろう

……お気の毒に……。

しばらくすると攻撃が止み、地面に伸びている鈴仙さんの姿が明らかになった。

「ああー……しつかりやられましたねー……。」

文さんと共に鈴仙さんのもとに駆け寄る。

自分をボコボコにした二人とその他三名に見下ろされる様子は端から見れば不良に絡まれているようにしか見えないだろう。

「うう……。」

「だ、大丈夫ですか……?」



鈴仙さんは呻き声を上げて、頭をさすりながら体を起こす。

「さて、それじゃあ説明してもらおうかしら？」

「説明も何もさつき言った通りよ……。師匠に侵入者は追い返すように言われたから私  
はそれに従っただけ。」

「……どうにも状況が読めない。何であの数少ない常識人の鈴仙さんといきなり戦闘  
が始まったのだろうか？」

師匠「……つていうのはきつと永琳さんのことだろうけど侵入者つて……………」。

「雑用には何も知らされてないってわけか。」

「何とでもどうぞ。」

魔理沙さんの挑発に乗ることなく鈴仙さんはそっぽを向いてしまった。何だか拗ね  
た子供のようにも見える。

どうやら弾幕勝負での勝敗は絶対であるようだ。

「え……………えつと……………文さん、これはどういう……………？」

小声で横に尋ねてみる。

「あ……………ここに来るまでの竹林が前と全然違う構造になっていたうえに途中から同じ  
ところを回りそうになったでしょう？あれは彼女の……………鈴仙さんの能力によるもので  
す。それで理由は分かりませんが我々の行く手を阻んだということ今にいたるわけ

です。」

「は……はあ……。」

よく分からないが鈴仙さんによつて僕達は竹林を迷うよう仕向けられていたらしい。

それじゃあ、前に僕が迷つたのも鈴仙さんのせい——

「あ、いや、あのときはただ純粹に鞆が迷つただけです。」

心を読まれた上にバツサリと断言され何ともいえない表情を作る。

「それで……永遠停はどつちよ？」

「私があなた達に教えるとても？」

霊夢さんと鈴仙さんの間に火花が散り始める。

今にも第二ラウンドが始まりそうだ。

「あんた負けたんだから大人しく言うこと聞きなさいよ。」

「私はそんなの知りませんよ。」

「この……あんたが知らないわけではないでしょうが！」

声を荒げる霊夢さんに負けじと鈴仙さんも知らぬ存ぜぬを突き通す。

「何だよ……。こんなんじゃ埒があかないぞ……。」

「そうですよね……。」

そう言えばいつの間にか早苗さんが戻ってきている。弾幕勝負が行われている間は

姿が見えなかつたけど……ちやつかり避難していたのだろうか？

「あんたね……みつともないわよ。」

「……………」

鈴仙さんの態度を見るにこのまま粘つても吐いてくれそうにない……。

再び竹林をさまようしかないのだろうか？

そんな風に思いかけたそのときだった。

「ちよつと良いですか？」

全員が文さんの方に注目する。皆の視線を気にすることなく文さんは一歩前へと踏みだし、地面に腰を下ろしている鈴仙さんの前にしゃがみ込む。

するとおもむろに懐から一枚の写真を撮りだした。

それを鈴仙さんの眼前へと突き出す。その瞬間鈴仙さんの顔色が何かの試薬のように真っ青に変わった。

ニコニコと楽しそうな文さんは鈴仙さんに耳打ちする。必死の形相でしきりに顔を縦に振る様子を見ると何だか気の毒になってきた……………。

「道教えてもらえるそうですよ。」

2分ほど経つた後、文さんが僕達に向かって親指を立てた。

その後ろの鈴仙さんは正座しながら地面の方を向いている……………。可哀想に……………。  
「ここから右にずつと行つた先です。」

先ほどに比べると随分と低くなつたトーンで右の方向を指さした。

「おお、ありがとな！」

魔理沙さんが無邪気にお礼を言う。悪意があるのだろうか？ないのだろうか？どちらにしても質が悪いのには変わらないが……………。

「よし、じゃあ永琳のここに行くわよ。いきなり侵入者を追い返すだとか何考えてるか知らないけど本人に聞けばいい話よ！」

「善は急げですね！」

霊夢さんも早苗さんも特に気にすることもなく鈴仙さんの教えてくれた方向に進み出す。

何というか……………うん……………。

言いやうのない感覚のまま霊夢さん達の後を追う。

「あ……………ちよつと。」

去り際に後ろから消え入りそうな声がかかる。

振り向くと、鈴仙さんが文さんに縋るような目で何かを話していた。

微かに聞こえた声の一部。

「あの……………本当にお願いしますね……………」

小刻みに震えながら表情で何かを訴えている。

……………何でだろう……………目から水が……………」

「あの……………文さん？ 鈴仙さんに何見せたんですか？」

「写真ですよ？」

「いや、まあ……………それは分かってますけど……………」

何だか迷っていたときに比べてかなり霧が薄くなつたようにみえる。

「そうじゃなくて僕が聞いているのは写真の内容についてです。」

鈴仙さんをあそこまで怯えさせる写真……………いったいどんな写真なんだろうか

……………」

「見たいですか？」

文さんに目を合わせて尋ねられる。一見すると曇りのない綺麗な眼だ。

改めて見たいか？ と訊かれれば、見たいような見たくないような複雑だ。

「鞘にはちよつと刺激が強すぎるかもしれないですねー。」

「しげきがつよい？」

……………」

し、刺激が強いつていうのは……？

それは、つまり？そういうこと？

え？いや。どういうことだろう？

鈴仙さんの弱みになるような写真であり、なおかつ僕には刺激の強い写真。  
そこから予想できるのは……………。

「？ど、どうしました鞄？顔真つ赤ですけど…………？」

「あ、あ、あ、あ！文さん!?さ、さささ…………最低です!!見損ないました!!!」

「え？」

叫ぶように言い残して少し先を歩く霊夢さん達のところを駆ける。

いくら文さんでもそんな写真を撮って、人を脅すだなんて…………許されない行為です……………。

第一、何で文さんがそんな写真を持っているんですか…………。

心内にモヤモヤとした気持ち悪さが膨れ上がってくる。何だろう…………コレ……………。

「おー?どうした鞄。」

いきなり走ってきた僕に魔理沙さんから声がかかる。

「い、いえ。別に大したことでは……………。その、永遠亭はもう近いんですか？」

「……。断言はできないけどもう近くまで来てると思うわよ。」

「しつかし永琳は何で侵入者を追い返すだなんだってやってるんだ？」

「何か私達に來られてはマズいことでもあるのでしょうか？」

「どうせろくでもないこと考えてるんですよ。」

靈夢さんは首を揉みほぐしながらだるそうに歩みを進める。

何だかこう……巫女さんつてもつと神聖なイメージがあつたけど、実際はそんなものだよ。今更といえは今更だし。

「何？」

「え?! いや、別に何でも！」

何を考えているかを悟られてしまったのか靈夢さんの半眼が刺さる。

「うーん……なんだろうな……タイミングから考えても今回のことと無関係とは思えないしな。」

「そうですね。永琳さんはアンネさん達を見ていたはずですし、そこで何かが起こつたのでしょうか？」

「うっ……あ、文さん。」

いつの間にか真後ろには文さんが立っていた。最低だの見損なつただの言つてしまつたせいで目を合わせることができない……………。

「何かって何よ?」

「さあ?そこまでは。」

文さんは肩をすくめてみせる。

「そういえばブン屋は人里に来る前に永遠亭に行つてたんだよな?」

思い出したように言つた魔理沙さんの言葉に皆の視線が文さんへと向けられる。

確かに文さんは人里で僕達と合流する前に永遠亭に大ちゃんを預けにやつてきていたはずだ。

「はい。確かに来ましたけど特に何かあつたわけではないですよ?大妖精を預けただけです。」

「それにしてもちよつと人里に来るの遅くなかつた?」

「そうでしたか?」

疑うような声にも動じることなく文さんが答える。

「んー……なんだろうな?何か月に関連することか?」

すると魔理沙さんが気になる発言をした。

月?月つてあの空の月だろうか?兎がお餅をついてるあれ?

「……もしかしてエルさんとチールさんは月の住人だったりするんでしょうか?」

月の住人?ど、どうということだろうか?



頭の中がこんがらがっている僕をおいて話は膨らんでいく。

「エルさんとチールさんは月からの使者で永琳さんと輝夜さんを追って地球にやってきたとか?」

「話が飛躍しすぎよ。第一根拠がないわ。」

早苗さんが楽しそうに想像を巡らせるのを霊夢さんが遮った。

「じゃあ、二人は月からの侵略者で、幻想郷を征服しに来たとか!」

「……………」

ジト目が早苗さんに向けられる。

暫く間をおいた後

「勿論冗談ですよ?」

ニコニコとしたまま早苗さんが声を上げて笑う。

……………やっぱり話についていけない…………。

「まあ…………何にせよ本人に聞けば分かる話よ。ほら、見えてきたわ。」

辺りはさつきとは比べものにならないほど霧が晴れて視界は明瞭になってきた。

「それじゃあ、行きましようか!」

そして僕は再び永遠亭に足を踏み入れることとなった。

続  
く  
……  
……  
……。

## おまけ編 9

## おまけ編 1話く用法・用量をお守り下さいく

「で、どうすればいいんですか……………?」

文は人を殺す目で静かに誰かを見つめる。

「ああ、えーつと……………それはね——」

「みつめましたよ……あ……あ……や……さ……ん……………」

誰かの言葉がゆらゆらと安定しない声に遮られる。

……………ダッ

ガシッ

目にも留まらぬ速さで走り出した文の裾が掴まれた……………。

「ふう……………。終わった……………」

「お疲れさまです。」

机にかじりついていてガチガチに凝ってしまっているであろう師の肩を揉みほぐしながら労をねぎらう為に言葉をかける。

彼女に自分のマツサージしている肩が凝っているかどうかなど分かりはしないのがこういうことはやること自体に意義があるものだ。

「お。ありがとうございます。悪いですね……こんなに遅くまでつきあわせてしまって。」

「いえ！むしろ手伝わせてもらえるだけありがたいですよ！」

たった今書き終わらせた原稿をトントンと揃える彼女は射命丸文。ここ、幻想郷の新聞記者であり妖怪の山に住まう烏天狗である。

そしてその横で柔らかい笑みを浮かべる少女……心音鞆。一見すると少年に見間違えるほどの控えめな——失礼。暫く前に幻想郷へと迷い込んで倒れていたところを文に介抱されたのだ。どうやら記憶を失っているようである。

「今更改めて紹介する必要があるでしょうか。」

「……？どうしたんですか？」

文はヒラヒラと手を振ると原稿を引き出しへとしまった。

「何でもありませんよ。それより、鞆も疲れたでしょう？しっかり休んでください。」

「はい。それじゃあ先に失礼しますね。おやすみなさい。」

鞆は軽く一礼すると布団の敷いてある部屋へと入っていった。

「さて、それでは私も今日は休んで……。あや？」

大きな伸びを終えた文の目に何かが映り込む。

玄関の隅にちよこんと置いてある小包。身に覚えのない届け物に顔をしかめながら文はそれを手に取った。

『親愛なる新聞記者とその助手のお二人へ。これはちよつとしたプレゼントです。ネタにでもしてください。』

癖のある字でそう書かれたメモはあるものの肝心の差出人の名前が見あたらなかった。

これ以上怪しいものというのもなかなか思い浮かばないが、この新聞記者より強い好奇心を持つ人物もなかなか思い浮かばない。

文は小包を机の上に移すと慎重に包装紙を剥がしていく。すると中から小さな白い箱が顔を出した。

ゆつくりとそれを持ち上げると細かく左右に振る。

——が、音はしない。

つまり、その箱のサイズにぴったりのものが入っているか、もしくはクッション材のようなものが一緒に入っているということになる。

重さは特に重くも軽くもない。

これだけでは何が入っているのか想像のしようもない。

仕方なくその不気味な箱を開けることにする。

そつと開かれた蓋からのぞいたのはクツションに収まる小瓶が一つとそこに添えられた一枚の手紙だった。

『これはすてきなおくすりです。疲れがとれるので是非一度ご賞味あれ。』

先ほどのメモにあるものと同じ字でこう書かれている。

薬とは本来決して賞味するものではないだろう。文は苦笑を漏らしつつ丁寧に小瓶を手に取った。

飴色の瓶にはラベルのようなものは見あたらず薄く中の液体のみが目映る。

大きさはちょうど手のひらに収まるぐらいの小さなものだ。

おもむろに蓋を取り、仰いで中の液体のにおいを確認する。特に異臭がするわけもなく無臭のようだ。

「……………どうしますかね。」

くすりの送り主は何となく予想がつく。

だからこそ何の警戒もなく口にすればどうなるか分かったものではない。くすりの効能は……まあ、アブナイ類のものだろう。

そこまで、考えて文は一つの案を導き出した。

自分が飲めないなら誰かに飲ませればいいじゃない！

小瓶を丁寧に箱に戻すと部屋の隅へと移動させる。

文は満足げに頷くと明朝に備え、休息をとることにした。

「おはようございます……………」

寝ぼけ眼をこすりながら頭をこくりこくりと揺らす。

日の入りから暫く経っただろうか。鞆はあくびをかみ殺して小さく頭を下げる。

「ああ、おはようございます。よく眠れましたか？」

「はい。それなりには……………」

まだハッキリとしない意識を引っ張りながら椅子へと腰掛ける。

「ん〜…!!」一度大きく伸びをしていくらか視界が明瞭になった。

極めつけにキリツという擬音を想像しながら目を見開く。意外にもこれだけで結構

目が覚めるものだ。

「目は覚めましたか？」

「はい！ぱっちりです！あ、ありがとうございます！」

机に置かれた湯飲みを見て鞆は振り向き、お礼を言った。

文はニコツツと笑うと

「いつもとは少し違う淹れ方をしてみたんですよ。どうぞ。」

そう言つて早くソレを飲むように促す。

「へえ、そうなんですか？じゃあいただきますね。」

そんなことに気付く様子もなく鞆は湯飲みを手に取る。そして一口啜つた。

「……………どう……………ですか？」

「はい！おいしいです……………けど、僕には味の違いは分からないです……………」

鞆の様子に特にいつもと違ったものはない。申し訳なきように頭を垂れている。

「いえ、変えたといつても本当に些細なことですから気付かなくて当然ですよ。」

そう。その通りだ。あの小瓶の中身を垂らしただけなのだから。

「そうなんですか……………？何だかすいません……………」

尚も暗い表情をしたままお茶（おくすり入り）を口に運ぶ。

「でも、いつも通りとてもおいしいですよ！」

気を遣うように鞆が笑う。可愛らしいが文が今求めているのはそれではない。

いったいこのくすりの効果は何なのだろうか？

わざわざ何でもなくくすりを送りつけてくるなどは考えにくい、効果が出るのが遅い



ただだろうか？

アレが送ってくるくすりだ。ほぼ確実にそういうくすりだろう。ネタにするしないは別にしてくすりが効いてこなくては面白くない……………。

そこまで考えて初めて変化が現れ始めた。

「すー…………すー…………。」

さつき「ばつちりです！」とか言っていた気がするが目の前の鞆は幸せそうに寝息を立てている。

「これは…………睡眠薬……………？ですかね…………。」

鞆を起こさないように注意して呟く。

ただの睡眠薬…………そんなことがあるだろうか？それにそうだとしたら何のためにこんなものを送りつけてきたのだろうか？

もしそんなものでネタになると思っているならアレには一言言っておいたほうがいだろう。

期待していたようにならず、文は残念そうにため息をつく。鞆の背中に毛布をかける。

「まあ、まだ睡眠薬と決まった訳じゃないですしこれから何か起こることも十分あり得ますからね！」

空気を取り戻すように再び眩くと、いつ何が起こっても大丈夫のように鞆が見える位置で原稿の見直しでも……………。

ギョツ

不意に服の裾を捕まれた。

当然、掴んだのは鞆だ。先ほどまで寝息をたてていたのにいつの間……………。

「文……………さん？」

鞆は眠そうな表情で文を見上げていた。

しかし、何だか様子がおかしい。顔は妙に紅潮しているし目もトロンと垂れ下がっている。

これはもしや……………。

「……………？どうかしましたか？」

文はいつも通りの表情で尋ねる。

「ええと……………僕……………何だか熱があるみたい……………。えつと……………それで、体が熱いので……………。」

「……………。パシヤツ」

つついっ無意識にシャツターをきっていた。

「……………？」

しかし、いつもの鞆なら涙目で慌てて何か言いそうなものだが今回は違った。虚ろ目で小首を傾げている。

「……………どうやらくすりの効果は催眠作用だけでは無かったようだ。

「大丈夫ですか？どこかに横になった方が……………」

「だいじようぶ……………れす。はい。だいじようぶ……………」

ろれつが回っていない上虚空を見つめて笑っていることから察するに絶対大丈夫ではないだろう。

まあ、面白ければ何の問題もない。

どうやって記事に繋げるかは少し難しいところではあるが、方法ならいくらでもある。まずはこのくすりの效能の詳細を知るのが先だろう。

「鞆、私の顔が分かりますか？」

「……………文さんですよー？」

さすがに今話しているのが誰か分からないほど意識が朦朧としているわけではないらしい。

では、これはどうだろうと鞆の目の前で人差し指を立てる。

「じゃあ、これは何本ですか？」

「……………ええと……………」

………どうやら、思った以上にまずいらしい。人の判別よりこっちの方が簡単な気もするが……。

そのときだった。

はむっ

「ひいや!」

不意にそんな声があがった。しかも鞆のものではない。文のものだ。

文自身、相当長く生きてきているがそんな声をあげたのはいつ以来か思い出せない。

自分が上げた声に戸惑いつつもそれよりも鞆のとつた行動に大きく動揺する。

鞆の口から解放された右手の人差し指は鞆の唇と艶めかしく光る細い糸で繋がって

いた。

相も変わらず鞆は虚ろな目で文を見上げている。口元は微かに緩んでおり鞆らしく

ない色気のようなものが窺えた。

いつの間にか鞆の腕は文の腹部に回されており、耳を澄ますと吐息が聞こえてくる。

「えへへ………あゝやゝさゝん。」

………とりあえずこのくすりの効能に関してはある程度分かった。

考えたとおり、まあそういった類の《おくすり》だったようだ。

しかし……この状況はちよつとマズい。

まあ、面白そうだから良しとしよう。

「どうかしましたか？鞆？」

「何らか、暑くって……変な気分で……。」

だんだんと息が荒くなっている。さつきから紅潮していた鞆の顔はもうきれいな紅色に染まりきっていた。

何というかこう……ゾクゾクとした何かが身体中を這い回る。

バレないように気をつけながら写真に収めていった。

「あやや？そんなこと言ったら襲っちゃいますよ？」

冗談で鞆の顔をこちらに向けて囁いてみる。いつもの鞆なら爆発して卒倒しそうなものだが……。

その瞬間視界がグラツと揺らぐ。背中に軽い痛みを感じ床に押し倒されたことを理解した。

「そうですね。そうですね！そうしましょう！大丈夫です何の問題もありません！女の子同士だからノーカウントです。文さんは何の心配もしなくて大丈夫ですよ。僕に任しておけば大丈夫です、文さんは天井のシミでも数えていてください。あ、でも僕から目を離しちゃ駄目ですよ。ずっと見ていて下さいね。ずっと……。」

先ほどとは違う獣のような息の荒さに思わず怯む。

一息でそうまくし立てると鞆はゆっくりと妖艶な笑みを浮かべた。  
そんな中文が上げることができた声と言えは……………

「え？」

続きますごめんなさい……………。

## おまけ編 2話くメタ発言はお控えくださいく

「え？いや、ちよ……鞆？ど、どうしたんですか？」

珍しく本気で取り乱しているのか詰まりながら文は自分に跨がる少女を押し退けようとする力を入れる。

「どうしたつて、文さんが言ったんじゃないですか……。」

しかし抵抗むなしく、床に押さえつけられたまま鞆に両手の動きを封じられる。

「大丈夫ですよ……優しくしてあげますからね……ふふ。」

甘い声が耳元にこぼれ落ちる。思わず声を上げそうになったのを何とかかみ殺した。

どうにかして逃げなければと体勢を立て直そうとするがガツチリと拘束されていてうまく身動きがとれない。

「文さん照れてるんですか。大丈夫ですよ落ち着いて。」

柔らかい手が文の首元からなぞるように頬まで移動した。

鞆の行動一つ一つにゾクゾクとした感覚が伴う。

「ゆっくり……少しずつでいいんです。少しずつ。」

鞆の顔がどんどん近づいてくる。明かりは鞆に遮られてしまい、逆光となるため表情

は窺えない。

そしてそのまま……………。

はいはいはい。ちよつと待った。

いつもよりは数倍速く回る脳内で一度そう呟いた。

このままでは、いろいろとマズい。そう、本当にいろいろな意味でマズい。

さて、どうしたものだろうか。

恐らく……………というか間違はなくこのままでは鞆の顔が自分の顔に重なることとなるだろう。

距離的に考えてあと0・3秒ほどだろうか……………。

押し退けようにも異常なほど強い力で押さえつけられており逃げられそうにない。

少々乱暴だが他に手はないだろう。

ちよつと我慢してくださいね……………！

心の中で短くそう呟いた。

ゴウツ……………。と低い音が響き、鞆の体が浮かび上がる。



「えっ？」

再び鞆の体が地面につく頃にはそこに文の姿はなく鈍い音と開いたドアから流れる風の音だけがその場に残った。

暗く狭い部屋の中。

カタカタと何かをたたく音。薄明かりに照らされた人影が一つ。

唐突に……そして乱暴に後ろにあるドアが開かれる。

外からの光で部屋の中がいくらか明るくなった。開け放たれた入り口には一人の少女が立っていた。

「見つけましたよ……………」

そういう彼女の息は酷く荒れており、相当急いでここまでたどり着いたことが窺えた。

少しだけ位置のずれた頭襟を正して文は部屋に一步踏み込む。

「何か言ったらどうなんですか？あのくすり……送りつけたのはあなたでしょう？」

文の威圧するような低い言葉にも反応を示すことなくその誰かはカタカタと音を鳴らし続ける。

その態度に呆れたのか文は肩をすくめるともう一度誰かに聞こえるようにハッキリと

「もしもし！聞こえますよね！どうなんですか？」

半ば叫ぶように声をかける。どうやら珍しいことに相当気が立っている様子だ。しかし、それでもなお誰かは手を止めることなく軽い音を小刻みに奏で続ける。

「あなたねえ……。」

文が誰かの座る椅子を軽くk w r。

一度では物足りなかったのか更に二度目の蹴りをかm つした。

ここまで来ると意地なのか、目の前の誰かは気にしないフリをして作業を続ける。

そのとき、一瞬だけ文のこめかみに#のようなマークが入ったように見えた。

「……。」

無言で誰かの首筋を捻り……。ちよつと待って、痛い痛い。分かったって、いったん落ち着いて……。あああ!?!痛っ!?!いやタンマ、タンマ。確かに我々の業界ではご褒美だけどタンマ!!

「意味もなく頑なに無視するからですよ……。」

いや、だって設定的に反応したらマズいかなって……。

「それは無視する理由にはならないでしょう。」

っていうか何でここにいるんすか。駄目でしょ作品内に作者が出ることになっちゃうんだから。

「……とりあえず読みにくいんでこのスタイルやめてもらえますか？」

文にそう言われたため渋々と天の声が帰ってきました。

「それで……どうなんです？あなたでしょう？あの妙なくすりを送りつけてきたのは。」

「はい。そうですよ。」

「よくもまあそんなにケロツと言えますね……。」

目の前の癪毛の《誰か》はヘラヘラと笑う。彼は……まあ、そういう人物だ。ロリコンの変人といえば理解していただけるだろうか？

「だって、ネタが思い浮かばなかったもんだから思いつきでちよつとね……。」

「思いつきで人の貞操危険に晒しますかね普通？」

文の口調はいつも通りだ。しかし、明らかに感情的な部分が混じっている。隙を見せると人生が打ち切られそうな気さえする。

しかし、この命知らずはバカなのかマゾなのかアホなのか、

「女の子同士だからノーカンでしょ！っていうか私のためにもうちよつと頑張ってください」

さ(殴)

言葉を最後まで紡ぐことなく床に倒される。当然の報いだろう……笑みを浮かべているのが気味悪いが……………」

「鞄に押さえられてふりほどけなかったのもあなたが原因ですか……」

「その通り！私にかかれればそれぐらい朝飯前さ！」

文は親指を立てる誰かを思わずもう一度床にキスさせてやろうか迷うがどうせ恍惚の表情を浮かべるだけなのでやめておく。

「今すぐ元に戻してください。」

代わりに丁寧そう言った。字面や表情こそ恭しいが実質は命令のようなものである。

「ア、ハイ。ワカリマシタ。」

さつきまでのドヤ顔は遙か彼方へ飛んでいったようで、生まれたての子鹿のようにガクガクと震えながら片言で答えた。

「でもワカリマシタとは言ったけどそんな簡単に戻せないと思うよ？」

「はい？」

「いやあ……今回のおまけ編の中ではこういう力関係にしちゃったからね。仕方ないね。」

テヘツと舌を出した誰かの体がきりもみ回転をしながら地面に叩きつけられる。

さすがの文も我慢できなかつたらしい。気味の悪い笑みを浮かべながら誰かが地面を転がる。

「何をふざけたこと言ってるんですか、さつきと直しなさい。」

「いや、ですから簡単には直せませんですよ。あ、いいっすね。」

踏みつけられる痛みにも口角を緩めながら答えが帰ってくる。

この変態が言っていることが本当なら少々マズいことになる。

おまけ編はおそらくあと2000文字ほど、今現在この話数の半分ほどが消費されている。

後半半分で鞘に会おうものなら今の力関係では何をされるか分かつたものではない。

こうなつたらどうかして文字数を稼ぐしかないのか……………。

よし……………。

「ああああ……………」

「ああ!!それ規約的にヤバいからやめて!!直す方法なら一応あるから!」

強行手段に移ろうとした文を誰かが必死に止めに入る。

「ん?今直す方法はあるって?」

「あ、うん。まあ……………鞘を元に戻す方法ならありますけど。」

勢い余つたのか自らの発言を後悔するように誰かは表情を濁らせた。

「で？その方法は？教えてください。」

「ん〜……ええとね。せつかちはホモの始まりだから良くな——」

「あくしろよ。」

文の目映いばかりの笑顔に誰かは思わず不自然な笑みを浮かべて言葉を切る。

そして小さくため息をつくと全然似合わない真面目な表情に変わる。

「鞆を元に戻す方法……それはね……。ズバリ！文と鞆がバトル漫画のように熱く！北海道産のバター並みに濃厚で！それでいて小学1年生のようにぎこちないキスを交わす……………」

最後まで語ることなく誰かの体はきりもみ回転をしながら天井に叩きつけられる（天井）

「ぐふっ……ふふふ、私にとってこれぐらいのことむしろ快樂でしかないのだよ。さあ、どうする文よ!!」

「このコンピューター……破壊しがいがありそうですね。」

「スイマセンでした勘弁してください。」

PCの前に立ってそう言ってやると途端に文の目の前に土下座している誰かが現れた。

「で、どうすればいいんですか……………?」

文は人を殺す目で静かに誰かを見つめる。

「ああ、えーつと……………それはね——」

「みつけましたよ……あ……や……さ……ん……………」

誰かの言葉がゆらゆらと安定しない声に遮られる。

……………ダッ

ガシッ

目にも留まらぬ速さで走り出した文の裾が掴まれた……………。

「えへへ……………どうして逃げるんですか。」

スリスリと顔を文にこすりながらモゴモゴとした口調で鞄が尋ねる。

「さ、鞄? いいですか! 正気に戻ってください! ここで何かしようものならその変態が喜ぶだけですよ。」

鞄はゆつくりと後ろを振り向く。

変態がとても健やかな笑顔で正座していた。手元には録音機器、脇にはビデオカメラと準備は万端のようだ。

「こちらの準備はOKだ。いつでも始めてくれ。」

親指を立てて何かを促す。

「おや？どうしたんだい靴、こちらの準備は完璧だからいつでも始めてくれて……  
それとも私も交ざっていいんだだだ——」

すると誰かの体が壁を一枚突き抜けてその先にゴロゴロと転がる。

こ、これは……死んでる……!?!

「文さん。邪魔は亡くなりましたよ……!さあ思う存分……。」

ゴミ処理を終えて達成感と狂気に満ち溢れた靴の視線の先にお目当ての女性は見え  
たらなかった……。

「はあ………はあ………。」

勢いよく仕事場のドアが開かれる。

力を抜いてドスツと椅子に腰掛ける。空気以外のものも抜けていくのではないかと  
言うほど大きなため息をついた。

「あー……もう………。どうしたのですかね………。」

アレのせいでひどく面倒なことになったと頭を抱える。靴の単純な頭ならできるだ



け遠くに逃げていると考えるだろう……だからこそあえて山へと戻ってきたはいいが……

ふと、文の目に机の上の餡色の瓶が映った。しかしあのくすりをここに置いた覚えなどない。

「……もしや。」

身を乗り出して瓶を手取る。瓶の下には小さな手紙が瓶を重石にするようにして置いてあった。

『もう残りの文字数がやばいから元に戻す用のくすり置いときます。活用ください。』

文は右手に持っている瓶をもう一度まじまじと確認する。

発言の内容に関してはともかくこれで状況を打破できるならそれでいい。

「あくやくさくさん……!!今度こそ逃がしませんからね……。」

どうやら本格的にしゃくが足りないようだ。ですがまあ、こちらにとつては好都合。

文は内心ほくそ笑むと鞆につかみかかる。

「?……どうしたんですか?文さん。そんなにながつつかな……ん?!」

半ば無理矢理に瓶の中の液体を鞆の喉に流し込む。

まえのおくすりの時とは違いすぐに鞆がひざを突いて床に倒れる。もう4000文字を越えているため終わらせたくて仕方がないのだろう。まあ、何はともあれ一件落着だ。文も椅子までいかずにその場で腰を下ろすと安堵の息をついた。

— その夜 —

「だつて〜、僕だけおかしいですよー！何で僕だけ成長が遅いんですか〜!!」

顔を真っ赤にして机に突っ伏し、グチを漏らす鞆。

その横で苦笑いをしつつ鞆の話に耳を傾ける文。

《二元に戻す薬》を飲ませて、起きあがってからずっとこの調子である。

静かな夜の妖怪の山に鞆の声が響く中で文は今度こそアレを妖怪の餌にでもしよう  
と誓うのだった。

続きませんからご安心を……。

## 魔法の森の取材

## 10章 1話くまりすましにご注意をく

「なんだか外が騒がしいな。」

そう呟くと魔理沙さんは玄関の扉を開く。

開かれたドアから覗けたのは太いツタが壁を作っているというなかなか珍しい光景だった。

「「なっ……!?!」」

その場の全員が驚きの声を上げる。

優雅なティータイムはそこで幕を閉じた。

「お邪魔するわよー。」

ドゴオオオン

少年マンガのような擬音を響かせながら霊夢さんは永遠亭の扉を開ける。

いや、開けると言うよりも倒すという方が正しいだろうか。

「だ、大丈夫なんですか？」

「私達は永遠亭のお客様よ？ お客様にあんな出迎えだなんてなかなか素敵な根性してるじゃない？」

僕の心配は答えになってない答えで一蹴される。

「あら、随分乱暴なお客様が来たわね。」

「あ、永琳さん……。」

永遠亭にのりこめー、わーい、わーい、した僕たちを迎える声は特に怒っている様子はなく平然としているようだった。

「そちらからお出ましとは探す手間が省けて助かったわ。」

「悪いけれど今来てもらっても伝えるようなことはなにもないわよ。」

「何もしらばつくれる必要はないでしょう。何で私達を追い返そうとしたりしたのよ？」

威圧的に笑みを浮かべる霊夢さんを見ても永琳さんは何も言わない。

僕には何だか困惑しているように見えた。

「それでもまだしらばつくれるって言うなら力づくで——」

「さつきから何か勘違いしているようだけど私は何もしてないわよ?」

永琳さんの言葉に霊夢さんは「はあ?」と声を上げる。

「何言ってるのよ。ここにくる途中鈴仙に襲われたわよ。まあ、振り返ちにしてやったけど……そのときあんたに侵入者は追い返すように言われたって……」

「確かに鈴仙は今朝から見あたらなければ……そんなこと言った覚えはないわよ。」

「はあ……?」

永琳さんの態度をみる限り嘘を吐いているという感じじゃない。

霊夢さんや他の三人も同じように感じたのか不思議そうに首を傾げている。

「私は別に追い返すつもりはないから安心していいわよ。でも、さつき言ったとおり今伝えるようなことは何もないわ。」

「まだ何も分かっていないってことか?」

「そういうことになるわね。とりあえず立ち話も何だし場所を変えましょう。」

何だかスッキリしないまま話が変わっていく。

そして僕達はアンネさん……そして大ちゃんが寝かせられている部屋へと向かった。

「やっぱり、一見するとただ眠っているだけのようにはしか見えませんね……。本当に深

刻な状態なんですか?」

「私も思いつく限りのことは調べてみたけれど、どれも空振りだったわ。でも普通の気絶した状態何かとは違うのは確かよ。」

横にされた二人はピクリとも動く様子はなく、目を瞑っている綺麗な顔は何だかシンデレラを思わせる。

あれ?それを言うなら白雪姫だろうか?

「まあ、とにかく引き続き調べてちょうだい。それより私達の方でちよつと面白いことがあつたのよ。」

「面白いこと?」

「ええ……。」

く少女説明中く

「なるほどね……魂を奪う、それに宿らせる、ねえ……。」

「文、あんた前ここに来たとき二人のこと話さなかつたの?」

「そういえば話してませんでしたね……急いでましたからうっかり……。」

文さんはそう言うのとアンネさんの顔の上で手をヒラヒラとさせる。

「その二人は妖怪なの？」

「まだ確実なことはいえないけど多分そうでしょうね。ただ付喪神でもなさそうだし人の姿形をしてるけど私はあんな妖怪は見たこと無いわね。」

「ま、見た目だけでは化けている可能性もありますし分かりませんね。」

永琳さんは顎に手を当てて何か考え込むようにポーズをとる。

「なに？ なにか引つかかるの？」

「いや、特に何も無いわ。」

誤魔化すような笑みを浮かべた後、それより……と襖の方に体を向ける。

「鈴仙……バレてるわよ。」

襖の奥でビクツと体を震わせたのが何となく分かった。

「し、師匠……すいません私の力不足で……。」

襖を開きウサギ耳の女性が頭を下げる。

「どうやら襖の向こうで話を盗み聞きしていたようだ。」

「鈴仙……あなた私に霊夢達を追い返すように言われたのよね？」

「え？ は、はい！ し、師匠言いましたよね？」

永琳さんからの質問に鈴仙さんは戸惑いながらも時間を置かずに答える。

「言っていないわよ。」

「え？」

そして返ってきた返答に目を丸くする。

でも……やあのととき確かに……と呟きながら必死に記憶を辿っているようだ。

「幻覚でも見たんじゃないか？」

「昨日試した薬がマズかったのかしらね？」

魔理沙さんがおそらく冗談で言ったであろう言葉に永琳さんが深刻な顔で呟くのを僕は聞き逃さなかった。

……………。

聞き逃せば良かった……。

「って……そんなことどうでもいいのよ。新しい発見が無かったなら私達は魔法の森に向かわないと……。」

霊夢さん達は聞こえていなかったのか永琳さんの言葉に反応することは無く話を続ける。

「そういうえば言ってたわね。手紙が届いたとかなんとか……。」

「届いたんじゃないかって見つけたのよ。全く、誰が拾うかわからないでしょうに……。」

「行き先を悟られてたってことだな。」

「舐めたマネしてくれるわ……。」



靈夢さんが今にも舌打ちしそうな雰囲気です。

「とにかく私達は魔法の森に向かうわ。」

「そう……。くれぐれも気を付けてね。」

「言われなくても分かっているわよ。」

靈夢さんはお祓い棒で肩をポンポンと叩きながら部屋を後にする。

お祓い棒をそういう使い方しても良いものだろうか……。

ダメなんだろうな……。

そんなふうを考えているといつの間にか部屋には永琳さん、鈴仙さん、そして横になった二人と僕だけになっている事に気づいた。

「おーい、鞆ー?」

「は、はい!!」

部屋の外からの声に永琳さんと鈴仙さんに短く礼をして襖の方へと走る。

僕が部屋を出た後永琳さん達が何か話しているような気がしたが内容は聞き取れなかった。

「あの……文さん。」

「?……どうしましたか?」

前を歩く文さんの服の裾を引っ張る。

「いえ、あの……………その……………さつきは考えなしにひどいこと言ってしまったてごめんなさい……………」

視線を何処に向けたらいいのかわからず右やら左やら斜め下やら色々なところを目を移しながら小さな声で呟くように話す。

さつきの今で調子がいいかもしれないけれど言っておかないと話しづらくなりそうだし……………何より自分の中でモヤモヤが消えそうにない。

「え？……………ああ……………うん。はい大丈夫ですよ。はい、気にしていませんから……………はい。」  
何と言われるだろうかと身構えていた割には文さんの返事が妙に軽く拍子抜けしてしまう。

というか何を謝罪されたのかわかっているのだろうか？

何ともいえない表情のまま歩みを進める。

「そういえば今は《魔法の森》に向かっているんですね？どんな場所なんですか？」  
気を取り直して訊こう訊こうと思っていた質問を口にする。

「どんな場所……………ですか？」

「うーん……………とりあえず暗いな、それにジメジメしてるし茸が多いぜ。」  
「とにかく居心地が悪いわ。」

楽しそうに言う魔理沙さんと対照的に霊夢さんの声のトーンは低い。

「慣れてない内は森の中にいるだけで体調を崩すこともあるようですよ。」

「そうですね……。」

とりあえずろくな場所じゃないことは伝わってきた。

そんなところに家があるなんて……アリスさんという人はいったいどんな人なのだろうか？

確かあの手紙には人形遣いだって書いてあった気がするけど……。

僕の頭の中で暗い部屋で黙々と藁人形を作成する濃いくまのある女の人の画ができあがっていく。

「随分貧しい想像力ね……。」

………幻想郷の人達は皆が皆、人の考えていることを覚えるのだろうか？

それとも僕の考えていることなど全部すべてまるっとスリツとゴリツとエブリシングお見通しなのだろうか？

「そういえばあの手紙って誰が持っているんですか？」

すると急に文さんが全員に尋ねた。

「それは勿論霊夢が持ってるんだろ？」「それは勿論魔理沙が持ってるんでしょ？」

霊夢さんと魔理沙さんがほぼ同時に答える。

そして目と目を合わせる。

「……………」

気まずい沈黙が流れる。

「私、魔理沙に渡したはずだけど？」

「いやいや、その後すぐ返したはずだぜ？」

そしてお互いに責任のなすりつけあい始める。

ああだこうだと言葉が飛び交うのを文さん、早苗さんと共に傍観する。

言い合いは徐々にヒートアップしていき声のトーンもどんどんとあがっていく。

なんだかこう……もう口喧嘩に近くなっているのではないだろうか？

「あの……この状況で言い出しにくいんですけど……。」

控えめに手を挙げた早苗さんを気にも留めずに二人はぎやあぎやあと口論を続けている。

「手紙私が預かっていたんですよね。」

そういうと早苗さんは懐から手紙を取り出す。

「……………」

「だいたいあんたはいつもいつも……………」

「それを言うなら霊夢だって……………」

霊夢さんと魔理沙さんは自分達の声で聞こえていなかったらしい。今にも掴みかかりそうな雰囲気でお互いにらみ合っている。

「あー……………ちよつと拝見してもいいですか？」

仕方なく文さんが二人を無視して早苗さんから手紙を受け取る。

僕も文さんの横から背伸びをして手紙を覗いた。

《前略 親愛なる新聞記者とその助手のお二方。あとなんか3人ぐらい。

この度は勝手ながら我々の遊びに付き合わせてしまったことを深くお詫びいたします。

今回、文という何とも面倒な方法を取らせていただいたのにはいくつか理由があるのですが……………省きましょう。

さて、本題に入りますが……………恐らく次に何処に向かえばいいか迷っていると思います。

ということ、私達が次に向かう場所をお教えします。私達が次に向かうのは光の射さない深い森。

その中、人形遣いの小さな家にてお茶を淹れて待つております。

草々 エルとチール》

当然ながら前に見たときと変わりはない。

「……………」

文さんは真剣な表情で手紙を舐めるように観察する。

「なにかあるんですか?」

「いえ、この『文』という何とも面倒な方法をとらせていただいたのにはいくつか理由があるのですが』というのが少し気になったんですが……………」

「『文』さんだけにですか?」

「わざわざこんな意味深な言葉を残す必要があつたのか……………」と。まあ特に理由はないのかもしれないね。」

そう言うのと文さんは手紙を早苗さんに渡す。

スルーされたことは別に気にしてなどいない。

「あの、二人とも……………手紙はもう見つけられましたよ。」

額に青筋を走らせる二人を宥めるように早苗さんが声をかける。

「あ?」

恐ろしい表情のまま同時に睨まれ早苗さんが少し怯んだ。

「い、いや……………手紙はもう見つけたんで——」

「は？」

「……………」

その後、霊夢さんと魔理沙さんを落ち着かせるまでにかなり多くの時間を要した。

続く……………」

## 10章 2話～キノコの胞子～

鬱蒼とした密林。

一歩足を踏み入れただけでももう戻ることができなくなるような……不思議な雰囲気  
を纏っている。

そんな妙な威圧感のある魔法の森を前に僕達はいつこうに前に進めずに——  
「何してるんだ？置いてくぜ？」

いるなんてことはなく、前に行く魔理沙さんに声をかけられる。

「は、はい。今行きま——すにやあ!？」

ズルツ

ぬかるみにすつぽりと片足がはまる。

まあ、当然僕がそこから体勢立て直すことができるはずもなく……ベチャツと嫌  
な音が耳元で響き、顔が生ぬるい液体につっこんだ。

「だ、大丈夫ですか!？」

「盛大に転びますね。」

「うわあ……………」



「あー……………」

4人が思い思いの言葉を発しながら哀れみやらなんやらの視線を向ける。

早苗さんに手をかしてもらって起きあがった。

「す、すいません……………」

「ありがとうございます……………」

「す、すいません……………」

「最近魔法の森の土質が所々こんな感じになつてゐるんだよな。」

「なんだか不思議な色ね……………」

「こうした方が喜ぶ人もいますからね。」

「鞆より私の方が需要あるんじゃない？」

「じゃあ、今から飛び込むか？」

「お断りするわ。」

霊夢さんはひらひらと手を振りながら何処からかハンカチを取り出す。

「ほら、そのままじゃ気分悪いでしょ？とりあえず使いなさい。」

「え？いや、そんな……………」

「気にしなくて良いわよ。その状態で来られるのも困るからね。返さなくてもいいから

顔だけでも拭きなさい。」

そう言うのと霊夢さんは手に持ついい香りのするハンカチを僕に押しつけた。

「おや、ツンデレですか？」

「あざとい！さすが腋巫女あざとい!!」

少し離れたところから両手をメガホンのようにする二人を霊夢さんの拳骨が襲う。

「るっさいわね……殴るわよ？」

「もう殴つてますよね？」

「分かってないな霊夢。そこは『か、勘違いしないでよね!』で決まりだろ？」

頭にできたたんこぶをさすりながら懲りずに二人は霊夢さんをからかい続ける。

とりあえず遠慮なくハンカチで顔を拭いた僕は汚れを簡単に払い、折り畳んで仕舞った。

できるだけ早く洗って返すようにしよう……。

しかし、顔を拭いたはいいけど服の中までどろどろで気持ち悪いな……。

アリスさんの家でシャワー借りれたりしないだろうか？

「それじゃあ、先を急ぐわよ。」

霊夢さんは尚もニヤニヤと中学生のように自分をからかう二人にため息をついた。

〈10分後〉

「あ、あの……まだ着かないんですか？」

「まだ森に入って10分ぐらいしか経ってないですよ?」

「そうですか……?もう何時間も歩き続けているような気が——ひやつ!」

小石につまづいて前のめりに倒れかける。

「おっと……。」

何とか文さんに支えられて再び地面に頭を埋めずにする。

「あ、ありがとうございます……。」

しかしおぼつかない足取りで今度は後ろに倒れそうになる。

「よっと……。」

今度は魔理沙さんに助けられ倒れずにすむ。

「ご、ごめんなさい……ええと、もう大丈夫です……。」

「いや、明らかに大丈夫って感じじゃないですけど。」

「フラフラだし、目もなんだか虚ろだし……。」

「ほ……本当に大丈夫ですから……。」

そう言つて何とか立ち上がる。

これ以上迷惑をかけるわけにはいかない……このままじゃ前から何も成長してないと思われてしまう。

それにしても何でこんなに頭がぼーつとするのだろうか?

特に思い当たる節は何も……

「あ、鞆！前を——」

「きゃんっ!？」

鈍い音を立てて頭部に強い衝撃を覚える。

何か見えない壁に阻まれているのだろうか？

「どうしたんですか鞆さん……木に突っ込んだりして。」

早苗さんの心配そうな声を聞いて僕がぶつかつたであろう目の前の木を見つめる。

さつきまでこんな木、あつただろうか……？

「鞆、どうしたんだ？明らかにおかしいだろこれは。」

「幻覚でもみてるんじゃないの？」

「茸の胞子にやられたんですかね？」

「あー……なるほど。」

なんだか僕をおいて話が進んでいく。

「だ、大丈夫ですよそんなに心配しなくても……この通りピンピンしていますから

……。」

すぐに立ち上がり、無理に笑顔を作る。

「……………」

しかし僕をみる皆の目は何だか冷たい。

「マズいですね。」

「マズいな。」

「マズいわね。」

「マズいみたいです。」

ため息混じりに4人が順々に呟く。

不思議なことに目の前の4人の声が後ろから聞こえ、思わず首を傾げる。

「鞘……それ、花ですよ。」

また後ろの方で文さんの声がした。

「どうするんですか？このままじゃそのうち川の向こうのお婆ちゃんのところまで連れて行かれちゃいそうですよ」

「どうせ小町はサボってるでしょうし大丈夫なんじゃないの？」

霊夢さんや文さんの声が聞こえるけど見渡しても姿はない。

それより、いつの間にかお花畑に移動していたようだ……あ、蝶々……。

「あ……ちよつと待ってるよ、確かここに……あつたあつた。」

「んぐっ……!？」

急に何かを口に流し込まれる。苦くて独特のにおいがする粉っぽいものだ。

「何それ？」

「霧雨特製魔法の森の茸で作った万能治療薬だぜ。」

「この上なく胡散臭いですね……。」

「大丈夫なんですか？その薬。」

「効果に関しては私が保証するぜ？」

さつきから軽く揺れていた視界がぐにやぐにやとねじ曲がりだす。

皆が何か言っているけど文字として頭の中に入ってくるだけで頭が働かず、その文が何を意味しているかが分からない。

「どうみても悪化しているようにしか見えませんが……。」

「即効性の高い薬だけど効くまでに何秒かはかかるからな……。」

「そんな数秒で効くんですか!？」

「だから言っただろ？万能薬だつて!」

ねじ曲がったり移り変わったりしていた視界が徐々に安定し始める。

頭もなんとかまともに働き始める。

「うう………ん……。」

「お、大丈夫か？」

「は……はい、多分大丈夫……ですか？」

「疑問系なんですね。」

早苗さんに苦笑され、釣られたように僕も笑みを漏らす。

「まあ、顔色は大分良くなったみたいですね？意識もすっかりしているようですし……。熱とかは……？」

「え……やつ、ちよつ……待つ……文さん……んっ……。」

文さんに前髪を上げられ、おでこを当てられる。

「大丈夫そうですね。平熱です。」

「あ、あの……文さん、ちか……近い……です……。」

何かの歌詞じゃないけど爆音で鳴り響く鼓動音が聞こえてしまうのではないかと錯覚してしまう。

魔理沙さんがニヤニヤとこつちをみているし早苗さんはなぜか嬉しそうにしている。

「あんまりからかうと可哀想よ。」

「あや？私としてはからかっているつもりなど毛頭なかったのですが？」

「え？からか……。」

「あー……なんでもないですよー。」

文さんは楽しそうに笑いながら話す。

はぐらかされたようでスッキリしないまま再びアリスさんの家に足を向けた。

「おつきいすね……………」

小並感を漏らしながら目前の一軒家に目を奪われる。

青い屋根に白い壁の綺麗な家で幻想郷に来てからは紅魔館以来の洋式の建物だ。

「アリスさんって一人暮らしじゃないですよね？」

「いや、一人暮らしのはずだぜ？どうしてだ？」

「一人暮らしにするには大きい家だな……………と思つて……………。そうなんですか……………」

目の前の家はさすがに紅魔館ほどではないものの女性一人が生活するには十分すぎる大きさのものだ。

でも紅魔館のような言葉にできない不気味さはなく、おとぎ話にでも出てきそうな素敵な感じだ。

いくらするんだろう……………」

そんな夢も何もないことを考えていると豪華な扉が開く。

そして扉が開いた先にはアリスさんが……………」

立っているなんてことはなく人の姿は見あたらなかった。

「あ、あやあ、あやさん……………!?ととと、扉が勝手に……………」



「お、アリスいんのかー？」

明らかに勝手に開いたであろう扉にズカズカと躊躇なく魔理沙さんが足を踏み入れる。

「ま、魔理沙さん、何があるかわか——」

「っ!？」

その瞬間だった。

魔理沙さんの周りに小さな人形のようなものが現れる。

可愛らしい見た目に反してそれぞれが槍やメイスなど恐ろしいものを手に持っている。

「危なっ——」

最後まで言い切ることなく言葉を呑み込む。

自分の喉元に突きつけられた切っ先が鋭く光った。

どうやら文さん、霊夢さんと早苗さんも同じ状況にあるようだ。これはここの家主の仕業なのだろうか？

「なんだ……あなた達だったの……。それにしても面倒なことするわね……。」

すると家の方からため息混じりに声が聞こえてくる。

一步も動けないため顔だけ動かして声のした方向をみる。

「こんなもの送りつけてきて……何のつもりよ……」

そこに立つ女性は想像していたよりもずっと若く、それこそ人形のように綺麗な見た目をしていた。

魔理沙さんと同じく金髪で、でも魔理沙さんとは対照的に落ち着いた雰囲気を感じさせる。

「あー……状況が読めないんだけど？」

「どうやら霊夢さん達も僕と同じように訳が分からないみたいだ。

「何もとぼける必要はないでしょう。で、何が欲しくて来たのよ……」

「あの、アリス……？ 本当に訳が分からないんだぜ……」

魔理沙さんの言葉にアリスさんの顔が一瞬だけピクツと動いた。

「本当に身に覚えがないの？」

「ああ。」

「じゃあ、何しにきたのよ？」

アリスさんが小さくパチンツと指を鳴らすと僕たちの周りを囲んでいた人形達が一斉に武器を下ろした。

思わずふうと安堵の息と共に入っていた力を抜く。

「あー……話すと長くなるんだけど……。それでも聞く？」

「話すの面倒がつていられるだけでしょ？ 話さないと家に入れたりしないわよ。」

「分かった分かった……。」

く少女またまた説明中く

「なるほどね……異変の話は私のところにも少しは入ってきてたけど……次は私のところに来る……と。」

アリスさんは顎に手を当てて真剣に考え込む。

「そういえばさつき、あんた『こんなもの送りつけてきて』って言ってたわよね。何よそれ。」

「私に届いた手紙のことなんだけど……事情は分かったから中に入りなさい。紅茶でも淹れるわ。」

そう言ってアリスさんに手招きされて僕たちはアリスさんの家へとお邪魔した。

続く……。

## 10章 3話〈優雅なお茶会〉

「そういえばあなたは？」

アリスさんの家に入ろうとする途中で呼び止められた。

アリスさんからしたらきつと僕だけが未知の生物なのだろう。

「あ、ええと……僕は——」

「天狗の助手だってよ。」

悪意があるのか分からないが魔理沙さんの声が紡ぎかけた言葉に重なる。どちらにしてもかなり質が悪いのだが……。

「へー……大変ね……。」

「それ何気に失礼ですよね？」

哀れみの視線を向けるアリスさんに文さんが不服を申し立てるがスルーされた。

「それよりあなた……そのまま私の家に入るつもり？」

「え？」

半眼を向けられ、自分の格好に目を向ける。

至る所に白い粘液がこびり付いている。普通の人ならこいつを自宅に入れたいとは

思わないだろう。

「あ、ご……ごめんなさい!! ええと、どうしたらいいですかね……?」

「とりあえずお風呂貸してあげるから体洗いなさい。」

「は、はい……。ありがとうございます! でも、着替えも何もないんですけど……。」

「ああ……着替えならここに。」

そう言うのと文さんがどこからか丁寧に畳まれた洋服を取り出した。

「一体いままでどこに持っていたのだろうか? ……つていうか何で文さんが僕の着替えを持ち運んでいるのだろうか……。」

「こんなこともあろうかと思ひまして。」

グツと僕に向かって親指を突き立てる。文さんは一体何を想定して日々過ごしているのだろうか……?

まあ、この妙な泥を落とすことが出来るのなら細かいことは考えなくていいか……。思考を停止した僕はアリスさんの言葉に甘えてお風呂を借りることにした。

く少女入——

「ねえ魔理沙、この前貸した魔導書……早めに返してよね。」

「ん？ああ……分かった分かった。」

アリス、霊夢、魔理沙、早苗、文の5人が中サイズのテーブルを囲む。

アリスが置いたカップからは上品な香りが漂っていた。

浴室の方からはよく耳をすますと控えめな鼻歌が聞こえてくる。言わずもがな中の靴のものだろう。

「それ、多分返つてきませんよね……。」

「はあ……分かつてたことだから別にいいけど……。」

ため息混じりに頭を抱えるアリスも椅子に腰掛ける。

「そういえばあなた、助手とかいたのね？てつきりそういうことはしないのかと思つてたわ。」

文は紅茶を一口啜り、クスツと笑顔を作ると、

「別段人手が足りないなんてことはないのですが面白そうだったので……。」

再びカップに口を付けた。

「ふーん……。ちよつと鈍くさそうな子だしあなたと馬が合うと思えないけど……。」

「確かに役が立つイメージはないわね。」

「むしろお荷物になつてるイメージがあるな。」

「皆さんなかなか辛辣ですね……。」

当然のようにグサグサと言葉を並べる三人に早苗が苦笑いを浮かべる。

「まあ、確かに仕事の役に立った記憶はほとんど無いですけど、なかなか不思議な力を持つてますよ。……私にも計り知れないようなものを。」

「不思議な力……ね。」

霊夢の顔が一瞬だけ陰る。脳裏にあのときのことのことが横切ったからだ。

「意味深なこと言いたいだけじゃないの?」

そしてそれを隠すように文に半眼を向ける。

「まあ、それに関して追求する気はないけど……意外だったから——」

「あ、あの……お風呂、ありがとうございます……。」

なにか話し込んでいる皆にタイミングを計って声をかける。

「!?!」

予想通り、アリスさんと早苗さんが驚きの表情を隠すことなくこちらに目を向けている。

まあ……そんな反応をするのも当然だろう……。

「おお……似合ってます似合ってます。」

文さんが意地悪く笑う。

「何でこんな服なんですかあ……。」

涙目になって、手を下腹部のほうに押し当てる。

マンガやアニメの中でだけの存在であるとしてもなく短いスカート。すこし屈もうものなら服としての機能を失ってしまうような代物だ。

「大丈夫ですよ。鉄壁を誇る射命丸印のスカート（short version）です。たとえ台風が吹こうがひっくり返ろうが意図的にめくろうがめくれません!!」

文さんが何か熱く語っているけど正直何を言っているかよくわからない。

最後のに至ってはさすがに無理があるのではないのだろうか？

「ああ……ええと、何て言うか……。」

早苗さんにアリスさんが何ともいえない表情で僕の格好を凝視する。

「しゅ、趣味は人それぞれですからね……。く、悔しいぐらい似合ってますよ……?」

早苗さんの笑顔がひきつっている。そりやまあ、男だと思っっている人がミニスカートを履いて目の前に現れたら引きもするだろう。

「あ、あの……一応誤解がないように言うんですが……僕……女ですよ?」

さすがにこの状態でそれを言っておかないと僕の人格を疑われそうだ。

それを聞いた二人がポカンと首を傾げる。文さんがそんな二人の反応を面白そうに観察していた。



「……ってそんなことはどうでもいいのよ。それより、アリスに聞きたいことがあるのよ。鞆は早く座りなさい。」

「あ、はい。ごめんなさい。」

急いで一つ空いてる席に腰をかける。隣にいる早苗さんが「女の子みたいな名前だと思ってたけど本当にそうだったとは……。」とブツブツ呟いている。

なんだか前もそんなこと言われた気がするなあ……。もう男の子に間違えられるのも1回目や2回目じゃないし別に何とも思わなくなってしまった……。グスン。

「とりあえず……。冷めないうちにどうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

訝しげな視線を向けたままアリスさんが紅茶の入ったカップを出してくれた。

スカートのでせいでアリスさんからの印象は最悪だろう……。もしかしたらあの人形達を使って襲われるかもしれない。

「それで、アリスが送りつけられた手紙って言うのは？」

自分の妄想に怯えていると魔理沙さんがそう切り出した。

「ああ、そうだったわね。これよ。」

アリスさんが取り出した手紙を皆が体を持ち出して覗く。

僕たち宛てにきた手紙と同じ封筒に入っている。代表するように霊夢さんが封筒から手紙を取り出す。

《前略 素敵な人形遣いのお姉さんへ。

急なお手紙をお許し下さい。この度、私どものちよつとした計画においてあなたに協力していただくことにしました。勝手をお許し下さい。まあ、協力といつても簡単なことですからあなたであればきつと造作もないでしょう。それではまた後日お伺いすることになるでしょう。草々。》

「……………」

僕がざつと目を通した後にはそれぞれ何か考えている様子だった。僕が一番読むのが遅かったようだ。

「あ、そういうえば……私たち宛に来た手紙がこれです。」

早苗さんがアリスさんに届いた手紙の横にもう一つの手紙を広げる。

「全く同じ字ですね。文体もどことなく似ています。」

「どつちも絶妙に鼻につくわね。」

手紙本体も二つとも同じもので二つの手紙が同一人物にかかれたものだと言いつていた。

「どうやらあの二人は意図的に私たちを同じ場所に集めたようですね。」

「一体何が目的なんだ？」

「愉快犯の行動にいちいち理由なんぞ求めてたらきりが無いわよ。」

「霊夢さんは切り捨てるようにそう言うのと二つの手紙を仕舞った。」

「ま、大丈夫だとは思ってたけど無事みたいで安心したわ。防犯対策もバッチリみたいだしね。」

「あなた達が堂々と入り込みすぎなのよ。」

「悪い？ やましいことなんて何もなかったんだから。」

紅茶を一口啜ると椅子に深く腰をかけ直す。

「でも、アリスさんが無事だったのはいいんですがこの後どうするかが問題ですね。」

「そうだな……。また手がかりが途絶えたって訳だからな。」

「わざわざ手紙を送りつけてきた理由が必ずあるはずですよ。待ってれば姿を現すかも知れませんし、一休みするのも兼ねて暫くおじやまするのはどうですか？」

「私は別にかまわないけど……………」

アリスさんは一瞬だけ目を泳がせるとすぐにそれを誤魔化すように右手に持つ紅茶に視線を落とした。

「アリスは異変解決に着いてくる気はないのか？」

「自分の身が狙われたわけだし、勿論協力するわ………と、言いたいところだけど私も忙しくてね。少なくともすぐにつて訳にはいかないわ。」

「ま、お決まりよね……そんなこつたらうと思つてたわ。おかわり。」

霊夢さんが差し出したティーカップにコポコポと紅茶が注がれる。

「そういえば僕達宛の手紙には『お茶を淹れて待つています。』と書いてありましたね。」  
何気なくそう呟く。

「実際には武装した人形集団に手厚い歓迎を受けたわけですが……。」

「ま、そう言うなよ。何も悪気があつたわけじゃないだろうし。」

魔理沙さんがアリスさんをカバーする。

「着いてこないのは構わないけどくれぐれも気をつけなさいよ？相手の実力はまだ未知数なんだから。」

「言われなくてもわざわざこんな手紙まで送つて『警戒して下さい』つて示されてるんだから大丈夫よ。」

「そう。」

どうやらアリスさんに置かれる信頼は厚いようだ。人形のことを除けば普通の人のようだし数少ない常識人の内の一人なのかもしれない。

「あー！そういえば！全く関係ないのですが……。」

話し合いが一段落すると文さんがその場で立ち上がった。

「前の話の続き……教えていただけませんか？」

「はい？」

コソコソと隠すつもりのない聞こえ放題の耳打ちをする。その相手は霊夢さんだ。

「前の話……って。どの話よ？」

霊夢さんは心当たりがないのか眉をひそめる。

「一番最近に神社に伺ったときですよ。意味ありげに話を切っていたじゃないですか。」

「そうだったかしら？ま、どっちにしても情報料はきっちり払ってもらわよ？」

「そう言うと思ってましたよ。」

文さんが懐から手帖を取り出すとサラサラと何かを書き込む。

さりげなくのぞき込もうとしたが角度が悪く、上手く内容は見えなかった。

「これでどうですか？」

手帖から一枚紙が破かれ霊夢さんの手元に移動する。

「どれどれ……………」

暫くマジマジと紙切れと睨めっこしていると不意にニコツと明るい表情が現れる。

文さんは営業スマイルを浮かべているがどこか期待するような目を向けている。

「ま、この条件なら……………」

霊夢さんは紙切れを丁寧に折り畳む……そして。

「話にならないわね。」

そう言つて破り捨てた。

「あやや……やはり駄目でしたか。」

いつの間にか破り捨てられた破片をすべて回収した文さんが残念そうに呟く。

一体何を提示したのだろうか？前みたい僕が関わってないかもものすごく心配だ……。

「ま、今度はそれ以上の条件もつてきなさい。そしたら考えてあげるわ。」

笑顔でそういう霊夢さんは僕の目にはなんだか相当やり手のように映った。

続く……。

## 10章 4話 植物は偉大

しよぼんと肩を落としつつ文さんは元いた席に戻るとドスンと腰を下ろす。

「なんなんだ？その情報つてのは。」

「私、気になります！」

文さんに負けず劣らず好奇心旺盛な二人が霊夢さんに食いつく。

「ここであんたらに教えたら意味ないでしょ……。それ相応のコストを用意してもらおうまでこの情報は死守するわよ。」

呆れたようにそう言ったかと思うと、その意志が確固たるものだど証明するように霊夢さんの目が鋭く光る。まるで獣の目だ……………。

「冗談だよ冗談。いくら霊夢でもそこまでバカじゃないだろ。」

「そこまでつて何よそこまで……。。」

はあ……と大きなため息をつくと気怠そうに頬杖をつく。

もう何度目かわからないが、度々霊夢さんが本当に巫女さんなのか疑ってしまう時がある。

早苗さんも巫女さんばいかと言われたらそうでもない気もするけど……………。

「何？私の顔に何か着いてる？」

「ひえっ!? あ、いやいやいやなな、何でも——」

ゴオオオオオオオオオオオン!!!

突如、僕の声をかき消すように騒音が鳴り響いた。

それはメキメキツとかグシャツとかずいぶんバラエティに富んでいる。

周りを見回してみるがどうやら音の出所は室内ではないらしい。

「なんだか外が騒がしいな。」

そう呟くと魔理沙さんは立ち上がり、玄関の扉を開く。

開かれたドアから覗けたのは太いツタが壁を作っているというなかなか珍しい光景だった。

「「「なっ……!!?」」」

その場の全員が驚きの声を上げる。

優雅なティータイムはそこで幕を閉じた。

「ちよっ……!!? 何だこれ!?!」

魔理沙さんがすかさずツタを抑えるように掴みかかる。

しかし……。



「うわっ!!」

「バチィ!と痛々しい音がして魔理沙さんの体が弾かれる。転がった体はそのまま棚にぶつかり、飾られた人形がいくつか床に落ちる。

「魔理沙!?!」

「ちよつと!魔理沙!?!大丈夫!?!」

「だ!大丈夫ですか!?!」

「魔理沙さん!?!」

皆一斉に名前を呼びながら魔理沙さんの元へ駆け寄る。

「つてて……。大丈夫だぜ、ちよつと打っただけだから……。」

「……………アリス。ちよつと借りるわよ……………」

「霊夢さんがそう眩くと同時に太いツタにランスが深々と刺さる。

「え、ちよつと……………」

「やあっ!!」

かけ声と共に、更にツタにランスが食い込んだ。

「気をつける霊夢!そいつ、魔力が宿ってるみたいだぞ!」

「そんなの言われなくても……………つてちよつと……………嘘!?!」

霊夢さんが持ち手を離すと同時に7割ほど見えなくなっていたランスが更に姿を消していく。要するに、ツタに飲み込まれていったのだ。

数秒でまるで何もなかったかのようにランスの姿は見あたらなくなり、刺した痕跡もきれいさっぱりなくなってしまう。

その様子はどこか補食シーンを思わせる。

「さて……どういう状況ですかね。これは……………」

「少なくとも喜ばしい状況じゃないってことは言い切れるわね。」

「何のんきに座ってるのよ！閉じこめられたかもしれないのよ!？」

アリスさんが扉の先を塞いでいるツタをこじ開けようと人形達にツタを攻撃させている。

しかし、ガンツとかバキツとか状況に相応しくない擬音が聞こえてくるばかりで出口が確保される様子はない。

「かもしれないはないな。完全に閉じこめられてるぜ。」

「相当強い魔力がこもっているみたいですね……………」

アリスさん以外のみんなはなんだか諦めムードを漂わせている。

「なんでそんなに無関心なのよ!?!危機的状况に置かれてるかもしれないっていうのに

……。」

「塞がれているのはドアとか窓だけ？ そうだとしたら壁でも破れば抜けられるんじゃないの？」

「いや……外の子達に調べてもらったけど家全体が巨大な植物に覆われてるみたいね……。」

「外の子達というの？」

「………露西亞人形よ……。」

アリスさんはボソツと呟くと一つため息をつき、霊夢さん達と同じように椅子に腰掛ける。

「まあ、どちらにしても別に無駄に体力消耗する必要はないでしょ。あんたのお人形達があツタをどうにかしてくれるまで気長に待つてるのが得策よ。」

霊夢さんは大きく伸びをした後、一気に力を抜いて首から小気味良い音を響かせた。

「そんなこと言つて……面倒に思つてるだけだろ？」

「まさか、そのようなことがあるうはずがございませぬー。」

「霊夢……あんたね………。………つて、ん？」

呆れて顔を濁らすアリスさんが机の下に目を向ける。そして手を伸ばして何かを取ろうと踏ん張る。

「……………!?……………これって……………」

アリスさんが机の下から取り出した封筒。どこか見覚えのあるそれはどこことなく不気味な雰囲気纏っているような気がした。

見間違えるはずがない。僕達宛の手紙、そしてアリスさん宛に書かれた手紙が入っていた封筒と同じ。

「中身は？」

文さんの冷静な……………しかし緊張感のある一言にアリスさんが慎重に封を解く。

中から出てきたのはやはり一枚の折り畳まれた紙……………これも二つの手紙と同じものだ。

手紙が開かれ、机の上に置かれると6人が同時にのぞき込む。

『拝啓。人形遣いの家に集いし6名の皆様方。まずは予告通り紅茶を淹れておくことが出来なかつたことをお詫び申し上げます。茶葉が無駄だと感じたものですから……………。さて、そういうえば私達の自慢の妖花はお気に召したでしょうか？手懐けて間もないため、まだ上手く扱えていないのですが一軒家を囲むくらいは可能でした。ともかく少々頑張れば脱出は容易ですのでご心配なく。』

「……………。」

黙ったまま皆と顔を見合わせる。

疑うまでもなくあの二人が置いた手紙なんだろう。

「妖花……ですか。あまり覚えはないですね。」

「私もね……思い当たる奴はいないわ。それっぽいのはいたにはいたけどそいつ等は皆退治しちやつてるはずだから……。」

「にしても『茶葉が無駄』ってのはかんに障るな……。」

魔理沙さんが眉をひそめる。

「それ言わないでよ……わざとスルーしてたのに……。」

霊夢さんがイラついた様子でため息をつく。確かにそのフレーズは挑発としかとれない。というか事実挑発なんだろう。

「そういえばこの手紙っていつここに届いたんですかね?」

僕達が来たときに机の下に置いてあったとするならばきつと誰かが気づいていただろう。だとすれば僕達が来た後……それもアリスさんが手紙を見つける直前。閉じこめられた後の可能性もある。

「なるほど……確かにそうですね。」

自分ではなかなかの発見だと思ったのだけど文さんの反応はイマイチだ。

「もしかして私達が閉じこめられる直前か直後なんじゃないですか?」

早苗さんが僕の考えをそっくりそのまま代弁する。自分も気づいていたのに、と発言

しなかったことに対する後悔の念が湧いてきた。まあ、そんなこと考えていても仕方がない。

「つてことはあの二人は今もこの家の中にいるつてことか？」

「え……？」

魔理沙さんの言葉について周りを見回す。この部屋に僕を含めた6人以外は見あたらない。

「前の時のように、二人が一人になって潜んでいる可能性もありますね。」

「そもそも私等の中に二人が乗り移った奴がいなくても言い切れないぞ。」

その一言で驚くほど空気が重くなるのを感じた。疑心暗鬼というのは空気感染するらしく全員の目が穢く光り始める。

「で、でも……あの二人が僕達の誰も能力でどうにかできなかつたつて言つてませんでしたっけ……？」

「そんなのいくらでも偽れるわよ。」

おそるおそる言つてみるも霊夢さんにあつさり切り捨てられる。

「お互いに疑つてても仕方ありませんよ。今は脱出が先決でしょう？」

「そんな悠長なこといつてられないですよ！殺人鬼と同じ部屋になんていられません！

私は自室に戻りますよ!!」

「なんであなたは自分から死ににこうしてるのよ……。」

早苗さんの冗談（？）で幾分か場の雰囲気は戻りつつあった。しかし、相変わらず皆が疑いの目を光らせている。

「ツタの方はどうなの？なんとかなりそう？」

「え？ああ……時間をかければどうにかなりそうだけど、どれだけかかるかは何とも言えないわね。」

「ま、とりあえずしばらく待ちましようか……。」

あれから1時間ほど経っただろうか？もしかすると僕の間感ではそうというだけで実際にはそんなに経っていないのかもしれないけど……。

「もし……仮によ……？」

いろんなことがありすぎて疲れていたのもあり、うつらうつらと首を揺らしていたところに霊夢さんの声で我に返る。

「どうしました？」

「もしも、私達の誰かが体に乗っ取られていたとして、その可能性が一番高いのって……。」

そこまで言っ言葉を切った。「鞘さん……ですよね？」すぐさま早苗さんが続ける。

まあ、確かにこの中で一番乗っ取りやすそうなのはどう考えても僕だろう。だからこの中にあの二人がいるとしたら当然疑わしいのは僕……………。

「ええっ!？」

ぼやけていた脳が一気に鮮明になる。

気づけば周りからの目がどこか冷たくなっていた。

「ままま、待つて下さい!!た、確かに一番疑わしいのは僕かもしれませんが！ぼ、僕は僕ですよ?!信じて下さい!」

焦って、上手く舌が回らないがそんなことはお構いなしに否定を続ける。むしろ怪しいかもしれないが必死であることは伝わっただろう。

……伝わったうえで霊夢さんがニコニコとしたまま立ち上がる。

目の前の人物がここまで大きく見えるのは初めてだ。人が視覚から得る情報というのはかなりいい加減らしく、こうも気持ちに左右されるようだ……。

「おち、おち……落ち着いて……………落ち着いて下さい!」

ジリジリと近づいてくる霊夢さんに僕の声は届かず、一向に足を止める様子はない。

一縷の頼みを込めて、文さんの方に目を向ける。文さんは満面の笑みで、「Fight!」というような親指を立てていた。

「鞘、大丈夫よ。ちよつと隔離か何かするだけだから。そんなに痛くないわよ。多分。」



霊夢さんの顔はなんだか明るい。この巫女Sだ。絶対サデイストだ。

「は、話せば分かります！だ、だからちよつと待つ……。」

「観念なさい。」

高く振りあがる霊夢さんの腕は決して永琳さんと呼ぶものではなく先端ではお払い棒が僕を見下ろして嗤っている。

こうなつたらなんとかして避けようと、霊夢さんの動きに集中する。

きたっ——

咄嗟に避けようとしたが、避けることが出来なかった。

というか、避ける必要はなかった。

鋭くヒュツと空気を切りながら振り下ろされたそれは一直線に僕……の隣の早苗さんに一撃を喰らわせた。

「あはは、みつかつちやつたか。」

誰かがそう言つて嗤つた。

続く……。

# 10章 5話～最後まで手を抜かないで～

「やつー！」

続けざまに霊夢さんが早苗さんに向けてもう一度お祓い棒を振り下ろす。

しかし早苗さんはニヤニヤと笑みを浮かべたままそのお祓い棒を素手で受け止める。

「ざくんねんっ。さすがにそれじゃ——」

「何が残念なのよ?」

突如早苗さんの手に電撃のような何かが走ったかと思うとバチイツと激しい音を立てて強い衝撃が生まれる。

「痛っ……。人間ってのはそればかりだね……。」

早苗さんは少し表情をゆがめると素早く身を翻した。

逃げられる!直感的にそう気づいたが上手く体が動かなかった。

「逃がしませんよ。」

しかし僕が動く必要はなかったらしく、微笑を浮かべる文さんが早苗さんを押さえつけていた。

「状況が全く理解できないんだけど……。」

アリスさんに続けて僕と魔理沙さんも首を縦に振る。

分かっていることは、僕に向けて振りかぶられたお祓い棒が実は早苗さんに向けられたもので、逃げようとした早苗さんが文さんによつて取り押さえられたつてこと。

その早苗さんというと椅子に縛り付けられて身動きがとれない状況にある。

推測できることとしては、早苗さんの中に実はエルさんかチールさん。あるいは両方が存在しているということくらいだろうか？

「ま、お察しの通りこいつが一連の事件……異変の元凶よ。」

「ちよ、ちよつと待つて下さいよ!!わ、訳が分かりませんー早く縄をほどいて下さいー!」

早苗さん……ではなくエルさん及びチールさんは両手を後ろに回し、足を椅子の両足に固定された状態であるにも関わらず器用に霊夢さんの元まで前進する。

「逃げようとしておいて今更それは厳しいでしょう。もうちよつとマシな言い訳はないんですか?」

冷たくあしらわれて尚、必死に主張を続けるがそれが聞き入れられることはなく、霊夢さんがくるつとこちらに体の向きを変えた。

「さつき文が私にメモを渡してたでしょう?それに書いてあつた内容が早苗が怪しいつものだったのよ?」

「具体的に言いますと……少し前に我々への手紙を見つけたときですが……よくあのときのことを思い出して下さい。」

あのときその場にいたのは文さんと霊夢さんに、僕と魔理沙さんだから、答えを求められているのは僕と魔理沙さんだろう。なんとか記憶を探り出す。

「あのときのことっていわれてもな……。鈴奈庵で少し話した後、現場を見に行こうって話になって現場に向かったわけだろ？」

「その途中で通り雨に降られて若い女性としばらく駄弁ったあと、現場に行つて手紙が見つかつたんですね？」

「そこです。」

文さんが急に僕に向かつて人差し指を突きつける。どうやら僕が何か重要なことを口からこぼしたらしい。

「あの女性が何か関係しているんですか？」

「いえ、そちらではなくもう少し前の……。」

僕は自分の発言を思い出してなぞるようにして頭の中の文章を読み上げる。

「えつと……その途中で雨に降られてわか——」

「そうそう。」

正解だというように笑顔を作られたけど正直何が正解なのか分からない。

「まあ、確かにあのときは雨が降ってたけど……それがどう関係するんだ？」

「これが私達宛の手紙よ。」

質問には答えることなく霊夢さんはスツとあの手紙を取り出した。もう何回も見ているけど特に変化している様子はない。あのとき雨が降っていたことと何が関係しているのだろうか？

「ああ……なるほど……手紙が濡れてないってことか。」

答えをひねり出す前に横で魔理沙さんがボソツと呟いた。

「ああ!!」

「その通りです。」

確かにあのあたりに傘に出来そうなものはなかったし雨が降る前に手紙が置かれていたならばしよびしよになっっていないとおかしいはずだ。ところがどっこい、実際に僕達が見つけた手紙は特に濡れている様子はない。

雨宿りしたところから事件の現場は目視できる位置にあったし、雨が止んでから手紙が置かれたということはないはずだ。

つまり手紙を見つけたと言った早苗さんが怪しいということになるわけか……。

なんだ……考えてみれば単純な話だ。なぜ僕は気づけなかったのだろうか？

「しかし、それだけで早苗が怪しいってのはさすがに乱暴すぎないか？」

「私も確かにそう思ったんですが……霊夢さんならきつと深く考えないだろう思ったので。」

文さんの言葉にムツとしたように霊夢さんが眉をひそめた。

「悪い？ かま掛けて引つかかればそれで問題ないじゃない。」

「ずいぶん適当な思考回路ね……。」

「というわけだけど……どう？ 何か言いたいことは？」

「い、言いたいことも何も……さつきも言いましたけど何がなんだか意味が分かりませよ!!」

目の前の早苗さん（？）は先ほどと同じように必死にそう主張する。

僕の記憶が正しければ確かさつき「ざんねん」とか「人間はいつも」とか言っていた気がするし、本当に早苗さんにあの二人が乗り移っているとするとするなら白々しいことこの上ない。

しかし、今日の前にいる人物を見ると、果たしてそれが今まで見てきた早苗さんと別人であるか疑わしく思う部分があるのも事実だ。

実は目の前の早苗さんはさつきまであの二人が乗っかっていたけれど、今はもう元の早苗さんに戻っている。そんな可能性もあるのではないだろうか？

「あんたねえ………往生際が悪いわよ。いい加減諦めなさいよ。」

「……………」

早苗さんを正面から睨みつける霊夢さんに、早苗さんは黙り込んでしまった。

「はあ……………」

と思つたらすぐに深くため息をつく。そして、早苗さんらしくないヘラヘラとした笑みを浮かべた。

「まさか、捕まっちゃうとは思つてなかつただけだな……………」

「やつと認めましたか……………」

「ま、しらばつくれようがないみたいだからね。」

さつきまでの泣き出しそうな必死さから一転、余裕を表情に張り付けてクスクスと話し始める。

どうやら間違いなくこの人は早苗さんではないらしい。要するに目の前の人物は早苗さんの皮を被つたあの二人なんだろう。

文字通り人が変わった光景にアリスさんは呆然と目の前の様子を眺めている。そんなアリスさんに不意に偽早苗さんが声をかけた。

「やあ、お姉さん。初めまして……………つてのは少し違うかな？さつきそこの巫女さんが説明した通り、エルだよ。よろしくね。」

妙に明るく緊張感のない声が室内に響いた。場の雰囲気も相まって、耳障りに聞こえ

る。

「んぐ……もともとはお姉さんをターゲットにするつもりだったんだけど……ちよつと難しそうだね。ま！私達の狙い通り、いい感じに妨害が入ってくれたわけだね！うんうん！このぐらいいいしないと面白くないもんね。」

早苗さんの見た目をした愉快犯は随分と愉しそうに語っている。もし、早苗さんの体じゃなかったとしたら思わず手が出ていたかもしれない……いや、それは自分を勇敢にかいかぶりすぎだろうか。

「それにしても、1回目から阻止されるっていうのは予想外だったな……。さすがは私達が見込んだ奴らだね。次は負けないよ！」

「それは、残念ね……。次はないわよ。」

偽早苗さんの話を遮るようにして霊夢さんが冷たく呟いた。

そして右手にいつの間にか持っていたお札を偽早苗さんに掲げると何かぶつぶつと呪文のようなものを唱え始めた。

すると面白いぐらいに偽早苗さんの表情が変わった。余裕を表すかのようにニヤニヤとしていたのが180度変わって顔を真っ青にして何とか逃げ出そうともがき始めた。

「——っ!!」



よく分からない呪文が終わったのか言葉を勢いよく切ると空中に五芒星……のよう  
な何かを描き目をカツと見開いた。

それとともにお札から光が線になって飛び出すとピタツ……と糸が切れたように早  
苗さんが動かなくなってしまうた。

「な、何をしたんですか……？」

目の前で起こることの展開が早すぎてそう霊夢さんに尋ねるのが限界だった。

「簡単な話よ。早苗の中に妖怪を閉じこめたっただけよ。」

一言の回答があつたがそれだけでは何のこっちゃ分からない。僕が訳が分からない  
よといった様子で首を傾げていると、

「妖怪を封印したのよ。」

恐ろくかなり噛み砕いた説明だったのだろう。何とか僕でも理解することが出来た。

「つてことはもう被害は広がらないってことですか………？」

「いや、それはまだ言い切れないわね。」

「………というと？」

霊夢さんは手に持つお札を早苗さんの額に貼り付けると、椅子にだるそうに腰を下ろ  
す。

「早苗の中に今二人ともいたかどうか定かじゃないってことよ。」

「まあ、そうですね。今のはエルさんみたいでしたから、チールさんの方がどこにいるか分からないですし。」

「そういうことね。ま、この手の輩は片方が無力化するだけで案外簡単に捕まえられるもんだから大丈夫だと思うけど。」

「そうそう！片方を崩せばもう片方なんて勝手に崩れ落ちるもんなんだから。」

「ええ……その通り………?!？」

偽早苗さんはバリバリと派手な音を響かせながらお札を自らの手ではずすと、小さな口から舌の先端だけをのぞかせた。

すぐさま同様を隠し切れてない霊夢さんが偽早苗さんに向けて掴みかかる。

しかし、その先にさつきまでいたはずの偽早苗さんの姿はなく、霊夢さんはピタッと制止する。

「は〜い。皆スト〜ップ！」

後ろで静かに呟かれる。

僕の首もとに突きつけられた手のひらサイズの小さなナイフは残忍に光っている。

バカでも分かる。《人質に取られた》のだと。

これまでここで起こったことの殆どを理解することが出来ていない僕だったが、今の状況はもつと理解に苦しむ。

しかしまあ、こうなつてやることと言えば一つだ。僕は静かに両手をあげた。

「動かないでね？絶対動かないでね？あ、別に某飛べない鳥クラブみたいなノリじゃないからね？」

後ろでは早苗さんの皮を被つた妖怪が一人で楽しそうに笑っている。

「それじゃ、私はお暇させてもらおうかな……いやあ、あれ喰らつたらひとたまりもなかったと思うよ。うん。さすが博霊の巫女さんだ。」

後ろ歩きで徐々に入り口のほうへと連れて行かれる。扉のところまでたどり着くと、今まで塞いでいたツタがまるで偽早苗さんに道を開けるように人が通れる隙間分だけ開いた。

「じゃあね。次も期待してるよー！」

最後にそう言い残すと、僕は入り口からまた部屋の中へと押し戻された。

「待——」

逃がしてなるものかと振り向いたそこには最初からいなかったかのように偽早苗さんは見あたらず、先ほどと同じようにツタが入り口を塞いでいた。

続く……。

おまけ編 10

おまけ編 1話く恋患いく

あれ？そもそも何で僕はこんなところにいるんだろう……？

ふと浮かんできた疑問に首を傾げる。

まあ……本編じゃないし、深く考えてはいけないんだろうか？

……。

……。

って、本編って何だ!?

世界から音が消えしまったのではないかと錯覚してしまうほど静かな空間。

よく耳を澄ませてみると遠くから微かに時計が秒を刻む音が聞こえてくる。

目の前では先ほどから一度も視線をあげることなく読書にいそしむ少女が僕と向き合う形で座っている。

スツ……

頁をめくるときの紙が擦れる音ですら耳に響いてくる。

この状態でもう何時間経ったのだろうか……？実際の10倍以上時間が経っているように感じるほどその空間に居るといふのは気まずいものだった。

僕はどうかやら誰も何も話さない。こんな状況が苦手なようだ。

賑やかなのが好きと言うわけではないけれども静かすぎるといふのはどうにも耐え難い物がある。勇気を振り絞って控えめに声を上げてみた

「あ、あの……パチュリーさん……？」

「なに？」

石像のように同じ体勢を続けていたパチュリーさんは僕の声にゆっくりと顔を上げた。

紅魔館の地下にある図書館に二人の声が順々に響きわたる。

「え、……ええと……その、何を……読んでるんですか？」

「フモリティシツチ式魔導書第2版。」

「え？あ、はい……へえ……。」

早口に素っ気なく答えられて、咄嗟に出た声は何ともな間の抜けた物だった。

パチュリーさんは再び視線を落とし、真剣な眼差しで、ただ一点自分の手にある分厚い本を追い続けている。

こうして、状況は振り出しに戻るといふ結果になった。

しかし、こんなところで諦めるわけにはいかない……！そう意気込んで再びパチュリーさんに言葉を投げかける。

「パチュリーさんって……肌真っ白ですよ……。」

長めの袖の先から顔を見せる手は殆ど色がついておらず、正にお人形のような喩えが相応しい。

幻想郷で見てきた女性は皆が皆とても綺麗で色の白い肌をしていたけど、中でもパチュリーさんは規格外に白い気がする。

「あんまり日の光を浴びることがないからかしらね。レミイも白いでしょ。」  
顔を動かさずに声だけで反応が返ってくる。

レミイというのは吸血鬼のレミアさんのことだ。確かにレミアさんも真っ白な肌をしていた気がする……吸血鬼は日の光を浴びられないっていうから当たり前なのかもしれない。

「全く外に出ないんですか？」

「そうですね。」

半ば冗談のつもりだったのだけど帰ってきたのは予想外の三文字だった。

「ま、全くですか？」

「ええ、全く。」

パチユリーさんは顔を上げることなく受け答えを続ける。

全く外に出ない……。確かにお世辞にも活動的なタイプには見えないけれど……。

「そ、そうなんですわね……。でも！だめですよ！あんまり日の光を浴びずにいると、体が弱くなっちゃいますから。」

「そうね。気をつけるわ。」

パチユリーさんはそういうとまた一つ頁をめくる。

なんとなく、無言の圧力で話しかけるな。邪魔するなどと訴えられている気がする。

そうして、何度目かの沈黙が訪れた。

どうしよう……。

あれ？そもそも何で僕はこんなところにいるんだろう……？

ふと浮かんできた疑問に首を傾げる。

まあ……本編じゃないし、深く考えてはいけないだろうか？

……………。

……………。

って、本編って何だ!?

自問自答を終え混乱する頭の整理がつかないまま何気なくパチュリーさんの方へと顔を向ける。

すると視界に、なんとも予想外な人物が映り込んでいた。

いや、ある意味予想通り……お決まりとも言えるだろうか?

読書に勤しむパチュリーさんの後ろ。ふわふわと空中を上下しながら烏天狗がニコニコとこちらに手を振っていた。

「え?なんでこk……。」

思わず驚きを声に出したが、すぐに自ら口を塞いで言葉を切る。

「なに?…どうかしたの……?」

パチュリーさんが怪訝そうな表情をこちらに向けた。

「ああああ!!え、ええと。その……。なんでもないです。はい……。ほ!ほんとに何でもないんですよ!」

「……う?そう。」

上手くごまかせただろうか……?

文さんが持つフリップに書かれた『しやらつぷ』の文字を横目に、いつの間にか少し浮いていた腰をいすに落ち着ける。



僕の咄嗟の反応に、文さんは満足したように親指を立てると、パチュリーさんに気づかれぬようにフリップを取り替えた。

取り替えられたフリップに書かれた文字を目を凝らして読む。

『次のフリップの文をそのまま声に出して読んでください。』

ちようど読み終えた瞬間にフリップが入れ替えられる。

いったいどこから取り出しているのだろうか？ それにどこに仕舞っているのだろうか？

青い狸のポケットでも持っているのかな？

そんなことを考えていると文さんがフリップの文字を何度も指さす。

どうやら早く読むように急かしているらしい。あわててフリップに目を向ける。

そして、たどたどしくフリップに書いてある短い文を読んだ。

「そういえば、魔理沙さんってどう思いまs——」

「ゴホッ！ゲホッ……！」

すべて言い終わる前に急にパチュリーさんがせき込みだした。

「だ、大丈夫ですか？」

「だ、だだだ、大丈夫よ……。」

急いで立ち上がり駆け寄ろうとしたが、パチュリーさんはそれを拒むように僕の動き

を手で制した。

手で半分隠れた顔が上気しているように見えたのは僕の気のせいだろうか？

「な、なんで急に魔理沙が出てくるのよ。」

咳払いを一つして、パチュリーさんが僕に尋ねる。

「え？……ああ、えと。その……。」

どうやらパチュリーさんは真後ろで必死に笑いをこらえている文さんに気づいていないようだし、文さんも気づかれないようにしているようだ。

そのため文さんにそう言うように指示されたとは言えず、なんと返答すべきか思考する。

「とくに……深い意味はありませんよ？ふと頭に浮かんだので……。」

しかし、僕の足りない頭ではそんな答えをひねり出すので精一杯だった。

「そ、そう……。」

パチュリーさんは納得行かない様子だがそれ以上追求はしなかった。

すると先ほどまでかじりつくように読んでいたフモ何とか魔導書を閉じて頬杖をつく。

「魔理沙……ねえ……。貴女はどう思うのよ。」

「え？……僕ですか？」

質問に質問で返され一瞬戸惑うが、答えにくい質問でもないので率直に答える。

「そうですね……。まず、元気な人……って印象が強いですかね？」

「ふふ……。まあ、そうですね。」

そう言つて微笑むパチュリーさんを見るのはとても新鮮だった。あまり笑わない人だと思つていたけどもしかしたらそんなことはないのかもしれない。

「あとは……なんですかね……。霊夢さんととても仲がいいですよね。」

「……あれ？」

不意に訪れる静寂。パチュリーさんが眉を一瞬ピクリと動かしたつきり固まつてしまった。

急の出来事にどうしていいか分からず、助けを求めるように文さんの方を見る。

そこで文さんが浮かべていた表情は言葉では何とも言い表しにくい物だった。

哀れみともとれるし、呆れともとれる。いったい僕はなにをしかしたのだろうか

……。

「霊夢ね……。そうよね。とても仲がいいわよね。」

すると時間差で、固まつていたパチュリーさんが動き出す。

その声は僕との会話と言うよりは、独り言のように聞こえる。

「そ、それで……。パチュリーさんはどうなんですか……。？」

この状態で、僕がこれ以上何か言うのは危険だという判断の元、パチュリーさんに順番を譲る。

「え？……ああ、そうだったわね。質問されたのは私だったわ……。そうね……。魔理沙ね……。」

呟きながら顎の方に手をやるとパチュリーさんは早口に話し始めた。

「借りていった……。……というか盗んでいった本は返ってくる気配がないし、頻繁に図書館内を破壊するし、思いつきで無理矢理外に連れ出されるし、無鉄砲だし、魔法もパワーしか考えてないお粗末なもの……。面倒見は良いけど気を抜いたら変な茸食べさせられるし、好奇心旺盛にしても度が過ぎててすぐ周りを巻き込むトラブルメーカー………つてとこかしら。」

僕の勘違いでなければ一度も息継ぎせずになんて言い切ったようだった。

言っていることと反して声色は明るく、表情も心なしか楽しそうに見える。

「いい加減何か取り返す手段を考えた方がいいかしら……。」

「やれやれといった風のため息をつくパチュリーさんの後ろで文さんはニヤニヤと笑みを浮かべている。」

何かの拍子でパチュリーさんが振り向けば一発でばれてしまいそうな距離だが全く気づかれない気配はない。

文さんの先祖は忍者か何かなのだろうか？

「まあ、あれで結構良いところあるし、悪い人じゃないわよ。」

パチユリーさんは優しく微笑むと、そう言つて締めくくつた。

「へー……。魔理沙さんのことよく知ってるんですね！」

「……………」

あれ？

デジャヴにしては随分とスパンが短い気がする。

いや、あのときは若干違う……文さんの顔は哀れみや呆れではなく、よくやったという感じの讃えのようにも見えた。

何よりパチユリーさんの様子が180°違つていた。

あのときは死んだ魚のような目をしていたが、今は目を丸く見開いて鼻のあたりまで真っ赤にしている。

僕は……なにをしかしたんだらうか……？

「……………別にそういうのじゃないわよ。」

しばらくの静寂の後、ポソツとそう呟くとパチユリーさんは赤くなってまだ戻りきつ

ていない顔を隠すようにフ何とか魔導書に顔を埋めてしまった。

「え？あ……え？僕、何か変なこと言いましたか？」

「別に。」

顔を上げることなく短く返されて、何か変なことを言ったのだと確信する。

どうしよう……ここで謝るのは逆効果だろうか……でも黙っているというわけにも……。

ふと助けを求めて文さんの方に目を向ける。

……文さんは満足げな笑みを浮かべて僕に写真を見せつけていた。

目を凝らして見てみるとどうやら顔をきれいに赤く染めたパチュリーさんの様子が映っているらしい。

貴女という人は……。

呆れて半眼を向ける僕を気にもとめずに、満足したのか文さんはクルリと窓の方を向く。

そのときだった。

浮かれていたのか文さんが本棚にぶつかって小さく音が鳴った。

「あ」

文さんがそう声に出したときにはもう既にパチュリーさんが文さんの腕を掴んでい

た。

「あら、いたのね。全然気づかなかったわ。」  
にこやかな表情には所々青筋が入っている。

僕はその日、初めて文さんが青ざめている姿をこの目でみたのだった。

……続く？

## おまけ編 2話く恋患い ぱあとつうく

「はい。」

「あ、ありがとうございます！」

カチャ……と高い音を立ててテーブルにお洒落なティーカップが置かれる。

当然僕には紅茶の善し悪しを判断できるような才能は無いけど、少なくともそれはとてもいい香りを部屋中に漂わせていた。

ティーカップが上品なものであるだけになんとか飲む側としても無意識に背筋が伸びてしまう。

香りを十分に味わってから普段とは違う仕草で口元まで紅茶を運ぶ。

「あちっ!!」

「ああ……、まだ熱いと思うから気をつけてね。」

「あ……はい。」

どうやら僕に高貴だとか上品という言葉は似合わないようだ。……まあ分かり切っていたことだけど……。

ゆつくりとティーカップを机に戻し、ため息をついた。



魔法の森のとある一角。

隠れるようにして建っている洋風の一軒家……その一室。

僕の向かいに腰掛けているのは人形遣いのアリスさんだ。

短い金髪にカチューシャがよく映える。

もはや僕が置かれている状況に疑問を抱く余地はない。『おまけ編だから』その一言

で片が付くのだ。

無心で、浮かびそうになる疑問を前もって解決しておく。

「なに？随分複雑な顔してるけど……。」

アリスさんが不思議そうに……とか心配そうに……とか訝しげに尋ね

る。

「ふえ？あ、いえ！何でもありません！」

「そう？」

当然アリスさんもこの状況に特に疑問を持っている様子はない。パチュリーさんと

同じだ。

さて、今僕がしなくてはいけないことは何だろうか？

僕は短い時間で考える。

そしてものの数秒で考えても無駄であると悟った。

「それにしても……すごい数の人形ですね。」

考えることを放棄した僕は、他愛もない話題をふることにする。

アリスさんの部屋の棚にはものすごい数の人形が隙間なく敷き詰められていた。

手のひらサイズの物もあれば部屋の隅には僕の背丈と変わらないのではないかというほど大きな物もあった。

「殆ど実験で使った後の物よ。飾るぐらいしか用途がないから……。」

アリスさんは棚に並ぶ人形を眺めながら苦笑する。

僕は初めてアリスさんと会ったときのことを思い出す。

目の前の人形達も武装して動き出すのだろうか……？

「なかなか物を捨てられない性分だから。」

「そんな！捨てるなんてもつたいないですよ！こんなによくできてるのに。」

それは少しデフォルメされてはいるものとても精巧に作られていて捨てるなんてとんでもない。

「あら？そういつてくれると悪い気はしないわね。」

アリスさんは照れ笑いを浮かべてそれを隠すようにティーカップを口元に運んだ。

「でも、一体どうやって人形達を動かしているんですか？」

僕は人形が自分よりも遙かに大きな剣やランスを装備した姿を思い出しながら尋ね

る。

アリスさんはその質問に何と返すのが適切か分からないと言った様子でしばらく考え込んだ後、

「そうね……どこから説明すればいいのかしら。簡単に言えば人形に心を宿すってところかしら？ 召喚系の魔法のちよつとした応用ね。まあ、特に対象が人形である必要はないのだけど。魂を持たないもの……要するに無機物ならなんでもいいの。」

……なるほど分からん。

「心を宿すと言ってもそれは自我を与えるということではなくて、ただ単に行動や感情の受信機関を生み出すと言う方が正確ね。この方法はかなり古くから今よりもお粗末ではあるけど使われていて……。」

きよとんとしながら右耳から左耳へと通り過ぎていく説明をただただ聞いている僕を見てアリスさんは苦笑を浮かべると、

「まあ……魔法ってことよ。」

そう言つてまとめた。

……なるほどわかった！

僕はパツと表情を輝かせてぼんつと左の掌に右手を握つてのせた。

とても簡単でわかりやすい仕組みだったようだ。

そんな単純な僕の反応に改めて苦笑を浮かべた後にアリスさんは紅茶を飲み干した。

「手にとつて見てもいいですか？」

「どうぞ。」

紅茶を飲み終わり、アリスさんに尋ねるとあつさりと言で返答してくれた。

目の前にある普通のサイズの人形を手にとつてまじまじと観察する。

金色の髪はまるで本物のようにサラサラでリボンや服もピッタリのサイズをアリスさんの手で作ったのだろう。

とても精巧に作られていて今にも動き出しそうだ……まあ、動かそうと思えばすぐに動かせるのかもしれないけど。

そんなことを考えていると急にアリスさんの表情が強ばった。

「これは……………」

「どうしたんですか？」

アリスさんの様子を見る限りあまり良い状況ではないのだろう。

僕の問いに答えることなくアリスさんは何かを耳にすませるような姿勢で目をつむっている。

「誰かがここに向かってきてるみたい……。ちよつと様子を見てくるわね。」

しばらくするとアリスさんが口を開いた。

「え？は、はい。大丈夫なんですか……？」

「まあ……人数は一人だけみたいだし、大丈夫だとは思うけど。もしものときの為にね……お客さんもいることだし。」

どうやら僕に気を遣ってくれているようだ……。なんだか途端に申し訳なくなる。

「あ、ありがとうございます。」

アリスさんは笑顔で答えるとそそくさと出て行ってしまった。

僕はその場に一人取り残される。

正直に言うと、他人の部屋に一人で置いて行かれる方が不安をかき立てられるのだが、気を遣ってもらっている以上なにも言えなかった。

一人。

独り。

意識した瞬間、背筋にぞわぞわとしたものが走り抜けるのが分かった。

もしもアリスさんが戻ってこなかったら……？

アリスさんじゃない……知らない人がやってきたら？それが『人』ならまだいい。

もし……もしも獯猛な妖怪だったら……？

そこままで思考を振り払う。ちよつと一人になったぐらいで何を心細くなってるん

だ僕は……もう子供っていうような歳じゃないんだから。

僕は気持ちを入れ替えるように深呼吸をする。

ガンツ

「痛っ!」

伸ばした手が柵にぶつかって痛々しい音が部屋の中に響く。

そして人形がいくつかバタバタと床に落ちる。

「あー! すいません! すいません!!」

誰か居るわけでもないが反射的にそう口にしなから人形達を元あった場所に戻していく。

とはいっても、どの人形がどこにあつたかなど分からないので、人形の大きさなどでだいたいの場所を予想して配置していく。

「合ってる……かな?」

自信はないが、まあアリスさんが戻ってきたら正直に話せばいいことだろう。

そう思って最後の人形を上から二番目の段に座らせる。

すると……。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……。

何ともありきたりな音。

ありきたりに声を上げて、ありきたりに腰を抜かして。ありきたりに目を見開いて……。

ありきたりに柵が動いて隠し扉が顔をだした。

さて。

一度整理してみよう。

1、アリスさんの家でくつろいでいた僕とアリスさん

2、するとアリスさんがこちらに近づいてくる敵影を確認

3、アリスさんと僕は別行動を取ることに、アリスさんは敵の確認、僕は待機

4、落としてしまった人形を拾い上げ柵に戻すと隠し扉がガガガガ……。

どうやらまだ頭の中が混乱しているようだ。

とりあえず重要なのは

『なんかアリスさんの家に隠し扉があつてひよんなことからそれを開いちやつたZE』  
つてことだ。

「どごうしよう……。」

鉄製のいかにも重そうな扉を前に僕は手を口元に当てながら呟いた。

試しに、動いた柵を戻そうと引つ張つてみる。しかし、当然ながら非力な僕では微動だにさせることができない。

そもそも何でこんな物がアリスさんの家にあるのだろうか？

小説や漫画、ゲームなんかではあつて当然だというように定番の隠し扉が存在する家があるが、実際に作ろうと思えばかなり大変だろうし、第一そんなに用途が思い浮かばない。

お宝でも隠してあるのだろうか？

そんな風に考えていると扉を開きたいという欲求が胸の奥から波のように押し寄せてきた。

ついついドアノブに手をかけそうになるがすんでのところで留まる。

人の家を勝手に探索するなんていくら何でも非常識だろう……。

しかし『今更この幻想郷で僕が持つ常識なんて無い物に等しい』という考えがないと言えは嘘になる。

ゆつくりとノブを捻る。

カチツ……………。



「あれ？」

ドアが開くことはなく金属がぶつかる音が扉が施錠されていることを示していた。

棚で隠してある上に鍵がかかっているとは……よほど重要な物が隠されているらしい……。

ここまで来ると余計に中が気になってくる。

いや、でも駄目だ。そんなこととしてしまつては泥棒と同じようなもの。

……でもわざと開けたわけではないし、鍵を見つけても元の場所に戻しておけばバレないんじゃないか……。

いやいや……さすがに……。

でも見たい………。

僕の中の天使と悪魔が交互に囁き、そのまま数分が経過する。

どうやら僕は着々と文さんの影響を受けているようで、最終的に出した結論は……。  
「鍵はどこだろう……？」

痛む心を抑えながら部屋を探し始める。

しかし、鍵は案外すぐに見つかった。

「L」字型のドアノブの丁度死角の位置、鍵の形のくぼみにピッタリはまっている小さな

鍵。

灯台もと暗しというが、ドアの近くに鍵を隠しておくというのはなかなかいい方法かもしれない。

まあ……僕がこんな簡単に見つけてしまっているからそんなことないのかもしれないけど……。

そんな思考を置いて、鍵を慎重に差し込む。

焦る手を押さえつけてゆっくりと回した。

カチャンと音が鳴るのを確認して、今度はドアノブを捻る、今回は引つかかる感覚はなくスムーズに扉が開いた。

ごくりと、息をのむと隠し扉の先に目を向ける。

そこには……。

黄色、そして白と黒。

パツと見で視界に入った色はこの三つ。部屋中がそれで埋め尽くされている。

そこにあるのは人形の山だった。

それだけなら特に驚くこともない、アリスさんらしいという言葉で片づいてしまう。

しかし、目の前の景色はそうはいかないものだった。

その人形たちは明らかに僕の知っている人物を模して作られていた。

「これって……魔理沙さん？」

思わず呟いた。

その瞬間。

急に体に力が入らなくなり、床にひざを突く。

薄れていく景色の中、アリスさんの顔がうつすらと見える。

穏やかに笑っているようにもみえるけど、感情を映さない人形のような顔にも見える。

そのまま僕の意識はとぎれた。

……続く

※この話はフィクションです。本編や実際の人物、団体とは一切関係ございません。